

青春叢書

～中短編集～

虎山人

目次

アオザイは泣かない
シュガー
サテンの靴が履けたら
イレーヌ
密林の記憶
カーチベール
南風が吹く頃



アオザイは泣かない

※これは、実話を元に書き下ろしたものです。歴史的事実に関しては、『サイゴンのいちばん長い日（近藤紘一）』に多くを負っています。

～プロローグ～

タマリンドの葉が痛いほど南国の日差しに映えて、街路を燃えるような緑で覆っていた。この町は地図の上ではホーチミンと名を変えているが、今でも市民は親しみをこめてサイゴンという旧称のまま、親しみをこめて呼びならわしていることが多い。

一九七五年の陥落直前に、奇しくもこの地に来ていたわたしにとって、実に十六年ぶりの再訪だった。

建物は老朽化しているとは言え、往年のプチパリの面影をいまだに残す街角に、わたしはある戸惑いを禁じえなかった。

それはこの十六年間、いつも心のどこかでわたしを切ないほど苦しめてきたものだった。セピア色の思い出は事務的に流れていく日常の間に現れては消え、人間の無力と、日常という劇的な現実とは、夏の明るい果樹園の記憶を冷たい水晶のアルバムの中に閉じ込めていた。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

一九九二年、わたしはある取引先の時計メーカーの事務所とショー・ルーム開設のため、このホーチミンに来ていた。

商社勤めもかれこれ二十年になった。中堅商社なので商売になるものなら何でも扱った。

あの当時、わたしの主要取り扱い品目のトップはタイヤだった。

今度は時計だ。取引先のメーカーが、競合他社のベトナム進出に遅れてはいけないと、慌ててわたしの会社に協力を申し入れてきたのだ。

競合メーカーはホーチミン市の目抜きであるドンコイ・ストリートにショー・ルームを構えていた。

わたしは若い社員を何度となくホーチミン入りさせ、その頃にはほぼ大筋メーカーの意に沿った線でベトナム側と合意するにまでになっていた。

すでに、同じドンコイ・ストリートに仮のスペースを押さえ、あとはわたしが直接現地に赴いて契約書にサインするだけだった。

折しもベトナムは長かったインドシナの戦争に終止符を打ち、開放経済へ動き出していた。香港や台湾、そしてタイなどから、華僑たちがビジネス・チャンスを求めて殺到していた。

日本はアメリカの色目をうかがっていたために、ベトナムへの借款を凍結したままで、明らかに遅れていた。

わたしが二度目にベトナム入りした九十年代前半というのは、まだそういう時期だった。

今回のプロジェクトは、タイや香港あたりから密輸で入る時計の流通実態に合わせて、ホーチミン市にメンテナンス需要と将来の正規輸入や、現地生産の可能性を踏まえた橋頭堡を設けることだった。

わたしは香港支店から一足先にホーチミンに来ていた若手社員の倉田君に、タンソンニュット空港で出迎えを受けた。

空港から市の中心部にあるレックス・ホテルまでの間、朽ちかけたような町並みを、わたしは飽かず眺めていた。少しの変化も見逃すまいとしていたのかも知れない。

この十六年の間に、すべては変わっており、また何ひとつ変わっていないとも思えた。

あるいはこのホーチミンの中で、サイゴンがまた息を吹き返しているようにも思えた。

あちこちでフランスパンを売り歩く露天商の姿は昔と何ら異なることがなかった。

廃車同然のヒルマンのタクシーの中で、倉田君はあれこれと最近のホーチミン事情を説明してくれたが、そのほとんどは耳を素通りして、相も変らぬ雑踏と喧騒の中に消えていった。

路上を埋め尽くすような人波を目で追うごとに、わたしは十六年前のサイゴンを思い出さずにはいられなかった。

あの頃、わたしは毎年二度はサイゴンを訪れていた。ベトナム戦争の末期だったが、タイヤの需要はむしろウナギ登りだった。

一九七三年に米軍の極端な削減が実施されてからというもの、タイヤの引き合いは不思議なことにかえって急増したのだ。わたしは混迷する戦局の帰趨をよそに、イップ・ジョーという華僑系の代理店主と販売工作に明け暮れていた。それは空前の軍需景気だった。

もちろん、日本の憲法に触れるから、自衛隊に納めていたようなコンバット・タイヤは持ちこめなかったが、ジープや、トラックのタイヤはメーカーの生産が追いつかないことがあるほどだった。

ただ、米軍の需要が低下していくにつれ、南ベトナム政府軍相手に値段の交渉をすることが多くなり、正直頭を痛めていた。

戦争とは、極限の状態であると同時に、たしかに当たり前の日常でもあった。

わたしはインドシナ半島を燎原の火のように舐めていく狂騒のドラマを、このサイゴンで見守っていた。

あちこちで、ベトコン(ベトナム共産主義者)の爆弾テロが起こり、それに報復する南ベトナム政府の国家警察による公開処刑や共産党シンパに対する虐殺など、血の匂いがしない日はおよそなかった。

静寂がかえって気味悪く感じるほど、戦争はこのサイゴンに馴染んでいた。

レックス・ホテルに着いたわたしは、簡単に明日の予定を確認し、倉田君と食事をとった後自分の部屋に落ち着いた。

思い出に残るものは、いつも明るく、そして哀しいものばかりだ。

レ・ロイ通りを往来するけたたましいバイクの音を聞きながら、わたしは寝つかれない体を無理に眠りに押しこもうとして、何度も徒労を繰り返していた。

ホー・チミンの朝は、わたしが行ったことのあるアジアのどの町よりも美しかった。

中心街のレ・ロイ通りからドンコイ通り(旧ツゾー通り)へ入ると、植民地スタイルのコンチネンタル・ホテルや、劇場(旧国会)が立ち並び、透き通るようなアオザイ姿の娘たちが新鮮な南国の風を体いっぱいを受けて行き来する。

不思議と兵士の姿をほとんど見ない。

近くにある旧南ベトナム大統領官邸(現記念館)の方を見やると、廃墟同然のカトリック大聖堂の尖塔が、あの日と同じように真っ青な空に伸びていた。

当時、サイゴンの朝の空気がわたしはなにより好きだった。

この町ほど、今日も生きてあることの感慨を身にしみる町はなかったのだ。

サイゴンでは優しくなれることなど不可能だった。

人を掻き分けてでも、生存の機会をむさぼることが常態だったこの町で、静かな朝の光の雨だけが、行き交う人々の瞳をほんのひとときにせよ、柔らかい輝きで満たしていた。無法という社会の真空状態は、いかに自由というものが過酷なものかを人々に思い知らせ、街角で花咲く愛の形も、痛ましいほどの焦燥を帯びていた。

翌日、わたしはひとまずドンコイ通りに設けた仮事務所に赴いた。

競合メーカーのショールームも、すぐ目と鼻の先に見えた。

わたしは倉田君と、公団側との最終契約のレビューをして午前中を過ごした。

一階のショールームに予定している店先で、わたしたちは一頁一頁読み合わせていた。

すでにベトナム人スタッフが二人いて、手続きに携わっていたが、二人とも男性で、もう一人女性の従業員の必要があった。

ただ、公団側が勝手に人選して外国企業へ派遣するシステムがわたしはどうしても気に入らず、あとの一人は強硬に一般公募で押し切ったのだ。

この件についてもずいぶん倉田君には働いてもらった。けっきょく公団側が折れて、わたしの主張は受け入れられた。

わたしたちが人選したものを、公団が追認して、形式上派遣するということで落ち着いたのだ。

ホーチミン市内にある英語学校に公募の連絡をして応募者を募ったのだが、その日はちょうど公募の締め切り日に当たっていた。

すでに八十人ほどの応募があった。

この書類審査だけでもかなりの時間がかかるはずだ。

そろそろ正午も回り、わたしたちはランチに行くことにした。そのとき、一人の若いベトナム人女性が飛び込んで来た。

長い髪がアオザイによく似合う娘だ。籐で編んだバスケットをハンドバッグ代わりにして、息を切らしながら入ってきたその娘は、大きな瞳を輝かせて言った。

「すみません。まだわたしのアプリケーション(応募用紙)、受け取ってもらえますか？」

わたしはまさかいきなり英語で聞かれるとは思わなかったので、驚いてしまった。倉田君が笑いながら答えた。

「君が最後の一人だ。締め切りは十二時だけだね！」

若い娘は胸を撫で下ろして微笑んだ。

倉田君は立ったままざっと書類に目を通してわたしに見せた。

娘はちょうど二十二歳で、名前はミンとあった。物怖じしない態度と、スムーズな英語が印象的だった。

「英語、うまいね。ここには学校に行ってるってあるけど、それだけ？」

わたしは店先にずっと立っているその娘に尋ねた。

「ええ、学校だけです。」

わたしは感心してしまった。

「倉田君、申し込み者はみんなこのくらいのレベルかい？ もしそうならたいしたものだね。英語学校の水準って、かなり高いんだろうね。」

「いや、例外ですよ。けっこうワケのわからない英語が多くて。英語が苦手な僕が言うんですから、ひどい水準が多いですよ。僕がベトナム語で面談したほうが、ずっとマシだと思うくらいですからね。」

倉田君は、確認がてら質問をした。

「家族はいないんだね？」

「そうです。一昨年、父が亡くなってから、ずっと養母とっしょです。」

「実のお母さんはずいぶん前に亡くなっていると書いてあるね、一九七五年・・・」

ミンというその娘は少々心配そうな顔になった。

「あの、家族のことが問題になるんでしょうか？」

わたしは気遣って口をはさんだ。

「いや、そんなことはない。自信を持って受けてください。それで結構です。」

「良かった。それならわたしにもチャンスがありますね！」

「もちろん。」

わたしはその闊達な様子が実に爽やかに思えた。

娘は五月の光の中へ軽やかに溶け込んでいった。
サイゴン河へ吹き抜けて行く明るい風が眩しい。
まるで蝶の舞いのように白いアオザイは波打ち、黄金色の粉が街路樹にちりばめられていくようだ。それはこの町に息づく新しい世代との最初の出会いだった。

時代は明らかに移りかわっていた。
ランチを取る前に、わたしは近くにある競合メーカーのショールームに立ち寄った。
シンガポール店から駐在しに来ているインド人スタッフがいた。
彼がどうもショールームと事務所を管理しているらしく、二年契約の駐在ということだった。
競合相手ではあったが、異郷に一人でいることはつらいものだ。
ましてインド人が日系企業に勤めているのだ。

インド人青年は嬉しそうにわたしのランチの招待を受けてくれた。
そしてわたしたちはすぐ隣のリバティという洋食屋に入った。

「しかし、すぐ商売には結びつくとはとても思えませんがねえ。」

そのインド人青年が言った。

「おたくはしかし、商社が入ってないね。メーカーさんが直接ここに店を持っているんでしょう。たいしたものだよ。」

「さあ、どうですか。あなたには悪いが、やはりこういう国を相手にするには、商社をかませた方がいいと思うんです。とくにこのごろそれを痛感します。」

「リスク・ヘッジかい？」

わたしは自嘲気味に言った。

「いやこれはすみません。そんなつもりで言ったんじゃないのですが。」

「いいさ。メーカーが自分で商品に責任を持って販路を開いて、アフターサービスまでするのが本当だ。海外の事情がわからず、英語も話せないから商社を使うっていう時代はもうとっくに終わったね。今じゃあ、商社はファイナンスして、商圈に食い込めればいいほうで、下手をすれば、業務の煩雑な市場をメーカーから押しつけられて、彼らのコストダウンの協力をさせられるか、リスクヘッジで交渉相手の矢面に立たされるか、そんな割にあわない仕事が多くてね。まあ今日はうちのメーカーさんの人といっしょに来てるわけじ

やないから、こんなことも言えるんだが。」

「しかし、うちをご存知のように商社を通さずにホーチミンに進出したでしょう。ここで、そのままにリスクの問題で頭が痛いところなんです。それもずっと昔に原因があるんですよ。」

「へえ、一体なにが困ってるんだい？」

「いやあね、それが一九七五年にサイゴンが陥落したとき、うちはこちらにもう代理店があったんですよ。その代理店契約を解除しなかったのが、すべての問題の発端なんです。どうせ、南ベトナムが崩壊して、その敗戦の混乱の中で、代理店も工場も自然消滅してしまうだろうと思ったんでしょう。実際、その当時の代理店主は、海外へ逃げてしまいましたから、契約を敢えて反故にしなくても、代理店そのものの実体なくなった、とうちのえらいさんたちは、そう考えたんでしょうね。ところが……」

「ところが？」

「そうなんです。ところが、北ベトナム(共産政府)が、南ベトナムを制圧して数年経つと、どんどんベトナムに密輸で時計が入るようになった。それから、もと代理店は、共産政府に接收されて、公営企業として修理工場も店も運営されていったんです。今、共産政府がうちに何て言っているか、ご存知ですか？ なんと、この十六年間の販売手数料を払えと言ってきたんですよ。おまえたちの店と工場を、ずっとサイゴン陥落以来引き継いでやってきた。おまえたちの代理店が逃げ出した後も、自分たちが運営してきたんだから、その従業員の賃金も十六年分ぜんぶ払えと。」

「そんな無茶な。」

「そこが彼らの狙いです。ベトナムが開放経済へ動き出すと、まあうちも足元を見られたわけです。われわれからいい条件を引き出すための、格好の交渉材料にしているわけですよ。」

「それで、払うのかい？」

「まだ検討中です。連中も本気で言っているわけじゃない。」

わたしはそんなことが本当にあるのか、と少なからず驚いた。

正直言うと、十六年前、あの陥落寸前のサイゴンへわたしがやってきたのは、将来こういう事態が起きないように、あらかじめ代理店契約を解除しておくためだったのだ。

それは辛い出張だった。

当時北の共産軍が、南の防衛陣地を突破して、雲霞のように押し寄せ、サイゴンを十重二十重に包囲していたのだ。

代理店の人々がビジネスどころではない亡国の土壇場に追いつめられていたあの状況下に、ネクタイをした日本の若い商社マンが、さもふうつうの出張然とした様子で、代理店契

約を切りに来たのだ。

ああいう思いをした出張は後にも先にも一度きりだった。

わたしは任務であったわけだし、本社や取引先のタイヤ・メーカーの判断もけして間違っ
てはいなかった。

ただ、わたしにしてみれば、この上もなく残酷な行為にしか思えなかったの
だ。・・・・・・・・

「何があったかわたしには分りませんが、あのときとにかくうちの東京の判断が甘かった
ことだけは確かです。」

インド人青年は、そう苦笑いして言った。

わたしも別の思いで苦笑いしていた。表のドンコイ通りに、オレンジ色に輝く火炎樹が花
開いていた。あの時も、火炎樹の花が町いっばいに咲いていたのを、わたしは思い出して
いた。

それは一九七五年三月十八日。

わたしはまだ入社して二、三年の駆け出しだったが、すでに早くから海外出張を繰り返して
いた。

そのときはシンガポールにいた。

東京を出てからもう二ヶ月以上経っていた。バングラデシュやインド、パキスタン、スリ
ランカと回ったところで、その後はタイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンに行く
予定で、東京に戻るのはさらに一ヶ月後になるはずだった。

一度出国すれば、二、三ヶ月は当たり前だった。

人も足らなかったし、経費も関係していた。ベトナムはその前の年の暮れに訪れていたの
で、その時は出張予定に入れていなかった。

夜もかなり更けていた。シンガポールの代理店と会食をしたあと、つきあいで飲みに行き、
かなり酔っ払ってホテルに戻った。

フロントで東京からのテレックスを渡された。その内容はあまりにも短兵急なものだっ
た。

《大至急、サイゴンに入ラレタシ。出張予定変更ノ各所ヘノ連絡ニツイテハ、ソノ任ニ及
バズ。イップ・ジョーノ代理店契約ヲ直チニ解除サレタシ。》

何がどうなっているのか見当もつかなかった。ただテレックスの最後にもう一度、『TOP URGENT(大至急)』と繰り返してあったので、ただならぬ事が起こっていると判断せざるを得なかった。

わたしはその晩のストレート・タイムスといわず、手に入るあらゆる新聞を貪るように読んだ。

事態は切迫していたのだ。

南ベトナム政府は、三月十日に、中部高原地帯の要衝であったバンメトートを失って以来、総崩れになっていた。

評判の悪い独裁者グエン・バン・チュー大統領は、ついに中部高原地帯の放棄を発表したのだ。

ベトナムは、南北に長い。

主な都市は海岸に連なっていたが、北ベトナム共産軍は、山間部からゲリラ的に展開し、南ベトナムの海岸諸都市に波状的に攻撃を行ってきた。

これを排除するには、どうしても中部高原地帯にくさびを打ち込んでおき、共産軍のゲリラ活動を阻害する必要があった。

バンメトートはその重要な「くさび」の一つだったのだ。

そして、そのくさびが失われた。

南ベトナムにとってみれば、中部高原全体を失ったのと同じダメージだ。

結果、海岸に点在する主要都市は、かろうじて、一本の国道でつながっているにすぎず、かろうじて地歩を守っていたが、山間部のどこからでも攻撃を受ける格好になってしまったのだ。

すでに、北ベトナム国境に近いビンティエンやダナンなどには共産軍の総攻撃が始まっていた。

誰がみても、南ベトナムの海岸諸都市はまるでドミノ倒しのように、北部から南部のサイゴンまで、相次いで戦線が崩壊していっただろうことは、容易に想像できたのだ。

中部高原の失陥というのは、そういう衝撃的な事実だった。

冗談ではない。

それは南ベトナム政府にとっては、敗北への最短コースだ。

彼らは、まだ無傷な精鋭部隊を中部高原地帯から撤収させて、首都サイゴンの防衛に当たらせようとしているのだらうとは思ったが、それはダナンをはじめ、その他の海岸諸都市を見捨てることと同じだった。

わたしは事態を把握するにしたがって、酔いもすっかり醒めてしまった。

翌日、わたしはサイゴン行きフライトを取りに走った。

カウンターでは、どこもこのニュースに慌てた人々が争ってサイゴン行きに殺到していて、やっと取れたのは五日後の二十五日の便だった。その間、わたしは日に日に悪化する南ベトナムの戦況に焦りを覚えていた。

いったん崩れた均衡というものは、回復するのがきわめて困難だ。

津波のように押し寄せる共産軍の前に、南ベトナム政府軍は潰走につぐ潰走を続けていた。とくに兵站が脅かされた海岸諸都市の各政府軍部隊は大混乱をきわめた。

わたしがシンガポールにいる五日の間に、一番北ベトナム国境に近い旧王城ユエがあっけなく陥落した。

わたしがサイゴンに入った二十五日には、クワンチ、そしてクワンガイがあいついで陥落。この結果、難攻不落を謳われた要塞都市ダナンが包囲され、もはや南ベトナムは全土の半分近くを失ったといってもいい状況に陥った。

これ以降、サイゴン陥落に到るまでの混乱と狂騒の一ヶ月が始まる。

あの渦中にいた一人の日本人として忘れ得ない思い出を書き残しておきたい。

タンソンニュット空港に迎えはなかった。

非常事態に陥ったこの国で、それも無理はなかった。シンガポールから、代理店イップ・ジョーに宛てたテレックスにも返事はなかった。

恐らく、サイゴンのテレックス・センターが処理不能なほど込み合っているのだろう。空港から市内へ向かう道々、首都が意外に平静だったのには、わたし自身少しホッとした。タマリンドの緑も、火炎樹の花の紅も、四ヶ月前と何ら変ってはいなかった。

わたしはサイゴン河に面したマジェスティック・ホテルに部屋をとった。

ベトナム戦争に関った幾多のジャーナリストがこのホテルに一度は泊まったことがあるはずだ。

表通りは河向こうのジャングル地帯に潜む共産ゲリラの迫撃砲を避けて、内側の部屋にした。

これは常識だった。

代理店のイップ・ジョーがいつもそのように予約してくれたので、わたしも用心してそれに倣ったのだ。

わたしはすぐ華僑の多いショロン地区へタクシーを飛ばした。何から切り出せばいいの

か、頭の中はごちゃごちゃになっていたから、まったくまとまりがつかなかった。
イップ・ジョーの二階建ての店には職員たちがいつものようにのんびり蠅を追っていたが、当の本人は不在だった。
馴染みの若いセールスマンが驚いたようにわたしを見て立ち上がった。

「いつ来たんです？」

「たった今だよ。シンガポールからテレックスを打ったんだけどな。」

「何ですって？ 受け取ってませんよ。たぶん、テレックス・センターからデリバリーされてないんでしょう。」

「イップさんは？」

「ダラトにいる奥さんの親戚を連れ戻しにいます。」

「ダラトというと、ここから四百キロも北東だろう。親戚はダラトにいるだけかい？」

「そうです。幸いダナンの親戚は、政府軍がコンツームやプラークから撤退する前に引き上げていたんで。」

「撤退の前？ へえ、そういう事前の情報が入ってたのか。」

「そりゃあ、大枚のカネを制服の連中に使っていたのもダメじゃあないですからね。わかるでしょう？」

そうだった。情報こそが命の綱だった。

夫人と六歳になる娘はサイゴン市内の自宅にいるらしい。

ともかくイップ・ジョーがいなければ話にならない。この一週間以内にダラトから連れてこれなければイップ・ジョーも危ない、とその若いセールスマンは笑いながらわたしを脅かした。

わたしはひとまずマジェスティック・ホテルに戻って待機することにした。

本社宛てのテレックスをその男に託して、わたしはホテルへとって返した。

シャワーを浴びて、上層階のレストランに落ち着き、しばらく東の方から夕暮れに包まれていく河向こうの密林を眺めていた。

哀しい夕暮れは、わたしの高鳴る鼓動とは対照的に、のどかに煙るような紫に染まっていた。

蛇行するサイゴン河がその幻のようなブンタオ河口の方へ消えていた。

この先にはマングローブが生い茂っている。潮干帯はおおむね共産ゲリラの制圧下に入っている。

今や北部の海岸線に取り残され、崩壊寸前のダナン要塞は断末魔の声をあげていた。

この絵のように美しい河口の情緒が、いったいどういう形で消滅していくのか、わたしはつとめて想像しまいとしていた。

切なさは限りなく、とても耐えられなかったのだ。それまでは何度来ても何とも思わなかった一つ一つの情景が、取り返しがつかないほどかけがえのないものだ、思い知らされていた。

その後、三日経ってもイップ・ジョーはサイゴンに帰って来なかった。

そして四日後の三月二十九日、とうとうダナンが陥落した。

第一軍団の司令官はチュウ大統領の死守命令を無視し、海上から逃亡してしまったのだ。すでにおびたらしい難民たちが、「難攻不落」のダナンに殺到し、内部は大混乱となっていたらしい。

南ベトナム政府軍の兵士たちは、先を争って船に乗ろうとし、阻むものは友軍だろうと一般市民だろうと容赦なく乱射しながら逃亡したという。

暴行と殺戮、そして略奪。

多くの難民や敗残兵たちは、一号公路をひたすら南へ、サイゴンへ血路を開いての退却を選んだ。

その頃のサイゴンはまだ平穏だった。

昼過ぎともなれば午睡(シエスタ)が始まり、舗道に張り出したあちこちのカフェで若い恋人たちがつかの間の恋をささやきあっていた。

首都は何事もないかのように、静かに南国の河風に漂っていた。

わたしはこのまま停戦協定の話合いが行われるのではないかとさえ思いはじめていた。

イップ・ジョーが残った親戚を連れてサイゴンに戻ったのは、月が替わって四月の第一週のことだった。

わたしはイップ・ジョーに再会し、ひととき思い描いていた平穏な日々の幻想を、余りにも子供じみたものだと覚悟せざるを得なかった。

今まさに変わりつつある流れはもう止まるはずも無かったのだ。

サイゴン入りしてから無為に過ごした二週間というものが、次第に激しい重さでわたしの心に襲い掛かってくるのをどうする事もできなかった。

四月五日。

イップ・ジョーは逃避行の疲労を残した顔でホテルへやって来た。そうそう時間を避けないのか、ランチ越しのミーティングとなった。マジスティック・ホテルの六階へ上がり、わたしたちは小一時間話し合った。

「よく来たね、ムッシュー・ジプシー。」

そう言って幾度か危機を乗り越えてきた四十五歳の瞳が笑った。わたしをそういうあだ名で呼んだのは、彼と夫人と、そして六歳になる娘だけだった。

フランス語(ムッシュー、〇〇さん)と英語(ジブシー)がちゃんぽんだ。ジブシーは、フランス語なら、「ジタン」のはずだ。

ジブシーのように定まることなく転々と出張して歩く男という意味でそう呼んでいたのだろう。

わたし自身、後にも先にもこれ以外にあだ名を持ったことがない。

「大変な事になりましたね。」

「まあいつかはこうなる日が来るとは思っていたけれども、こう急だとは正直思いもよらなかったよ。わたしの方の親類は華僑だし、あらかじめタイやアメリカに出してしまったがね。ダラトから来た家内の方のは、ベトナム人だ。どうしたものか頭が痛い。」

「イップさんも出国する予定ですか？」

「仕方あるまいよ。家内の心臓もこのところ落ち着いているんで、今のうちに動かないとね。もう南ベトナムの命運は尽きている。ダラトへ行って見てよくわかったよ。サイゴンとダラトの間にスアンロックがあるだろう？ 南ベトナム政府軍は首都圏の最終防衛線としてスアンロックに主力の精鋭部隊を送り込んでいた。軍広報局の話では、共産軍がすでに北部・中部を制圧して、休む間もなく一気に南部へ総攻撃をかけてくるようだ。」

「具体的にはいつ？」

「今年中くらいに呑気にかまえていたが、どうも雨季までにはサイゴンを落とそうと思っているようだ。」

「そんなに早く？」

「わたしはスアンロックを通過してサイゴンへ戻る途中、夜陰に紛れてあちこちで共産軍兵士を見た。あれは民兵のゲリラじゃない。正規軍の兵士だ。もう北の先行部隊はゲリラと呼応してこのサイゴン郊外に展開しているんだよ。スアンロックで政府軍がどんなに善戦したところで、全滅は時間の問題だ。」

「共産軍はどうしてあなたたちを襲わなかったんだろう？」

「難民効果さ。大量の難民がサイゴンへなだれ込めば、先週陥落したダナンのように、じき自壊作用を起こす。それをねらっているんだ。難攻不落と言われたダナンがあのだ。サイゴンなんか隙間だらけさ。連中は難民をサイゴンへ煽るように追い立てていたよ。」

イップ・ジョーはまくし立てるように喋った後、煙草を一服した。

「うちでは家内の手前、吸えないもんでね。」

そう言って苦笑いした。

「それで、どうするね？日本で生産済みのタイヤの船積みをストップするかね。もうレター・オブ・クレジット(信用状)はとっくに開いてしまったがね。」

わたしはどう切り出していいか言葉につまった。

「これも仕事だ。はっきり言ってくれ。わたしもきちんとケジメだけはつけて置きたい。こういうときにこそね。」

わたしは意を決した。

「イップさん。わたしが今回来たのは代理店契約の解除(ターミネート)のためです。わたしが用意した書類に署名していただきたいんです。」

説明は不要だった。

第一、いちいち説明できる心境ではなかったのだ。イップ・ジョーは白いものがまじり始めた髪を撫でつけながらため息をついた。

「そういうことだと思ったよ。」

わたしは自分がタイプアウトした一枚の紙を差し出した。

代理店主は入念にそれを読んだ後、こう言った。

「あっけないものだね。この十年がたった一枚で終わりとはね。……」

男の瞳はどこかずっと遠くを見ているようだった。

「こういう戦争とか革命とかいった非常事態には、フォース・マジュール(不可抗力)の条項が代理店契約書にも入っているだろう。あれで君たちは自分をプロテクトできると思うがね。」

「ええ、ただ念のためでしょう。」

「まあ、仕事ってものは、そういうものだな。君も嫌な仕事を引き受けたものだ。実際、よく来てくれたよ。」

イップ・ジョーは爽やかに笑った。

「ただひとつ。」

彼はわたしの顔を見て続けた。

「ひとつだけ、東京に聞いてくれないかね。メーカーはアメリカに販売会社を持っている。あそこでわたしを準代理店のひとつにして欲しい。こっちも一からやり直した。すぐ立ち上がれるとは思わないが、そのくらいのフェイバーは欲しいんだ。この十年、戦争特需とはいえ、アジアでは他の代理店に抜きん出た販売実績を残したとわたしは信じている。是非にとイップ・ジョーが頼んでいる旨、東京に伝えてくれないか。」

わたしは東京の本社から、メーカーの意向をすでに聞いて知っていた。一切条件は受けるな、と指示されていたのだ。しかし、わたしは敢えてこのとき、即答した。

「わかりました。やらせてください。メーカーの判断を仰ぎます。」

イップ・ジョーは明るい顔に戻って礼を言った。

「それが駄目でも、今ここでちゃんと署名しておくよ。君もはやくこの国を出たほうがいい。いつまでも長居は禁物だ。」

「いや、わたしはこの一件がはっきりするまで残ります。出てしまったら交渉なんかうやむやになるに決まっています。」

「ムッシュー・ジブシー、時間がないんだ。一日も早く出国したほうがいい。スアンロックの防衛線が突破されれば、サイゴン総攻撃までもの一日か二日だ。タンソンニユット空港が閉鎖される前に出国することだ。」

「イップさん。わたしは商社へ入って物資部に配属されて、あなたとのタイヤの商売が初めての仕事でした。それだけにあなたとはかけがえのないたくさんの思い出がある。だからできるだけのことをしたいんです。今わたしに出来ることは、『ここにいること』で

す。」

代理店主は目を細めた。

「東京とテレックスで何度もやりとりしている暇はない。先方からの一回の回答を待つだけだ。わたしはそれ以上交渉する積もりもない。出てくる回答が最終的なものとわたしは考えている。」

イップ・ジョーは明るい屋下がりの陽光を浴びて静まりかえる対岸の密林を見やると、思い出したように万年筆でわたしの用意したペーパーに署名した。

わたしもその場でテレックス原稿を書いた。東京本社へ宛てたものだ。

《YJ(イップ・ジョー)ト面談。代理店契約解除ニツキ、基本合意。但シ、従前ノ当地ニ於ケル実績ト緊急事態ニ鑑ミ、米国ノ準代理店資格ヲ懇望シオル。至急メーカーヨリ確答取ラレタシ。首都陥落ハ秒読ミ段階ニアリ。YJ一族モ出国ヘ向ケ準備中。交渉往復スル時間的余裕無ク、最終的ナ回答ヲ待ツ。》

わたしは《基本合意》とのみ書き、《署名シタ》とは明記しなかった。

わたしがここに残る含みを匂わせなければ、本社もメーカーもイップ・ジョーの要請には難色を示すだろうと懸念したからだ。

米国の販売会社に段取りをつけたり、経営陣に稟議を回したり、メーカーの意思決定にはだいぶ時間がかかるだろうということは明らかだった。

わたしは唯一、メーカーの先代の会長とイップ・ジョーが古くからの知己であったこと一つに望みをつないだ。

そしてわたしがここに残ることは、事態を少しでも深刻にする効果があると信じた。

あまり騒ぎすぎてもいけない。

たかが仲介商社の二十七歳の若造が、興奮してイキがっているくらいにしか思われなからだった。

「テレックス・センターはごったがえしていて、すぐに打ってくれるか疑問ですよ。」

「だいじょうぶ。オペレーターにカネを渡して最優先でやってもらうよ。まだピアストル(当時の南ベトナムの通貨)が有効なうちに使わないとね。」

イップ・ジョーは愉快そうに言った。

「イップさん、あなたのことだから、海外にも資産を逃がしているとは思うけど、ここに

あるピアストルはどうなるんですか？ 銀行じゃあラチがあかないし。」

「粹いっぱいにかネを外へ出してしまっているしね。この頃じゃあ、闇屋も法外なレート
を振り回している。まあ平気さ。出来るだけゴールドにしてあるし。どうせ、サイゴン陥
落ともなれば、超インフレは避けられない。ピアストルもただの紙くずになる。脱出に面
倒があったり、失敗したら、そのときの用意にしてもいい。」

そろそろ午睡(シエスタ)の時間だった。 IPP・ジョーはわたしの手をしっかりと握って
言った。

「今、うちの会社の整理やらなにやらで立て込んでいるんだが、少ししたらうちに来ない
かね。もしまだ君がそのときサイゴンにいれば、の話だが。」

「喜んでうかがいます。」

「ホテルよりは過ごしやすくだらう。第一、マジェスティック・ホテルは海軍総司令部の
真正面だ。迫撃砲のマトになりかねない。」

四月七日。本社からテレックスが届いた。

《 Y J 代理店契約解除ノ署名ヲ取ル事ニ全力挙ゲラレタシ。米国商内ノ件ニ就イテハ、メ
ーカーガ鋭意検討中。本件ハ Y J ノベトナム出国後モ交渉継続可ニテ、初期ノ目的完遂ヲ
第一義トサレタシ。解除ノ後ハ、貴員モ直チニ出国スル事、順守請ウ。》

客観的に言って当然の回答だったが、やはりわたしは失望した。

予想はしていたが、わたしが IPP・ジョーの苦境に何の役にも立っていないことが口惜
しかった。

その日、わたしは返電した。

もう一度だけ抵抗してみようと思ったのだ。

《了解。米国ノ件ハ、別途交渉継続スル事デ説得試ミル。解除ノ件終了後出国スルガ、生
産済ミタイヤノ LC (信用状) 未開設分ロット及ビ荷揚げ地変更ニ就キ、 Y J ト最終協議行
ウ故、更ニ数日当地ニ滞在スル。明朝ヨリ Y J 邸ニ移ル。》

ほとんど、とんちんかんか駄々をこねているのといっしょだった。

実際、メーカーが各国に代理店を持っている以上、荷揚げ地変更には多少時間もかかる
し、また仮に生産済みのタイヤが未払いロットになっても、よほど汎用性の低い特殊なス
ペックでもない限り、他市場の代理店に肩代わりさせることが、できないわけでもない。

ただ、わたしは何のかんのと理由をつけてサイゴンに踏みとどまりただけだったのだ。

翌四月八日の朝。

わたしはショロンにあるYJ邸へ向かった。

朝食を家族といっしょにする予定だった。

ちょうどタクシーが大統領官邸脇の道路を抜けようとしていたとき、空軍のF5戦闘機が轟音とともに急降下してきた。

わたしの記憶では一機だったが、あとで、実は二機だったことを知った。

目標が何であるのかわからなかったから、なにか一種の演習のようなものとわたしは呑気に構えていた。

ところが突然、官邸内外の対空高射砲がけたたましい音をたてて乱射し始めたので、運転手もわたしも慌てて車を捨てて飛び出した。

通りの人々もクモの子を散らすようにバラバラと商店や家垣に身を寄せた。

わたしは雑誌売りのスタンドにへばりつき、上空を見上げたが、もうF5戦闘機は見えなかった。

なぜ、空軍機が大統領官邸を襲ったのだろうか？

クーデターだろうか。それとも発狂寸前となっている政府軍内だけに、もはや手がつけられないほど将兵の絶望と鬱憤が爆発しかけていたのだろうか。

しばらくして、砲火が止むと、官邸の屋上から真っ黒な煙が立ち上った。

煙の様子からして被害は少なかったと思うが、この事件は、平穩を装いながらも、南ベトナムの中身は、もはや国家の体をなしていないという事実を白日のもとにさらけだした。

車で IPP・ジョーの私邸に辿り着くと、六歳になったメオが大はしゃぎで迎えてくれた。華僑とベトナム人の混血でとても可愛らしい。

そして、とてもおませな娘だった。

昨年末、出張で来た際に約束させられたフランス人形を見せると、メオは狂喜してキスの洪水を浴びせてきた。

IPP・ジョーはすでに空軍機による大統領官邸の爆撃事件を知っており、わたしがホテルを出発する時間と重なっていただけに、そうとう気を揉んだらしい。夫人はかなり具合が良くなったらしく、いっしょに朝食に出てきた。

立て込んだ中国人街にあって、IPP・ジョーの私邸は十分にガーデンをとったフランス植民地風の瀟洒な二階建てだった。

淡いクリーム色が小さな果樹園によく映えていた。

プール・サイドにテラスが張り出していて、そこにテーブルをしつらえ、わたしたちは朝食をとった。

メオはますますやんちゃぶりを発揮し、こちらが疲れるほど上機嫌だった。わたしたちの会話を邪魔するたびに、人懐っこい大きな瞳がくりっと輝くのだった。

イップ・ジョーが言った。

「家の中はすっかりがらんどうでね。まとめられるものはみんなまとめてしまった。ダラトから逃げてきた親戚たちにも、あげられるものは残らずあげてしまったよ。」

「奥さんの親戚はサイゴンに残るんですか？」

「仕方がない。何人かはアメリカやフランスのビザを持っているが、たいていはサイゴンにとどまるよりほかない。ただこの家はまずい。わたしもタイヤに限らず、政府軍に物資を入れていただけに、共産軍が入ってきたらどうなるかわかったもんじゃない。みな昨日、そうそうにこの家から出て行ったよ。長いことホテルに君を放りっぱなしにして悪かった。」

長い髪を掻き揚げて後ろでまとめていた夫人が言った。

「ムッシュー・ジブシーも大変なときにサイゴンにいらしたわね。スアンロックでは激しい戦闘が始まっているらしいわ。でも政府軍が優勢ですって。サイゴンも大丈夫かもしれないわね。」

イップ・ジョーがかぶりを振った。

「しょせんアダ花で終わるさ。流れは止められない。中部高原地帯から引き戻しスアンロックに踏みとどまっているのは、政府軍随一の精鋭部隊だ。確かに共産軍の被害もかなり大きいらしい。今年に入って、初めての政府軍の本格的な反攻だからね。どぎもを抜かれたんだろうよ。しかし、周囲を何重にも共産軍が包囲しているんだ。逃げ場を失った政府軍がもうがむしゃらになってスアンロックにしがみついているっていうだけのことさ。火事場の馬鹿力みたいなもので、スアンロックから一歩も出られず、攻め立てられているというのがたぶん実態だろうよ。」

「スアンロックのゴム園も台無しね。」

スアンロックは美しいゴム園の町だ。

ダラトと同じで、もともとフランス人たちがつくった避暑地で、とくにゴム園が有名だった。

イップ・ジョーの父親がタイヤをやっていた関係で自分でもゴム園を経営したいということから、彼らも小さなゴム園を持っていたのだ。

とりわけイップ・ジョーと夫人には思い出深い場所だ。二人の婚約当時に逢引を重ねたところでもあったからだ。

わたしも一昨年、初めてベトナムを訪れた折に一度連れて行ってもらったことがある。カトリックの白いチャペルを中心にした落ち着いた町並み、そしてゴム園とのどかな風景がずっと広がっている。

そのスアンロックも、今や凄惨な戦火の真っ只中にある。

「わたしね、最近よく夢をみるの。それもいつも同じ夢。あなたがメオとどこかで会っている夢よ。主人もわたしも出てこないの。ずっと先の話かしら。変ね。」

「馬鹿を言いなさんな。みんなでサイゴンを出るんだ。メオ一人で生きていけるはずもない。」

「そうですよ。一日も早く出たほうがいい。気分がまたすぐれなくなったら、もう身動きとれませんよ。」

「まあ会社の方もすぐに片付く。従業員には出来るだけのことをしておかないと。後生が悪いからね。それが終わったら、すぐに出国しよう。いいね。」

夫人はにっこり笑ってうなずいたが、どこか影の薄い印象が気になった。ときおり寂しそうにメオを見つめているのだ。朝の果樹園を伝わってくる爽やかな風が少しまぶしいのか、しばしば目を細めるのだった。夫人はホット・チョコレートを飲みながらこう言った。

「あの夢、どうしても気になるわ。でも、メオは何があってもきっと大丈夫な気がするの。あの夢のせいね。・・・・・・・・」

四月十一日。

首都圏最後の防衛線スアンロックが崩壊した。

政府軍の第十師団が壮絶きわまりない戦いをして、激烈な抵抗をみせたため、共産軍は主力部隊を割いてスアンロックを迂回しながら一気にサイゴンへと矛先を変えた。

スアンロックに立てこもる政府軍については余軍に任せて、主力は先を急いだのだ。

このため第十師団はやむなく全部隊を解散し、各自独力でサイゴンへ帰還を試みた。

しかし、共産軍の追撃を受け、軍隊としての組織も失っていたため、けっきょく師団そのものが、混乱の中で自然消滅してしまっただけだ。

これでサイゴンは完全に包囲され、孤立無援となり、裸同然の首都となった。
首都の平穩は音を立てて崩れ、パニックが始まった。

四月二十三日。独裁者グエン・バン・チュー大統領はテレビの前に立ち、国民に辞任を告げた。

それまでわたしはずっとイップ・ジョーの私邸で日を送っていた
二度ほど東京へテレックスを入れたが、いっこうに返電がない。恐らくテレックス・センターが未曾有の混乱をきたしていると思われた。
東京でもそうとう焦っていたらしく、後でわかったことだが、日に二本も三本もテレックスを打っていたらしい。
そのうちの一本がようやくわたしの手に届いたのは、チュー大統領辞任の翌日だった。

《代理店契約解除ノ任ニ及バズ。安全ヲ期シ至急出国セヨ。リピート REPEAT (繰返ス)。至急出国セヨ。》

わたしはイップ・ジョーに相談した。

「ほらご覧。もう東京も待てないんだ。君に万一の事があつたら大変だ。仕事どころじゃない。それに東京は知らないが、君はもう初期の任務を果たしているんだ。すぐ出国したまえ。」

「まだ米国の件、何の検討結果も連絡してきてないじゃないですか。このままで僕は出国できません。」

「今は忘れることだ。もうこれは東京マターなんだ。わたしが出国した後も、交渉継続可と言ってるんだから、それでいいじゃないか。わたしたちも出国する。いいね。すぐ手配するんだ。」

ところがわたしたちはすぐには出国できなかった。実に大量の外国人や市民がベトナム航空のチケットカウンターに詰め寄せていて、まったく空席が無い状況となっていたからだ。やっとの思いでわたしは二十七日の便をとった。

イップ・ジョーの方は一日早い二十六日の便がとれた。

南ベトナムの政界はチュー政権後の空白の中で、生き残りをかけた凄絶な暗闘が繰り広げられていた。

時間がなかった。

共産軍の首都総攻撃は今日にでも、また明日にでも起こり得たからだ。

敵はサイゴンを取り囲むように首都西南にも展開していた。

サイゴン郊外の目と鼻の先にあるタンアン、そしてロンアンも共産軍の手に落ちた。サイゴン河の河口一帯、そしてブンタオ海岸も、もはやそれまでのゲリラではなく、正規軍が布陣していた。

首都の北部に迫っていた共産軍各部隊はそれぞれサイゴン市内の攻撃目標を策定し始めていた。

そして、スアンロックを突破してきた第四軍団は、いつでも首都総攻撃ができる態勢を整えていた。

わたしはまだ IPP・ジョーの私邸にいた。

どうしようもなかったのだ。

毎日メオと果樹園で遊んでいた。

もうできることもなく、出発便までも少し日があったから、たまにはサイゴン市内に出て、カフェの長椅子にひっくり返っては、新聞や雑誌を読んだりしていることもあった。メオは世の中で何がおきているかも知らず、屈託のないことを言っていた。

「ムッシュー・ジプシー。ママがね、きっとあなたにまた会えるわよ、って言った。」

「もちろんだよ。今度はどこで会えるかな。香港か、タイか、もしかしたらアメリカかも知れない。」

「わたし、アメリカ大嫌い。」

「どうして？」

「ママが嫌いだから。」

「君たちが、僕より一日早くサイゴンを出るんだよ。」

「知ってるわ。どうしてムッシュー・ジプシーはいっしょじゃないの？」

「航空券が取れないんだ。いっしょのがさ。」

「ほかの人みんなサイゴンからいなくなっちゃうのかしら？」

「たくさんの人がそうしたがってる。」

「みんな出て行ったら、サイゴンは空っぽになっちゃうじゃない？」

「新しい人たちがやって来るんだよ。」

「どこから？」

「北の方から。・・・・・・・・」

果樹園の中の白いブランコに乗りながら、わたしたちはいつまでも話続けた。

毎日プールで泳いでいたわたしたちは、真っ黒に日焼けしていた。

まるで歳の離れた兄妹のように、いつもわたしたちはいっしょだった。

果樹園からはのどかな田園風景と密集した森が見えた。水牛の姿を目で追いながら、湿気た地平線に無数の共産軍兵士を思い浮かべた。

優しい風景の底に潜む酷薄な現実というものに、わたしはいたたまれなかった。
せめて出国までにサイゴンが陥落しないことを祈るばかりだった。
果樹園のハンモックで午睡(シエスタ)していたときだった。
メオがプールから上がって来て、出し抜けに言った。

「ムッシュー・ジブシー・・・」
「なに？」
「わたし、あなたが好き。」

メオは真剣な眼差しでそう言った。
「どうしたんだい、急に？」
「パパやママがあなたのこと好きだから。」
「うれしいよ。ほんとにうれしい。僕もメオが大好きだ。」
「わたし、あなたのお嫁さんになってもいいのよ。」
わたしは噴出してしまった。

「わかったわかった。じゃあ、もっと大きくなったら、いっしょに考えようよ。」

メオは、『うん』とうなずいて、わたしの唇に優しくキスをしてくれた。
わたしは小さな濡れた体をしっかり抱きしめた。
果樹園の明るい日差しが、その日ほど残酷に、また切なく思えた日はなかった。

首都は恐慌状態に陥っていた。
市民がアメリカ大使館などに押し寄せて乱闘が相次いだ。
わたしたちは間近に迫る総攻撃を想定し、私邸を引き払い、市内の国会横にあるコンチネンタル・ホテルへ移った。
この間、大量に流入していた敗残兵や難民がサイゴンの治安を猛烈に悪化させていた。
兵士たちは軍服を脱ぎ捨てて、市民の群れに紛れ込んでいた。南ベトナム政府は最後の停戦協定へむけて必死の交渉を続けていた。
チャン・バン・フォン副大統領は昇格して、正式に大統領として共産側と折衝につとめた
が、これは北ベトナム政府からはたちまち拒否された。
もはや、無条件降伏か、それとも時間切れで総攻撃か、二つに一つしかなかった。

二十五日。夫人が倒れた。
心臓発作だった。医者のお話では心臓弁膜症とのことだった。顔も土気色になり、かなり容態が悪化しているのがわたしにもわかった。

わたしたちはコンチネンタル・ホテルに釘付けとなり、身動きが取れなくなった。

二十六日、とうとう夫人は起き上がれなくなった。一家はそのままサイゴンに残留を決めた。

夫人はうっすらと笑いながら、イップ・ジョーに謝っていた。

イップ・ジョーは声も出さず、慟哭していた。

外では狂騒の季節が始まっていた。

河向こうのジャングルでは砲火や機銃の乱射音が断続的に聞こえるようになった。

市内でも、銃声がひっきりなしに起こりはじめ、略奪や暴行が激しくなっていた。

前の晩には寝付いたあと、夜砲で飛び起き、急いで地下室に逃げ込んだりもした。

不安な夜は緊張した朝になり、人々の顔から南国特有の柔和な表情は消えた。

並木通りに張り出したカフェにも人影はなく、突然襲ってくる威嚇砲撃に怯えるばかりだった。

東京からテレックスが入った。

《即刻退去セヨ。》

悲鳴にも似た命令だった。

わたしは二十七日の便しか取れないことを再度連絡した。

重苦しい空気が、正気を失ったサイゴン市内に漂っていた。

ゴールドを買い求めて人々は殺到し、ピアストルは暴落した。

この日、グエン・バン・チュー前大統領がサイゴンを脱出した。

海岸線には米軍の艦艇が待機し、残存米軍兵士や米国居留民、そして大量のベトナム人たちを救出していた。

午後、夫人は少し楽になったと言って、パティオ(中庭)でわたしたちとお茶を一緒にとった。息をするのも難儀そうな夫人は、それでも笑顔を絶やさなかった。

出国の機会を永久に失ったイップ・ジョーも、もうすっかり覚悟を決めていたようだった。楽しいティータイムだった。

わたしたちはこの二、三年の思い出話に興じ、まるでまたすぐにでも再会するかのようさえ錯覚するほどだった。

サイゴンを出なくて済んだと喜ぶメオのはしゃぎようは、わたしたちをしばしば爆笑させ

た。

夫人は明るい日差しの中で両手をわたしの方に広げた。わたしは夫人のやせ細った体を抱きしめた。夫人は優しくわたしを抱いて、頬にキスをした。

彼女を見たのはそれが最後となった。・・・・・・・・

翌朝、わたしはコンチネンタル・ホテルをチェックアウトし、タンソンニュット空港に向かった。

前日、イップ・ジョーは空港まで送ると言っていたが、その日フロントに彼の姿はなかった。

わたしは敢えて声をかけずに出発した。

空港へ行く途中、もう一度代理店やイップ・ジョーの私邸を見ておきたかったので、大回りをしてタクシーに市内を走らせた。

車がツゾー通りに行く間、運転手はとんでもないことを言った。

「お客さん、今朝、マジェスティック・ホテルがやられたのをご存知ですかい？」

「やられたって、被弾したのかい？」

「ひでえもんさ。河向こうから撃った共産側の迫撃砲でね。海軍総司令部をねらったのか、国家警察や国会をねらったのかわからないけどね。ともかくマジェスティックの六階にぶち込まれてね。かわいそうに、ギャルソン(給仕)が一人吹き飛ばされたよ。」

ツゾー通りから海岸路を迂回するとき、わたしは右手のホテルを見上げた。

言う通り、六階のレストランが黒こげになって破壊されていた。

「こうやってグルグル市内を回っているうちに、また砲弾のお世話にならないといいんだがね。」

「そのときはそのときさ。今日までやられなかったんだ。きっと大丈夫さ。」

わたしは理由にもならないことを言ってごまかした。

シヨロンの一角を巡った後、空港へと急ぐと、そこはもう人波で滅茶苦茶な状態になっていた。

多少早目に来て正解だった。

予約してあっても、席がなくなってしまうのだ。押し合いへし合いしながら、ようやくチェックインを済ませ、搭乗口を目指して人垣の中を泳いでいくと、搭乗口にイップ・ジョーが心配そうな顔をして立っているのに気がついた。

「ムッシュー・ジブシー。いったいどうしたんだ？ もうホテルをとっくにわたって言うから、こっちでずっと待ってたんだが。一向にこないから心配したよ！」

「済みません。お宅や会社をもう一度見ておきたくって。ぐるっと回ったんですよ！」

「物好きだな、こんなときに。」

イップ・ジョーは笑った。さわやかだった。

わたしたちはそれから話す言葉を失っていた。

「今朝、家内が亡くなってね。……………」

わたしは絶句した。阿鼻叫喚の空港ロビーで、わたしたち二人だけがポツと真空状態のような静けさに包まれた。イップ・ジョーの瞳が気のせい、光ってみえた。

「君が来てくれてほんとうに良かった。この最後の一ヶ月、家内もとても楽しかったと思うよ。こんなときにほんとうによく来てくれたよ。そして何より、君と仕事が出来たことを誇りに思っている。」

わたしはイップ・ジョーの手をしっかりと握り、何か言おうとしたが、やはり言葉が出てこなかった。わたし自身、そのとき人前で涙を見せることを恥としなかった。

「ともかくも君だけでも出国できてよかった。」

「三十日の日航の最終便とも思ったんですが。」

わたしはやっとの思いで、そう言った。

「一時間たりとも今は待てない状況だ。たぶんその日航の最終便も飛ぶことはないだろう。」

「あなたはどうします？」

「家内を埋葬したら、ブントオ海岸へ逃げようと思っている。」

「無茶な。あそこはもうとっくに共産軍に制圧されている。国道だって閉鎖されているじゃないですか。」

「とにかく海までたどりついて、漁船を手に入れるしか、後は方法がない。娘に万一のことがあったら家内にも申し訳がない。この期に及んでは、軍もアメリカもまったく頼りにならないからね。」

ファイナル・コールだった。

イップ・ジョーがいつまでも放さないわたしの手を解いて肩を抱いた。

「さあ、行きなさい。君のことは忘れない。ボンボヤージュ(いい旅を)。……」
「また必ず会いましょう。……」

イップ・ジョーが小さな声で、『See you』と言ったような気がしたが、よく聞き取れなかった。

搭乗ロビーに入っても、彼はわたしの姿を追っていた。

笑いながら彼が大きく手を振るのが見えた。

わたしのフライトは間一髪だった。

翌日には共産軍の猛烈な砲撃が始まり、タンソンニュット空港そのものが炎上してしまったからだ。

サイゴン総攻撃の火ぶたが切って落とされたのだ。

アメリカ大使館に殺到したベトナム人たちはすべて見捨てられた。

フォン大統領は辞任し、ズオン・バン・ミン大統領が終戦工作を引き受けた。

チュー元大統領の右腕だったグエン・カオ・キ前副大統領も米軍艦艇で脱出した。

一度は考えた日航の最終脱出便は、ついに幻のフライトとなった。

わたしがシンガポールに着いてから、相次いでインドシナ半島の西側政権が、共産側のために崩壊した。

まずわたしがサイゴンを脱出した二十七日には、隣のラオスでパテト・ラオ(ラオス愛国戦線)によって首都ビエンチャンが陥落。

翌二十八日には、カンボジアからロン・ノル将軍が逃亡し、首都プノンペンがクメール・ルージュ(赤いクメール)の手に落ちた。

そして三十日、北ベトナムの共産軍戦車隊がいっせいに河を渡ってサイゴン市内に進駐し、人気のないメインストリートをまっすぐに大統領官邸へ突入していった。

ミン大統領は官邸の一室で待機していたが、北の正規軍は『交渉の余地はない』として連行した。

これで南ベトナム政府は名実ともに消滅した。

わたしが、中部高原地帯の戦線崩壊の最中にサイゴン入りしてから、わずか一ヶ月のことでしかなかった。

シンガポールのホテルの一室で、テレビに流れるサイゴン陥落の様子をずっと見ていたわたしは、それから十六年、一度もサイゴンに足を踏み入れることがなかった。

：：：

その日、倉田君とわたしはそうそうにベトナムの公園側と契約書を取り交わし、宴会となった。

宴会は地元の焼酎漬けとなり、さすがにこれはきつかった。

中国でバイチュウ(白酒)を一気飲みさせられたこともあったが、ベトナムの焼酎もかなり強烈なものだ。

なにしろ相手は七人だ。

二人でかなうはずもない。

ともかく今回のわたしの出張も、この一気飲みでほぼ役割を終えたようなものだった。

宴会の後、倉田君は気のすまないわたしを、もう一軒二人で飲みにいこうと執拗だった。さすがに若い。

これだけ飲んでも、まだ彼は女を漁る体力があるらしい。

わたしはいい加減ホテルに戻りたかったが、とうとう根負けしてついていった。

それはショロン地区にあるナイトクラブで、香港資本のものだった。

共産主義政権下でこんなところがあるのかと、一驚せずにはいられなかった。

ホステスの数はおよそ七十人くらい。

ショーあり、歌あり、香港やマレーシアあたりにある夜総会とさして変りはなかった。深いソファに落ち着くころには、多少とも酒が抜けてきた。

倉田君は片言の英語を話す馴染みの娘がいるらしく、のっけからよろしくやっていた。わたしについた娘は英語がまったく話せなかったので往生した。

まだ開放経済が始まったとはいえ、すべてが『共産主義国家ベトナム』のままだったといっている。

倉田君の話では、五十米ドルも出したら、驚くような美人が手に入る、という。

『処女は四百ドルですがね』と、彼は如才ない。

高いと言えばいいのか、安いと言えばいいのか。

なんとも複雑な気持ちだった。

「ドン(現在のベトナムの通貨)で払うんじゃないのかい？」

「ドンなんかで払ったら、紙幣をバケツ一杯持ってこないと間に合いません。一ドルが一万四千ドンですからね。」

ドンの通貨価値は地に落ちていたので、この頃では煙草のバラ売り一本を買うのにも、米ドルがまかり通っていた。

まるで陥落前のサイゴンにそこだけは逆戻りしているみたいだ。

周りの客はやたらに台湾人、香港人、タイやシンガポールから来た華僑ばかりだ。
娘たちも、ほとんどがこのショロン地区の同じ華僑のようだった。
日本人といったら、まだ此の頃は非常に少なかったのだ。
クラブでもわたしたちくらいのものであったろう。

「一時、台湾からかなり木材を目当てに来てたんですよ。安い南洋材ということで、それなりに成算はあったんですが、いざサンプルで切り出してみると、見た目には立派な木材でも、中にベトナム戦争当時の銃弾が入っていて、とても使い物にならないんだそうです。今はやはりグルタミン酸とか、まず現地の食料事情に根ざした、それも基礎産業の生産工場が多く進出してきているみたいです。」

「それもみんな、華僑系なんだね？」

「そうですね。アメリカはまだ国交を結んでないし。日本は、アメリカの様子をうかがって、まったく手が出てない。・・・ところで、どうです？ その娘。」

わたしの横にじっと座っていた娘は、わたしが気に入らないのではないかと、心配そうな顔をしていたので、なんとも居心地が悪くなってしまった。

ちょうどわたしは二年前に妻を病気でなくし、娘が一人だけいた。こういう場所へ来た以上、もっとなりふりかまわず遊びに徹することができればよかったが、どうも性格上、場違いな気がして萎縮してしまうのだ。

特にここがベトナムだということが、なおさらまずかった。

肉体市場は夜十時を過ぎてたけなわとなり、華僑の観光客などが引きも切らず大挙して押し寄せ、取っ替え引っ換え、女性を表へ連れ出していった。

そう言えばホテルというホテルの外に娘たちがバイクや自転車で乗りつけては、外国人を誘惑しているのを思い出した。

わたしがちょうどトイレに立ったとき、奥の廊下で向こうからどこかの華僑の男と絡み合うようにベトナム人女性が歩いてくるのに出くわした。

どこか見覚えがあると思いつつも、わたしはそのまますれ違った。

わたしは酔い覚ましに顔を洗うと、また来たように戻った。

すると、今しがたすれちがったその娘が外で待っていてわたしに話しかけた。

「もうお忘れですか？ 今日、お昼に事務所でお会いしたのに。」

わたしは目を疑った。

事務員募集の締め切り直前に飛び込んできたあの娘だった。よもや、夜この時間にこんなところで働いているとは想像もしなかった。

「いや、まさかと思ったよ。驚いたな。ずいぶん綺麗にしているね。」

彼女は悪びれずにカラカラと笑った。

「応募は失格ですか？」

「あの・・・もう一人の若い日本人には言わないほうがいいだろうね。」

「あなたは？」

「いっこうに。」

「よかった。」

「ときに、名前は何だっけ？」

「ミン。」

「ああそうだ。メオじゃなかったんだ。」

「あら、もうそんな彼女がいるの？」

「とんでもない。もう十六年も昔の話だよ。もっとも、生きていれば、君と同じ年頃だろうけどね。」

「明日はどうなさるんですか？」

「仕事は終わりだ。のんびりサイゴンの町を回ってみようと思ってね。」

「サイゴンなんて古臭いわ。わたしがホーチミンを案内してあげる。」

「しかし君は昼間、学校だろう。」

「さぼっちゃう。どこのホテル？」

わたしは困った。可愛い娘だけに、よけい当惑した。色白な丸顔が愛くるしい。流れるような髪が背中まで垂れていて、案外背の高いスラリとした体の線が、透き通るようなアオザイによく似合っていた。ホテルまで押しかけられては厄介だと思い、わたしは言い訳をした。」

「明朝だけちょっとわからないんだ。連れの男と相談しないとね。君の家には電話があるかい？」

「そんなものないわ。居候だし。いやあね、わたしが誘惑するとでも思っているのね。じゃあお昼はどうかしら。マジエスティック・ホテルご存知？ あそこの六階にレストランがあるの。待ち合わせしません？ 十一時半。」

「けっこう。」

「じゃあ、明日また。．．．．．」

彼女は何やら名残惜しそうにしていたが、さっとわたしの顔にキスをして、飛ぶようにホールへ駆け戻っていった。

わたしは狐につままれたような顔をして突っ立っていたに違いない。

しばらくして席へ戻ると、倉田君がいらいらして待っていた。

「さあ、そろそろ女の子を連れて退散しましょう。華僑がもう入りきれなくて、入り口の辺にあんなに並んで待ってるんです。たまりませんよ。支配人が連れて行くのかいかないのかってウルサくてしょうがない。」

「今日はわたしはいいよ。」

「えっ、気に入りませんか？」

「そうじゃないんだ。今、明日の約束をしてきたところなんだ。」

「なあんだ。さすがですね。恐れ入りました。そうときたらすぐ出ましょう。」

わたしたちはビル勘定をすませて表へ出た。

さっきのミンという娘が華僑と連れ立って、タクシーに乗り込んでいくのが見えた。

彼女もわたしに気がつき、にっこり笑いながらウィンクで合図をしてきた。

小悪魔のような屈託の無さが妙に爽やかだった。

わたしはなにかを思い出しそうに気がしたが、そのときはまだよくわからなかった。

翌朝、わたしはレックス・ホテルの屋上で簡単に食事を済ませ、カラベル・ホテルにいい指圧があるというので、レ・ロイ通りを散歩しながら、劇場(旧国会)まで歩いた。

ホーチミンの町は朝から活気に溢れていた。

ただそれはバンコクや台北のような騒然とした活気ではなく、何かホッとするようなそれだった。

朝が次第に目覚めていく心地よい息吹を感じるのだ。

劇場まで来て、わたしは横道に入ってしまった。

昔と変わらないカラベル・ホテルがそこに建っていた。

マジェスティック・ホテルが取れないときに、よく泊まったものだった。

蒸気浴をして二時間たっぷりマッサージを受けているうちに、わたしは年甲斐もなく、若い異国の娘とのデートに心を躍らせていた。

我ながら恥ずかしくもあり、正直言って、ミンというその娘はきっと来ないとはじめから

あきらめている自分もいた。

いや、来なかったらどんなにがっかりするだろうと、むしろ心配だったのかも知れない。
カラベル・ホテルを出ると、表はまだ午前とはいえ、朝の残り香が通りに漂っていた。
新しい時代が確実に訪れていると、無邪気に信じられるような気がした。

世に内戦ほど醜く、また残酷な戦いもない。

そして悲劇はいつの世にも必然的に存在した。

悲劇の裏にはまた必ず希望もあった。

それが時代を貫いていく唯一の動機だった。

この十六年の歳月の間に、わたしは今日見た明るい青空と、高くそそり立つ入道雲を夢見
ていた。

贖罪の意識からは、けして何も生まれるはずもなかったのだ。

わたしはドンコイ通り(旧ツゾー通り)に沿ってサイゴン河畔まで歩いた。

あの海軍総司令部は跡形もなくなっていて、半円形のロータリーに変わっていた。

マジスティック・ホテルは化粧直しをされていたが、六階のレストランから望める眺め
は、十六年前のそれとそう変りはなかった。

まだ時間が早いのかボーイがためらっていたが、窓際に座らせてもらうことにした。

河面を漂う風は白日の輝きに呼応して黄金色に波を立てていた。

汽笛が何度となくここがまぎれもなくサイゴンであることを告げていた。

時間通りにその娘は、例の白いアオザイをはためかせながらやって来た。

「お待たせして、ご免なさい・・・」

「よく来たね！」

「こちらこそ。ウソだと思っていたんでしょう？」

「からかっているのかと思った。」

「正直ね。」

「何か食べるかい？」

「遅い朝食を取ってきましたから。」

「じゃあ、コーヒーでも？」

ミンは好奇心に満ちた目でわたしを見つめていた。

「昨夜の女の子は？」

「女の子？ わたしには連れはいなかったはずだけど。」

「一人、女の子を見たわ。」

「ああ、あれはね、倉田君のお馴染みさんだよ。」

ミンは安心した様子だった。わたしには勝手にそう見えたのだろう。

「わたしの方が、素敵？」

「もちろん。」

「よかった。あなたも年齢がかなり上だけど、とっても素敵よ。」

わたしにはこういう単刀直入な表現が苦手だった。だからとても新鮮な気持ちがあった。

それにミンというその娘は都会的なセンスに溢れていたのだ。

英語も堂に入っていた。

「ご両親は亡くなったんだよね。」

「ええ。父はエンジニアでしたけど。」

「サイゴン陥落前はけっこう稼ぎになっていただろう。それなら英語や、フランス語が出来るんじゃない？」

「いいえ、それがぜんぜんしゃべれなかったの。」

「本当？」

わたしは意外だった。

あの当時、エンジニアは米軍関係で引っ張りだこだったから、たいていは英語か、昔フランス植民地時代の影響もあって、多少とも教育があれば、フランス語も話たはずだからだ。

「養母は、父の後妻なんです。実の母は、ご存知のようにとうに亡くなっていて、わたし、顔もあまりよく覚えてないんです。」

「写真は？」

「ないわ。きっとよっぽど貧乏だったのね！」

ミンはあっけらかんとして言った。

「君はずいぶん色が白いけど、シノワーズ(中国人)との混血かな？」

「いやあねえ、日本人って。詮索がほんとうに好きなのね。残念でした。わたしは生粋のベトナム人。父も母もみんなハノイから来た人よ。気が済んで？」

「了解了解。悪かった。さあ、今日はお嬢さんはどこへ案内してくれるのかな。」

「ご希望は？ 昔こちらによくいらしてたんでしょ？」

「年に二、三回くらいずつね。そうだな。ショロンに行ってみたいな。」

「昨夜ショロンにいらしたじゃないの。」

「あれはナイトクラブだし、どこをどう回って行ったんだか、まったく見当もつかないんだよ。それに行ってみたいところがあるんだ。」

「住所は？」

「あるよ。ここに。」

わたしは手帳に書きとめてきたイップ・ジョーの事務所のアドレスを見せた。

「まあ、行けばだいたいわかるけどね。昔の商売のパートナーが持っていた会社でね。サイゴン陥落以来、初めてベトナムに来れたんで、どうしても行ってみたいんだよ。」

「サイゴン陥落。・・・哀しい思い出？」

「まあ、そうとも言える。」

わたしは一瞬目を伏せた。問い詰めるような娘の視線がわたしには痛かったのだ。ミンはわたしの手をとって、さっさと席を立った。わたしの方があたりを憚ってたじろいでしまった。彼女は平気でわたしと腕を組み歩き始めた。

シヨロンまでサイゴン駅前通りをまっすぐ下る途中、わたしはタクシーから窓外の町並みを注意深く眺めていた。

中心街から少し入ったあたりに懐かしい二階建てビルが見えた。

そこは、今ではもうすっかり事務所の気配がなく、薄汚れた雑貨屋などに姿を変えていた。老朽化はととも隠しきれなかった。

無駄だと思いつつも、ミンを通訳にして住人にたずねてみた。

しかしイップ・ジョーは二度とここへ立ち寄らなかったようだ。

隣の板金塗装屋は、陥落前からいたそうだが、イップ・ジョーの行方は知らなかったもう七十近いおやじさんだった。

「何でも、ブンタオ河口へ向かうとか聞いたがね。もう国道も寸断されとったし、たどりつけなかったろうよ。」

無理もない。

聞かなければ良かったと思った。

ミンは根堀り葉堀りわたしとイップ・ジョーとの関係のことを聞いたが、わたしの答えはどれもいい加減なものだった。

けだるい屋下がり、わたしたちはイップ・ジョーの私邸へ向かった。

私邸はさらにひどい状況だった。

ガーデンやプールは完全に瓦礫の下に埋もれていた。

瀟洒な植民地風の建物も、倒壊寸前という有様で、そうとう長いこと人の住んだ形跡はなかった。ミンがからかった。

「この辺の人が、ここにはコンクイ(幽霊)が出るって言ってるそうよ。」

瓦礫の山を踏み越えて裏の果樹園の方をのぞいてみた。
葡萄棚は跡形もなくなってしまい、ほとんど雑木林に近いほど荒れ果てていた。
かすかに、のどかな田園風景や水牛の姿が遠くに見えた。

「その人、軍隊に出入りしていたんでしょう？ 戻って来たはずないわ。根本的に名前も身分も偽ったはずよ。生きていたんなら。・・・・・・・・」

そのとおりだった。かりに生きていたとしても、わたしはなにやらこうやって探していることが、この十六年の歳月を冒涇しているような気さえしてきた。

「ここまでなんだ。わたしの記憶や、思い出も。この先にはもうなにもない。」

ため息ばかりが瓦礫の山に降り積もるようだった。
わたしたちは市内に戻り、新しくできたばかりのカフェに入った。

「さあ、今度は君の番だ。話を聞かせてほしいな。」

わたしはとにかく気持ちを切り替えようとしていたのだ。

「わたしはミン。二十二歳で、昼間は英語の学校、夜はナイトクラブで働いています。・・・・・・・・」

「待ってくれよ。」

わたしは噴出してしまった。

「恋人は？」

ミンはさっと赤くなった。

「ははん・・・・・・・・さてはいるな。」

「いないわ。夜働いているんですもの。誰が付き合ってくれるものですか。それよりご家

族は？」

「うん。東京にね。娘が一人。家内は亡くなったんでね。」

「あら、御免なさい。余計なこと聞いちゃって。・・・」

「もう人生の半ばを過ぎて、君のような明日は、わたしには来ないよ。」

「だから過去ばかり見つめているの？」

「どうかな。」

「でも、素敵よ。どこかしら遠くを見ているような眼差しが。」

わたしはえらく気恥ずかしくなってしまった。元来、こういう会話に慣れていないのだ。

「ねえ、わたしを見て。」

わたしは緊張した。

「もう昔のことは振り返らないで。」

変った娘だった。さも、わたしのすべてを知っているかのような口ぶりだ。そしてわたしはある種の生々しい感情に耐えていた。

「君は今夜もクラブに行かなくちゃいけないのかい？」

やっとの思いでそう聞いてみた。

「ええ。学費のためですもの。」

「今夜の分、わたしがエスコートしても構わないかな？」

わたしは体中が熱くなるのをひしひしと感じた。

ミンは一瞬ドキッとして言葉を詰まらせた。

「いっしょにいて欲しいの？」

わたしはうなずいた。

「さあ、どうしようかしら。……」

彼女は悪戯っぽそうな瞳をしてわたしをからかった。
表通りには街路樹が重厚な南洋の日差しの中で踊っていた。
時折カフェの店員が舗道に水を撒いては目に優しい風情をつくりだしていた。

ハノイの出身だと言っていたが、ウソであることはわたしにもわかった。
物腰がまるであか抜けていたからだ。
地元のサイゴンっ娘(こ)に違いなかった。
この娘にも言うに言われぬさまざまな過去があるのだろう。
あの混乱の後、身をよじるような生き方をしてきたに相違なかった。
まだその頃は彼女自身ははっきりと世の中のことがわからなかったにしても、自分を見ろと
いった彼女の一言は、実際わたしにも痛い一言だった。
彼女が過去の重圧から逃れて、新しい世界を見ようと精一杯手を伸ばしているのが想像で
きたのだ。

「いやあね、わたしったら、一目ぼれしちゃったのかしら。ごめんなさい。変な娘でしょ？ お金で済むことなのに！」

ミンは臆病そうにわたしをのぞきこんだ。

「とんでもない。君は眩しいくらいだ。」
「上手ね。そうやっていろんな国の女の子を口説いてきたの？」
「人間き悪いね。」
「でも本当でしょう？」
「少しはね。」
「そして今日もそういう気分なの？」
「もう勘弁してくれないか。親子ほども歳が違うんだから。実際うちの娘の少し上のお姉さんってところなんだ。」

彼女のきわどい質問はとどまるところを知らず、わたしはまったく弄ばれていた。
わたしは当面の劣勢を打破するために、彼女の手を引っ張って、いっぱい光の中へ飛び出した。
旧大統領官邸裏の公園からカトリック大聖堂を回って、旧日本大使館へ。
そして河岸通り。

わたしたちはわけもなく愉快だった。

汗が体からほとばしり出て、それはまるで逃げ水のように、わたしたちの体に絡み、陽炎(かげろう)のような一刻(ひととき)の充足感を覚えるのだった。

ミンが言った。

「思い出をつくることのできる人は、夢だって見ることができるわ。……」

河岸通りの木陰に逃げ込んだ彼女は、ときどき突拍子もないことを言う。

「ねえ。あなたもきっと夢を持てるわ。」

「そうかな。」

「そうよ。」

「君のおかげかな。」

ミンはそうやって底の知れた誘導尋問を繰り返しては、子供のように喜んでいた。

汗ばんだアオザイはそれでもたちまち、夕刻の河風に吹かれて乾いていった。

数え切れない光の踊り子たちがキラキラと彼女の全身にまとわりつく様子は、まるで時空を超えても色褪せることのない生命のようだ。

若々しい血は銀河のように流れ、肉体は水蒸気のようにあらゆる光の渦を取り込む。

永遠の充足や懐かしい思い出や、優しい恋に、その姿を自在に変えていくのだろう。

サトウキビ売りがタマリンドの並木を通り過ぎて行く。

彼女とわたしはその緑の下を軽やかに流れていった。

あらゆる人間の心の葛藤からわたしたちは自由だった。彼女の言う通りだ。思い出はみな懐かしくも、美しくもあるはずだった。

かけがえのない日常とはそういうものだろう。

さまざまな哀しみも、まるで雨の痛みにも似た喜びをわたしたちに与えてくれると、そう信じられる不思議な午後だった。

わたしは夕暮れの中で、幾度か彼女の大きく見開いた瞳を目の前にして、思わず唇がニアミスしそうになった。

そして彼女はいつもはっとして、恥ずかしそうに笑いながら蝶のようにすり抜けていった。わたしは夢中だった。

その夜、彼女が客に連れていってもらったことがあるという裏通りのル・メコンというフランス料理屋へ行った。

洒落た内装で、バイオリンやチェロが奏でるシャンソンに、わたしたちは身を任せた。言葉は妙に少なくなり、目があうたびにわけもなく微笑み、まるで恋人同士のようにだった。

真珠が涙のかけらなら、微笑みはそれに命を与える月の光だ。

青白く、そして切なく燃え続ける。

またたくまに時間が過ぎ、わたしたちは店を出た。

まだ瞳で言葉を交わし続けていた。

店の前に立ち尽くしたまま、次の言葉を捜していたのだ。

「それで・・・・・・・・」

「それで？」

彼女は大胆にもわたしの首に腕を回した。

「何か言って。」

「それで、これから・・・・・・・・」

わたしがそう言いかけると、彼女が言った。

「シルク(絹)のような夢が見たい？」

彼女の瞳は満天の星のように輝き、それは明るい朝露にも似ていた。わたしは止み難い衝動を抑えることができなかった。

ルージュの落ちた唇に、震えるような思いをそっと伝えた。

彼女もしっかりとわたしを抱きしめたまま、長いこと染み入っていた。

そのときわたしたちが呼んだ車が店の前へ戻ってきた。彼女はさっと身を翻すと、にわかには髪を掻き上げ、みるみる頬を涙で濡らしていった。

わたしが思わず近寄ろうとすると、彼女は後ずさりして、わたしに悲しい声を投げかけるのだった。

「ごめんなさい。わたし・・・・・・・・」

彼女はようやくそれだけを言うと、暗い夜道へ一人で走り出して行った。

薄暗い街灯の中を白いアオザイ姿がぼんやり消えていくのを、わたしはただ敗残者のように見送るだけだった。

一瞬ですべてをぶち壊しにしたわたし自身の醜悪な苦衷だけが、いつまでも暗闇に沈んでいた。

レックス・ホテルに戻ってからも、わたしはミンの手入れの行き届いた長い髪や、透き通るような瞳や、風のようにしなやかな体を思い出していた。

そして寝付かれない夜がただ音もなく通り過ぎていく。夢はやはり夢でしかないと、そう思いしらされた。

来るんじゃないかったという青臭い後悔が胸を埋め尽くし、わたしは固いベッドに身を投げ出すばかりだった。

光に飢えた心は、乾ききった河のように、寝苦しい夜の淵に沈んでいく。

空しさと、新たな思い出を汚した冒涇のやり切れなさが、いつまでも月明かりの中で時計の針を元に戻そうとしていた。

翌日、わたしは倉田君の見送りを断り、一人でタンソンニュット空港へ向かった。

十六年前と同じように、空港ロビーはごった返していた。

ようやくの思いで香港行きの搭乗券を手にとると、わたしは人ごみを掻き分けるように搭乗口へ急いだ。

その時、わたしは信じられない光景に目を奪われた。

搭乗口のそばにミンが立ってこちらをじっと見つめていたのだ。

わたしは彼女の前まで来ると、何と声をかけていいか言葉に詰まってしまった。

清潔な白いアオザイに身を包み、彼女はやわらかい瞳を輝かせてわたしに微笑んだ。

「昨夜は・・・ごめんなさい。変なところが、まだ子供だったのね・・・今度お会いするときには、もっと大人になっているわ・・・」

わたしは何かを言いたかったが、彼女は続けて言った。

「これ・・・ラブ・レター・・・」

白い封筒をわたしに押し付けた。

とても厚い中身だった。夜を徹して書き綴(つづ)ったものらしい。

彼女は目を閉じて、さっとわたしの唇にルージュを残していった。

「さあ、急がないと。あとがつかえているわ。……ムッシュー……ジプシー。……」

わたしは心臓が止まりそうだった。その呼び名を知る人は、この世にごく限られていた。わたしは思わず、声を出しそうになった。

すると彼女は満面に笑みを浮かべ、人差し指でわたしの口を封じた。

「ボン・ボヤージュ。……ムッシュー・ジプシー。……」

そう言って彼女は真っ白な歯を見せた。
わたしは彼女の手をしっかりと握り、自分の頬に押し当てた。
万感の思いが熱いしづく滴となって頬から彼女の手を伝っていった。
彼女の瞳は、大粒の涙をこらえていた。

アナウンスが流れる。

「ファイナル・コールよ。……」

彼女はもう一度わたしの唇にキスをして、言い含めるようにささやいた。……

離陸してからも、わたしはしばらくの間、彼女のくれた手紙を読むことができなかった。きっとこの厚い手紙の中には、わたしが知りたい十六年のすべてが書かれてあるはずだった。

そしてイップ・ジョーはもうこの世にはいないのだろう。
体中をこの上もない充足感と、来てほんとうに良かったという思いが虹のように橋をかけていく。十六年。……わたしの心のつかえは、白い入道雲の端々に碎けて、その虹に色を変えていくような気がした。

ホーチミンはすでに遠く、南シナ海はあの日からエメラルドの色を変えてはいなかった。けして無駄ではない日常が、ひそやかな息づかいを確かに伝えていた。

～エピローグ～

以上は、わたしがサラリーマン時代、ベトナム担当だった先輩から聞いた、本人の実体験をもとに書いた小説です。主役から端役まで、登場する人物はすべて実在します。また仮名にしてあります。その後、ミン(メオ)がどういう人生を歩んでいったのかは、寡聞にして知りません。

シュガー

その日のハレイワ・ビーチは、嫉妬に狂った女のような波がたっていた。重苦しい雲は七マイルも続く海岸線に覆いかぶさり、鉛色の海はやり場のない憤りを冬のノース・ショアにぶちまけていた。シュガー（彼はそう呼ばれている）のバイクは、ホノルルから内陸をずっとR（ルート）99沿いに北へ抜けて、ちょうどハレイワの手前からR83に入ったところだった。ラムキ橋を渡るとあちこちにつぎはぎだらけの古臭い木造家屋が見えてくる。今ではそれなりにリストアされて小奇麗なブティックやレストランに成りすましている。ゼミの卒論を落としてハワイに出奔したのが一昨年。理由は明快で、ただサラリーマンになりたくなかったのだ。そのくせ、大学院に残る気もさらさらしない。そもそも経済原論には興味がなかった。妙に彼を可愛がってくれたゼミの教授の甘さにつけいった結果がこれだ。

『もうあと数年で二十世紀が終わる。』・・・つまらないことに、シュガーは妙な焦りを覚えていた。・・・『俺は一体なにをしているんだろう？』

さっきカイルアのアパートを出てくるとき、ポストマンが教授の最後通牒を届けたばかりだった。出かけるところだったのでいい加減に読んだが、どうやら卒論のタイムリミットは一月中旬で、もう後がないぞ、ということらしい。二ヶ月ちょっとしかない。シュガーのことがお気に入りだった教授もとうとう堪忍袋の緒が切れたのだろう。

バイクは国産と決まっていた。どんな暑い日でも、長距離を走るときには長袖のコットシャツを着て、革のグローブを欠かさない。そしてヘルメットはするものだとは固く信じていた。

『今日は駄目だ。』

パイナップル畑を延々と走り抜ける頃からもうあきらめていた。ハレイワの町は人も車もすっかり影をひそめていた。十一月にはいると風の強い日が多くなる。その日はノース・ショアも片っ端から店じまいになっているのだろう。小さなハレイワの町を過ぎると、やがてワイメア・ビーチが左に広がってくる。

波が凄まじい。四十フィート（12m）はある。それもすぐに形が崩れるタチの悪いやつだ。ハワイで言う波の高さは、トップからせりだし部分までだから、波のボトムからなら

この2倍はある。つまり24mの波だ。ビルの高さに例えれば、6階分くらいだろうか。去年デレク・ホーが見せた劇的なパイプ・マスタースでの決勝戦でも、これほどの波はなかった。年齢的には盛りを過ぎた男が、前年三十六位からの雪辱を果たして、最後の土壇場で大穴をあけたツキも、せいぜい十フィートのワンチャンスの波だった。ハレイワからワイメア、そしてエフカイ、パイプに入る頃、ヒステリーを起こしたような波の具合を目の当たりにして、何とも気が萎えてしまう。

バイクを減速して路肩に寄せると、向こうに真っ赤なシボレー・コルベットのコンバーチブルが停まっているのに気づいた。ドアは半開きになっていて、ブロンドの白人女がむくれっ面をしたままフロント・バンパーに腰掛けている。椰子は大きくしなり、砂が舞い上がるR83沿いには場違いな服装だ。イエローのワンピースだが、ベアトップになっているので上半身はやたらに肌が露出していた。

シュガーはバイクにサイド・スタンドをかけ、女に近寄っていった。ヘルメットをはずすと、にわかに冬の風が体の中を走り回るようだった。

白人女は火のついていない煙草を指でつまんでにっこりとシュガーに笑いかけた。シュガーはつねづね白人というものを、目からはなかなか表情が読み取りにくい人種だと思っていた。そのかわりに連中は顔や体全体で表現するのが上手いと感心するのだ。

「What's up? (どうしたの)」

「急発進したり、急にがくと止まったり、・・・恐ろしくてもう乗れないわ。」

シュガーは女を急き立てるようにしてボンネットを開けてみた。問題は簡単なことだった。

「ラジエターに水がはいってない。・・・」

「あら、本当？」

「日本人はウソをつかない。」

そう言ってシュガーは悪戯っぽく笑った。

「I know(知ってるわ)」

女もさっきの仏頂面とは打って変わって柔和な表情になっていた。

シュガーは近くの民家へ水をもらいにいった。バケツに水を汲んでくる途中、なんとなく腹立たしくなった。『こんなこともわからずに、車だけは偉そうだな。・・・』

白人女はシュガーがラジエーターに水を補給しているあいだ、腕を組んだままずっとその様子を見ていた。

「どこで働いてるの？」

女は三十代後半だろう。メラニン色素が少ないくせに、やたら肌を焼くものだから、胸元から背中にかけてシミがたくさんでている。ルックスは悪くない。インテリなんだろう。整った顔の輪郭が安っぽくない。『教養のない白人ほど始末におえないものはないからな。』シュガーはいつもそう思っていた。

「昼間は、パライソっていう店でピザの宅配。・・・夜は最近ディスコで・・・バーテンの見習いだね。」

「ディスコ？」

「ココ・パームス。・・・アラモアナの近くだよ。」

「あなた、何ていうの？」

「シュガーってみんなは呼んでる。」

「可愛いわね。」

「あまり好きじゃない。」

女は名刺を一枚差し出した。

ナタリー・ブラウン。インテリア・デザイナー。ヘッド・オフィスはロサンジェルス。自分の会社らしい。

「カリフォルニア・・・ね。」

「わたし自身はハワイにいることの方が多いの。LAは人に任せてるわ。こっちの方がアイデアが閃くから。」

「モダンな仕事だから、インスピレーションが大切だ。」

「でも、エディソンじゃないけど、それはたった一パーセントよ。九十九パーセントは、けっこう汗を流しているんだから（パースピレーション）。はたから見ているのと大違い。」

「でも、その一パーセントがなければ、残りの九十九パーセントも、結局ただの徒労で終わる。」

「あなたって面白いわね。」

ナタリーというその女は白い歯を見せて笑った。

「家はハワイカイにあるの。・・・電話して。」

彼女はもう一度名刺を取り上げて自宅の電話番号を書き加えた。そしてさり気なくシュガーの頬を撫でて車に乗り込んだ。こんどはスムーズにエンジンがかかったようだ。所在なげにシュガーはヘルメットを持ち直し、車から離れた。ナタリーは思い出したようにシュガーに声を投げかけた。

「ありがとう。・・・シュガー。」

真っ赤なコンバーティブルは、ハレイワ方面へ下って行った。

：：：

風はますます激しく海を揺り動かしていた。

波に感情があるというのはウソだ。感情という言葉は優しいという意味だからだ。彼らはただ野生をむき出しにしているだけだ。

サーフィンが危険度の高いスポーツだとはいえ、しょせんスポーツなんだとシュガーは思っていた。自然と一体になるなどといった哲学や精神論には正直言って食傷気味だった。

霊長類の中で人間ほど野生を失ったひ弱な存在もない。無理していいことは何ひとつない。ほかの動物にはちゃんと周期的な発情のメカニズムが備わっていて、その結果妊娠したときだけ雌の乳房が張り出す。

しかし人間の女は成長とともに恒常的に乳房が目立つようになっている。人間の男がまったく野生をうしなしたデクノボウだからだ。いつも女は、その『女性』を主張していないと、男は種の保存に興味湧かないのだ。二足歩行を始めたことで、大変な進化を遂げた人間だが、おかげで女性の「それ」は外見からは股間に隠されてしまい、女であるという目印が無くなってしまったのだ。それが人間の女がいつも乳房を張り出している理由。

逆に言えば、発情システムを失った男は、いつだって女を求めるし、全然女がなくても構わない。強姦や輪姦も動物には存在しない。人間が、哀しいほど野生から遠ざかってしまった結果の副産物だ。とても自然とわたりあうだけの器量など、もうとっくに持ち合わせではないのだ。シュガーは、そんな風にいつも思っていた。

サーフィンのために大学の四年間をほとんど潰し、おまけにこんなところにまで来て、二年近くもブラブラしていることが、ときにはばかばかしくなることもある。とくにこういうスポーツに不向きな天気の日にはそうだ。とはいえ、負け癖のついた今の生活がけこ

う居心地いいものだというのも事実だった。ただ自分という存在が地崩れを起こしていくのを、シュガーはいつも黙って見送った。

シュガーはバイクを置いたまま、人っ子一人いないパイプ・ビーチへ出てみた。愛想のない潮風はここがハワイだと思うのに十分だった。

『ツイてない。』

シュガーは呟いた。
道理でどこもかしこもクローズになっているはずだ。波は完全に発狂していた。

『これじゃあ殺されちまう。』

何トンもの土気色の水が炸裂した後に、その悲鳴が届いてくる。そして次のうねりが重たそうに緩やかなアーチをせり出してきた。これは大きい。水平線の前にたちはだかつて、なおもその手を一杯に広げていた。そそり立つ壁はほんの数秒。もしかしたら一分ほどの長さにすら思えたかもしれない。胸が塞がりそうな瞬間だった。一気に波の稜線は落下し始めた。

そのとき、思いもかけずシュガーの目にサーフ・ボードの一端がとまった。鉦山で発破をかけたように砕けていく大波の飛沫に、シュガーは目をひときわ凝らしてみた。すると突然視界が開け、赤いボードがカレント（流れ）の上に飛び出してきたのだ。白人の男が腹ばいになってパドリングをしている。シュガーの目はその男に釘付けになった。もう一波が迫り上がる前に、赤いボードはほとんど休む間もなく反転して、うねりに身を任せた。張り詰めた糸がこれでもかというように伸び上がっていく。男は今にも切れそうな糸の頂点に立つと、一気に直滑降していった。波はまるで時間を止めたようにショルダ―を張り出したままだ。やがて赤いボードが水の壁を真横に切り裂いていく。チューブが始まっていた。

シュガーは体中に悪寒が走った。突然、男のボードが失速したかに見えたのだ。スピードを殺したようなこの瞬間が、リップングへと続くポイントだ。男はスピードをためこんだ。正念場だった。このボトム・ターンで生きるか死ぬかが決まる。大きな口が閉ざされようとする寸前、赤いボードは円を描きながら想像を超える速度でたちまち波をクリアしていった。あとは大地を叩き壊すような断末魔がパイプ・ビーチに広がるばかりだった。

『これはもうサーフィンじゃない。．．．』

シュガーはため息ばかりついていた。喉が渴いた。舌も粘つく。赤いボードはもうどこにも見えない。あとからあとから巨大なモンスター・スウェルが生まれている。

シュガーは椰子の木の根元に腰を下ろし、気が抜けたようにボンヤリしていた。まるでサム・ペキンパーの映画で、圧倒的な暴力を見せつけられたあのような気分だ。

あのサーフィンは明らかにスポーツの限界を超えていた。

しばらくしてふとシュガーは人の気配を感じた。東洋系の若い女がウィンド・ブレイカーを引っ掛けて、百メートルほど先に佇んでいるのだ。もしかしたら、シュガーが気づかなかっただけで、ずっとそこにいたのかもしれない。うなじにかかるくらいの黒髪を片手で押さえたまま、じっと彼女は海を見ていた。

相変わらず砂は激しく舞い上がっていた。やがて、赤いボードを抱えたあの男が海から上がり、体を引きずるように戻って来るのが見えた。女のほうはにこりともせずキスをして、タオルを男の肩にかけた。シュガーはその様子を見守っていた。二人は一言も口をきかず、重苦しい表情のまま向こうの椰子の群落へ立ち去って行った。まるで大きな過ちを犯したあのような無力感が漂う。砂に残された男女の足跡は、みるみるうちに風にかき消されていった。

：：：

シュガーはその日のピザの宅配を終えて、車をパライソに戻した。そしてバイクを駐車場の奥から引っ張り出し、クッキーが同じ店内のシフトを終えるのを待っていた。シートに腰掛けて煙草を喫っていると、あの赤いボードの男のことが思い出された。

クッキーは生粋のポリネシアンだ。色が黒いのでクッキーとあだ名がついた。彼女は結構それを気に入って、『シュガーとクッキーなんて、いいコンビネーション。』と勝手に悦に入っていた。

彼女はシュガーに夢中だ。ある日、シュガーが客としてパライソに入ったときのこと、ドン臭いクッキーはヘマをやらかした。シュガーは見かねて、それを自分のせいだと白人マネージャーにとりなした。これがきっかけ。以来クッキーは、『日本人は優しい』とい口癖になってしまった。

カイルアのアパートに週一回は必ずやってきて、洗濯やら掃除やら、頼みもしないのにかいがいしくするのだ。今ではシュガーもバイクで彼女をカネオへの実家まで送るようになってしまった。クッキーは今ではすっかり恋人気取りになり、シュガーはしばしば閉口する。十七歳の小娘に生活の匂いを嗅いだ瞬間から、もう吐きそうになる。

八時頃、そのクッキーがタンクトップにジーンズで跳ねるようにパライソから飛び出してきた。はちきれそうな褐色の彼女を、シュガーは『リトル・ボマー（小さな爆撃機）』と呼んでいる。クッキーはキスすると、大きなえくぼをつくって笑った。

「待った？」

「いつものことさ。」

「ごめんネ。遅れちゃう？」

「少し危ない。」

「今日は送ってくれなくていいヨ。バスで帰るから。だから食事だけいっしょにしよ。チリ・コンカーンが死ぬほど食べたいな。」

「太るよ。」

「若いから平気。」

クッキーは愉快そうに大きくウェイブした長い髪をバンドでとめた。ペペというメキシカン・カフェは同じダウンタウンにある二人の行き着けだ。クッキーはふうふう言いながら、チリ・コンカーンを頬張っていた。そして時折シュガーの顔を覗き込んで、例のえくぼをつくってニッコリするのだ。シュガーはいつも子供に付き合われているような気がする。

「イルカの調教、すすんだ？」

「まだアシスタントしかさせてもらえないの。でも先週は初めてイルカと泳いだわ。」

クッキーはオアフ島東部のマカプウ岬にあるシーライフ・パークでアルバイトをしていた。ハイ・スクールを出たばかりの彼女には夢がある。

「また日本でイルカを殺したんですって。」

「へえ。」

「残酷だわ。」

「そうかな。」

「残酷よ。イルカは言葉を話すのよ。脳がほかの動物よりずっと発達してるんだから。それを殺すなんてひどいわ。」

「脳が優れていることと、生命の尊さとは基本的には関係ないと思うけどな。優秀か、優秀じゃないかで決めるなら、もうナチとなにも変わらないんじゃないの。」

「必要ないのに殺すのはいけないと思わない？」

「必要だから殺したんだろう？ 魚網が食いちぎられて商売あがったりの漁民がさ。それ

に、必要か必要でないかで決めるのも、ずいぶん人間の身勝手な発想だよね。イルカは可愛いから駄目だけど、鶏や牛や豚はいいって言うんだらう？」

「食肉用の動物はちゃんと種が保存されるように管理されてるもの。」

「馬鹿言っちゃいけない。要するに、きみたちは動物を人間の養いや鑑賞や愛玩の対象としてしか見てないんじゃない。」

「もういいわ。」

クッキーはふくれてスプーンを置いた。

「もっと食べよ。若いんだろ。」

シュガーはぶっきらぼうにそう言って、タコスを彼女の口の中に押し込んだ。クッキーは噴出しそうになりながらいやいやをした。ひとしきり笑いをこらえていた彼女は、ようやくコーラで飲み下すとまた話を始めた。

「あなたって本当に表情がないの。日本人ってみんなそう？」

「目でわかるからさ。」

「駄目よ、そんなの。楽しければもっとちゃんと笑わなくちゃ。だから反対にシュガーなんてあだ名がついちゃうのよ。」

「君たちは、目を見ただけじゃ何を思ってるのかわからない。白人もそうだけどね。厄介な人種ばかりだ。」

「目で本当にわかるの？」

「わかるさ。」

「今わたし何を考えてる？」

「そんなこと目を見なくたってわかる。」

「だから何よ？」

「抱いて欲しいってさ。」

「いやだァ！」

「凶星だろ。」

クッキーは真顔になって、またシュガーの顔をのぞきこむようにして言った。

「欲しいの？」

「別に。」

「なあんだ。」

クッキーは急につまらなさそうな顔になった。

「俺、もう行くよ。悪いけど。」

「明日、アパートへ行くね。いい？」

「どう言ったって君は来るんだろ？」

「えへへ。」

クッキーは愉快で仕方がないようだった・彼女は愛されているよりも、愛していることのほうが、じつはずっと幸せなんだと思っている。

観光客がまず入ってこない殺風景なペペでは、メキシカンの店主が商売なんか関係ないという感じで、カウンター越しに『チック』を読んでいた。油の切れかかったカサブランカ・ファンがからからと無機質な音をたてていた。

：：：

ココ・パームスは毎夜のことながら大変な賑わいだっただ。半分以上が日本人女で占められ、そのほとんどが露出度のきわめて高い格好をしていた。このごろではローカルの白人女までがそれを真似している。違いは、日本人の場合、例外なく Fa-ooga face (ファウーガ・フェイス) と呼ばれるやたら厚化粧をしていることだ。

土曜の夜、十一時頃からローカルがぐっとその数を増す。こちらは男も女もいっせいに繰り出してくる。シュガーもカウンターに入り、サーフィン仲間のニックから日頃手ほどきを受けたカクテルをさばいていた。ココ・パームスをシュガーに紹介したのもニックだ。亜麻色の短い髪をしたこの男は、四分の一ばかりポリネシアンと混じった白人で、日焼けした顔をほころばせながら、気楽にウェイトレスの注文をこなしていく。

レゲエやサルサが調子いい。シュガーとニックが並ぶといかにもサーファーだということが人目でわかる。それほど二人は際立っていた。ローカルの中には、この二人がいるからココ・パームスに来るといふ女たちも多い。だからカウンターはいつも白人女でぎっしり固められているのが常だった。

ココ・パームスとはいいいながら、店内はまったくそういうコンセプトが感じられない。むしろモノトーンタッチの落ち着いた雰囲気、トロピカルしようと思ってきた観光客には拍子抜けする者も少なくない。

「いい加減にしろよ。」

シュガーはグラス・ホッパーをつくりながらニックのほうも見ずに言った。

「わかるかい？」

「ああ。」

「目の下に隈が出来てるってんだろ？」

「そういうこと。」

ニックは目を閉じて、指でこめかみを押しえた。

「やりすぎだよ。マリファナだけじゃないんだろ。」

「まあね。．．．．これ昨夜の日本人女が買ってくれたんだ。」

ニックは右手をジャラっと鳴らしてゴールドの太いブレスレットを見せた。

「おいしかった？」

「デッド・フィッシュ（死んだ魚）のようだったね。白目むいてひっくり返ってたよ。ずっと。」

シュガーは苦笑した。

「ちゃんと教えてやるんだね。」

「そのつもり。車を買ってくれそうなんでね。」

「今日、来てるのか？」

「もうじき来るだろ。」

あまり馴染みではないローカルの白人女がカウンターに近寄ってきた。二人の顔をかわるがわる覗き込み、肘をついて言った。

「何の悪だくみ？」

「原油の値段が安いねって話さ。」

シュガーは表情一つ変えずに答えた。ソバージュの女は大きな瞳をしてニヤッと笑った。

「名前は？」

「サンドラ。サンディでいいわ。あなたでしょ、シュガーって。」

「そう。」

「サーフィン、上手いんだって？」

「どうかな。」
「恋人は？」
「いないよ。」
「ウソ、クッキーって娘（こ）がいるんじゃないの？」
「よく調べたね。」
「でも、まだ寝てないっていう話だけど？」
「まだだよ。」
「可哀想なクッキー。」

サンディは、そう言いながら、笑ってる。

「やりゃあいいってもんじゃない。」
「怖いのか？ 女の子が？」
「きみも十分若いと思うけどな。」
「いやだ。もう三十近いっていうのに？」
「歳は関係ないよ、たぶん。」
「もうすぐ休憩じゃないの？」

シュガーは、腕時計を見た。十二時まであと三分。

「それで？」

シュガーはつくりかけのモスクウ・ミュールをニックにぼんと渡して言った。サンディは人差し指で自分の喉を横に撫でながら、ふふふと笑う。『あれが欲しい』という意味らしい。ニックが隣で一口のんだ水を思わず噴出した。……

ディスコの裏手にある従業員用ガレージには、コンクリートのガーベージ・ボックスがある。トタンの蓋が閉じてあって、サンディはその上に腰掛けたまま大きく両足を開き、シュガーの下半身を受け入れていた。衝動が体中に走るたびに彼女は犬のような声をあげる。

『こいつらはスポーツみたいにセックスをする。』

シュガーは白け気味だった。

この時代にあって、ペニスが無ければ感じないと思っている単細胞な女は同情に値するとシュガーは思う。アメリカ人のセックスが意外に男性崇拜の呪縛から免れていないと思うのは、いつもそういうときだ。

実際、アメリカの女ほど男への依存心の強い連中もいない。始終、旦那と離れたってない

と不安になり、いつも『愛してる』を言い交わしていないと、その想いをつなぎとめていられない。社会が女に自立を求めても、女自身はけっこう疲れてる。ときにその必死で突っ張っている様子は、痛ましさを覚える。

終わってからもサンディのむっちりした下半身は小さな痙攣を楽しんでいた。ぐったりと脱力した重い女の体が深呼吸するたびに、その痙攣がシュガーの胸にも伝わってくる。

「死にそう。・・・」

サンディはやっと小さな声で言った。

シュガーは寝てくれる女は誰かれ構わず寝てきた。不思議なことにクッキーだけが例外だったのだ。彼女を一度もアパートに泊めたことがない。

「ほんとうに喉が渴いちゃった。」

サンディは体を離れた。

『醜い。』

シュガーはセックスが終わったあとの女の顔が嫌いだった。

サンディは地面に足を下ろすと、短いスカートを直した。最初から下着などつけていない。そして再び濃厚なキスをシュガーの舌にからめてきた。白人の女は舌が長いからとりあえずキスは上手い。シュガーはそれだけを思っていた。・・・

ココ・パームスはさらに込み合っていた。ひとしきり注文をさばいたところで、シュガーに電話がはいった。クッキーからだ。

「やっとパパが寝たわ。なかなか電話できなくて。・・・今日、ごめんね。遅れちゃった？ わたしは大丈夫。ちゃんと帰れたから。」

『そんなこと聞いちゃいない。』シュガーはこういうクッキーの物言いがいつも気に入らない。

「なにか用？」

つっけんどんだった。「スポーツ」の後で、疲れていたのだ。

「ううん。ただ1・4・3（ワン・フォー・スリー）……って言いたかったから。」
「1・4・3？」

途端にクッキーは小さな声になった。

「I love you! …1・4・3。パパに聞こえちゃうわ。」
「ああ、そういう意味。」
「そ。だから、1・4・3……ねえ、言って。」
「1・4・3……」
「えへへ……いい子いい子。」

クッキーは十分満足して電話を切った。独りよがりの通話音だけが受話器から流れていた。……

店内は次第に雰囲気は乱れてきた。酔いが相当回ってくる頃合いだ。カウンターもいったん落ち着いたので、シュガーはテーブルを回って空のグラスを取って歩いた。コーナーには二人の日本人女がいた。二人とも典型的な酔っ払いの表情をしていた。さきほどから白人たちに声をかけられていたが、趣味ではないのか応じるようすはない。ワンレンのほうが、通りがかったシュガーを日本語で呼び止めた。『すみませえん。』シュガーは聞こえないフリをした。日本人とわかったらあとが面倒なのだ。日系人になりすましたほうが、なにかと楽だった。ワンレンの女は不機嫌そうな顔をして言った。『なあにい、聞こえないの？ 日本人のくせに。』『気取ってんのよ。英語で話かけてごらんよ。』ショート女が聞こえよがしに言う。

「イクスキューズ・ミー。」

シュガーはやむなく振り返り、商売上のつくり笑いをして答えた。

「Yes, Miss. What can I do for you?」

その英語は短いけれども、ネイティブにしか聞こえなかった。二人の女は点になった。

「日系人じゃん？ どうする？ あたし英語わかんないよ。」
「きゃあ、バナナ・ボーイなんて、けっこうあたしたちワイハしちやってる。」
「ねえ、それってすっごいおしゃれじゃない。」

こういう幼稚な会話は、毎晩のように聞かされている。しかし、何度聞かされても、シュガーには、まったく意味不明の日本語としか聞こえない。二人はシュガーを気に入ったようだった。

「ドウ・ユー・スピーク・ジャパニーズ？」

ワンレンのほうが悪る悪る聞いた。

「スコシダケ。」

二人はもう有頂天だった。

「かわいっ・・・ねえ、この男(こ)、超かっこいいじゃん。」

「誘ってみ。ねえ、誘ってごらんよ。」

たどたどしい英語の授業が始まった。

「何時に終わるの？」

「四時。」

「そのあとは？」

「帰って寝るよ。」

「遊ばない？」

シュガーは日本人に興味がなかった。そこでカウンターにいたニックを呼んで、巻き込むことにした。ニックは持ち前の愛想を振りまき、女たちをたちまちその気にさせた。シュガーがゲンナリする一方、精力的なニックはしっかり二人のホテル、・・・ハレクラニのルーム・ナンバーとフル・ネームをメモ紙に書きとめた。そして店がハネたらすぐに行く約束した。

カウンターに戻ってきたニックは皮肉を言う。

「珍しいね。おまえがニップス（日本人）を引っ掛けるなんてさ。」

「馬鹿。二人とも、お前に振ったんだ。よろしくね。」

「本気か？」

「本気。さっきサンディって女を食ったから、もう今夜は要らないってこと。」

「まじかよ。そう言わずに付き合えよ。」

「嫌だ。」

「Puna buds(マリファナ)やるよ。」

「たくさんだ。」

二人の日本人女はそれでも不安だったのか、やがてカウンターにまでやってきて、ニックとシュガーの前にへばりついた。並み居る白人女たちを押しよけるようにして、もうすっかり恋人気取りだ。

その後、ニックが大いに慌てることになった。例の、車を買ってくれるとやらの別の日本人女が店にやってきたのだ。こっちはさらに泥酔していた。ただならないカウンター越しのムードに逆上したその彼女は、ニックに向かって灰皿やらグラスやらを投げ飛ばし、店内は大騒ぎになった。とうとうシュガーがニックの尻を拭く羽目になってしまった。この泥酔女をホテルまで送り届けるのだ。ニックによれば、バニヤンのコンドミニアムということなので、ともかくシュガーは彼女を抱きかかえて店を出ることにした。

しなだれかかった泥酔女を支えながら、『日本の女も発育がよくなったな。』と妙に関心した。結構背の高い女だ。尻も上がってれば、腰のくびれもキマっていた。グラウンド・フロアに下りる階段の途中、しなだれかかりながら彼女は初めてシュガーに口をきいた。

「ニック・・・結婚してくれるって言ったわ。」

「・・・・・・・・・・」

「聞いてる？」

女はもういらだっていた。

「聞いてるよ。」

「ニックの友達？」

「そう。」

シュガーは我知らず日本人として素直に対応している自分に不思議な気がした。

「なんで、あんた、ニックじゃないのよ。・・・まあいいわ。あたしね、ニックに車買ってあげるの。」

「金持ちなんだな。」

「パパに言うわ。」

「パパね。」

これで今夜パパという言葉聞くのは二度目だ。

「わたし・・・メイ。」

「？」

「五月に生まれたからメイっていうのよ。」

「へえ、自分でそうつけたのかい？ 素敵じゃないか。」

「馬鹿にしないで・・・」

何を言っても駄目だと、シュガーは思った。

「ニックが本気じゃないのは、わかってるの。」

「いい子だ。申し分ないね。」

表にやっとの思いで担ぎ出ると、アラモアナの潮風がやたらに生暖かく、泥酔した自称メイという女の気分をなお一層悪くしたようだ。彼女は思わず吐いて、舗道にへたりこんだ。

タクシーを拾おうとすると、見覚えのある真っ赤なコルベットが目の前に横付けされた。ハレイワで会ったナタリーだ。

ナタリーはこざっぱりしたスーツを着ていた。そして愉快そうに声をかけた。

「どうしたの、シュガー。あれから電話もしてこないと思ったら、こんなところでオイタしてたのね。」

「冗談じゃない。店のお客さんだよ。もう潰れてる。」

「どこに泊まってるのかしら、その娘(こ)。」

「バニヤンだっけさ。」

「送ってあげるわ。お乗りなさいな。」

∴∴∴

バニヤンのコンドミニアムにつくと、再び肉体労働が始まった。ナタリーは外で待っていると。シュガーは泥酔女を背負うようにしていった。モップをかけていた白人の従業員が手を休めて笑っていた。

コンドミニアムは女一人にしては身の置き場に困るくらい広い。このテの女たちはキッチンをけっして使わない。それなら一般のホテルでもよさそうなものだが、やはりハワイに慣れているというためには、どうしてもコンドミニアムでなければならないらしい。

シュガーは彼女をベッドに投げ出すと、すぐ立ち去ろうとした。ふと振り返ったとき、彼女の体にぴったり張り付いたようなタイト・ドレスが気になり、楽にしてやろうと、身ぐるみを全部剥がした。泥酔女はされるがままに裸にされ、みっともないほどの大股開きで

ひっくり返った。フーっとため息をついたシュガーは、マグロになった女に毛布をかけ、ようやく部屋を退散しようとした。

そのとき女は不安そうな声をあげた。

「帰っちゃうの？」

「もう用はないからね。おやすみ。」

「しないの？」

「他人の女は盗らない。」

「古臭いな。」

「きみのほうがよっぽど臭い。」

女は初めて笑った。

「してもいいよ。」

「けっこう。」

「じゃ、ニックのこと教えて。」

「さっきの二人はただのお客さんだよ。心配いらない。きみはニックのお客さんじゃないだろう。」

「わたしのこと欲しくないの？」

メイは毛布を開いた。シュガーは呆れた顔をして壁を拳で叩くと、やおらベッドの横に戻ってきた。

「やっぱり欲しいんだ？」

メイはほくそ笑んだ。力無げな顔が青白い。唇も乾いている。

「その気にさせてみな。」

メイは目を閉じて、ゆっくりと自分一人で始めた。シュガーがじっとその様子を見ている。右手の指は行ったり来たり。円を描いたり。やがて左手は左の胸を弄びだす。

「こういうの・・・見たことある？」

メイは、一人で気持ちが入り始めている。

「ニックの家に行ったことないのか？」

シュガーは醒めた目でメイの仕草を眺めながら聞いた。その拍子に三分の一ほどになった煙草の灰がカーペットに落ちた。

メイの背中が弓なりになり、中指が出たり入ったりしている。

「どうして？　．．．．あの人、彼女でもいるの？」

メイは目を閉じたまま、息遣いが荒くなっていた。

シュガーは答えなかった。愚問だった。

「ねえ、きて．．．．はやくして。」

シュガーはほとんどなくなってきた煙草を消すと、無造作に立ち上がった。

「女はいない。」

メイは安心したように微笑んだ。

「よかった．．．．ねえ、いいよ。して。お願い．．．」

額に汗をかいていた彼女はもう我慢できなかった。

「男がいるんだ。女じゃない．．．．おれはもう行くよ。」

メイの指はぴたりと止まった。そして目が点になっていた。

「どういうこと？」

「つまり、．．．．そういうことだよ。じゃあね。」

シュガーは呆気にとられているメイをそのままに、さっさと部屋を出た。エレベーターを待っている間、メイの部屋から物が壊れるような、大きな物音が聞こえてきた。今夜は荒れそうだ。

：：：

バナヤンを出ると、ナタリーのコルベットはワイキキから R72 沿いに東へ向かった。

「どうして電話してくれなかったの？」

「別に。用がないから。」

「ご挨拶ね。・・・もうお店に戻らなくていいんでしょ？」

「もうとっくに車は反対のほうに走ってるじゃない。」

「一応、聞いてみたの。」

「今日はもういいって言われた。」

「やっぱり。」

「そう。」

「いいところがあるの。」

「いいところね。」

「そう。とつても。気に入るかしら。」

「もっとはっきり言ったら？ Get a chance, boy! (つきあわない?) とかさ。」

「品がないわね。」

「おれは品がない。」

「嫌なの？」

「とんでもない。」

「よかった。」・・・

夜が明けようとしていた。マウナロアの海岸線が見える。星が死にそうな色をして椰子の並木の間で悲鳴をあげていた。ダイヤモンド・ヘッドが濃い紫色に浮かびあがる。

「何をしたいの、シュガー。」

「サーフィン。」

「ずっと？」

「たぶん。」

「仕事は？」

「労働に価値があるとは思えない。」

「倒錯した気負いみたいね。」

「何とでも。やり遂げることにぜんぜん誇りを感じられない。」

「若いのに。」

「すぐ歳をとるさ。」

「それでもいいの？」

「そのとき考える。」

「ステディな彼女、いないの？」

「勝手に押しかけてくる娘（こ）なら一人いる。ポリネシアンだけだね。」

「で、あなたは？」

シュガーはただ首を横に振った。

「可哀想に、その娘。ただ体だけ？」

「おれは抱いてない。」

「でもそのくせほかのどうでもいい娘（こ）は、ジャンク・フードみたいに食べ散らかすのね。」

「そうかな。ただ、いい加減なだけだよ。」

「それでも自分だけは特別だと思ってるんでしょ。」

ナタリーは意地悪そうに笑った。痛いところを衝かれたわりに、シュガーは悪い気がしなかった。ずっと年上の女だからかもしれない。

コルベットはハワイカイに入った。瀟洒な住宅街を抜けて、湾が目の前に開ける。

ナタリーはヨット・ハーバーの一角に車を向けた。そしてライトアップされた真っ白なコロニアル風の家へ乗り入れた。

「ここ？」

「そう。」

「気に入らない？」

「そんなことはないよ。」

「入って。」

ナタリーは車を降りるとさっさと家へ入っていった。広いリビングを通ると、そのままヨット・ハーバーの棧橋に出ることができる。二階建てとはいっても、階上に二間ある寝室はロフト感覚に近い。材質はかなり高級でマホガニーがふんだんに使われている。白壁が涼しげな風情だ。インテリア・デザイナーらしく、さり気ないところにチャーム・ポイントが設けられている。ドライ・フラワーの類は一切なく、手入れの行き届いた生花が新鮮な彩りを放っている。シュガーはホッと素直な気持ちになれた。

ヴェランダに出ると、海が生命を取り戻そうとしていた。原色の青が存在を主張し始めていた。

ナタリーは骨太の、しかし細い体をシュガーに寄せてきた。イタリア系の恋は苦くて甘い味がする。・・・・・・・・

ベッドの中でナタリーは優しかった。別に男に飢えているわけでもなさそうだ。不思議なくらい長く気持ちのよい時間が過ぎていった。朝日が眩しい潮風に乗ってレースのカーテンに泳ぐころ、ナタリーも声をあげた。……

エアコンをつけ忘れていたので、二人ともじっとり汗ばんでいた。日焼けしたシュガーの厚い胸に顔を寄せていたナタリーが口を開いた。

「プロになりたいの？」

「仕事になったら大変だよ。アマでいい。」

「不思議ね。こんな日本人見たことないわ。」

「男の理想はしょせん女のヒモになることだって、誰かが言った。」

ナタリーがアハハと笑い出した。

「はっきりしてるわね。……きっとあなた自身に対して、とても無責任なのね。いったん無責任になってしまうと、成熟していくことがばかばかしくなってくるのよ。ピーターパンってやつね。」

「お好きなように。」

「わたしがあなたの分までその責任を引き受けてあげようかしら。」

「ありがたいね。待ちに待ったパトロンの登場だ」

「そうね。……それにしても、あなたは変ってる。自分を感じ取る力が欠けているのかも。だから人にも優しくなれないんだわ。」

ナタリーの低い静かなおしゃべりを聴いているうちに、シュガーはなんとはなしに切ない自分の呼吸を感じていた。なにをしていいのかわからない欲求だけが体の中で湧き上がる自分を身に染みていた。年上の女がシュガーの上体を抱きしめる。こんな風に女に抱かれたことはない。意味もなく涙が流れた。『そんな馬鹿な。』一筋だけすうっと頬をつたうと、ナタリーがそれを唇ですくった。シュガーはやたらに日が眩しくてならなかった。

∴∴∴

その日、シュガーはピザの宅配をあっさりクビになった。ジーンズのポケットにはナタリーがくれた百ドル札が三十枚、くしゃくしゃになって入っていた。

カイルアのアパートはいつものようにがらんとしていた。そもそも身の回り品というものが少ない。塗料の剥げ落ちた壁は安っぽいクリーム色で、ただ空しく広がっているばかりだ。雑誌やクアーズの缶がそこらじゅうに転がっていた。

クッキーから電話がはいった。早引けしたからこれから来るというのだ。ずいぶん心配している様子だ。シュガーはそれがかえってうるさかった。『男は勝手だ。』を自分でも思いながら、『来るな』ともいえない。

午後、ふと目が醒めると、クッキーがキッチンを片付けたり、掃除をしたり、山ほど積まれた衣類を洗濯したりしていた。シュガーはただぼんやりして横になったまま、窓に弾ける日の光を眺めていた。ヴェランダでは間に合わず、クッキーは部屋の中にまでロープを張り渡して洗濯物を干していた。

「何を見てるの？」

クッキーはTシャツを干しながら、ちらっとシュガーのほうを見て言った。

「Checking the sets (波の具合を見てるのさ)」

シュガーはゆっくりベッドに起き上がった。クッキーが物干しの手を止めて、クアーズを一缶投げて寄越した。

「どこへ行ってたの、今朝？ パライソに連絡もしないで。」

シュガーは鬱陶しかった。口もききたくなかったのだ。このまましばらく余韻のようなものに浸っていたい。彼はクアーズを半分ほど一気に飲んだ。

「ハワイカイ。」

「ふうん。」

クッキーはてきぱきと仕事を片付けていた。その甲斐甲斐しさはともかくとして、とどまるところを知らないおしゃべりに、シュガーはいつにも増して不快感を覚えた。黙っていたら疑われるということにさえ思い及ばず、ただクッキーが話しかけるのを聞き流していた。

欲しいものはそういうものじゃない。ナタリーと一緒にいた数時間が優しく思い出され

た。何か大きいものの中で素っ裸にされたような恥ずかしさと安心感が、体にまだ残っていた。

クッキーはそんな様子におかまいなく喋り続けていた。

「あなたの誕生日はまだ先ね。」

「忘れたよ。」

「日本に帰りたいとは思わない？」

「毎晩帰ってるさ。」

「もうすぐクリスマスね。」

「・・・・・・・・」

「わたしの誕生日まであと二週間よ。」

「・・・・・・・・」

それがどうしたという感じだった。そう言えばクッキーは銀製のイルカのペンダントヘッドが欲しいと以前言っていたのを、シュガーは意味も無く思い出した。

クッキーはつまらなそうに立ち上がると、バケット・タイプのバッグを肩に引っ掛けた。

シュガーはベッドに座りこんだまま、初めて自分からクッキーに話かけた。

「その中の junkes (もの)、いったい何だい？ やたら沢山入ってるよな、いつも。」

クッキーは機嫌を取り戻したようにえくぼをつくった。

「あなたの夢。」

「俺の？」

「波の音が聞こえるわ。」

「・・・・・・・・」

クッキーは近寄ってきて、すばやくシュガーにキスすると、ケラケラ笑いながら鼻歌まじりに颯爽と午後の光の中へ飛び出していった。

夢を見たくても見方がわからない。生命を削って何度も痛みながら、ひとつひとつ夢の見方を覚えていくだけの勇氣もない。ただ湧き上がる無方位の欲望に、なすすべもなく襲われていた。

∴∴∴

ニックがオフの日、シュガーは二人でワイメアの波にオンした。

北東から吹く貿易風は鳴りをひそめ、南西から湿気を帯びたコナ・ウィンドがたち始めていた。

ノース・ショアには人が多かった。十一月中旬から十二月にかけて、その年のAli'i（アライ）を選ぶサーフィン大会が目白押しだ。そのための最終調整もあるのだろう。プロ級のサーファーが多い。

シュガーがハワイに来たばかりの頃、当初は慣れなかったロング・ボードにもやがて馴染んだ。グーフィーとレギュラーも、自在になった。マノアあたりのサーフィン仲間が、トーナメントに出てみたら、というほどシュガーの腕はみるみる上達していった。もちろん本人はプロになれるなど想いもよらなかったし、その気は毛頭なかった。自分の力量がどうのこうのというのではない。

ただ、職業というものがどうしても受容できないのだ。その点、シュガーは驚くほど執着というものが無い。ボードもけっして凝ったりはせず、むしろ大切にしているボードほどクラッシュに遭ったり、折れたりするものだと思っていた。

シュガーの頼りなさは、ちょうど死にたいくせに、どういうわけか自殺の動機が見つからない人に似ていた。

銀色の波が八フィートの壁を畳み込むようにして押し寄せていた。ワイメアはパイプのような癖がない。光は濃紺の世界から弾けて空気中に発散していた。

ニックがよく言っていた。『その日、最初にドルフィン・スルーをしたときに、水の中でもふつうに息をしているような気分だったら、けっこうその日はイケる。魚になったってことだ。』

スポーツは、いつも失うものがある人のすることだとシュガーは思っていた。だからラグビーはスポーツではなかった。あんな暴力的な、危険なものはけしてプロがやるものではない。だから、アメフトになるのだ。ラグビーは無防備なだけに、殺意に近い格闘技だ。

サーフィンはその数倍の殺意を感じる。

二人は思いとどませようとする砂を踏んでいた。

「気づいたか？」

「何が？」

「二人で来てる。」

「誰が？」

「あの晩、お前が振ってくれてさ、おれがいただいたあの二人の日本人女(ニップス)だ

よ。」

「二人とも、いっぺんいただいたのか？」

「いや、実際にはショート・ヘアのほうはスピードやらしたら、ヨダレらしたまま、She wen radical out. (のびちまったよ)」

ニックはハワイ特有のピジン英語を多用する。

「で、もう一人のワンレンのほうはどうだった？」

「Great(よかったね)・・・to the max (最高だね)・・・のっけからもうおれのにしゃぶりつきやがった。愛してる、愛してるってそればかりさ。」

「いっそ、結婚してやれよ。」

「冗談じゃない。会ったその晩にひとのペニスにむしゃぶりついて、愛してるなんていう女を女房にしたらどうなるか、おまえだってわかってんだろ？」

シュガーは苦笑して、ボードを持ち替えた。

二人は海に飛び込んだ。

「Unreal! (すげえ)」

「Don' t make ass. (ヘマすんなよ。)」

サンドバーをかすめていく太いカレントのうねりに、二人はすぐ乗ることができた。何本かのスウェル(波)を超えた。振り返るとビーチが箱庭のように平板な風景を見せていた。目前には大きなうねりが始まっていた。

「こりゃ、十三フィートか？」

シュガーはやり過ぎたニックを放っておいて、中途半端なポジションのままオンした。そして一気にドロップする。そそり立つ波の腹を真一文字に切り裂いていった。

一瞬の気の迷いが最終的には底の浅い珊瑚礁にやられてズタズタになる。青い水晶の壁は自分の影を照り返しながら凄まじい音をたてて横に張り出してきた。

ショルダーが崩れ始めていた。生気がすうっと離れていくような痺(しび)れ。ものの十秒が五分にも思えるほど息の長いチューブだった。

ボードはマジック・カーペットの急斜面を真横に加速していく。前方出口の空がみるみるうちに小さくなっていく。飛沫はもうシュガーの体を覆うようにその口を閉じようとしていた。

世界が砕け始める。背中を何トンという流れが掠めていく。シュガーの息は止まっていた。やがて彼は電光が閃くように屈曲した体を解き放ち、チューブを抜けた。

一瞬、目が眩しい太陽に焦げてしまいそうだ。炸裂する波が尾を引いていく。体の芯まで、シュガーは海の精を吸い込んだ。……

けっきょくニックは散々だった。大切にしていたボードも折ってしまった。ジンスはやはり生きているらしい。

早めに上がったシュガーは、もう一本乗るといって新しいボードを抱えてやってきたニックをビーチで待っていた。ニックの言う『もう一本』はたいてい、五、六本になるのが常だ。波は前にもまして大きくなっていった。快感や溶けるような幸福感がいつも疲労のあとに訪れた。そして大切なものは必ず一拍おいてやってくる。

いい波を取ろうと悪戦苦闘するニックを待っている間、シュガーはこんな日がずっと続けばいいと思っていた。灰色の雲から零れる午後の光。深く、ウソのないほど青い空。ゆっくりと呼吸する一群の波。砂はいつまでもコナ・ウィンドに笑っている。……

ニックはよほどツイてなかった。予備のボードもクラッシュしてしまったのだ。本人に怪我がなかっただけマシだった。二人はビーチを後にするとき、『バイパス』というサーフ・ショップに立ち寄った。華僑の親父が手作りのサーフ・ボードを売っている店で、ニックの行き着けだった。

飾り気のない殺風景な木造のショップは、ペンキも塗ってない。まるで加工場のようだ。眼鏡をした五十がらみの親父がフィンを取り付けている最中だった。油で髪を撫で付けた几帳面そうな男だ。店内にはグッズやアクセサリーの類がなにもない。ゴッチャやマウイ&サンズのようなブランド品は皆無だった。奥の小さな部屋に続く間口にシュガーの目は惹きつけられた。真っ赤なボードが一本、商品とは別に立てかけられていたからだ。見覚えのあるロング・ボード。

親父はニックの顔を見ると相好をくずした。

「また折ったな、ニック。」

「まあね。……これ、ずいぶんセンター・フィンが前にズレてるな。」

「パイプ・ビーチ用だよ。あそこのチューブにはこのほうがいい。」

親父は取り付けたばかりのボードを拭き始めた。

シュガーは初めて寄った『バイパス』だったが、人目で気に入った。売らんかなという風情が微塵もない。たぶんここでボードを買い求める客は、ここにしか来ないと思えるような店だった。

壁際に立ち並んだボードの一本にワックスをかけている女がいた。親父の娘らしい。奥二重の目がよく似てる。星のような瞳の輝きが印象的だ。どこかで見たような気がしたが、それだけだった。よく焼けた肌が、開けっ放しの窓から飛び込んでくる日差しによく映えていた。セミ・ロングの黒い髪はそれほど痛んでいない。歳の頃は二十四。自分と同じくらいか。彼女はしゃがみこんだままチラッとシュガーを見た。彼女はにこりともしないで、ワックスをかけながら、シュガーに話かけた。

「大きなチューブに乗ったの、見たわ。」

「何だ、見てたのか。」

「素人にしてはクールだったわね。上出来だわ。」

「あんたは？」

「ジョイス・・・ジョイス・ラム。あなたは日本人？」

「そう。」

「ニックはよく来るけど、あなたは見たことないわね。」

「いつもニックのボードのお下がりを使ってるからね。つまりあれはみんなこのボードだったってわけだ。」

それだけでシュガーがどんな生活をハワイで送っているかわかるはずだった。

「あの・・・赤いボードは？」

「ああ、あれは売り物じゃないの。」

「わかってるさ。・・・誰が使ってる？」

「誰も。・・・どうして？」

「ああいうのでサーフィンしている男を見たことがある。」

ジョイスの顔が強張ったような気がした。

「ちょっと前になるけど、凄い波の日があった。あの日、その男は一人でパイプに出ていたんだ。乗り切っても、全然嬉しそうじゃなかった。あんな強烈なサーフィン、見たことがない。」

「気になるの？」

「あのくらい上手ければってね。」

「無理ね。でもあなたは十分上手だわ。ただ・・・」

「ただ？」

「哲学が欠けているだけよ。」

「哲学？」

嫌いな言葉だった。

「そう。」

「あの男なんだな、やっぱり。君もあの日、パイプにいた。」

ジョイスは初めて笑いながらウィンクしてみせた。

「誰なんだい？」

ジョイスはおどけたように大きな目をひときわ見開いて笑った。

「せっかちなね。海に出ない？」

「いいね。」

ジョイスは立ち上がった。

午後のワイメアは人手が一層多くなっていた。シュガーはショア・ブレイクを抜けて比較的安定したポイントまでパドル・アウトすると、波間に漂いながらジョイスの様子をみでずっと追うことにした。波を待つ必要もなかった。水平線はほとんど姿を見せようとしない。すぐに二十フィート級のうねりがやってきた。

道理で、人が多いわりには沖にサーファーが少ないわけだ。ターゲットはとてつもなく広い根を張って盛り上がり始めた。さっき自分がクリアしたチューブどころの話ではない。ジョイスは沖合いでテイクオフするとともにそのチューブに包まれていった。すでに巨大な壁が姿を現していた。波は一様なあり方ではなく、平坦であったり、不自然な隆起をつくっていたり、そこからあらゆる水面下の変化を読み取っていかねばならない。ひとつひとつの波はそれまで人の手に触れられたことがない。

ジョイスのラヴ・コールが始まっていた。余計な肉を全部そぎ落としたような均整のとれた体が信じられない速度でチューブに飲み込まれていく。行き場のない大量の水と空気が混在して、ダイナマイトのように噴出してくる。ジョイスの姿は壮絶なブレイクの中に消えていった。シュガーには息を呑むような一瞬が、気の遠くなるほどの時間に感じられた。

やがてジョイスはバック・ドア・バレルから霧のように噴出すエアとともに飛び出してきた。シュガーは初めて自分が息をついたのがわかった。心臓はひどく高鳴っていた。

やがて中国娘は何事もなかったかのようにパドリングしながら戻ってきた。白い歯を見せてシュガーのボードに近づいてくる彼女は、ひとときわ輝いて見えた。言葉が出てこない。ただ、無性に愉快だった。二人は波の上でお互いの手を思い切り打ち鳴らすばかりだった。

海はしばらくトーン・ダウンしていた。水平線も時折その姿をのぞかせるようになり、光だけがいつまでも踊っていた。

ニックの Mokemobile（サーフ・ラック付の車）を停めてあるところまで歩いていく途中、ニックが急に耳をそばだてた。

「どうした？」

ニックは黙って人差し指を口にあてた。そして椰子の群落に音を立てぬように分け入るのがあった。あとに続くシュガーにもやがてそれが聞こえてきた。震えるようなか細い声。しゃくりあげるような女の泣き声だ。そこで目の当たりにしたものは、四人の白人男にてごめにされている東洋系の女二人だった。

女たちは素っ裸にされて、ロングヘアのほうは口に突っ込まれて、声を失っていた。もう一人のショートのほうは、鼻血を出していた。しばしば男が容赦なく平手打ちをしながら、三人がかりで女の頑なな体を押し開こうとしていた。

「なんだ。おまえがこの間食った連中じゃない。ハレクラニだっけ、泊まってるの？」

「ああ……」

ニックは真っ蒼な顔をして午後の惨劇を見つめていた。

「どうする？」

ニックはやっと小さな声で言った。

シュガーは頓着せずに言った。

「ほっとけよ。」

「おい、おまえの姉妹（きょうだい）だぜ。」

シュガーは返事もせずそのまま立ち去ってしまった。ニックはあまりに冷たいシュガーの態度に当惑したが、そのうちに慌ててその後を追いかけた。

：：：

夕方、バイクでカイルアのアパートに戻ったシュガーは、クッキーが残りの洗濯物をして
いるのに出くわした。

「どうだった、パーティ？」

「Waimea was pumpeen, today. Good-fun. (今日のワイメアは凄い波だった。良かったよ。)」

シュガーまでこの頃ではピジン英語の癖がついていた。

クッキーはシャツをリボン結びにして、バミューダをはいていた。ヒップアップしたパン
チのある体が乾いた衣類を取り込んでいる。

「ねえ、女の人から電話あったよ。」

クッキーがそれとなく告げた。

「誰？」

「ナタリー。」

「ああ……」

シュガーはTシャツを脱いでベッドに転がった。

「電話ちょうだいって。」

「ふうん。」

「あの女（ひと）だれ？」

「中年のインテリア・デザイナー。」

「へえ。」

クッキーにしてみれば、そんなことを聞いたのではない。あなたにとってどういう人な
の、という意味だったが、当然のようにはぐらかされた。彼女は何事もなかったようにヴ
ェランダへまた出て行った。

シュガーは野生を感じ始めていた。まるでワイメアに碎け散る飛沫のようだった。その日
の午後、ジョイスに見せつけられたサーフィンだったのか。それとも帰りに見かけた二人

の日本人女の惨劇だったのか。あるいはけなげなポリネシアン娘の生活感に吐き気をもよおした結果なのか。自分でも正体がつかめなかった。ただ、やみくもになにかを壊してみたかった。もしかしたら、自分を潰してみたかったのかもしれない。

シュガーは静かに起き上がるとクッキーを後ろから抱きすくめた。ビクンと体が震えたのは、シュガーのしっかりした両手がはちきれそうな彼女の胸をつかんだからだ。シュガーは彼女のシャツを思い切り引き裂いた。ボタンが飛ぶ。驚いたクッキーを、強引に自分のほうに向けると激しく唇を奪った。

クッキーは『やめて』と抗ったが、シュガーは造作もなく彼女をそのままベッドの上に放り出した。クッキーの両腕を片手で押さえつけながら、バミューダを下着ごと足首まで引きずり下ろした。

彼女はもう抵抗しなかった。ただつまるような声が涙のあいだから零れてくる。

「嫌だ。．．．．．こんなの。嫌。．．．．」

シュガーは手を放した。クッキーは泣きながらガタガタ震えていた。唇も真っ青だった。中途半端に剥ぎ取られた衣類を直しながら、彼女はベッドの上で泣いていた。シュガーは、Tシャツを着ると、ひとことも言わずにアパートを飛び出した。クッキーは声をしゃくりあげながら、ボタンの飛んだシャツを胸のところでいつまでも結ぼうとしていた。．．．．

アパートを後にしたシュガーは、気分でココ・パームスをすっぽかした。そしてバイクでハワイカイに乗りつけた。何事かと驚いて出てきたナタリーをもうドアのところで激しく求めた。彼女も戸惑いながら夢中で若い男の野生を受け入れた。．．．．

シュガーは猛烈に空腹を訴えていた。ナタリーはタオルを巻いたままキッチンで食べ残しのクラム・チャウダーとパンプキン・パイを温めた。

「喧嘩したの？」

ナタリーは電子レンジをかけながら聞いた。リビングのソファに汗まみれのままひっくり返っていたシュガーは煙草に火をつけた。

「まあ、そんなところ。」

「で、ここへ避難してきたわけね。わたしの電話が原因？」

「いや、そうじゃないけどね。突然押しかけて迷惑だったかな。」

「そんなことないわ。」

「ココ・パームスに行くの、うっかりしちゃったよ。」

「いく必要ないでしょ。十分なものあげてるわ。」

「・・・・・・・・」

シュガーが黙ったのが気になったのか、ナタリーはソファのところまできて優しくキスをした。

「怒ったの？」

「いや。」

「笑って。」

シュガーは吹き出した。彼女の長い舌がからみつく。

「わたしのこと、聞かないのね。」

「どんなこと？」

「主人のこととか。・・・・・・・・」

「嫌がるでしょ？」

「そうね。でも聞きたくないの？」

「関係ないから。」

「そう？ ねえ、映画見にいかない？」

「今から？」

「車でね。カイルア・ドライヴイン・シアター。」

「カイルアには戻りたくない。」

「わがままね。・・・・・・・・いいわ、じゃあちょっと足を伸ばして、パール・シティのドライヴイン・シアターでも。」

パール・シティにはアラモアナに次ぐショッピング・センターがある。その山側にカム・ドライヴイン・シアターがあった。野外映画を見せるのだが、その夜は車がまばらだった。

シュガーはスクリーン正面のポールから突き出されたクリップを車のアンテナに装着した。ナタリーがラジオの周波数に合わせると、台詞が聞こえてきた。

「ねえ、知ってる人？」

ナタリーは右手のやや前方に停まっている車をアゴで指した。見覚えのあるところではない。ニックの車だ。ペイントが剥げた Mokemobile。なにか同乗者の女に言っているようだ。身を乗り出して顔をのぞかせたのは、メイだった。なぜかシュガーとわかった瞬間、

メイの顔から笑顔が消えてすぐ引っ込んでしまった。

「知ってるよ。……」

シュガーはもう映画などどうでもよくなっていた。やにわにナタリーの唇を貪った。ナタリーのほうでも、もうブラをはずしていた。

「駄目よ。こんなところで。人に見られるわ。」

「見せてやりゃあいい。」

ナタリーはもどかしそうに下着から片足を抜くと、大きく足を開いて男を迎え入れた。……

∴∴

翌日の昼頃、シュガーはハワイカイの棧橋を前にしたナタリー宅のヴェランダで遅い朝食をとった。カイルアのアパートに電話してメッセージを聞いてみた。まずニックから入っていた。昨夜ニックは遅番だったらしく、あのあとココ・パームスにいったらしい。シュガーは無断欠勤でクビになったという。一体どこをほっつき歩いているんだ、さっきはパール・シティにいたじゃないか、とニックは怒鳴っていた。もうひとつのメッセージはクッキーだった。小さな声はまだ怯えていた。

『泣いたりして……ごめんね。怖かったから、ほんとうに。でも、今度は大丈夫。きつとうまくいくわ。……あの後しばらくあなたのベッドにいたの。あなたの匂いがして……子供っぽい？……1・4・3。……』

シュガーは訳も無く哀しくなった。コナ・ウィンドに乗ってくる陽光のせいだ。係留されていたヨットが一艘、また一艘とマウナルア・ベイに出て行く。ココ・ヘッドがクールに突っ立っているのが見えた。

クッキーの一件は、どう考えても自分に非がある。そして仲直りをしようと思えば、実際たいしたことではなかった。クッキーはクッキーで、あの晩素直になれなかった自分に苛立っていた。けっきょくクッキーはニックに泣きついた。

しばらくして、ニックは二人の仲直りのお膳立てをした。友人のクルーザーをカネオへ沖に出すことにしたのだ。しかも二人のほかに、ちゃっかり自分の『ボーイ・フレンド』まで連れて来たのだ。タイ人の男だったが、ファルンという女性名で呼ばれている。「彼女」はもともとアメリカ人に囲われていた。結婚が出来ないので、アメリカ人は養子縁組

をして事実上ファルンを手に入れた。その後別れ、最近ではニックの「女」になっていたのだ。今のファルンは自由だった。

端正な顔立ちやスリムな体は、ちょうどボーイッシュな、しかもかなり質のいい女のように見えた。性転換も豊胸手術も受けていなかったが、化粧もなしに、自然にいい女の匂いを漂わせているのだった。

クッキーは、ファルンがニックの「彼女」だということを知らなかった。ただの友達くらいにしか思っていなかった。彼女の錯綜したジェンダーとセックスの問題など、気がつきもしなかった。ある意味、単純で素朴なクッキーにとっては、なにも知らなかったからこそ、ファルンとふつうに話が出来たのかもしれない。

クルーザーは、カネオヘ湾のヘエイア・ハーバーから沖に滑っていった。右手にあるココナッツ島から湾のほうは、お世辞にも綺麗な海とは言い難かったが、沖に向かうごとに海はその表情や色を透明に変えていった。

アフオ・ラカと呼ばれるサンド・バーは、沖合に忽然と現れる遠浅の砂州で、珊瑚礁が多く、遊ぶには絶好のスポットだ。カイルア半島の先には海軍航空隊基地がある。振り返るとなんの変哲もないカネオへの町がたたずみ、ヌアヌ・パリの峠が切り立った山間(やまあい)に小さく見えた。

サンド・バーに近づいたところでニックは投錨した。シュガーは鏡のように透き通った海に飛び込んだ。沖合にできた遠浅のサンド・バーはそれだけでファンタジーだ。さいわい鬱陶しい雲も、今日は少ない。光の乱射が海面をキラキラさせている。

サンド・バーに上陸すると、目にしみる白い砂が広がる。シュガーが砂地に座り込むと、あたかも絶海の孤島にでもいるような気分になった。

あとからクッキーも泳いできた。彼女は大胆な黒いビキニを着ていたが、上陸すると濡れた体がまるで蜥蜴(とかげ)色に輝いて見えるのだった。シュガーは明らかに水というのが、色素を持っていると信じた。

クッキーは横にやってくると腹ばいになってシュガーの顔を覗き込んだ。

「ねえ、このまえね・・・オーストラリアのビデオをTVでやってたの。見た？」

「あいにくそのTVが、俺の部屋には無い。」

クッキーはバツが悪そうに笑った。

「そうだったよね。」

「それで？」

「それでね、グレート・バリア・リーフで捕獲した大きなホオジロザメをシドニーの水族館へ運ぶ、っていうのをやってたの。ところが小型飛行機だから、水槽にサメを入れて運

ばなくちゃいけないでしょ。運んでいるあいだ、サメは泳げないわけ。」

「泳げないと困るのかい？」

「困るわ。サメは普通の魚みたいに自分で酸素を水ごと取り込むことができないんだもの。サメは鰓(えら)が動かないのよ。だからいつも泳いでいないといけないわけ。泳ぐことで自然に口から海水を通して、やっと鰓が酸素をとっていくの。」

「眠れないな。」

「眠れないわ。」

「ストレスがたまるね。」

「ノイローゼって、魚にもあるかもしれない。」

「それでどうしたんだ。その先があるんだろ？」

「そうそう。それでシドニーに着いたときには、呼吸がもうできなくなっていたものだから、すっかり弱ってしまって、ほとんど仮死状態に近かったのね。それを水族館の大きな、それは大きな水槽へ入れたんだけど、もう駄目なの。そのまま水槽の底に沈んじゃった。水族館の人たち、どうしたと思う？ 一人のダイバーが入って、そのサメを抱きかかえながら泳ぎだしたのよ。ゆっくりね。相当重いはずだわ。ホオジロザメですもの、大きな水槽を何度も何度も繰り返し円周状に泳いだの。そのうちにサメは呼吸を少しずつ回復して、尾ヒレが動き出したり、・・・とうとう最後にはいつものように元気になったってわけ。」

シュガーは面白いとは思ったが、だからどうだ、という気も一方ではしていた。やがて、クッキーのお喋りがただの雑音のようにすら聞こえてきた。

「まだあるの。むしろこれがこの話の一番すごいところよ。そのサメね、自分と一緒に泳いでくれたダイバーのこと、絶対に忘れないの。別の日にそのダイバーが水槽に飛び込んでも、もう彼をけして襲ったりしないのよ。ねえ、聞いている？」

「ああ、聞いている。サメはとってもお利口さんっていう話だろ。」

シュガーはニックの誘いに応じて今日のピクニックに参加したことを、早くも後悔し始めていた。

『仲直りなんて、俺には似合わないな。・・・』

クッキーはクッキーで、シュガーのあまりに無反応な表情に、すっかり肩を落としていた。

カイルア・ビーチはウィンド・サーフィンで有名だが、カネオへでもこのサンド・バーあたりには沢山のウィンド・サーファーがいる。まるで海面をさまざまな色の蝶たちが踊り回っているようだ。

クッキーは気を取り直してまた話だした。

「このまえね、シーライフ・パークに新入りのイルカが入ったの。これから馴らしていくのよ。」

シュガーはイルカの筋肉質の体を思い浮かべてみた。そう言えば、クッキーも、はちきれそうなバネの効いた体がイルカのイメージに似ていた。

「そのイルカがね、餌の小魚を食べないのよ。鮮度が悪いからかもしれないけど。ほかのイルカとも馴染まないし。それでスタッフが生きたナマコを取って来たの。野生のイルカの大好物よ。わたしそれを持ってプールに入ったわ。そしたら、イルカがすごく喜んでね。もう大変な騒ぎだったわ。次の日にわたしがプールに入ると、そのイルカ、底に残っていたナマコをくわえてきてわたしにくれるのよ。わたしに食べろっていうのかしら？イルカもけっして忘れないのね、友達のこと。」

シュガーはだんだん苛々してきた。『自分もナマコを食べばいいじゃないか。友達なんだから。』ふと余計なことを言いたくなってしまう。

「イルカの肉って、まずいらしいぜ。ゴムみたいでさ。」

クッキーの顔色が変わった。そして、ぎこちなく笑顔をつくって言った。

「ねえ、今晚、空いてる？」

「いや。」

「インテリアの『お勉強』？」

クッキーの精一杯の攻勢だった。

「馬鹿言え、『仕事』だ。」

「うそ。」

「信じなくて結構。」

「信じるわ。」

「それこそウソだ。」

クルーザーが錨を下ろしているあたりでは、ニックが海の中からしきりに船上のファルンに『飛び込め』とけしかけていた。ファルンは笑ってかぶりを振っている。泳げないというのだ。

冬の光は朝のやわらかい風景に馴染んでいた。馴染めないのはクッキーと自分の二人だけだとシュガーは思った。けっきょくこのままクッキーに言おうとしていた一言を口にすることなく終わるんだらう。シュガーは哀しいのでもなく、口惜しいのでもなく、冷ややかに喉につかえそうな朝を、ただ見送った。

クッキーは言葉を口にしなくなった。・・・・・・・・

：：：：：

「ボトム・ターンが決め手なのはわかるでしょう？」

バレッタで髪をとめたジョイスは、シュガーの顔を見つめた。

「その次は体重の移動。・・・・・・・・バックサイドでも同じよ。波のボトムをきちんと横に走り続ければ、フックにちゃんと出られるわ。クリアは波から逃れようとするのじゃなく、波の動きを待つ余裕がポイントよ。」

その余裕こそ、一事が万事だとシュガーは思っていた。あの日、赤いボードの男は開きなおったような余裕を持っていた。それがどこから生まれてくるものか見当もつかないのだ。シュガーはなんとなくタブーになっていたあの男のことを口にしたりした。ジョイスはちょっと表情のない顔になったが、すぐふだんの優しい笑みと取り戻していった。

「じゃあ、今度いっしょにナイト・サーフしてみる？」

「危ないじゃないか。」

「その余裕の正体を知りたいんでしょう？」

シュガーはクアーズを一気に飲み干して息をついた。

ジョイスは意地悪そうに目で笑ってみせた。

二人のいたハレイワのバーはオープン・ルーフのわか屋台のようなもので、椰子の群落越しに波の押し寄せるのがよく見えた。少し沖には恐ろしいトイレット・ボウルが渦巻いているはずだ。

「恋人は？」
「だめよ。No chance for you.」
「あの男なんだな、やっぱり。」
「嫉妬してるの？」
「冗談じゃない。別に女には困ってない。」
「それだけのものなのね、けっきょく。」

ジョイスはカラカラと笑った。

「そういう意味じゃない。」
「シュガー、あなたは何のために生きているの？」

唐突な質問だった。

「サーフィンをしたい。」
「それだけ？」
「わからない。」
「病気ね。日本人もアメリカ人も一緒だわ。」
「そうかもしれない。」
「でもけっこうそれが気持ちいいんじゃないくて？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「やっぱり病気だわ。治りたがらない病人は、病人でいる資格がないっていうしね。」
「余計なお世話だ。」
「でもそこがはっきりすれば、あなたのサーフィン、もっと上達すると思うわ。ずっとね。それに・・・・・・・・」
「それに？」
「サーフィンよりもっと大切なものがわかるかも知れないじゃない。」
「何だい、それ？」
「あなた自身のことよ。昔カミュがね・・・・・・・・」
「カミュって、フランスのアルベール・カミュのことか？」
「そう。彼がね、いろんな価値や倫理が失われてしまった今、どうしたら孤独な人間たちが新しい倫理を構築したらいいのか、ってそういう問いかけをした。」
「Existentialism（実存主義）だろ。それと俺のサーフィンとどういう関係があるんだ。」

「あなたが、誰ともつながっていないから。つながろうとしなければ、自分のこともわかりやしないわよ。」

まったく得体の知れない女だった。シュガーは少々うんざりしていた。考えることがそもそも嫌になっているのだ。自分が誰かを知ってはみたい。何をする人間なのかを探ってはみたい。しかし、考えることにはアレルギーを起こしていた。繊細なまでに鈍感な自分の無責任さにただ冷たく浸っているのが何よりも楽だった。

ジョイスが涼しそうな眼差しで風を追っていた。

目前で砕けた波がハレイワ・アライ・ビーチに散っていく。潮の匂いが柔らかいジョイスの髪を撫でていく。

ハワイには四人のティキ（神）がいる。カナロアはそのうちの一人で、海と夜を支配する。その夜、カナロアはいくぶん機嫌がいいようだった。

昔は波乗りする前に、ポリネシア人たちは、ティヤクイの樹液を木製のボードに塗りつけてティキに祈ったそうだ。一番いい波が取れるように。最高の Ali' i（アライ）になれるように。

ただ、夜はその波がまったく読めない。わずかに月明かりの下でロールや飛沫がぼんやり浮かび上がるだけだ。不確かな視界の中で、海鳴りと足から伝わってくる波の律動だけが頼りだ。

ジョイスは難無くテイクオフしていった。シュガーは乗れないと判断するとすぐドルフィン・スルーに切り替えた。

日中よりも水の中にいる時間が長く感じられた。早く息がしたい。岩礁にタッチすることもなく、うまくすり抜けることができた。

そう思ったとき、すぐにまたボードが浮き始めた。次の波が始まっていたのだ。大きい。予想外だった。シュガーはとっさに反転して波の頂点に立った。その夜のエフカイ・ビーチはせいぜい十五フィートくらいと思ったが、夜はとてつもない大波に乗ったような錯覚と恐怖に見舞われた。

ドロップしていく。重力に引っ張られるようにボードが壁を切り裂いていく。どこがボトム・ラインか想像もつかない。

腰に衝撃が伝わってきた。シュガーはターンを試みたが、すでに真っ黒な壁が崩落し始めていた。暗黒の質量はウムも言わせずシュガーをそのまま押し倒していった。

あとは長い長い空白の窒息状態が続いた。巻かれていく。永久に存在は忘却されてしまうかのようだ。

その間に星の夢をみた。現れては消えていく星たちが笑っていた。蒼白い月も知らんぷりを決め込んでいた。……

気が着いたときには、折れたボードを引きずって浅瀬に浮上していた。激しい息遣いのたびごとに冷たい空気が肺に充満していく。
ジョイスが水際に走り寄ってきた。

「怪我は？」

「ああ……大丈夫。巻かれちゃったよ。」

「よかった。本当に大丈夫？」

「なんとかね……星の夢を見た。」

シュガーはまだ肩で息をしていた。

「俺を笑っていやがった。……」

ジョイスが思わずシュガーを抱きしめた。ウェット・スーツを通して、彼女のストレートな体が、それでも優しい感触を伝えていた。二人は波打ち際でしばらく恋をしていた。まるで形にならない思いが、宇宙の片隅で息をひそめているようだ。ふっくらした女の唇は塩辛い男の頬や首筋に安心を与えていた。体はすっかり凍えていたが、それでも不思議と寒くはなかった。指先はまだ興奮していたようだ。シュガーの肉体は別の世界をかいま見た動揺をまだ隠し切れずにいたようだ。……

近くで声がした。ジョイスの名を呼んだのだ。スウェットを着た白人の男が歩いてきた。

ジョイスはシュガーから体を離し、『ハーイ、エディ……』と呼び返した。

男はゆっくり二人に近づいてきた。長身で一見優男風のその人物はいかにも表情が疲れていた。白人の年齢はいつも見当がつかない。二十代の後半だろうか。それにしても妙に肌に艶がなく、老成していた。

『この男だ。あの日パイプにいたのは。間違いない。エディ……エディ何だ？』

シュガーはまんじりともせず男を見つめていた。

「彼……シュガー。……」

ジョイスはあらたまったように言った。

男は長い髪を束ねていた。にっこり笑うとその男は手を差し出した。シュガーは濡れたまま男の手を握りかえした。

「物好きだね。・・・シュガー。」

引っ込み思案な声の持ち主だ。

「あんたほどじゃない。」

シュガーのほうがよっぽど傲岸不遜だった

男は苦笑いしてジョイスの冷たい腰に手を回した。ジョイスはチラッとシュガーの顔をうかがって男にキスした。

「帰ろう。腹がへった。」

「食欲があるの？」

「今夜は少し。」

「よかった。」

二人はシュガーと二言三言交わして、そのまま立ち去ろうとしていた。シュガーは何となく格好の悪い感じになっていが。ふとそのとき男は振り返り、シュガーに言った。

「二週間後、パイプでアマチュアのトーナメントがある。」

シュガーは立ちすくんだまま、黙って聞いていた。

「きっと波が荒れて、途中、中止になる。・・・君も出るんだろう？」

「ああ、・・・出るよ。」

シュガーはどういうわけか、思わずそう答えてしまった。『それにしても』、どうして中止になるほど波が荒れるとわかる？ 二週間も先の話じゃないか。シュガーはそういぶかった。

「ただ、そんな気がする。」

男はまるで、シュガーの内心を言い当てるようにそう呟いた。

二人が立ち去るとき、ジョイスは一人で小走りに戻ってきて、シュガーの唇にさっとキスをした。男はわずかにその様子を垣間見たが、何事もなかったかのように先に歩き始めた。ジョイスは男を追いかけながらも、もう一度振り返り、シュガーにウィングをした。カナロアは至極機嫌が良かったようだ。波はずっと穏やかになり、零れる星たちが音を立てていた。

シュガーは翌日から、朝まだ開けきらぬうちにノース・ショアでオンすることにした。真夜中の一時過ぎにはカイルアを出て、北海岸沿いに R83 をパイプ・ビーチに向かう。パイプでなければならなかった。エディの言ったトーナメントは、パイプで行われる予定だったからだ。

暗闇の中では手探りのサーフィンも、やがて薄明とともにその復習をするかたちになる。四、五日も続けていると、次第に波の変化のパターンに応じて素直に体が反応するようになっていった。そして陽の光に万物がその姿を露わにする時刻となっても、あらゆる感覚が視覚に優先するようになる。迫り来る波に押し出されるエア、温度、波が生み出す風の向き、足から伝わる律動、どれをとっても視覚に頼ることはなくなる。体中が研ぎ澄まされた一つの繊細な感覚になるのだった。シュガーの瞳はたとえすべてを見ていても、実はなにも見てはいなかった。

カイルアに戻るのは、まだ朝の八時ごろなので、それから午後まで死んだように眠った。夕刻にはナタリーからお呼びがかかる。ハワイカイの洒落た家で、白人女の柔らかい胸を口にふくんでいても、シュガーの脳裏にはエディという物静かな男の凄絶なあの日のサーフィンだけがよぎっていった。

ある朝、シュガーはナイト・サーフィンの後、なかなか寝付かれず、珍しくナタリーに自分から電話をしてみた。その日、ナタリーはオフのはずだった。ところがこの日に限って、ナタリーは何かの用事とかで都合がつかないようだった。何となくバツが悪い感じがする。

昼近くになってから、シュガーはカイルア・ビーチまでバイクで繰り出した。疲労が体の中にうずくまっていた。視覚は妙に距離を伸ばしたが、聞く音はそれに比べて何か遠い感じがした。海はウィンド・サーファーで埋め尽くされ、光が身の置き場に困っている。シュガーは不思議と空腹ではなかった。海岸道路にあるにわかづくりのアイスクリーム・ショップでパッション・フルーツのものをひとつ頼んだ。ハレイワのマツモト・ストアの真似らしい。

夢を見るのには勇気がある。それを貫き通すだけの生欲の硬質な本体力を、シュガーは持ち合わせていない。ベクトルがあまりにも鋭角に過ぎ、方向をきちんと定めることもままならなかった。影はただ空しく不毛な実体の後を追いかけるばかりだった。

シュガーは、エディのこと、ジョイスのこと、ナタリーやクッキーのことを、鈍感になった頭の中でバラバラに思い出してはとりとめのない脱力感に襲われていた。

遠くで誰かが自分の名を呼んだ。メイだった。パール・シティのドライヴイン。シアター以来、その存在は頭の中からすっかり消えていた。

ウィンド・サーフィンから上がったばかりなのだろう。水を弾いた白いワンピースの水着は、バニヤンのコンドミニウムで惜しげもなく体を開いて見せたあの晩より、ずっとセクシーに見えた。ビーチからゆっくり近づきながら彼女は笑いかけた。

「どうしたの？ 女にアブレてるの？」

「いや、寝付かれなくてね。起きて来たんだ。」

シュガーはカーキ色のランニングにデニムの短パンだった。

「あら、すぐ近く？」

「歩いたら十五分はかかるかな。どうせバイクだから。ニックには会ってる？」

「うん。ときどき。」

メイは取り敢えず笑っていた。

「今日は一人？」

「そうよ、男ならいくらでも寄ってくるもの。しつこいたらもう大変。このへんだと、少しは一人でいられるわ。」

シュガーは流れるようなメイのプロポーションに目を細めた。

メイは得意そうに続けた。

「カハラのショッピング・モールにいったら、もうインスタント・カップルばかりよ。もっとも慣れてない観光客じゃ、ちょっと無理かも。」

「なるほどね。」

「ねえ、おうち近いんでしょ？ シャワー使わせて。髪も洗いたいし。」

「いいよ。でもそれだけだよ。」

「今日は酔ってないわ。」

「だから大丈夫ってわけじゃない。」

「けっこう真面目なんだ。」

「きみがただのデザートになっても構わないってんなら、別だけどね。」

「冗談じゃないわ、願ひ下げよ。」

「プライドか？」

「とにかくシャワー使わせてよ。相談したいこともあるし。」

「ニックのこと？」

メイは返事をしなかった。

本音を言えば、シュガーはまったくメイに興味がなかった。女の魅力は知性と情緒の大きなギャップの間に緊張する美しさだとシュガーは思っていた。メイにはその緊張が存在しない。

「荷物は？」

「これだけ。」

メイはブルー・メッシュのナップザックにTシャツやらジーンズやらを詰め込んでいた。

ハオレ（地元の白人）の個人住宅街を抜けて、シュガーのバイクはアパートへ向かった。二階建ての簡易アパートに着くまでのものの五、六分、バイクという乗り物を経験したことのないメイは悲鳴に近い歓声をひっきりなしにあげていた。シュガーの背中がしがみついた女の体で熱い。

火のような部屋へ入ると、シュガーはエアコンのスイッチを入れる一方で、しばらく窓を開け放った。メイはナップザックを放り出すと、さっさとシャワーに入ってしまった。女の服を脱ぐ音が聞こえてくる。この部屋であの音を聞いたことはかつてない。やがてドア越しにシャワーのこもったような音が始まる。シュガーはベッドに寝転びながらその新鮮な悩ましさに馴染もうとしていた。何か懐かしいものを感じる。

シャワーを終えたメイは濡れたままタオルを巻いて出てきた。体をきちっと拭かずにしばらくそのままなのが快感らしい。髪だけは一応タオルで水を切ったようだ。メイは勝手にドライヤーを使って長い髪を乾かし始めた。それは一種の挑発なのか、シュガーには自信がなかった。もっともあの晩、もう十分に挑発されたのを思い出すと、何をいまさらという気がして、妙に白けてしまうのだった。

メイはシュガーにじっと見られていることを意識していた。しかし白人女のような自然さは、彼女にはない。ナタリーなら鏡の角度を利用して自分に笑いかけてくるだろう。日本人の女にはそういうちょっとした仕草のアソビができない。むやみに面白くないとシュガーは思う。

「わたし、そんなにつまんない？」

シュガーの胸のうちを見透かされたような唐突な一言だった。

「そんなことないよ。」

「ウソ。」

メイは表情ひとつ変えず、髪がドライヤーの風になびいていく。気持ちよさそうだ。

「この状況なら、……ふつうの男ならとっくにわたしを抱いてるわ。」

「そんなに誰にでも食って欲しいのか？」

「あなたのことを言ってるのよ。」

メイはドライヤーの手を休めて、香水をつけ始めた。ココの匂いが部屋中に溢れていく。シュガーは香水自体好きなほうだった。ただ日本人が一様にココを使うのが嫌だった。彼らに主張がない、ということではない。シュガーが、デューンや、トレゾアがすきだったから、というのでもない。

「高いんだア、これ。」

「知ってるよ。」

「どうしてか知ってる？」

「ふっかけてるだけだろ。」

「違うの。原料の問題なのよ。ブルガリアン・ローズとジャスミンの香料が主成分なんだって。ブルガリアン・ローズからたった一グラムの香料をとるのに四トンの花が必要なんですって。ジャスミンなんかも一滴分の香料をとるのに二百万個の花が要るんですって。信じられる？ ココが高いわけだわ。」

「そこまでやるとはね。狂気に近い。」

メイはこういうことだけは、どういうわけかよく知っていた。

「相談があるんだ・・・わたし。」

「聞いてるよ。」

「男が男を好きになるのって、女を好きになるのと違う？」

「ニックがつきあってるのは確かに男だけど、女として愛してる。だから単純に同性愛とはいえないよ。正真正銘の女で、あのファルンに勝る存在が現れたら、容易に気が移る類のものだと思うよ。なんだかんだいって、けっきょく相手の中に、『女性』を求めているからさ。」

「そう？」

メイは相変わらず髪を乾かしている。

「清潔で、ボーイッシュな女の子って感じだったわね。」

「なんだ、見たのか。」

「ちょっとね。タイ人でしょ。」

「CIAでも雇ったのか？」

「冗談言ってる場合じゃないの。」

「失礼。」

「ポランスキーの『赤い航路』って観た？」

「赤い？・・・」

「アメリカ人の売れない作家とパリジェンヌの話よ。最後に女のほうへ走って、男に見せつけるの。男はけっきょく女を殺して自分も自殺するってストーリー。観なかった？ この前日本でもやったんだけどな。アメリカじゃ、去年くらいにはロードショーやったんじゃないのかな。」

「観たよ。『Bitter Moon (苦い月)』だろ、それ。」

「そういうタイトルなの？」

「そういうタイトルなんだよ。」

「へえ、すごいじゃん。英語で観るなんて。」

「ここでは英語しかないんだよ。観たくて観てるんじゃない。」

シュガーはあからさまに軽蔑した。

「じゃあニックはあのタイ人の『女の子』を愛してるって感じなのね。」

「そう。ポランスキーの映画みたいに、戻って来れない河を渡ったわけじゃない。もっとも世の中には両刀づかいていうのもいるけどね。」

「ふうん。．．．．．」

「通常の人からみれば確かに倒錯しているかもしれないけれど、女性の入り込む余地は、彼の場合大有りだね。そもそも男が好きなわけじゃないからね。」

ドライヤーの手を休めた、メイは、無表情の中にもいくらか安心を覚えたようだった。

「ただ、きみの声がニックに届いてないだけだよ。」

シュガーの寝転んでいるベッドに腰掛けたメイは、拍子抜けしたように首をかしげた。

「少しは気が楽になった？」

「力が抜けちゃったわよ。」

メイはため息をついてベッドに添い寝した。柔らかい髪が日焼けしたシュガーの厚い胸板をくすぐった。

「そういう人、タイにはいっぱいいるの？」

「アジアには多いらしいよ。ハワイにいるフィリピン人の間にだって結構いる。バクラって呼んでるけどね。」

「バクラ？」

「フィリピン語でね、そう言うんだって。子供の頃、男の子があんまり可愛いと女として育ててしまうケースも多いらしい。性転換しているかどうかは、お金がかかるからまぢまぢだろうけど。」

「抱いたことある？」

「いや、ないね。友達には何人かバクラがいるけどね。」

「どうするんだろう、年取ってから。ずいぶん惨めだと思うな。」

「連中だって考えてるさ。だから孤児を引き取って養子にして、お金をかけて養育して、自分の老後の保険にすることも多い。」

「なにか、哀しいわね。」

「．．．．．」

メイは鼻を鳴らしながら、シュガーの乳首を舌でなぞった。彼女の左手はもうシュガーの腹部を滑るようにして獲物を探している。気分を出そうとするような呼吸が先を急いでいる。やがて粘っこい舌がシュガーの下半身に絡みつくの、シュガーは無機質な目でじっと眺めていた。

「やっぱり男なら誰でもいいんじゃない。」

メイは夢中で舌を遣いながら首を小さく横に振った。そして口ごもった声で言った。

「人のこと言えないんじゃない？」

「子供の頃、パパから言われなかったのか？ 口にモノを入れてるときは喋るなってさ。」

「よく言うわよ。」

そのうちにメイはひどく優しい声で聞いた。

「気持ちいい？」

「・・・・・・・・」

「あとで、わたしも気持ちよくしてね。」

シュガーはそれを聞いた以上、応じる気になれなかった。こういう言葉を聞くと、むやみに壊したくなる自分がいた。シュガーは、上半身を起こすとメイの顔を両手でしっかり押さえ、座りなおして激しく腰を前後に動かし始めた。

「じゃあ、安っぽく愛してるって言うてみろよ。口にモノを入れたままさ。」

メイはあまりに乱暴な動きに喉を詰まらせた。

「英語じゃ平気で言えるくせに、日本語になるとどうして言えないんだ？ え？」

メイは喉の奥にかつてない圧迫感を覚えながら、声にならない声で泣きじゃくり始めた。何度か臓腑が悶え、嗚咽が尾を引いた。

「吐くなよ。」

シュガーの一言が心理的なプレッシャーを増大させた。メイはしばしば嘔吐しそうになるのを必死で我慢していた。体中から力が抜けていき、だらしなくただ口だけがシュガーの仕打ちに耐えていた。

とうとうシュガーが終わる頃、メイは思い切り吐いた。シュガーは、むしろ強くメイの顔に自分を押しつけた。メイの嘔吐は、一度ではおさまらず、肋骨が鳥肌立った体に浮き上

がった。ようやく開放されたメイは涙が止まらなかった。目や鼻から絶え間なく涙が流れ出た、唇を伝って垂れる反吐を手で拭いながらいつまでも子供のように泣いていた。ようやく小さな震える声で、『ごめんなさい』と言ったとき、シュガーは知らん顔をしてもう煙草を喫っていた。

シュガーはメイをバイクで送った。カイルアを出るときからメイはずっとシュガーの背中に、力なくただもたれかかるようにしていた。顔色が悪く、気力も失せていた。唇は乾き、午後のけだるい日差しの中で、バイクのエキゾースト・ノイズだけが風の合間に聞こえていた。

ちょうどカイルア・ロード沿いにあるパリ・ショッピング・センターを通りかかった頃、見慣れた車が目にとまった。赤いコルベットだ。ヌアヌ・パリのほうから下ってきたその車は、そのまま東にそれていった。ナタリーが運転していた。同乗者は白人の男だった。今日はなにか用事があると言っていたはずだ。シュガーはその用事を見定めてやろうと、にわかになやらしい根性を出してみた。すぐにバイクを反転させ、R72 沿いに追いかけた。

コルベットはマカプウ岬を過ぎて東海岸を回りこんだ。黒い火山の岩肌と真っ青な海が晴れた日の印象を競っていた。やがてサンディ・ビーチの手前を、コルベットは右折した。どうやらハワイカイ・ゴルフ・クラブに向かっているらしい。シュガーはエントランスのあたりにバイクを止め、遠くから二人の様子を目で追った。ナタリーよりかなり年配の男だ。なりこそラフなポロシャツとスラックスだが、相当の紳士であることは一目瞭然だった。銀髪に近く、立派な押し出しをしていた。

亭主か？ どうも違うようだ。恋人のような甘さが二人にはある。客の類かとも思っただけだが、尋常ではない馴れ馴れしさがあまりにも際立っていた。

「ねえ、ここどこ？・・・」

目の座ったメイが小さな声でぶっきらぼうに言った。

「黙ってる。」

年配の男を見ているうちに、その背後にある教養や権威、そしてステイタスなど、あらゆる限りの持てるものが、まるで今、自分と比較されているような気がしてきた。いわゆる、『とてもかなわない』というやつだ。若さなどなんの取り柄にもならない。いつかは消えていく。

シュガーの目がさらに吸い寄せられたのは、車から出てきたナタリーのじゃれつきようだった。それは彼女が自分にはいまだかつて見せたことのないものだった。

『パトロンってやつか。』

自分の前では寸分のスキもない自立した女がこのザマだ。その女に抱かれて安心して自分には、いったいなんなのか。ナタリーの、まるで犬が飼い主に腹をさらけだしているような無防備な媚びかたや甘え方は、シュガーの目に痛ましいほど切なく滲んだ。

翻って、自分はその犬に弄ばれて喜んでいる。……時折ちぎれた濃灰色の雲が流れては、地表に影を落としていく。光は珍しく乾いた空気を遊んでいた。自虐、負け犬、思ってもみなかった嫉妬。いろんな言葉が頭の中を巡っていく。もしかしたら、早合点や単なる誤解かもしれない。それでもシュガーの信じられないような動揺は間違いのない一つの真実だった。……………

∴∴∴

チャイナ・タウンはどこへ行ってもそこにあった。そしてこれほどアメリカらしくない町も珍しい。日本人町はたいていアメリカに同化していくのが常だ。チャイナ・タウンは違う。あたかもアメリカに挑戦するかのように自分たちが中華であることを主張し続ける。

その日、シュガーはカイルアで待ち合わせた。ジョイスの車は古いベージュのマーキュリーだ。セダンは相当ガタが来ていた。R61のパリ・ハイウェイ沿いに車は一路ホノルルへ向かった。カイルア・ショッピング・センターでシュガーをピックアップしたとき、ジョイスは珍しく薄いピンクのシャツに、真っ白なタイト・パンツという服装だった。セミロングの髪にはやはり白いカチューシャをつけていた。いつもラフな格好のジョイスしか知らなかったから、これはとても新鮮だった。

マーキュリーはやがてチャイナ・タウンに入ってしまった。マウナケア・ストリートにあるマーケット・プレイスからほど近いところにジョイスの親戚がやっている広東料理屋がある。あたりは時代を感じさせる建物も多い。もっとも最近では東のほうから高層ビルが接近しており、やがてはコンクリート・ジャングルに変わってしまうのだろう。

ジョイスは祖父の代に香港から渡ってきた一族らしい。店は小奇麗な感じだったが、床や円テーブルはやはりどことなく油っぽい。給仕や出入りする客には表情がない。みんなシュガーというあだ名をつけてやりたくなった。ただけたたましい広東語が、ここだけは別世界だと訴えているようだ。

飲茶だった。お定まりのポーレイ茶が苦い。

「君に似てる。」

「え？」

ジョイスはシュガーがぼんやり見ている後ろのほうを振り返った。

「あのポスター？」

「そう。君に似てるんだ。」

「いやだ。歳が違い過ぎるわ。あれは今売れっ子の新進女優よ。」

「香港の？」

「そう。」

「よく似てる。」

「それはどうも。」

「君のほうがずっとスタイルがいいけどね。」

「もういいわ、そのへんで。」

「もっと言いたい。」

ジョイスは笑い出した。

「わたしのこと……好きなの？」

「うん。よくわかんない女（ひと）だけどね。」

その素直な一言に、自分でも驚いた。

「そのほうが嬉しいな。どこがどうだから好きだって言われるより、なにか大事にされているような気がする。」

「でも男がいる。」

「やめましょう。その話。」

「嫌だ。」

「ききわけが悪いわね。」

「子供だからね。こういうことにそんなに物分りがよくはなれない。」

「まあいいけど。でも、あなたは少年のような目をするときがある。人に言われたい？」

「どうかな。」

「少年の目をした人が、一番遠くまで行くの……」

その言葉はむしろそっくりジョイスに当てはまるような気がした。

「君たち中国人はまったく不思議だよ。」

「みんなそう言うわ。知らないだけよ。」

ジョイスは頬杖をついた。

「何が知りたいの？」

「夢の見方。」

「夢はつくるもの。ツキは呼ぶもの。奇蹟は起こすもの。」

「うまいね。」

ジョイスが微笑んだ。

「強いんだな。その強さはどこから来る？」

「さあ？」

「中国人ならみんなそうか？」

「どうかしら？」

ジョイスはキャッシャーのところに掛かっている日曆（ひめくり）のほうを見た。

「あの日曆の下の方に中国語書いてあるの、わかる？」

「一日一言ってやつだな。意味はわからないよ。」

「禍兮福所依 福兮禍所伏……」

「どういう意味？」

「荘子なんだけど。どんなに悪いことがあっても、いいことはその裏腹にやってくる。どんなに幸せでも、悪いことがそこに隠れている。」

「ひどいな。」

「どうして？」

「因果応報とは根本的に違う。」

「因果応報なんて、気休めだわ。」

「中国にはそういう発想は無いのか？」

「無いわね。」

「乾いてるね、君たちは。」

「仙人みたいでしょ？ 霞を食べて生きてるのよ。」

ジョイスは笑顔がいつも軽い軽い春風のような。

アメリカの中で中国という一つの確固たる意思がものを考えている。

シュガーはハワイというアメリカで、非アメリカ性をこれほど印象づけられたことがない。ヒスパニックも黒人も、それぞれ独自性には確かに頑固だ。しかし彼らはけっきょくアメリカという前提にたてつこうとはしない。むしろアメリカへの帰属性に悲願をこめている。華僑はそれに比べるとはるかにアメリカという価値に対して醒めている。

店内はやがて客の入りが多くなり、耳を覆いたくなるような喧騒に包まれていったアメリカという人類の偉大な実験がここにも一つ熱を帯びて存在していた。

数日後、パイプ・ビーチのナイト・サーフィンにすっかり馴れたシュガーは、気分を変えてサンセット・ビーチをトライした。調子は上々。波はどこまでも彼を理解してくれた。

その朝早く、ナタリーから誘いがあった。シュガーには抵抗があったものの、今はもう『仕事』と割り切るようにしていた。

ナタリーはいつものように貪欲にシュガーの肉体を求めた。イタリア系らしい濃厚な愛撫でも、もうシュガーの突き放されたような孤独感を癒すことはなかった。

「自由になると倦怠を覚え、豊かさの中でまた敗北を感じた。それはけっきょくわたしが無力であることの証明だった。・・・」

ナタリーがベッドの上で、小説の一節を読み上げた。そしてタオルケットの上に本を伏せると、シュガーのほうを見た。

「これ、まるであなたのことね。」

シュガーは裸のまま彼女の横に寝ていたが、うっすらと目を開けた。優しい年上の女の笑顔が間近になると、溶けそうなキスが唇に甘い湿気を残していく。

二階のベッドルームはまるで海の上に張り出しているような錯覚に陥るほど青い世界に近接していた。ぼんやりとシュガーは真っ白な部屋を見渡していた。海が太陽を反射して、壁や天井に粒子の波紋を広げている。横になっていると、立ち止まることがこれほど無意味に不毛なものはないと思えてくる。哀しいと思うのは一人のときではなく、いつも誰かと一緒にいるときだった。人と人をつないでいる細いパイプのようなものを、どうしても手繰り寄せることができない。徒勞の情熱は空回りし、言葉は体温を失った。

けだるかった。ここ数日、根（こん）をつめてナイト・サーフィンをしていたからかも知れない。シュガーは光の波紋を眺めているうちに思い出した。ある日、海の中が眩しいほど明るく、そして青かったので、息がつまるまで海中で見惚れていたときのことを。とうとう苦しくなって浮上すると、かえって快晴の空が真っ黒に見えるほどだった。タオルを巻いて横に添い寝しているこの年上の女は、あの日ゴルフ・クラブで見せたのとは違う表情をしている。あれもこれもすべてがシュガーの内部の乖離を証明しているように思えた。

ナタリーがくれた冷たいレモネードが舌に痛い。静かなエアコンが潮の匂いをずっと手の届かないところへ遠ざけていた。

翌日、シュガーはまたノース・ショアに出かけた。ナイト・サーフィンではない。まだ昼間の海を見たかったからだ。

バイクは三本の椰子の目印を過ぎた。もうエフカイだ。パイプは近い。波は穏やかで十フィートほどだった。バイクを乗り捨てて、シュガーは砂地に転がるコンクリート・キューブに腰掛けた。まばらに点々とパドリングするサーファーたちを彼は飽くことなく眺めていた。後ろで声がした。

「ここだと思ったよ。Long time no smell. (久しぶりだな。)」

ストライプのTシャツを着たニックが立っていた。マリファナを指につまんでいる。「おまえにも困ったもんだな。アパートにはいないし。てっきり on the run (家出) したのかと思ったよ。」

シュガーは不機嫌そうだった。

「中年女に囲われてるって本当か？ あのカム・ドライヴイン・シアターでいっしょだった女だろ？」

「そんなとこだ。」

「いいご身分だねえ。おまえ、こう見えてもけっこうしたたかだな。」

「なんとでも。」

「なあ、パーティやるんだ。今夜来ないか？」

「メイもいっしょか？」

「いや、呼んでない。金ヅルだぜ。やばいところは見せられない。」

「かわいそうに。」

「よく言うぜ、この悪党。今夜はファルンがいる。」

「男じゃないか。」

「だからさ、女も手配中だってば。」

「興味ない。」

「気晴らしに、たまにはいいだろう。」

「なんでここだとわかった？」

「ジョイスが『バイパス』で、パイプに行ったんじゃないか、って言ってたんだ。」

シュガーはしなやかなジョイスの体を思い出した。

「ニック、ジョイスのボーイ・フレンド知ってる？」

「あん？ いるってことは知ってるけどな。どこのどいつかは知らん。おい、来るのか来ないのか、どっちなんだよ？」

「わかった、わかった。」

「Shoot! そうこなくちゃ。」

「留守電にメッセージを入れてくれればいいのに。」

ニックはシュガーの顔をのぞきこむようにして言った。

「おまえさんは、ちゃんと会ってモノを言ってやらなくちゃ駄目なんだよ。」

「Pio the bud (マリファナ、消せよ)」

シュガーはさりげなく声を落として言った。

ニックは慌てて捨てると足で砂の中に踏み込んだ。警官が巡回して来たのだ。

ニックは憎まれ口を叩いた。

「その muffler burns (キス・マーク)、なんとかしろよ。クッキーが見たら、コトだぜ。」

シュガーは鎖骨の上に手をやった。

「そんなに目立つ？」

「その中年、かなり欲求不満な女だな。」

「そんなにたくさん？」

「Minors (たいしたことない) 星の数ほどだよ。」

∴ ∴ ∴

クッキーは決心した。

ナタリーの事務所はホノルルにあった。散らかしたシュガーの部屋で彼女の名刺を見かけたことがある。正確なアドレスは覚えていないものの、カピオラニ・ブルヴァード沿いだということと、ビルの名前は記憶に残っていた。アラワイ運河に近い。

思いつめたクッキーの表情に迷いはなかった。白い開襟シャツにジーンズ。その女(ひと)に会ったら、恐れることなく、言うべきことを言おうと心に決めていた。しかし、エレベーター・ホールで待っている間、いったい今の自分にとって言うべきことは何なのか、実はなにも明確になっていないことを思い知らされた。あることないこと頭の中を堂々巡りするばかりだった。歯がゆさはやがて自己嫌悪になり、十階に着くまでの数秒がまるで数時間にすら感じられた。むしろそう感じたいと思っていたくらいだ。

『まったく。頭が悪いってことは、犯罪だわ。』

妙な冷や汗が体中を襲い、わけもなく心臓が高鳴るのが自分でもよくわかった。

ナタリーの事務所は、ビルの合間からダイヤモンド・ヘッドがよく見えた。若い女の秘書が取り次いだ。所在無げにクッキーは待っていた。すると案外すぐに部屋に通された。ナタリーはブロンドを後ろにまとめて、何か書類をチェックしているようだった。

光彩のよくとれたオフィスは図面と写真があちこちに広げられている。足の踏み場もない。クッキーはソファに腰を落ち着かせることもできない。

ナタリーはペンを走らせながら、チラッとクッキーのほうを見た。

「ごめんなさい。少し待っててちょうだいね。」

クッキーは返事もせず、ただ突っ立っていた。

やがてナタリーは書類をまとめると、それを封筒に入れ、さきほどの秘書にことづけた。ため息をついた彼女は立ち上がり、まるでとってつけたようにクッキーに笑いかけた。

『きれいだ。この女(ひと)。・・・』

クッキーはもう圧倒されていた。

「クッキーね、あなた。どうしたの？ 突然ね。シュガーのこと？」

『わかってるくせに』。クッキーはにがにがしく思った。

「黙っていたら、わからないわよ。」

ナタリーは図面や写真を片付けて、クッキーをソファに促した。そして細い煙草に火をつけた。「どういうことなの？」

クッキーは思い切って言った。「別れて。」

ナタリーは思わず吹き出した。

「何を初対面で言い出すのかと思ったら、まったく若い人はいいわね。思い過ごしも羨ましいくらい。」

「ごまかさないで。」

クッキーは今にも泣き出しそうだった。

「言っておくわ。シュガーはお友達。あなたのことはよく聞いているわ。相談に乗ったことだってあるのよ。けっこう悩んでいるみたい。あなたのことで。」

クッキーは耳を疑った。ますます心は逸ったが、一瞬世界が広がるような明るさを感じた。

「いいこと。わたしには夫がいて、子供がいる。仕事も大変。シュガーは偶然通りがかりに車を直してくれたの。それ以来のお友達。そのほかは何もないわ。それよりシュガーはあなたに自分がふさわしくないんじゃないかって悩んでたけど。いつも彼の背中を押してあげているつもりだったのに。彼、なにもそれらしいことをあなたに言わない？」

クッキーは我知らず、目がうるんできた。唇を噛んだま頭（かぶり）を振った。クッキーにとっては、シュガーが自分のことを考えて悩んでいる、それだけで十分だった。

「彼のアパートに行ってあげなさいな。一晚ゆっくり話あえば、仲直りできるんじゃない？ 何があったか知らないけれど。」

「わたし、彼のアパートに泊まったことがない。」

「彼は誘わないの？」

クッキーは、『ノー』と顔を横に振った。

「おかしい恋人たちね。もっと素直になれないのかしら。若いのに珍しいわね、二人とも。」

クッキーはぎこちなく笑った。

「ごめんなさい。お邪魔して。気を悪くしないでください。あまり心配したのだから。誤解してしまったんだわ、わたし。」

「いいの、いつでもいらっしやい。」

ナタリーは爽やかに笑って立ち上がった。クッキーをエレベーター・ホールに送っていく間、二人はもう一度言葉を交わした。

「わたしとシュガー、うまくいくと思います？」

ナタリーは優しそうに言った。

「不安になっているときほど、お互いの気持ちは一番近いところにあるものよ。それに気がつかないだけ。」

クッキーは安心したように白い歯を見せて笑った。

クッキーを送り出した後、ナタリーは深いため息をついた。額には汗をかいていた。シュガーのアパートに電話してみたが、留守番電話になっていた。・・・・・・・・

∴∴∴

午後遅く、パイプからカイルアに戻ったシュガーは、がらんどうのこの部屋が一番落ち着くと思った。椰子の並木があるNYか東京に成り下がったようなこのハワイで、ここだけが原色の空気を感じることできる唯一の場所だった。とりたててハワイらしいものがあるわけではない。バス・ルームに転がっている無臭のマンゴー・ソープだって実はフィリピン製だ。

シュガーは何事にも夢中になるということがなかった。サーフィンを除いては。そのくせ、現実の一つ一つ思いを巡らすより、人と人との狭間に落ちていく自分がいたたまれなくなる。学生の延長らしくかなり理屈っぽい。ある種の理性へのこだわりといってもいいかも知れない。

行動を制約するものは、(彼の言葉を借りれば)『根源的責任』ということだった。『結果的責任』ではない。シュガーはときにそれをエゴという言葉に置き換えたりする。自分の

中にエゴを激しく感じるとき、それと同じものが周囲の人間にもあるのだとそう信じていた。そしてそれぞれのエゴが予定調和することは決してない。ただ、淘汰があるだけだった。

そのことに気づいてからシュガーはよく喉が渇くようになった。空のはるかを流れていく雲や、海に落ちてきそうな星たちを数えてはため息をつく毎日を送っていた。

シャワーを浴びると、ナタリーから電話があった。少し声の調子が違っていた。何かそらぞらしいものを感じた。いわく、クッキーがホノルルの事務所に突然やってきた、何も言わずにただシュガーと別れてくれと訴えた、云々。シュガーは黙って聞いていた。

「彼女、必死だったわ。悪い子ね。とりあえず言っておいたの。あなたたち二人でよく話し合ったら、って。わたしはそれに従うわって。……ねえ、聞いている？」

「聞いているよ。」

「どうするの？」

「またはっきり言ったものだな。どうもしないよ、俺は彼女に自分からアプローチしたことはない。好きにする。」

ナタリーの声は少し軽い調子になってきた。なんとなく、シュガーにはナタリーのことがあざとく思われてきた。自然、シュガーの口調もどことなくとげとげしいものとなった。

「ねえ、こんな話の後でなんなんだけど。これからパーティがあるの。ポートでね。アラモアナのケワロ湾から六時に出港よ。来ない？」

「服がない。」

「かまわないわ。突っかけや、ショートパンツじゃなければ。じゃあ、来るのよ。」

「わかった。」

「それから……クッキーのこと、怒っちゃだめよ。」

「怒らないよ。」

怒る以前の問題だった。

「ならいいわ。遅れないでね。チャオ。」

シュガーは電話を切っても、やはり頭のくるのを抑えることができなかった。クッキーの押し付けがましい思いにも、ナタリーのいやらしい使い分けを心得たやり口にも。シュガーはいまいましくなった。もちろんナタリーが、シュガーとは友達だといってごまかしたことを、シュガーは知らない。ただ、なんとなくナタリーの説明通りではないんだろう、とは気づいていた。

シュガーは、とにかく白い綿パンをはき、革のデッキシューズを引っ掛け、アロハを取り出した。そのときまた電話が鳴った。もうシュガーは取らなかった。留守番電話が作動する。すると、クッキーの声が単語をかみしめるように流れてきた。

「1・4・3、シュガー。・・・食事に行ってるの？ わたし、今、パライソ。もうすぐ終わるの。今日は早番。・・・パパにウソついちゃった。だからカネオへには帰らなくて平気よ。友達のところへ泊まるって連絡したの。・・・ちゃんとアパートで待っててね。今夜はわたし・・・」

シュガーは終わりまで聞かずにアパートを出た。『お仕事だ。』そう思い切るように独り言をつぶやいて、バイクのセル・スターターを押した。

ケワロ湾を大きなボートが離れたのはちょうど六時半。百人がいつぺんに乗れるボートはゆっくりとホノルル沖へ向かった。デッキからはホノルルがこちんまりとネックレスを束ねたように見えた。

ナタリーは例によってベア・トップのドレスだった。今夜は白だ。パーティに来ているのはすべてとっていいほど白人だった。それも本土、とくに東部エスタブリッシュ然とした連中ばかりだ。もちろんたいていアロハで片付けていたが、それでもNYそのものが精一杯張り詰めたような雰囲気だ。いわゆるカラード（有色系）はシュガーとほんの数人で、あとはポリネシアンの給仕、それにフィリピン人のバンドがいるくらいのものだ。ナタリーはシュガーを見つけると、すぐやってきた頬を差し出した。ハワイカイにいるときとまるで違う。シュガーは軽く彼女の頬にキスした。この段階でもう彼は何かいわれのない力を体の中に感じてしまった。

男たちは政治や株の話に興じていた。やれ一千万ドルをジョージ・ソロスのファンドに入れただの、この前のメキシコ通貨危機では大損しただの、やっぱりNAFTAは失敗だの、連銀は五月にもう一度政策金利を引き上げるだろう云々。・・・

それがどうした、という感じだった。

アルコールを飲む気になれなかったシュガーは、トマト・ジュースを給仕に頼んだ。シュガーの目は、デッキに集う人たちの中に、『あの男』を捜し求めた。時折ナタリーがシュガーを知り合いに紹介するのだが、ほとんど上の空で対応した。どうやら、それらしい人物はいない。

『いないから、ペットのように俺を都合したってことか。』

時間を追うごとに、自分という通貨が大幅に切り下がっていくような妄想を感じた。そのとき一人の中年の白人がシュガーにビールを頼んだ。シュガーは自分は給仕ではない、と言おうとしたが、なんだか面倒臭くなり、自分でカウンター・バーからビールを取ってきてやった。それを見たナタリーが慌ててその男にシュガーを紹介したところ、大いに驚いてみせたものの、しかし謝りはしなかった。ナタリーは心配そうにシュガーを見ていた。ともあれこれがきっかけとなり、二、三のナタリーの知人はシュガーを囲んで会話が始まった。みな、ナタリーと同業のデザイナーということだった。中にはシュガーとそう年齢の違わない者もいる。さきほどの中年男はまるで何事もなかったかのようにシュガーに話かけた。

「デザイナーなんていうのは、ビジネスとはいえ、芸術性が必要なんだ。言わずもがな、だがね。センスが重要だから、場合によってはプロとアマの境界線が無いって瞬間もありうる。」

ナタリーが応じた。

「勉強したその日から収入に結びつくって、よく求人広告に出ているでしょう？ 結構、安易に考えられがちよね。」

「まったくだよ。思いつきのセンスだけじゃ、なかなか続かない。それにいい舞台を選ぶってことも成功する秘訣だ。」

シュガーはなにもデザイナーになりたいわけじゃなかった。プライドをくすぐっておけば楽だくらいにしか思っていなかった。

「なににせよ、ビジネスに関しては、あんたたちアメリカ人には、誰もかなわないよ。」
「自分で言うのもなんだが、その通りさ。アメリカ人っていうのは、きみも知っての通り、実に流動的なものの考え方をする。恐ろしく自尊心が強いくせに、何が一番見栄えがするか、使い勝手がいいか、あるいは面白がってもらえるか、この点に非常に注意をはらうんだな。アート（芸術）っていうのは、効用がすべてだ。実用性といってもいい。」
「これからは、プリミティブなものが素材の中心になると思うわ。」
「やっぱり、素材だね。新しい素材を見つけて、いけるモノに仕上げるってことだ。われわれのアートっていうのは、素材が肝心だな。」

シュガーが唐突に口を開いた。

「世紀末にはいつもエコロジーが流行る。」

男たちは驚いた様子だった。シュガーがこのテの話題に乗れるとは思わなかったのだろう。たかだ、学生くずれのサーファーなのだから。

「ペーズリーの柄みたいだね。生物学に人々の関心は集まってくる。十九世紀末の流行と同じだよ。あの頃のデザインも蔦（つた）に絡まるような熱帯の図案が基調だった。アール・ヌーボー（新芸術）なんていったって、なにも新しくなかったんだよ。また世紀末がこれからやってくる。同じことが繰り返されるだけだ。」

「そうね。ピカソも言ってたわ。アートはけして進歩しない、ただ変貌するだけだ、って。進歩を信じるのは人間の思い過ごしなのよ。」

シュガーは会話が弾むのに反比例してなにやらむかついてきた。会話の中に頻繁に出てきた『アート』という言葉に、嫌悪感を覚えたのだ。

「でも、あんたたちはゴーギャンといっしょだよ、ある意味ね。」

またもや唐突なシュガーの言葉に、ナタリーも男たちも聞き耳をたてた。

「けっきょくゴーギャンは、原始に回帰しようとしても、フランスを捨てきれなかったのさ。タヒチの人間を描いてみせても、しょせん褐色のイエスだったり、半裸のマリアだったんだ。つまり、ゴーギャンは原始に染まろうとして失敗した。あんたたちは、しかし、ゴーギャンのその痛みや苦しみが無い。けっきょくNYやLAに帰っていくんだから。楽なものさ。それが証拠に、あんたたちはここにも本土を思いっきり持ち込んで。」

これは男たちのカンに触ったらしい。横でナタリーがいつ割って入ろうかとハラハラしながら見守っていた。

「きみは・・・」

くだんの中年男は落ち着きはらって話し出した。

「これがビジネスだってことをわかってないようだ。デザインに痛みや苦しみを感じていたら、仕事にならん。」

こんどはビジネスという言葉に、シュガーは過敏に反応した。

「なら、アートなんて言葉は使わなきゃいい。水と油なんだ。」

「ビジネスと芸術は両立しないっていうのか？」

「するわけがない。」

「ほう？」

石のように硬くなった無職の日本人は、にわかにはパーティの耳目を集めた。

「芸術は永遠だが、ビジネスは一瞬だ。しかも芸術の本質は悲劇だ。あんたたちは、感じているフリをしているだけさ。その方が、芸術の権威をカサに着れるからね。ハワイにまで、ネクタイを忘れないただの野蛮人だ、ってことさ。」

逆説的な皮肉だった。緊張の均衡はピークを迎えた。一瞬どよめいたが、ちらほらと軽蔑的な苦笑も聞こえてきた。

中年のデザイナーはとうとう、ルールを逸脱した。

「きみは働いてないからそう思うんだ。一度、社会でもまれてみれば、カネにならない芸術性など無意味だってことがわかるよ。」

そうさそうさ、と言うような声があちこちであがった。

シュガーはキレた。ピクリとも表情を変えず、メインデッキの大きなテーブルクロスをつかんだ。卓上にはシャンパンやら料理やら、盛りだくさんになっている。シュガーは男の顔をじっと見つめながら、そのままクロスをずるずると手繰り寄せるように引っ張った。酒やグラスがフロアに次々と落ちて爽快な音をたてる。シュガーはおかまいなしにクロスを引っ張り続けた。ロースト・ビーフも、フルーツも、バタバタと落ちていった。誰もが呆気にとられてシュガーを止めることもなかった。ナタリーは真っ蒼な顔をして、ただ顔を横に振るばかりだった。

クロスを全部手繰りきったシュガーに向かって、中年の男は静かに言った。

「Good night, Asshole. (おやすみ、ケツ野郎。)」

シュガーは黙ってデッキの端まで歩いていった、どよめいていた人垣は自然に割れてシュガーを通した。手すりにまで来ると、アロハも、デッキ・シューズも、着ているものをなにもかも脱ぎ捨てて、全裸になってしまった。

手すりに足をかけたシュガーは、半身を振り返り、右手で中指を立てて見せた。

「Good night, everybody. . . . Fuck you, everybody. . . .」

一斉に野次とも怒号ともつかない声があがったとたん、シュガーは海に身を躍らせた。冷たい。まだそれほどワイキキから遠くへ来ていなかった。浮上して明かりをみると、この距離ならなんとか泳げると思った、鮫やクラゲのことは考えも及ばなかった。ただ、われながら爽快だと思った。途中振り返ると、ボートは表面的な生活を乗せてダイヤモンド・ヘッドの沖を滑っていった。全身がしびれるほど冷たく、感覚が麻痺しそうだ。それでも海の中で笑い転げたいほど愉快で仕方がなかった。

波のとりわけ静かな夜。月明かりに弾ける波の面が星のように思えた。きっと夜空や星が呼吸をしていた。だから、海が輝いて見えた。

ワイキキに泳ぎつくまで、ずっとシュガーは心の中で言い続けていた。

『病気なのは俺じゃない。あんたたちの方だ。』

ニックはタンタラスの丘にほど近いあたりに小さな一戸建ての家を持っていた。その夜は大騒ぎだった。シュガーがなかなか来ないので、もうみんな勝手に始めていたのだ。男はニックをいれて五人。サーファー仲間の白人が三人に、あとはニックの『ガールフレンド』でタイ人のファルンだった。

ニックはその夜、女の調達には失敗したようだ。正真正銘の女は観光客のオーストラリア人二人だけだった。そのうち一人は、のっけからウオッカとマリファナで正体がなくなっていた。どこから手に入れたのか、オウピウム（阿片）の匂いがする。かなりの粗悪品だろう。マリファナに混ぜている。阿片はかなり甘酸っぱい匂いがするので、すぐそれとわかってしまう。だからめったに使うことはないはずだった。

目が完全にイってしまったオーストラリア女の一人は、まったく動かなくなっていた。そうなるただのモノでしかない。三人の男たちは、残りの一人に標的を定めた。回し始めたのだ。彼女は事態が予想外の展開になって大いに慌てたが、抵抗できないほど足腰が萎えていた。もう後は哀願とも悲鳴ともつかない声をあげながら、獣たちの餌になっていった。誰の言葉も、もはや人間の言葉にはなっていなかった。

ニックはというと、はじめのうちファルンで、自分を慰めていた。上目づかいにニックを見る表情は、自然の悪戯（いたずら）を呪っていた。そのうちにファルンを四つん這いにさせて、押し入った。そのときにはファルンは重苦しくうめくだけだったが、逆にニックが身を引くときには切なそうな声が長く尾を引いた。ファルンは鳥肌が立つような悪寒に見舞われながら、うつろに笑っていた。血が出るほど自分の指を噛んで、気の遠くなるような快感に耐えていた。ときどき体が痙攣を起こす。そのたびに、まるで持って生まれた原罪に対する罰を受けているようだった。

臓腑の腐ったような臭気が部屋中に充満し、舌を刺すような臭みに体は激しく燃えていた。ガラスの割れる音、罵声、輪姦が行われているベッドの軋み、音という音のすべてが独立して彼らの鼓膜に襲いかかっていた。

「へへへ、今夜は結構荒れそうだなあ。」

ニックはそんな事を口走ったが、とっくに大荒れだった。そのうちに、呼び鈴が鳴っているのに気がついた。さっきからずっと鳴っていたらしい。ニックはやおらファルンを突き放すと、立ち上がってドアのところに千鳥足で向かった。

「ニック？ わたし。クッキー。・・・」
「なんだ、きみか。早かったな。」

早いか、遅いかも実はわかってなかった。ニックがドアを開けると、目を丸くしているクッキーがいた。なにしろニックも素っ裸。部屋の中では、無秩序なドラッグパーティだ。

「シュガー、まだ来てないぜ。電話で言った通りさ。・・・じき来るよ。カイルアで待ってたって無駄さ。入りなよ。」

ニックは中の様子に言葉を失って身動き一つできずにいるクッキーを引きずり込んだ。

「悪いけど、今、なにその、途中なんでね。・・・そこで待ってるんだな。」

ニックは勝手なもので、さっさとファルンのところに戻った。快感が神経の細い糸を逆流する。視覚は距離を失い、熱を帯びた体が意識を無残に蹂躪していた。クッキーはなるべくその様子を見ることのないように、キッチンへ抜ける隘路に腰掛けた。ただ、目の前で繰り広げられている一部始終に、正直生きた心地がしなかった。火を

嘔きそうなほど紅潮し、冷や汗をかき、意識と記憶がずたずたに引き裂かれていくような嫌悪感を覚えた。

突然、彼女はシュガーのカイルアのアパートの合鍵をキッチンフロアに投げつけ、一目散にニックの家を飛び出した。シュガーがここへ遊びにくるのだ、と思っただけで、もう自分が不潔でしかたなく思えたのだ。

どこをどう走ったのか。ただ、無愛想な街灯を走りすぎるたびに、心の中で叫ぶのだった。

『もう嫌。・・・おしまいだわ。・・・絶対に会うものですか。』

クッキーは息が止まりそうなほど走り続けた。

：：：

シュガーはもとよりニックのパーティに行くつもりなど毛頭なかった。いったんカイルアに戻ると熱いバスにつかりながら長いこと時間を潰した。冷え切った体がひりひりと痛む。硬くなった筋肉が次第にほぐれていく。

食器が片付いていた。留守番電話のメッセージ通り、クッキーが来ていたらしい。しかしだからどうなんだ、という感じだった。ただぼんやりとバスルームに充満する蒸気を胸いっぱい吸い込みながら、まだ船上で繰り広げられているだろう日常という化け物のことを思い浮かべていた。そしていくら突っ張ってみたところで、ぐうの音もでないほど無力な自分を感じていた。

夜半、シュガーはバイクでワイメア・ビーチに出かけた。沖は真っ暗で何も見えない。サンセット・ビーチを過ぎる頃、沖に出ればあの辺が大波の立つキャミーランドだと想像したりした。

潮騒に何の距離感もない。かなり疲れていたのだろう。バイクを停めて、風のない、にじんだ色の夜が時を刻んでいくのをじっと見守っていた。めいっぱい砂浜に伸びた波は投げやりで透明な奇跡を残していく。

すべては錯覚に過ぎなかった。誰も世界の中心にはなれない。ナイト・サーフをしているうちに、自分の中である微妙な変化が起こり始めていることを感じ始めていた。今、この時代に生きていく真実とは、奪っていくことだと、それまでは思っていた。

『自己実現』や、『自我の解放』という言葉が疎ましくてならなかった。自分がわからないのに、なにを実現するのか、なにを解放するのか。それによって、なにのものにもつなが

らないことが、どうしてそんなに尊いことなのか、ずっとその答えが見つからなかった。だから日常という錯覚の中で、なぜああも人間たちは自信を持っていられるのか、不思議でならなかったのだ。

耳元でふと女がささやいた。

「だめよ。神様のことを考えたりしちゃ。」

ジョイスが背中越しにシュガーを覗き込んでいた。

「どうして、ここだとわかった？」

「お店に一人で残ってたら、バイクの音が聞こえたから。なんとなくシュガーじゃないかなって思ったの。」

「神様だって？」

「考えたりしてもだめってこと。啓示があるだけなんだから。」

「手を差し伸べてくれるのは？」

「悪霊。」

ジョイスも隣に腰を下ろした。

「自分が孤独だって思ってるんでしょう？」

「ご明察。」

「感傷的ねえ。」

「そう、とつてもね。」

「自業自得ね。生命をなにかに役立てようとするからよ。」

「アートといっしょだな。役立てようとしたら、芸術じゃなくなる。」

「そうよ。さもなきゃ、詩はただのスローガンになってしまうし、絵画はただのポスターになっちゃうわ。」

「どうしろってんだ？」

「バランスよ。」

「どういう意味さ？」

「それがそうあるべき姿であるっていうこと。」

「禅問答みたいだな。俺の肉体はまだ夢を見てる。」

「せいぜい、田園詩ね。」

自分の生き方を批判されるのには、シュガーは十分すぎるほど慣れていた。

「忘れないことね。不安なとき、もうほとんどの問題は解決していることが多いってこと。気がつかないだけよ。」

そうだった。空の青さに見とれているうちに、その広さのことをすっかり忘れてしまうことがある。目の前にあるハイビスカスの原色がこの手に欲しくて、それが翌年も、またその翌年も、繰り返し生まれてくることを信じるできないのだった。人間らしく生きることにとらわれて、人間であることを忘れてしまう。ジョイスはそれを現代人の病だと言う。

シュガーは、議論になるのが怖かった。

「知的な言葉遊びにはもう飽きたよ。溢れる知性。言葉の無駄遣いだ。俺たちは真理で生きていけるほど単純でも強くもない。どうしても見つからないのは動機だ。絶望にも行き着かない無力感は、考えるだけでぞっとする。エディのことだけど、あの日からずっと気になってた。死にたがってたとしか思えない。俺にはとても持ち合わせないものだ。俺には死の動機が明らかでない。逆に言えば、なにをして生きていったらいいのかわからない。馬鹿みたいだろう。欲求だけが膨れ上がってくるんだ。」

ジョイスは、じっと聞いていた。そして改まったように重い口を開いた。

「エディに勝ちたい？」

「無理だよ。狂ってる。ただいっしょにヒートはしてみたい。」

「自信がないんでしょう？」

「あるもんか。プロだってやらないよ、あんなサーフィン。」

「プロだからやらないのよ。それで生きているから。生命を失っては元も子もないわ。」

「それはそうだ。」

「自信が欲しい？」

「・・・・・・・・」

シュガーは静かにうなずいた。

ジョイスは『来て』と促すように立ち上がった。そして父親のやっているサーフ・ショップ『バイパス』へとシュガーを誘(いざな)った。

相当ガタのきている木造のショップは、それでも結構清潔だった。ジョイスは電気もつけずに、修理台からサーフ・ボードを片付けた。

締め切った部屋の中は木造特有の甘いにおいと、塗料やセメントの機械的な臭気が混在していた。空気は澱んだように湿っていた。

ジョイスはなんのためらいもなくシュガーの首に両手を回してキスをした。長い・・・一度のキスがやたら長く感じられた。熱い舌が伝わってくる。形のよい唇がシュガーの胸元に滑っていく。やがて、蒼白い月の光に無駄のない中国人女の体が浮かび上がった。冷たくて硬い修理台の上で、ジョイスの腰や肩が揺れるたびに、その顔は美しく歪んだ。のけぞる体から弾むような息と汗が吹き出してくる。まるで、今しがた海から揚げたばかりの真珠のようだ。シュガーは押し上げた彼女の両手を握りしめていた。夜はしなやかに過ぎていった。・・・・・・・・

店先のテラスに籐の長椅子があった。二人は裸のまま横になり、波の音を聞いていた。椰子の葉が月の光で濃い影を落としていた。それが風にそよぐたびに、カナロアの独り言が聞こえてくる。女の静かな呼吸が心地よく胸に伝わってくる。

「自信、ついた？」

「なんだ、起きてたのか？」

ジョイスはふふふと鼻で笑った。

「ねえ、自信ついた？」

ジョイスは意地悪そうにもう一度聞いた。

「ひどい女だ。」

「そうかもね。」

不思議な夜。いつになく女と終わった後も体を離したくなかった。

「ねえ、The Lunar Effect っていう本、読んだ？」

「ハワイに来てから一冊の本も読んでない、」

「本を読まない人は嫌い。」

「また読むようにする。」

「そうね。アーノルド・リーバーっていう人が書いたの。不思議な月の力のことがたくさん書かれてる。ロサンジェルスで生きた牡蠣（かき）を採取して、ニューヨークの研究室の水槽で飼ったんですって。牡蠣って満潮時に貝が開く習性があるらしいわ。プランクトンを食べるためにね。それがニューヨークに持ち帰った当初は、まだロサンジェルス時間の満潮時に開いてたんですって。ところが、しばらくするとニューヨーク時間の満潮時に

開くようになった。水槽の中には満潮も干潮もないわ。なんで牡蠣にその違いがわかったのかしら？」

「月の光でそれを感じ取ったっていうのかい？」

「ううん。月の引力らしいわ。微妙な引力の差が、牡蠣にそこがロサンジェルスではなくて、ニューヨークだってことを教えたのよ。」

「その話が俺たちになにか関係あるのかい？」

「べつに。」

ジョイスの優しい微笑みが見えた。柔らかい海の湿気が新しい生命を自分の体に与えていくようだった。

「寒い。……」

ジョイスがささやいた。シュガーは重なりあうように彼女の体を抱き寄せた。……

……

目がくらみそうな日差しでシュガーは目覚めた。タオルケットを巻いただけでテラスの長椅子に寝ていたのだ。ジョイスが冷たいパンチを大きな透明なマグに入れて来た。おはようのキスにパンチの味がする。

「パパがもうすぐ来るわ。なにか着たら。」

シュガーは慌てて起き上がり、部屋の中へ衣類を取りに入った。煙草が美味しい。ジョイスに向けると、『喫わない。』と首を振った。椰子の葉が大きくシヨップに覆いかぶさり、かえって差し込む太陽の光があたりに飛び散るようだった。砂が湿っている。

「なんとも思っていないの？」

シュガーは野暮だと思いながらもう一度聞いた。ジョイスは手すりに寄りかかりながら、パンチ・グラスを口元にあててにっこり笑うだけだった。

「聖母マリアってどこか。」

ジョイスは小悪魔のように目くばせした。

「さもなきや魔女、だな。」

「あなた次第ね。」

ジョイスは愉快そうだった。

「あのエディって、何者なんだ？」

「言えないわ。」

「君のボーイフレンドだろ？」

「どうかしら。」

「そうだって言ったじゃない。」

「なら、そうなんだわ。」

「裏がありそうだ。」

「探偵でも雇う？」

ジョイスは小気味よさそうに笑った。

「冗談を言ってるんじゃない。あの男はいったい何者なんだ？」

ジョイスはグラスの中で揺れる紅いパンチを見つめながらつぶやいた。

「脱走兵。・・・」

ジョイスは続けた。

「湾岸戦争で動員がかかったとたんに逃げ出した。もと海兵。おまけに逃げるとき誤って人を殺してる。それから転々として、ここまで来た。・・・臆病者。」

「俺だって嫌だよ、戦争なんか。」

「でも、その臆病者が今じゃ死のうとしてる？」

「人を間違っって殺したことを悔いてか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ジョイスは首を横に振った。

「なぜだ。」

聞きたいのはそれだった。

「さあ・・・・・・・・」

「知ってるんだろう？」

「たぶんね。」

「じらすなよ。」

「本人に直接聞いてみたら？」

シュガーはもうそれ以上は聞かなかった。爽やかな潮風がそれをさえぎったのだ。ラジオが流れていた。それぞれのビーチの波を何フィートか伝えていた。椰子の並木の向こうに六フィートの波がたっている。BGMがくすぐったい。ジョイスが海のほうを見ながらつぶやいた。

「Good sets, today (今日は波がいいわ)・・・・・・・・Lot a juice. (たくさん寄せてる)・・・・・・・・」

アマの大会は週末に迫っていた。

シュガーは午前中一杯ジョイスと波に乗ってから、昼過ぎにカイルアへ戻った。留守番電話には珍しくクッキーのメッセージが入ってなかった。

『ヘソを曲げたかな。』

シュガーは一つだけ入っていたメッセージを再生した。ナタリーからだった。朝方、電話をしてきたらしい。

『It' s me (わたし)、・・・ナタリー。・・・ゆうべはずいぶんとご挨拶だったわね。どうしたの？ 気に入らなかったの？・・・わたしは怒ってないわ。あなたは好きなようにしていいの。でもただ一つだけ。・・・』

テープにはやや間があった。次の一言が言い出せなかったようだ。

『・・・・・・・・何でもないわ。・・・帰ったら電話してね。忘れないで。』

シュガーはもう嫌になっていた。

『言うことをきかない飼い犬（ペット）が、かえって可愛いわつだ。』

ベッドにひっくりかえったシュガーは、やたらクッキーのことが気になり始めていた。冷房をかけずにいたので、じっとり汗ばんでいたが、一向に気にならなかった。その夜、シュガーはニックとダウンタウンの『ペペ』でトルティージャに食らいついていた。口いっぱいにしたニックが喋りまくっていた。

「で？・・・ジョイスはどうだった？ She wen give you da big lomi? (たつぷりもみもみしてくれたか) あん？」

シュガーはその言い方に眉をひそめた。ニックは構わず続けた。

「なんだよ、その顔。彼女は誰とだつて寝るのさ。」

シュガーはげんなりした。

「I owe you money or what? (なんか、文句あつか)」

ニックはからんだ。

「いやべつに。」

「メイのやつ、とうとう金が底を尽きやがった。」

「車はどうした？」

「買ってくれたよ。」

「パパにカネを送ってもらったのか？」

「そういうこと。シボレー・カマロの新車だぜ。」

「どうせなら、フェラーリにしてもらえば良かったのに。」

シュガーは冷やかに言った。

「あとが困るじゃないか。パーツ代でこっちが干上がっちゃうからさ。まあ、カマロで上等だよ。」

「どうするんだ彼女？ 用済みかい。」

「さあね。泊めてくれってしつこいんだ。」

「ホテル代もないのか。」

「そうらしい。」

「パパに送ってもらえばいい。」

「喧嘩したらしい。本当は東京に婚約者もいるみたいだしな。複雑だよ。」

「それでおまえは機嫌が悪いんだな。」

「いろいろとね。そうそう、クッキーが来たぜ。」

「おまえのタンタラスの家にか？」

「ああ。シュガーを探してるって電話があったからさ。カイルアのアパートでおまえを待っていたらしい。俺はてっきりおまえが家へ来るものだと思ったから、クッキーを呼んだんだ。そしたら、彼女、パーティ見てヒステリーみたいに飛び出していっちゃったよ。Maybe she was in a really good mood (たぶん生理だったんじゃないかねの?) 生娘でもあるまいに。大げさなことだぜ。」

シュガーはため息をついた。

「あいつは生娘だよ。」

するとニックは思い切り吹き出した。

「冗談じゃねえ。ガキが一人いるじゃんかよ。Undesirable kid (望まれざる子) がさ。」

「？」

シュガーは目が点になった。ニックは指についたケチャップをナプキンでふき取りながら上目づかいにシュガーを見た。

「なんだ、知らなかったのか。 You going pressure out? (がっかりした?)」

シュガーは気落ちはしなかったが、意外だった。

「ハイ・スクールのときにさ、引っかかったんだ。」

「どこのやつ？」

「ロング・ビーチから来たサーファー連中らしい。」

「おまえみたいな連中か。」

「人聞き悪いね。俺は孕ませるようなヘマはしない。あいつの姉貴とセットでひっかかったんだ。あげくの果てに二人ともいっぺんに、五、六人で輪姦(まわ)されたらしい。姉

貴のほうは妊娠しないで済んだけどな。恥ずかしくて黙ってたんだな。そしたらクッキーの腹がデカくなっちゃったってわけだ。あいつ、よく言ってるぜ。シュガーと一緒にいなくてもいいんだ、シュガーの役に立てたら、自分はそれでハッピーなんだってさ。けなげじゃねえか、なあ。よお、おまえ。ひどい顔してるぞ。She wop your jow. (いっぱい食わされたな。)」

シュガーはもうニックを相手にしていなかった。ただ急に食欲がなくなってしまったのだ。ニックは思い出したように、クッキーが投げ捨てていったカイルアのアパートの鍵をテーブルの上にジャラリとおいた。シュガーは黙ってそれを手にとると立ち上がった。

「もう行くのか？」

「おまえは仕事だろ？」

「いいねえ、困われ者は。」

「もう違う。」

「へえ？」

シュガーは塞がるような思いで店を出た。がさついたダウンタウン。ふだんは食欲をそそるレストランから流れてくる匂いも、今のシュガーには思わず吐きたくなるようなものだった。はやくバイクの排気煙を吸い込みたかったくらいだ。なにもかも止めてしまいたくなるような衝動がこみ上げてきた。色気のないダウンタウンの明かりがことさら安っぽい。

バイクのかかりが、やけに悪い夜だった。

日一日と大会は近づいてきた。クッキーからはいっこうに連絡がなかった。

噂が耳に入るようになった。それまでどうでもいいことだったが、妙に噂に注意がいくのだ。クッキーの姉のことだったが、どうやら今はワイキキで体を売っているらしい。皮肉なものだった。幸いにも子供のできなかつた姉のほうがその後の成り行きは哀しいものがある。一番のお得意は日本人。やはり、日本の仲介業者がいて、なかには修学旅行の高校生や中学生まで客にとっているらしい。そういう連中が、ワンショット二万円で褐色の花を摘み取っていく。

シュガーは思い切ってアロハ・スタジアムのスワップ・ミートへ出かけた。

小物、アクセサリ、家具、Tシャツ、サーフ・ボード、アンティークまでありとあらゆるものが、青空市場で売られている。以前一度見かけたものがまだそこにあるか、シュガーにも自信はなかった。別に時間に追われているわけではなかったが、気ばかりが急いでいた。水曜の午前中。品数は多く、人の出も比較的少ないはずだった。ところがシュガー

としたことが、アロハ・スタジアムの方は土日しか開いてないのをすっかり忘れていた。水曜も開いてるのはカム・ドライヴインのほうだった。この無駄足は、まるでとんでもない取り返しのないような気分にした。おまけにやけに熱い日で、体中から汗がしたり落ちるのだ。シュガーはいったんヘルメットを脱ぎ、額にバンダナを巻いた。気を取り直して、けっきょくアラモアナ・ショッピングセンターに飛び込んだ。そしてその足でカネオへにバイクを走らせるのだった。

山あいにならばとトタン屋根や安物の板を寄せ集めたようなバラックが点在している。一番奥まったところにはクリーム色の塗料のはげた安普請が建っている。凹凸のあるアスファルトに注意しながら、シュガーは土の露出した庭先へバイクを乗り入れた。静けさの中でホーンが鳴り響いた。

連音のホーンはすぐシュガーのバイクだとわかるはずだ。隣の家から中年の太ったポリネシアンの女が顔をのぞかせた。真っ黒な子供たちが遠巻きにこの外人の様子をうかがっていた。カーテンが少し揺れたが、クッキーの顔は見えなかった。

シュガーはエンジンを切ったまま待っていた。こんなに長い時間、女を待ったことがない。たった数分が何時間にも思えるほどだった。日差しがちょうど真上にさしかかる。ヘルメットを外すと、堰を切ったように汗が首筋に流れ落ちた。バンダナもまるで効果がなかった。

雑然とした低木がむさくるしい。風も止んでいた。鶏や犬の鳴き声がそらぞらしい。部落の連中が一人、また一人と小口や小屋の陰からシュガーをうかがい始めた。視線が痛い。とりわけこの日はそうだった。待ち続けるということをとうの昔に忘れていた男にとって、それは苦痛以外のなにものでもなかった。それでも待たなければいけない。むしろ待ちたかったというほうが正しい。

やがて木戸が開いて、クッキーが出てきた。洗いざらしのパオレを着た彼女は、投げやりな感じのまま近寄ってきた。責めるでもなく、何かを期待するでもなく、むしろ力のない表情が切なかった。

シュガーはさっきアラモアナで買い求めた銀製のイルカのペンダント・ヘッドをジーンズのポケットから取り出した。そして言いにくそうに口を開いた。

「これ・・・今日、誕生日だったろ・・・」

クッキーはそれを受け取ると、かすかに唇を動かした。透き通るようなまなざしが返ってきた。

シュガーはまだ口ごもっていた。言葉が見つからない。エンジンをかけ、バイクを反転させた。ヘルメットをかぶりなおすと、シュガーは思い出したようにアパートの合鍵をポンとクッキーに放った。やっとの思いで彼は言葉を見つけた。

「See you there (あとでまた、カイルアで。)・・・Both of you (二人とも)・・・」

クッキーの大きな瞳がきらりと輝いた。

「二人とも？」

「Ya (そう)・・・Both of you (きみたち二人とも)・・・」

シュガーはぎこちなく苦笑いした。クッキーは初めて白い歯を見せた。

∴∴∴

「お金がもうないの。」

メイは開き直ったようにあっさり言って長い髪を掻きあげた。ホテル・サーフライダーのサンデッキはプールの照り返しを受けて眩しかった。ニックは寝不足の顔を指で押さえて投げやりな態度をとった。

「それで、どうするんだい？」

「バニアンにはもういられないわ。あなたのお家に泊めて、お願い。」

「女といっしょに棲みたくない。」

「わたしたち結婚するのよ。」

「よく考えないとね。」

「いまさら、なにを考えるっていうの？」

メイのなじるような目つきとは裏腹に、その声は悲しい響きをしていた。ニックはペリエで喉を潤すと肩肘をついて言った。

「パパにおカネ、また送ってもらったら？」

「怒ってるわ。いい加減にしろって。」

「そうだろうね。」

「正直言うとね、あなたのこと、自信なくなってきたの。シュガーが言ってたわ。あなたが男と暮らしてるって。」

ニックはやれやれといった表情になった。

「迷惑なのはわかってるけど、お家に泊めて。土曜日には東京に帰るから。」

「また来てくれる？」

「そういうのって、ずるい。」

「愛してるんだ。」

「やめて。」

メイは目を潤ませた。まさに悲劇のヒロインになりきっていた。ニックは真面目なまなざしで彼女を見つめた。テーブル・パラソル越しにニックの手がメイの手をひっきりと握った。稀代の詐欺師とでもいおうか、それともここまでおめでたい女の馬鹿さ加減とでもいおうか。メイの濃く美しい眉、薄い唇、大きな切れ長の瞳。ほどよく肉のついた鼻梁。．．．．ニックはこれで終わるのも惜しいとは思いながら、けっきょくは金ヅルでない以上、利用価値もないと割り切るよりしかたがなかった。ただ最後にもう一度引っ張って、日本からカネを貢がせる試みはやってみる価値がある。何もここで敢えて自分から関係を断つことはない。

「今から家にくる？」

メイの目からみるみる涙が溢れ出た。

「いいの？」

「ほかならない君だもの．．．．ね。」

ニックはウィンクしてみせた。

メイはもうニックのためなら、どうなってもいいとさえ思うようになっていた。二人は一度パニアンに寄って、チェックアウトした。高価なバッグやスーツケースをニックのカマロに積み込んだ。あの塗料の剥げた Mokmobile は安値でサーフ仲間に売りつけた。メイの身勝手な夢や幸せの代償がこのカマロだった。

車を運転しながら、ニックが言った。

「このカマロも、君の好意とは言え、手放さなければいけないかも知れないな。残念だよ。」

「どうして？」

まだ目を赤く泣きはらしていたメイが驚いた。声もうわずったままだった。

「俺のどうしようもない家族のことは言っただろ？」

「お父さんと弟でしょ？」

「そう。縁を切るにはこれしかない。カネで解決する。きみといっしょになるなら、彼らは切るしかないよ。きみの負担が大きすぎるからね。きみだけの俺になりたいんだ。このへんできちりカタをつけておきたい機会だよ。」

メイはもう本気になっていた。

ニックには、父親も弟もないことを、メイは知らない。

「わたし、なんとかする。東京に帰ったら必ずおカネつくるわ。」

思いつめた女のまなざしは、自分が男の役に立っているということに異常な興奮を覚えていた。

「今までみたいにきみを頼ってばかりじゃいけないな。」

メイは男の肩にもたれた。

「いいの。なんでも言って。わたし、力になりたいの。……」

ニックは内心、シラケていた。こんなものか、と思っていた。

信号が赤のとき、ニックはメイを抱き寄せて、濃厚なキスをした。メイは力が抜けていくような幸福感で胸がいっぱいだった。

タンタラスの丘へ向かう道に入ると、ニックの家はもうすぐだった。あのクッキーがすっ飛んでしまったあのパーティの家だ。

ニックはさっさと荷物を抱え、家のドアを開けた。女房気取りでついてきたメイの目の前に現れたのは、シャワーのあとタオルを巻いただけのファルンだった。メイは男だとわか

っていながら、あまりにも清楚な美貌に一瞬たじろいだ。はしゃぎながら飛び出してきたファルンの顔からも、笑みが消えた。

ニックの脳裏にはいくたびか迎えたファルンとの凄絶な夜が蘇ってくる。『わたしを女にしてくれる？』 ファルンはよくそう言った。

ニックはふと我に返った。そのファルンが冷たい目で二人を見つめていた。そしてやがてため息をついた。

「もう・・・わたしは用なしね。・・・」

ニックは弁解しなかった。

ファルンは黙って服を引っかけて、手荷物をまとめ、奥の部屋から出てきた。二人を通りすぎるとき、ニックの顔を間近に見すえてささやいた。

「あんたって、不潔。」

ちらっとメイを見たファルンのきれいな顔立ちは、もう男のそれに戻っていた。

：：：

大会の前日、シュガーは最終調整をしにパイプ・ビーチへ出かけた。波高は二十フィート。コンディションは絶好調だった。この調子で翌日は今日みたいなビッグウェイブが立つことを祈るばかりだった。

ジョイスと会う約束をしていたが、人の出が多くて紛れてしまった。

昼ごろ、シュガーはワイメア・ビーチの『パライソ』を訪れた。ジョイスの父親が一人でボードにワックスをかけていた。

「ジョイスは？」

シュガーはぶっきらぼうに父親に声をかけた。父親は丸眼鏡越しにシュガーを見上げると、また何事もなかったように作業を続けた。

「さて、どこ行ったものか。」

「エディのどこだね？」

老人はびくっとして作業の手を止めた。

「なあんだ・・・デートに行っちゃったのか。」

シュガーはがっかりして椅子に腰を下ろした。煙草に火をつけて、今日初めての一服を肺の中に充満させた。

老人は再びワックスをかけながら、独り言のように言った。

「明日の大会は途中で中止になる・・・・」

「なんでさ？ エディも波が荒いって言ってたな。」

「あの男にはわかるんだよ。」

「どうして？」

「本能さ。」

「大会にはエディも出るみたいだよ。そんな口ぶりだったけどな。」

「そんなはずはない。」

老人はボードをひっくり返した。

「あれは・・・あんた、知ってるだろ？ あの男は表を大っぴらに歩けないんだ。」

「脱走兵だからな。おまけに人殺しときてる。」

シュガーは煙を気持ち悪さそうに吐き出した。

「もし大会に出るっていうのが本当なら、・・・・もう終わりが近いんだろう。自分でわかってるのさ。波が高いっていうのはそういうことだ。」

「なにが終わるんだ？」

「生命がさ・・・・モルヒネでこのところずっと痛みを抑えているが、もう末期だ。」

「病気なのか？」

「白血病さ・・・・癌だな、つまり。」

シュガーは長くなった煙草の灰が落ちるのも気づかなかった。

老人はひときわ力を込めてワックスをかけ始めた。

「あの男が明日海に入ったら、二度と帰ってこんだろうよ。好きなサーフィンで死にたいんだろうな。灰色の軍病院よりはな、・・・・それでいいのさ。」

シュガーは声もなくただ黙りこんでいた。どうしようもなく沈んでいく。ワックスをかける乾いた音だけが飾り気のないショップの中に響いていた。・・・

シュガーは『バイパス』を出たあと、明日のエントリー・リストを入手した。自分は八番目に載っていたが、エディという名はどこにも見当たらなかった。

帰りに、ビーチでニックに出くわした。ニックはこれから海に入るところだった。メイは、数日間タンタラスの家で、ニックに愛された後、後ろ髪を引かれるような思いで帰国したらしい。その後、さっそくファルンを呼び戻し、よりを戻したところなどはさすが稀代の詐欺師さながらだ。

ファルンは、やっぱり自分のことを愛してくれているんだと、以前より甲斐甲斐しくニックに尽くすありさま。

「よう・・・クッキーが、子供までおまえのアパートに連れて行けないってずいぶん悩んでたぜ。大変だな、いっぺんに家族をしょいこんじまって。」

「馬鹿言え。いっしょに棲もうなんて言っちゃいない。遊びにおいで、っていう意味でいったんだ。」

「へへへ。あっちはそうは思っていないよ。ところで、いっしょになるなら、サーフィンだけは止めて欲しいって、彼女言ってたぜ。おまえに言えないことを、全部こっちに言ってくる。迷惑きわまりない。」

「サーファーには、悪い思い出があるからさ。」

「違うよ。本当に心配してるんだ。この前もプロが一人、ノースの波に巻かれて、珊瑚礁の裂け目に頭から突っ込んでさ、お陀仏になったろう？」

「止めるかもしれない。」

「なんだって？」

「明日でね。」

「ほんとにわからない奴だな。」

狐につままれたような顔をしているニックをおいて、シュガーはワイメアを後にした。

カイルアのアパートに戻ると、枕の上にクッキーからの手紙が置いてあった。さっきまで来ていたらしい。中には一葉の写真も同封されていた。頬杖をついて長くウェイブした黒髪を肩まで垂らした彼女が、いたずらっぽくシュガーを見つめている。シュガーはこの一葉が気に入った。子供の写真は入っていなかった。

手紙の方にはこう書かれていた。

Oh, thanks God! You' re back to me, again. I don' t know how to express my feelings how happy I am to have you back. I cannot believe it, but it happened. I never wish anymore in my life but you whom I really love most. I' ll always be with you, even there' s a distance that keeps us apart. My love will be forever no matter how long we have to wait. I miss the times of your touch, your kisses, your embrace, your whispers to my ears, the way you tickle me , the way you stare at me and most of all, the words you said “Both of you” . . . I wish you a good luck tomorrow. And please be back as usual. I' ll wait for you here. Remember you' re not alone.

Love,

Cookie

シュガーには精神の高揚はなかった。スタンダードが言ったような愛の結晶作用は微塵もなかった。優しい感情とは裏腹に、それは不思議なことだった。クッキーと自分とのあいだに横たわる空間を埋めるさまざまな思いは山ほどあったが、かえって以前よりずっと彼女を近くに感じていたのは確かだった。愛というような一言で片付けられるほど、現実はなまやさしいものではなかった。言葉を捜しあぐねている自分のわだかまりが、クッキーに届くだろうか？ それとも彼女のほうがもっとずっと先へ行ってしまっているのかもしれない。シュガーは自分の中で大きく変わろうとしているものを手探りでつかもうとしていた。

:::

最後の瞬間はいつも無限への扉を開く。

その日、パイプには憲兵と州警察がうんざりするほど出ていた。私服が多かったが、シュガーには人目でわかった。誰ともなく噂が出回っていたのだろう。みな、一人の男を待ち構えているのだ。

波はエディの予言通り大荒れで、のきなみ三十フィートはあった。それでも大会は開始され、波が次第に騰勢を強める中で、シュガーは四十フィートの巨大なチューブをパーフェクトにこなして一躍ヒーローになった。しかし、その後三人目くらいになると、波が安易に散り始めたため、いったん大会は中断された。上空の雲は真っ黒となり、海は濃い灰色に凄んでいた。

ニックが言った。

「これじゃあどうしようもない。エントリーしないでよかったよ。殺されちまう。」

シュガーはほとんど聞いてなかった。熱いコーヒーを飲みながら波の様子を見ていた。ビーチの四方に目をくぼってエディの姿を捜し求めた。しかし一向にそれらしい男は現れなかった。ジョイスの姿も見えない。

「きっと来るさ。・・・」

シュガーは低い声でつぶやいた。

「誰がだ？」

「・・・・・・・・」

まったく水平線が見えなくなった。波はとうに四十フィートを超えていた。参集者の中にはもうあきらめて振り返り支度をする者すらでてきた。わずかに雨が降り始め、これが合図のようにどっと人垣が崩れた。大会中止のアナウンスがビーチに流れた。

そのとき、人の群れをかきわけるように赤いボードが一直線に海に向けて走りぬけていった。あたりの憲兵や州警察が大騒ぎで彼を追ったが、赤いボードはたちまちカレントに乗ってしまった。やにわにシュガーはコーヒー・カップを投げ捨ててボードをつかんだ。そして一目散に砂浜を抜けて海へ飛び込んだ。ニックが制止する暇もなかった。

シュガーは十二ヤードほど先にパドリングしているエディに迫った。一発目の砕ける波をエディはタイミングよくドルフィン・スルーしていった。シュガーはもろにかぶりそうになったが、からくも巻かれずに済んだ。そのかわり二十ヤードは離された。

ビーチでは捕り物にならず、制服たちが立ち往生してがなりたてていた。観衆もこの騒ぎに興奮して、一帯は歓声と野次に包まれていた。

二発目の真っ黒な壁をシュガーは必死でスルーした。なんとかエディから十ヤードの距離にたどりついた。二人は一番安定したポイントに来ていた。

エディはちらっとこちらを振り返り、シュガーに気がつくまで笑いながら、親指を突き立ててみせた。真っ白な歯が印象的だ。これ以上透明な笑顔をシュガーは今まで見たことがないと思った。

巨大なうねりがボードを持ち上げる。たらふく潮水を飲まされたシュガーは息をつくのが

やっとだった。

エディがボードを反転させようとしていた。シュガーはそれにならった。するとあっというまに水の壁は二人を高見に押し上げていった。シュガーは笑いが止まらないほど興奮していた。エディの叫ぶ声が聞こえた。

「Good luck Asshole!」

エディも波の頂点に立って

笑っていた。シュガーは大声で怒鳴った。

「Ya! You, too! Mother-fucker!」

気が遠くなるような一瞬の出来事だった。シュガーの声が届いたかどうかもわからない。エディを見たのはそれが最後となったからだ。

波は加速度を増していく。まるで摩天楼が倒れこむように、重力の中心点へ体を引きずっていく。シュガーが、ボードに手ごたえがなくなったと思った途端、あっというまに強烈な瀑布の中に叩き落とされた。あとは真っ白な泡が世界中に広がり、水の途方もない圧力の中できりもみしながら押し流されていく。二個ほど珊瑚礁か岩礁に接触した。あとは痛みもなくただ息が苦しいだけだった。そして何も覚えていなかった。

気がついたときには、シュガーは浅瀬で五、六人の男たちに介抱されていた。ビーチで横になったシュガーは足や背中から出血していたが、信じられないくらいに傷は浅かった。そのかわり、ウェットスーツはもう使いものにならないくらい裂けまくっていた。何度も水を吐いたシュガーはもう体に何の力も残っていないことを思い知った。ニックがホット・チョコレートを持ってきた。

「脅かすなよ、シュガー。 これはもう立派な犯罪だぜ。」

心なしか、あのニックの目がうるんでいた。

シュガーはガタガタ震える両手でカップを支えるとニックにたずねた。

「もう一人は？」

「おまえがドロップした波を乗り切ったあと、もう一本、新手的デカイのを取りに行ったよ。」

「さすがだね。」

「しかし二度目には運が尽きたらしい。四十か、五十フィート。いや、わからんくらいだ。これは記録だぜ。He got drilled（やっこさん、巻かれちゃったよ）・・・今頃は jam up（めちゃくちゃになってる）だろうよ。」

「死体は上がったのかい？」

「無理だよ。この波だ。」

制服たちは無線で交信しながらエディの遺体を搜索していた。どこかに打ち上げられるのは時間の問題だった。シュガーはもう何も考えることができなかった。

午後、手当てを受けた後、シュガーは取り調べを受けた。なにも関係がないとわかるとすぐに解放された。

シュガーは少し休むと、バイクでワイメアの『バイパス』に寄ってみた。表のガラス戸がロックされ、『Closed』のタグがかかっていた。ジョイスの名を呼びながら、シュガーは裏へ回った。木戸が開いていた。シュガーはショップに入ってみたが、父親もジョイスもそこにはいなかった。ただ機材が置いてある小さな収納部屋に、あの赤いボードが立てかけてあった。傷を相当受けていたものの、まだ十分しっかりしていた。そしてワックスがたくさんの水を弾いていた。今しがたここに置かれたに違いない。いつの間にこんなものを抱えて戻ってきていたのだろうか？ シュガーは手でボードに触れているうちに、わけもなく笑いだしてしまった。ほっとした気持ちと、無性に爽快な感じがめちゃくちゃに混じりあって、声をあげて笑い出した。もちろん残された体力でエディがどこまで逃げ切れるのか、誰にもわかりはしない。ただこんなところで制服に捕まって、灰色の軍病院で終わる男ではない。海が待っている。死の淵からひとかけらの生命を掠め盗ろうとしている男の姿が、シュガーの心を離さなかった。

『バイパス』までシュガーを捜しにきたニックが、いっしょにランチをとろうと言ったが、シュガーは断った。

「クッキーが待ってる。・・・彼女のことだ。食事もしないで待ってるよ。」

ニックは首をすくめた。

「ご馳走さまだね。」

ノース・ショアを後にしたシュガーはバイクで北海岸のカム・ハイウェイをカイルアに向かった。午前中の悪天候がまるでウソのように晴れ間が広がってきた。濡れたアスファル

トは生まれたばかりの日差しに蒸気を立てていた。遠くには虹が見える。カイルアのあたりだ。

『そう言えば、・・・・・締め切りまであと一ヶ月だったな。』

我ながら、唐突に卒論のことが思い出された。『徹夜が続きそうだ。』と、不思議なくらい素直に思っていた。

ちぎれた雲に琥珀色をした光の粒子が染まっていく。それが延々と続く椰子の並木に音もなく結晶していく。シュガーはその虹の様子を、クッキーにも見せてやりたかった。

サテンの靴が履けたら

香港。

気まぐれな亜熱帯。重たそうに息をする湿気。浮気な驟雨（スコール）。

あれから一年八ヶ月。わたしが女一人で香港に来てからもうそれくらい経つ。鬱陶しい雨季がまたやって来る。

無駄。徒労。苛立ち。不安。そう、不安という言葉が一番ぴったりする。とりとめもない不安は、やがて漠然とした危機感に変わっていく。

東京では女性雑誌に、『あなたも香港で働きませんか』的な記事が日を追って多くなっている。エキゾチックな海外。女が曲がりなりにも自立して生きていく。そう書きたてられ、紙面に紹介されている女の子たちの実例や紹介記事をめくっていくうちに、わたしの心は痛々しく叫んでいる。

『そうじゃないの。わたしは違うの。』

本当にそんなものじゃない。こんなに疲れてしまったわたしを、そんな雑誌しか見たことのない人たちの一体誰が想像できるだろう。

わたしは愛していた。愛されたかった。結婚もしたかった。それが実は、男を追いかけてここまで来たわずかな理由。

彼の名はリキ。同じ銀行で為替のディーラーだった。同じ部署で総合職のわたしとは競争相手でもあった。あのときわたしは二十八。彼はちょうど三十。二人とも独身。総合職の女は近寄りたないと、最初会ったときに言われた。わたしは自嘲気味に笑った。セミ・ロングの髪。少し痩せた体。色白でちょっと堅そうな顔つき。けして自信はないけれど、悪くはないと思っていた。彼はどちらかという若々しい筋肉質の体。悪戯っぽそうな表情からは、むしろわたしより年齢が下に見えた。

結婚なんて、恋愛なんてと思っていた。選ばれた総合職という気負いがわたしを仕事に追い立てていた。

いつしかわたしは同性の間で、一人意味もなく老いていた。

年齢じゃない。とも思っていたが空しかった。リキが為替の部署に入ってきてから、若いOLたちは色めきたった。

わたしはその実、彼にどんなに惹かれていても、なすすべもなくただそれを見送っていた。ところがリキが選んだのはこのわたし。もう有頂天だった。堰（せき）を切ったようにわたしはそれに応えた。

『君は大人の女だから。』

わたしにとってこれ以上の賛辞はなかった。知的であること。自立していること。仕事にも張り合いが一段と増した。週末を含めて会わない日など一日もなかった。わたしは夢中で力を愛した。三十前の微妙な時期。まるで青春を取り戻そうとするかのように。貪るように。

そこへ襲ったリキの香港転勤の辞令。目の前が真っ暗になりそうだった。そんなわたしに彼の言葉は生命を与えてくれた。

『君も一緒に来れたらいいのに。女の人の仕事って向こうにはないのかな。』

半年後、わたしは銀行を辞めて旅行会社に転職した。香港駐在の女性を求人していたのだ。はやる気持ちをそのままに、すぐにリキの後を追った。驚かせようと思い、事前には連絡しなかった。

あてがわれたこのアパートに入ってから彼に電話した。リキの声は驚きの中にも当惑の色を滲ませていた。体中の血が唞唞に引いていくのが自分でもわかった。

『君は大人の女だと思っていたんだけど。』

その一言が冷たく響く。迷惑なの？ 大人の女って、男にそんなに都合のいい女のことを言うの？ わたしはすんでのところ、『わたしはあなたのなんなの？』といいたくなるのを胸の奥に飲み込んだ。

香港島にある灣仔（ワンチャイ）の繁華街から丘の中腹へ上がったところにわたしのアパートがある。

ケネディ・ロード。ワン・ルーム。木の床。真っ白な壁。目も眩む摩天楼を通して、くす

んだエメラルド・グリーンのビクトリア海峡を見下ろせる。

スター・フェリーが行き交い、日曜日にはたくさんのヨットが揺れる。細い海峡の向こうには九龍半島の雑踏、時計台、植民地風のペニンシュラ・ホテル、啓徳（カイトク）空港も見える。過密な時間帯には一分に一機が離着陸する。

初めての旅行会社の仕事にも三ヶ月で慣れた。目が回るような忙しさ。日系企業の駐在員を相手に、航空券や宿泊など、ありとあらゆるスケジュールをさばっていく。くたくたになつたわたしを、それでもリキは毎週末には愛した。

一年八ヶ月。出張の多い彼は仕事にかこつけては足が次第に遠のく。ふと振り返ってみると、『愛している』とも、『結婚しよう』とも、リキの口から聞いたことがないのに気づく。わたしは寒々としたものを感じる。失う恋よりも、今まであったものが突然無くなってしまう空白感のほうが恐ろしい。

言葉は声を忘れようとし、欲望だけがかえって募る。

リキの体を求めていると気持ちが休まらなくなる。男のやって来るのが一週間に一回から、二週間に一回になり、やがて一ヶ月に一回。

わたしは前にもまして哀しく、狂おしくリキを求める。それは体がつながってなければ自分に自信が持てなくなったわたしの姿。

自分の女という性にも、恋や愛にも、そして仕事にも、あらゆるものに確信が持てなくなった証拠。

『慕情』を書いたハン・スーインが、一九九七年に中国へ返還される香港をこんな風に表現していた。

『借りものの土地。借りものの時間。』

香港だけじゃない。そこにいるわたしもまるで借りものの世界に不確かに生きている。仕事が惰性になる。自立する女なんかじゃわたしはない。

香港の返還（一九九七年）まで、あと五年。

今夜も男はまるで義務でも果たしたように納得した背中を見せて帰っていく。もう泊まっていってもない。アパートに一人残されたわたしは、声もなくベッドにうづくまる。わたしの行為が切なくなればなるほど、男の気持ちは醒めていく。前触れもなく訪れた孤独。瞳を閉じてはいけない。涙が零れてしまうから。

：：：

レパルス・ベイ（湾）。香港島の南岸。タンガ―（水上生活者）のサンパン（帆船）や、マリーナ・クラブのヨットがひしめくアバディーンを、複雑な海岸線に沿ってさらに南へ。

こじやれた別荘。ヨーロッパの佇まい。やがて大きな入り江が見えてくる。

タクシーでアパートを出たときには、湾仔のあたりは視界が十メートルほどに落ちる濃霧。山を越えてここまできると、薄雲の裂け目から漏れたスポットライトのような陽の光が、海のテーブルに溶け出している。

戦前からあった由緒あるレパルス・ベイ・ホテルはもうない。一部だけ残して、『ヴェランダ』というレストランになっている。

清潔な白い壁。落ち着いた木の匂い。体に染み付いてしまいそうな郷愁。植民地の洋風建築は、本国にあるとき以上にそれがヨーロッパであることを主張する。

テラス越しにレパルス湾が見える。カサブランカ・ファンがゆっくりと大きな円を描く。キッシュやスコーンと一緒に洒落な紅茶のセット。いい気持ち。

奈々。香港で一番仲のいい友達。もう五年もここにいる。彼女の姉が香港人と結婚している。奈々はしばらくやっていたOLを辞めて、姉を頼ってやってきた。

義兄はアパレルの工場を経営している。羽振りがいいらしい。

奈々は最初何もせずフラフラしていたが、そのうちに航空会社の地上サービスを勤める。その後はホテルのセールス・プロモーター。日本語教師。日系企業の秘書。何度も仕事を変える。今は広告代理店。

仕事だけじゃない。男もずいぶん変えた。それもみんな黒人。きまってバンドをやっている。

るミュージシャン。

『闇が体の中を熱く通り過ぎていくような快感』と彼女は言う。彼女もけっこう長身で、男のように骨太の体。くっきりとした目鼻立ち。長い髪をひつつめていることが多いから、年齢以上に見られる。本当はわたしと同年。

「マークと結婚するの？」

反則だった。この種の質問は、男がしたらほとんどセクハラと同じ。でもそれは女にも言える。奈々でなければ、このわたしの意地悪な問いに、『余計なお世話』と腹を立てたろう。既婚者に『子供はまだできないの？』というのもそれに近い危うさがある。女が女にするときは、男以上に露骨な残酷さがある。

「さあ、どうかしら。」

「優しい？」

「日本人よりはね。」

「そのていど？」

奈々はふだんから結婚なんて考えていないとうそぶく。結婚になにも期待していないと。結婚生活の慣れが今からもう見えてしまう。やがて、『彼が最近構ってくれない』とか、『全然わたしの話を聞いてない』といった、お定まりの愚痴を言うようになる自分が恐ろしい。わたしはふと考える。じゃあどんなふうに優しくされたら満足がいくのか、と。具体的な答えは何ひとつ出てこない。

若いうちは女だというだけでちやほやされる。そして結婚すれば、絵にかいたような幸せが手に入るという幻想。

「いいわけないよ、結婚なんて。」

奈々は冷めた紅茶のよう。

でもわたしは知っている。どんなに強がりを言っても、奈々は夢を見たがっているということ。

奈々は自分が誰で、どこから来て、どこへ行こうとしているのかを知らない。生き急ぐ焦燥。自分のこともわからないのに男を理解できるわけもない。

彼女は目に見えない結論を手探りしてる。そして今、闇のような肌に一瞬の夢を見る。

「恋も数をこなせば、呼吸がわかるものよ。」

奈々はしたり顔。捨てられて、また恋をして。性懲りもなく黒人のリズムが肌に合うと思
い込む。

『黒人が哀しそうな表情をするとき、誰よりも哀しい瞳をしている。』

それが奈々の口癖。そして世界中で一番哀しそうな瞳をした黒人にまた捨てられる。

『女を見る目がない男だって思えば何でもないわ。』

お伽話を読み続ける奈々。

今の恋人のマークはコースウェイ・ベイ（銅鑼湾）の繁華街にあるエクセルシオール・ホテ
ルの地下、ディケンズ・バーに出ている。

以前の恋人アランのときは、アパートにマリファナはおろか、アイスまで持ち込まれて大
喧嘩した挙句、アランはクールに出て行った。

たまたま恋人が黒人だったとしても、なぜいつも黒人でなければならないのか。奈々から
納得のいく答えを聞いたことはない。

マスコット感覚、ファッション、自分は人と違うと思いたい気持ち。エスニックな皮膚感
覚。薄弱な接点が無理な恋の不協和音を奏でる。

「ねえ、いいビジネスない？」

奈々の起業家精神。いくつかアイデアを出して、とにかく始めてはみるが、いつも失敗。

「お義兄（にい）さんのアパレル工場で新機軸を探しているのよ。いいプランだったら、
わたしにマネージメントをやらせてくれるって。」

アパレル。ファッション。気軽なようで、容易ならない分野。それは夢の日常化。こうだ

ったらいいのと思うことを、手の届くところへ引きずり降ろすこと。

「高価な絹(シルク)を日常化してみたら？」

わたしは思いつきを言う。

「たとえば？」

「絹のハンド・タオル。肌にいいって。」

奈々は気に入ったようだった。

「小さなジュエリー・ポシェットもいいかもしれない。指輪とかピアスとかを入れたりするの。一つずつ入れるようにしたら？」

「ねえ葉子。リキのこともうあきらめたら？ 別れたほうがいいよ。」

突然、奈々はわたしの一番敏感な部分に触れた。わたしは踏み切れない自分を思い出してまた嫌になる。

「若くないもの。そんなに冒険できないわよ。」

「若くないから、よけいもっとリスクを取らなくちゃいけないんじゃない？ いつまでもシンデレラじゃダメよ。」

「わたし、べつに綺麗なガラスの靴なんかでなくていいの。縹子(サテン)の靴で十分よ。わたしなんか。」

「ガラスより丈夫だし？」

奈々が皮肉を言う。

「夢ほど確かなものはないかもしれないけど。……」

わたしは一人つぶやく。冷めたダージリンが笑ってる。

∴∴∴

ケネディ・ロードのアパートへ帰ると、ベリンダがフロアに座り込んだまま電話をしている。まだ十六歳。年齢を偽ったフィリピン・パスポート。

長い髪を輪ゴムでポニーにしたベリンダは、香港でメイドの出稼ぎをしている。

今は、とある香港人の家庭に住み込み。月に四万円ほどのお手当て。それでも本国では大変なものらしい。フィリピンでは大学出でも月に二万円が相場だとか。クリスマスに里帰りをする、見たことも聞いたこともないような遠い親戚まで空港に迎えに来るといって、ベリンダは苦笑する。

本当はわたしはメイドなんか使いたくない。友人のたつての頼みで日曜日に三時間ほど来てもらっている。申し訳ていどのお手当て。おかげでわたしは、食器洗いも洗濯も掃除も、すべて放りっぱなしのルーズな女になってしまった。

ベリンダは労働で締まった体。褐色の艶。スペインの血が混じった深い、憂いを漂わせた顔立ち。ふとしたときにわたし自身、はっとしてしまうような哀しい美しさ。

ベリンダは香港人の家庭で働くのが嫌だという。休みなく働かされる。食事にしても家族が食べ終わった後、なにも残っていないことが多い。だから仲間のフィリピーナたちは皆、リズナブルな白人家庭か、逆に気をつけてくれる日本人家庭で働くことを望んでいるらしい。

彼女の以前の雇い主から一方的に解雇を言い渡されたので、ベリンダは一時路頭に迷った。訴えでるわけにもいかない。不法入国者だから。メイド仲間のツテで、ある日本人家庭にしばらく居候させてもらっていた。夫は二十代後半。けっこうポギ（色男）だとベリンダは自慢する。妻のほうはお産で日本へ帰っていた。今の雇い主のところへくるまでほんの二ヶ月くらいの話だ。

その男は商社勤め。よく飲んで帰ってくる。その夜も酔っ払っていた。ベリンダは残りの洗濯をしていた。男は自分でウイスキーの水割りをつくって、ベリンダの後ろにやってきた。

「新しい雇い主はどう？ 見つかった？」

「ええ、今月中に移ります。ここにしばらく置いていただいて、本当に助かりました。」

「今度はどこ？」

「北角（ノース・ポイント）です。」

「たまには遊びにおいでよ。」

「いいんですか？」

ベリンダは目を丸くしていたずらっぽく笑う。彼女は結婚こそしていないけれど、実は一歳の子がいる。ベリンダの腰に後ろから手を回す男はそれを知らない。彼女はされるがままに抱き寄せられながら、洗濯物をいじっている。髪をかき上げたうなじにそっとキスをされる。一瞬ベリンダはびくっと体を震わせる。小さな声が一応の抵抗を試みる。

「だめ。お願い、やめて。」

それでも体はもう男に응えている。ずいぶん長いこと男の体に触れていない。いい暮らしをしている日本人妻への妬（ねた）み、嫉（そね）み。

夫は今、自分に迷っている。なにか自尊心をくすぐられるような快感。化粧もしていない若い女の汗の匂いが男の舌にからみつく。

急にベリンダは我にかえる。慌てて体を引き離す。

「奥様に知れたらどうします？ だめ。」

「誰が言いつけるんだい？」

男は構わず抱き寄せる。

「いいえ、・・・誰も・・・」

やがて中性洗剤の匂いがベッドの上に広がる。彼女は男に味わいつくされながら、手を伸ばしてサイド・ボードの上にある妻の写真を伏せた。そして暗がりの中で、彼女はにやりと笑う。男はそれに気づかない。・・・・・・・・・・・・・・・・

エアコンもつけなかったので、二人とも汗だくになっている。男が終わった後、ベリンダはベッドに起き上がり、じっと見つめる。

「どうして、わたしなの？」

男は答えない。

「遊んでいるだけだってことは、わかってるの。」

女の野生が瞳に輝いている。

「そんなことはないよ。」

男はいつも否定形を使う。男の狡さ。ベリンダは十字を切って、男の腕の中へ入る。

「移っても、ときどき電話していいですか？」

言い訳も付け加える。

「けして迷惑はかけないわ。」・・・・・・・・・・・・・・・・

めくるめくような数日が過ぎ、ベリンダは今の雇い主のところへ後ろ髪を引かれるような思いで出て行った。暇を見つけては男に電話する。わたしのところでアルバイトを始めてからは、もっぱらここから電話をする。基本料金だけで、何時間かけても同じ。

フロアに座りこんだまま、ベリンダは小さな声で話している。彼女自身の言葉はほとんど聞き取れない。せいぜい、『迷惑はかけないわ。』くらい。わたしはそっと彼女の横を通り過ぎ、ベッドに寝転がる。もうとっくに読み終わった女性雑誌を広げる。ベリンダが鼻をすすっているのが聞こえる。

：：：

香港。東京の面積の半分のこの町に、東京の半分の人口がいる。日本人の駐在員とその家族だけでも三万人はくだらない。フィリピン人は六万人もいる。そのほか、イギリス人を筆頭に、アメリカ人や欧州人たち、そして毎年中国大陸からやってくる不法入国者。何十年もの間、ひっきりなしにやって来る彼らのおかげで、香港の男女の人口バランスは決定的に崩れてしまっている。香港女はお高くとまっていると評判が芳しくない。一九九七年に中国に返還されれば、この問題もさすがに無くなるのだろうか。

わたしの客にたくさんの韓国人女性がいる。

みな夜總會（ナイトクラブ）やカラオケで働いている。多くは、その筋のブローカーの手配で香港人男性と偽装結婚をしている。

ビザを手に入れて、香港に入国する際、一度だけ『夫』に会うものの、それ以降は二度と

会うことはない。『夫』も彼女に会うことを厳に止められている。彼女たちは毎月十万円以上のコミッションを払う。

結婚という紙切れを、紙切れ以下のものにしてまで生きることに執着する彼女たち。

その一方で、不倫であろうと、相手が独身の男であろうと、身を焦がすような激しい恋をし、献身的に尽す彼女たち。

お金をくれる男にはいくらでも体を奪われることを惜しまないくせに、好きな人からはお金が取れない。そして殺意に近い嫉妬。世界が違うではすまされない逆説のエロス。

目が回りそうな価値の転倒。前近代的な植民地というこの町のアイデンティティの無さが、それぞれの人をむき出しのままにしてしまう哀しさ。

自分は誰なのかをいつも自分に問いかけていなければいけない緊張。わたしはときに振り返る。そしてそこには誰もいない。わたしはまた歩きだす。どこへ？ いったい誰のように？

：：：

甘く、危険な香り。

わたしは思い出す。三つ上の先輩。そのとき彼女は音大の一年生。わたしはまだ高校生。ブラスバンド部のOBだった。彼女の在学当時から、わたしは密かに憧れていた。

ある日、先輩が家に遊びに来ていた。その日は、泊っていくということだった。わたしの両親は帰るのが遅くなるので、彼女に泊っていったらと誘っていたのだ。

わたしが雑誌の頁をめくっていると『なに読んでるの？』と彼女がのぞきこむ。

振り返ったとき、わたしの唇が彼女の手に触れる。

偶然？ 一瞬の出来事。なぜか耳を赤くしたわたし。やり場のない羞恥心と溶けてしまいそうな感覚。

その夜遅く、両親が帰って来てからも、わたしは一言も彼女に声をかけられなかった。

狭い家だったからベッドはいっしょ。両親が寝静まってから、彼女が小さな声でわたしにささやく。

わたしは当惑と期待のあいだで胸が張り裂けそうになる。沈黙は微熱を帯び、体が固くなる。彼女はわたしが寝てしまったと思い、優しく唇にキスをする。わたしは汗ばんだ自分の手を握り締めたまま、青白い月の軌跡を追い続ける。・・・・・・・・

彼女は音大を出た後、ほどなく商社勤めの男性と結婚した。本人はあまり気乗りしなかったらしいが、周囲にすすめられたようだった。夫の任地であるバンクーバーへ渡り、やがて離婚。理由はわからない。

夫はその後帰任したが、彼女は残った。駐在員の子女や現地の子供たちにピアノを教えて暮らしていた。

たまに日本に帰ってくるときには、自由気ままにやっている様子が以前より楽しそうに見えた。勝手に一人で休みをとっては、知り合いの女性たちとヨーロッパへ何度も旅行していた。

不思議だったのは、男性の噂がないことだった。あんなに綺麗だったのに。英語だけでなく、フランス語やドイツ語もできた。性格はとても女らしかった。

三年が過ぎ、そんな気楽な生活をしながら三十歳になろうかとしていたある日、彼女はピストル自殺をした。女らしく、頭ではなく胸を撃ち抜いていた。検証の結果、他殺の線は消えた。病もなく動機はわからずじまい。

彼女はきっと自分を愛せなくなっていた。あるいは愛する手がかりを失ってしまった。可哀想な先輩。でもそれは女なら誰でも無意識に引きずっている心の陥穽（かんせい）。

女に内在する危機とは、女であることを自分が愛せるかどうかということ。先輩がレズビアンだったかどうかはわからない。でも極端な話、レズビアンにとって女性喪失はほとんど自己否定以外のなにものでもない。

ブッチとフェミという役割は便宜上あったとしても、最終的にはやはり女として愛し愛されたい。お互いに女だという甘美な誘惑も手伝うかもしれないし、男というものへの悪夢のような思い出がそれに拍車をかける場合もあるだろう。

でも結局、相手の女性は等身大の自分自身。それは自分のいとおしい似姿。ちょうど少女が人形を慈しむように。もしもそれすら裏切られる結果になってしまったら？ 女であること存在に意味という価値を与えようとする重大な希求。女にとって誰にせよ愛されるということは、自分だって思い切り生きていいのだという確信に続く。

この希求に応えることができず、その苦悩さえも気づかずに、ただ体を通り過ぎていくだけの鈍感な男たち。湖面に浮かんだ頼りなげな月が、ありもしない自分の軌道を揺れながらさまよう。

女性という世界の無限と、錯覚しそうなほどの不確かさを、たった両の手でつかもうとする焦燥。

それともシンデレラを夢見る幻想？

生きる欲求のない人には、死の動機もけしてありはしない。死のうとする人は、いつもみんな本当は生きてみたいと思っている。

先輩の場合、ふと視点を変えてみたらどうだろう？ 彼女はクラシック音楽の世界に生きていた。ジャズやポップスのように日々新しいものにとってかわられるものではない。それは過去の世界。旅行する先はヨーロッパだけ。それもすでに終わった世界。もしも彼女が日本に帰ってくるとき、南回りでアジアに寄っていたら？ トランジットでもいい、ストップオーバーでもいい。この生き馬の目を抜くようなボンベイやバンコクや香港の町並みの喧騒と雑踏をほんの少しでも知る機会があったなら、きっと相当のショックがあったかもしれない。

自分を生み出したこの世界には、自然と生かす力もあるのだ、ということにもしかしたら気づいたかもしれない。

：：：

佳代。二十六歳。レイヤー・カットがよく似合う。華やかなイメージに男はみな振り返る。電器メーカーに勤める夫に伴い、この香港へ。

最初の頃、『夫とうまくいってない』とよく愚痴をこぼしていた。やがてコンピューターを買い込み、女性用下着を作り始めた。それぞれの体型に合わせて、よりよく見栄えがするようにコンピューター・グラフィックを駆使するオーダーメイド。

なりふり構わず夢中で一年。夫とは別れた。そのうち彼女は小さいながらも銅鑼灣の雑居ビルにアパート兼オフィスを持つ。香港人の従業員も二人。はじめは日本人駐在員のあいだで客層が広がっていった。口コミでいつしか白人女性の客も増えてきた。

その一人、イギリス人女性のイヴリンと仕事を超えて親しくなる。イヴリンは佳代の冒険を高く評価してくれた。夫でさえ鼻白んだのに。イヴリンはこう言った。

『あのボディ・ショップだって最初は、イギリスの倦怠期を迎えた子連れ主婦が一から始めたのよ。あなたならきっと成功するわ。』

佳代は何度となくイヴリンに励まされ、アドバイスを受けた。

イヴリンは二十八。ウェイヴがきいたブロンドのセミ・ロング。碧い瞳。白人には珍しい清楚な顔立ち。イギリス系証券会社の金融アナリスト。何度かイヴリンがサイズの合わせで来店するうちに、いつしか緊張していく無意識な肌の接触。挨拶がわりのキスは、やがてその時間が長くなり、甘さは濃厚になっていく。

ある日の午後、ミッドレベルのアパートへお茶に誘われる。佳代はイヴリンに対して、どうしてもぎこちない自分に自信が持てない。今まで想像もしなかった世界に、迷いが交錯する。ただイヴリンにはロンドンに夫も子供もいることが、妙な安心感を与えていた。

夏の日午後、エアコンが静かな寝息をたてている。粘膜がけして聞こえない言葉を伝えようとする。締めつけられるような興奮と、すべてを知り尽くされてしまうような幻覚。さざ波のようにゆっくり押し寄せる高まり。とても大切なものを今手に入れている、そんな午後。・・・・・・・・

たまに佳代と飲茶をすると、このイヴリンとどんなふうにあつたかを聞かされる。イヴリンが女性と愛し合うようになったのは、子供が生まれてからだという。後から後から佳代は話してきかせる。たまには、シリコンのディルドーを使うこと。二人で計画しているモルディブ旅行のこと。同棲しはじめてからお互いがリスペクトすることがなにより大切だとわかったということ。

今では、どちらかが何の責任を分担し、今度は誰の番、といったような分け方をせず、あくまで二人が必要なときにすすんで手を差し伸べるようになったこと。・・・今でも、気が遠くなるような長い夜を二人は過ごす。

メルトダウンしていく不安。コカインの白さにも似た哀しい飲み。わたしが『幸せ?』ときくと、佳代はちょっと首をかしげてにっこりと微笑む。『安心なの。』・・・・・・・・

夏。

一番香港らしい季節。

殺人的な暑さと湿気。もう息もしたくない。

朝、いつものようにわたしはケネディ・ロードを下る。メソジスト教会の脇を通過して、湾仔へ。耳を覆いたくなるような騒々しさ。鶏粥（ガーイチョク）の湯気。油條（ヨウティアオ）を揚げる匂い。

飲茶（ヤムチャ）の賑わい。捌（さば）かれた豚や鶏の惨劇。ガルーパやロブスターを満載した竹籠の間をすり抜けて、ジョンストン・ロードまで歩く。

二階建てのトラム（路面電車）に乗ってオフィスのある中環（セントラル）地区へ。路面電車はこれでもかこれでもかと路上に張り出す赤や緑の看板の間をすり抜けていく。

滯（みお）。二十一歳。学生風のボブカット。小柄だけれど挑発的な体つき。小悪魔のような笑顔。オフィスではわたしを姉のように慕っている。

一年浪人したが、日本の大学はどこも受からず、親が金を出して中国へ語学留学。

語学がもともと好きなのではなく、単に英語ができないから、変ったところで中国語を選んだ。

折からの中国ブームで就職に有利と踏んだにすぎない。結局は遊学。それが思いのほか、難しい言葉なのにショックを受け、たちまちやる気が失せた。英語どころではない。滯は半年で匙を投げた。おまけに北京に東京ではあたりまえのような遊び場がない。けっきょく一年もたたずに学業放棄。大陸を南へフラフラしながら、所持金をすべて使い果たしたのが香港だった。中国語がすこしわかりますという触れ込みでわたしのいる旅行会社に飛び込んできた。以来、わたしの妹。

九龍の重慶（チュンキン）マンションとはいわないまでも、かなりくたびれた雑居ビルに間借りしている。表通りに面した鉄格子。部屋の前にまた鉄格子。内側にある厚い木製のドア。『鍵の重さで疲れちゃう。』といつも不平を漏らす。

香港に進出している日系の大手スーパーに二十五、六歳のボーイ・フレンドがいる。彼氏が濡に夢中らしい。冬でも二人でジェットスキー。だからいつも真っ黒に日焼けしている。もっともふだんは四十代、五十代の、おもに妻帯者の男たちを相手に、いわば援助交際をしているけれど。

むしろ彼女にとってはこちらの方が本業らしい。単身赴任の建設会社のプロジェクト・マネージャー。商社の部長クラス。日本料理屋の板前長。香港に生産拠点を移した玩具メーカーのオーナー。数え挙げたらキリがない。だから平日の夜と週末のスケジュールは複雑怪奇を極める。

『セックスなんて、握手と同じよ。』

あっけらかんと言っている濡の顔にはいやらしさなど微塵もない。それが証拠に、二言目には『将来はこういう人と結婚してえ・・・』などと、行動の無軌道さにしては案外保守的な人生設計。感性と発想の乖離。うつろなアンビバレンツ。『こういう人』が本当に現れたとき、彼女はその見分けがつかのだろうか。虚構と錯覚と冷静なもう一人の自分の間で、どれが生身の呼吸だったか忘れてしまわないだろうか。

遊び。実益を兼ねた遊び。その割り切りも、半ば本気で半ば浮気。『遊んであげてるつもり』でも、実は遊ばれている。それがわかっていて、『ま、それもいいかな。』と結構楽しんでる。

不倫の痛みなどあっちの世界。食事をおごってもらっただけ、『お返し』に寝る。その後の甘えや我がままのハウトゥーはもうほとんどプロ級の腕前。どうすれば男が金を使いたくなるかを、この若い娘は熟知している。

あのときもまるで死にそうな表情で、『もっとして・・・めちゃくちゃにして！・・・』と男を有頂天にする。『あなたのもの』とか、『あなたにあげる』とか、自分を上手に商品化すれば男が夢中になることを十二分に計算する。

なにかのことで揉めたら、まず泣いてみる。たとえば子供のころ可愛がってた犬の死の情景を思い浮かべてみる。自然に涙が出てくる。すると本当に悲しくなってくる。男がひる

む。その機を逃さず男の体にしがみつく。そして翌朝には、『えへへ・・・』と笑って舌を出す。

腕にはカルチェの時計。・・・『男って、寝てさえしまえば、自分のものだって思うんだから。本当に精神が貧困ね。』と言う。そのたびに、わたしはまるで自分が批判されているような気がして嫌な感じ。濡に言わせれば、わたしなどは『性愛の癒着』以外の何ものでもない、ということらしい。

でもわたしは知っている。そんな娘でも、結局一人の男を待っていると。自分に暖かく関心を持ってくれる男を。真剣に怒ってくれる男を。その男の熱で思い切り病んでみたい渴望が、大きな瞳の奥で静かに息づいている。

：：：

その日、カウンターまで航空券を取りに、一人の男がやってくる。修平。三十二歳。外国通信社の契約カメラマン。なにかと噂の絶えない男。以前からわたしが受け持っている。用が済むと突然、今夜空いているかと聞く。わたしはいつも空いていると笑って答える。スタンレイズを予約したと彼は言う。

「もしわたしが断ったらどうするつもりだったの？」

「失うものがないんでね。」

修平はこともなげに言う。芥子（からし）色のTシャツにアイボリー・ホワイトの麻のジャケット。洗い晒しのブルージーンズ。ライカをいつもはなさない。日焼けした胸元が汗ばんでいる。

わたしは快諾する。修平は、得たりという笑みを残して席を立つ。すぐ濡がわたしのところへ飛んできてくる。

「あの人が修平さんですか？ 素敵じゃないですか。カッコいい。フリーのカメラマンって。」

濡はもう完全に獲物を追うような目になっている。まばたきもしない。出口のドアを一步踏み出していた修平が、半身を戻して吐き出すように言い残していく。

「冗談じゃない。ハイエナ同然だよ。」

滯は修平の後姿に釘づけ。

「ねえ、葉子さん。あの人いいじゃないですか。チャンス、チャンス。デートの約束でしょ？」

「彼、女に不自由してないわ。そういう男は願ひ下げよ。」

「そうかなあ。もったいないと思うけど。」

「滯ちゃん、モーションかけてみたら？」

「え、いいんですか？」

滯はもうその気になっている。

「お好きなように。」

「明日、教えてくださいね。今夜のデートのこと。」

「いいわよ。」

「約束ですよ。」

滯の目がすわっている。

男のポロの匂いが爽やかに残る。

スタンレイズ。レパルス湾よりもっと南へ。落ち着いた小奇麗な洋風海鮮料理店の屋上のテーブルを一卓。修平とわたしの世界が始まる。

降るような星たち。修平とは今までに、何度も複数の集いで食事をしたり、お酒を飲みにいったりしたことがある。二人だけなのは今夜が初めて。いいお友達のつもりだった。

楽しいお喋り。キャパやサワダ、イチノセ。インドシナ戦線に倒れていった伝説的なカメラマンたちの名が、修平の口から語られる。ファインダーからのぞく戦場の風景には、恐怖もヒューマニズムもない。指は夢中でシャッターを押し続ける。かすめていく実弾のことはまるで意識の外。衝撃的なワンショット。それが欲しい。そのくせ、ファインダーから目はずすと、たちまち震えに襲われる。

「だから、ハイエナと言ったのさ。」

修平が自嘲気味に笑う。

「でも、ほんとうは・・・・・・・・」

修平は続ける。

「本当に撮りたいのはそういうものじゃない。取り敢えず食べていくのに、まずビッグ・シヨット。あとは好きなものを撮っていきたいんだよね。」

修平はこれまでに、インドネシアからの独立闘争をするティモールや、フィリピンはミンダナオで抵抗する回教徒のアジトを訪れたりしている。ほかには、スリランカの内戦。カンボジアのクメール・ルージュ。血の匂いを嗅いでではライカをつかんで海を越える。

そんな修平が本当に撮りたいもの。それはアジアに残るヨーロッパの残像と余韻。植民地にやってきた冒険者たちのたそがれ。沈黙する栄光の残り香。たとえば中国。東北部のハルビンに白系ロシア人たちの町。今でもロシア聖教会が残る。太陽島と呼ばれるところには荒れ果てたロシア人たちの別荘が残っている。上海の旧英仏租界。青島（チンタオ）、天津（ティエンジン）、武漢（ウーハン）、廈門（シアメン、アモイ）、広州（グアンジョウ）にもドイツや英仏の町並みが残る。

インドのディウやゴアはポルトガル人の町。

タイのプーケットもポルトガル人の町。

スリランカの南端にあるゴールはポルトガル、オランダ、そしてイギリスの支配の面影が残る。

マレーシアのマラッカはわたしでも知っているオランダの町。

インドネシアのジャカルタには今はもう使われてもいない運河のそばにオランダ時代のオールド・バタヴィアがある。

ボルネオのクチン市内を流れる河沿いにはイギリス時代の商館が立ち並ぶ。

そして、フィリピン全土には何百というスペイン人たちの建てたカトリック教会が、あるものは未だにミサを行い、あるものは放棄されて密林に取り残されている。

わたしもガイドブックで見たことがある。ビコール地方のレガスピにマヨンという富士山より秀麗な火山があり、何度か大爆発を繰り返した。何世紀も以前、オールド・レガスピはポンペイのように火山灰に埋もれ、カグサワという教会の尖塔の部分だけが、荒野に突き出している。・・・・・・・・

修平が撮りたいのはそうしたかつての征服者（コンキスタドール）たちの忘れられた哀愁。修平の目は遠くを見ている。初めてわたしもそれに吸い込まれてみたいと思う。

「あなたがうらやましい。なにをしたいかはっきりしているから。」

それは本音だった。わたしは自分を確定できないでいる。

結婚？ 結婚できる時がくれば、それが適齢期なんだと今では思うようにしている。でも、結婚すれば、当然のように幸せになれるなどと考えてはいない。ただ結婚という外からの変化にしか頼ることのできないわたしが残っている。

新しい恋をする？ また始めからやり直し？ 出会って、お友達になって、デートの約束を取りつけて、仕事や趣味の話をしながらお互いに観察しあい、相手の家庭の事情を吟味する。癖や考え方の違いをバランスにかけ、あとは押ししたり引いたり駆け引き。いつしかごく自然な成り行きを意識しながらベッドイン。気の遠くなるようなプロセスと途方もないエネルギーの消耗。それを考えると、もう思い浮かべるだけで疲れてしまう。

わたしの話をじっと聞いている修平。その眼差しが透き通る。わたしが言葉につまる。そのとき修平がふと漏らす恋の告白。予想はしていても沈黙に押しつぶされそうになる。わたしはようやくの思いで言葉を手繰り寄せる。

「お友達じゃだめ？」

「もうお友達だろう？」

「その先へすすみたいの？」

修平はわたしとリキのことを以前から知っている。だからずっと黙っていた。そして、今ある種の判断をしたんだろう。

「誰とだって寝てきたくせに。」

わたしは苦し紛れに逃げる。

「誰とだって寝れる。でも好きでもない女の料理は食えないし、編んでくれたセーターだって袖を通せない。」

「あなたなら誰がお料理をつくってくれても食べれるわ。」

「食べれても、味がしない。」

「遊びのつもり？」

そう言ったわたしは、自分がかえってみじめになったような気がして、つくづく馬鹿だなと思ってしまう。

修平はどこか興ざめしたような表情になる。

男からアプローチされると、きっと体が欲しいだけなんだと警戒してしまう。もしかしたら、性を過大に評価しているのは女のほうかもしれない。自分の体を求められていることに、わたしはどうしても素直に喜べない。

「先にお友達になっちゃったのがまずかったかなあ。」 修平はそう言って、体を伸ばす。

女は結婚して家庭に入るといふ『大義名分』があるから、自立する責任から逃れることもできる。それはきつとなにかを恐れる気持ちからきている。

わたしはもう働くのが嫌になっている。東京にいたときにはこうではなかった。働いていることが好きだった。たぶん今は、なんの目標もなく、ただ生きるために働かなくちゃいけないと思うのが、わたしはたまらなく嫌なのだ。

結婚をしない女が特別新しい意識を持っているわけではない、と修平が言う。そういう女性でも長い生活の過程で、かならず何度となく恋をする。そしてそのたびごとに結婚しようか、それともしまいかの選択を迫られる。問題はただ先送りされているだけ。

女が自立を求められ、自らもその意味を考え始めて久しい。けれどたとえ女が自立しようとしても、その育てられかたが自立を前提としていないし、社会もそこまでの自立を女に望んでいない。少なくとも日本では。どこまでも形の不確かな存在。どのような女になればいいのか、だれもその答えを用意できない。変るとすれば、そのことに気づいた女自身が変わろうとするしかない。そしてそれを支え、励ますことのできる男。

「僕はうってつけだな。」

思わず噴出してしまうわたし。

「どうしてそんなに自信があるの？」

わたしは不思議でならなかった。

「君なら、なにか成功したり、向上したりすれば、僕自身が嬉しいと思えるから。」

簡単なこと。それが男にはできない。しようとも思わないかもしれない。もっとも女が自分で変ろうとしなければ、男にしたって手を差し伸べようもない。

煮え切らないわたしに、修平が疲れている。隣の香港人カップルや、ひとつむこうの白人とフィリピーナのカップルも、どうしてあんなに輝いて見えるのだろうか？ わたしだけがスタンレイズ・フレンチの小粋な夜に沈んでいく。

「ごめんね。はっきりしなくて。わたし、だめね。」

引きずっている。結果に真正面から向かえない。まるで自然消滅していくと思込もうとしているみたい。もうほとんどこれまでのことは終わってしまっているのに。自分でもそう覚悟しているのに。次にすぐ乗り換えるような真似にも、いわれない抵抗を覚えてしまう。『ずっとわたしのことを好きだったんなら、いつそのことすぐに奪ってくれたらよかったのに。』弱音がそこまで出かかる。

「君の寝顔を見たいな。」

「だめよ。眠れる豚だもの。」

大笑いする修平。白い歯。健康的な野生の色。

夜のビーチ。さざ波がわたしの答えを執拗に急き立てる。サンミゲルじゃ酔えそうになり。

翌朝。滯の興味津々な顔。いつもと違ってそれに腹の立つわたし。不思議な驚きだった。しつこい滯はあれこれと質問攻めにしてくる。わたしは笑って取り合わない。『たぶん、駄目じゃない？』と一言だけ。滯の、どこかしら責めるようなものの言い方と、しらじらしいエール。女同士の友達ほどこういうとき厄介なお荷物はない。強がり、見栄、偽善のいやらしさ、そして嫌みと騙しあい。わたしの胸のうちを射るような視線に、そんな予感がするのはただの気のせい？

滯は欲しければ何でもする。彼女がまだ高校生のとき、人気の男の子がいた。周りに群がる女子高生グルーピー。最初に彼の子を妊娠した人が彼の女になるという、冗談か本気かわからないようなゲーム。

はじめのうちは、『ねえねえ、わたし昨日彼とハッピーしちゃった。』と競い合う遊びのつ

もり。でも、滯はただ一人本当に妊娠してしまった。怖くなる滯。そして中絶。付き添ってくれたのは、彼じゃない。学校の男の先生。

いつしか今度はその先生と付き合い始める。そんな滯がときに羨ましい。生きようという焦燥感。夢を見たくてしかたがないのに、その夢の見方がわからない滯。だから息もできないくらい自分を感じようとして荒廃した行動の形態に落ちていく。

非行とか、ドロップアウトとか言われても、それは彼女が間違っているわけじゃない。自分をもっと大切にしたら、などとはけしてわたしは言わない。痛みが大きければ大きいほど、辛ければ辛いほど、あなたの感性はずっとあなた自身に近くなっていく。もっと洗練されたものになっていく。あなたの生き方はたぶんそれでいい。それができないわたしには、それがどんなに羨ましいか。きっとあなたにはわからない。

なにか美しいものに憧れてじれてるあなたのまっすぐな瞳に、正直負けそう。三十になろうとしているわたしが、青春というのもおかしいかもしれない。でも言っておきたい。青春は優しさなんかじゃないと。人間ならみんな優しくなくちゃいけないから。青春はきっと自分を感じ取る力と、夢を見る勇氣。病気なのはあなたじゃない。わたしたちのほうだ。修平に思い入れを募らせる滯を見ていると、次第に氣力が萎えてくる。負けたくない。二十一の小娘に修平を取られたくない。でも、気持ちはいつまでも踏み切れずに一人でしゃがみこんでしまう。

夏が佳境に入る。スコールが思い出したように寄せてくる。そのたびにわたしの喉はもっと渴いていく。まるで砂漠で息絶えた砂たちのよう。

：：：

植物園。中環（セントラル）からミッドレベルの丘を上っていく。すぐに白亜の総督府官邸が右に見えてくる。アッパー・アルバート・ロード。向かいにその植物園はある。ジョージ王像のまわりには咲き乱れるハイビスカス。生い茂る樹木の間には亜熱帯という中途半端な色気が発散している。

土曜日の朝。修平と二人で歩く。インドネシアにあるボゴールの植物園の話をしてくれる。圧倒的な雨量。晴れたら奇蹟だという。ボゴールにはまだほかにも奇蹟があるという。一メートルも生長してまさに大輪の花を咲かせながら、ほんの数日で枯れてしまうブンガバイカイ。日曜日じゃなければ、車に入れるらしい。今度二人でジャカルタへ行って、ボゴールでデートしようという。わたしは哀しそうに頷く。

このままでいいの？ 臆病になったわたしは、恋の仕方も忘れてしまった。涸れるほど涙があつたら、どんなに楽だったろう。この男の胸を借りて大きくなる自分を想像してみる。そのイメージは定まることをしない。あとからあとへつくられていく喜びが見えそう。『売れ残っちゃうかな？』と半ば冗談で言うと、この男は不愉快そうな顔をする。女は認められて欲しいくせに、まるで自分をクリスマスケーキかなにかのように例える。それが嫌だとこの男は言う。

貿易風が檳榔樹（びんろうじゅ）や棕櫚（しゅろ）の葉に囁（ささや）いている。頼れる自分をさがしなさいと。恐れることを忘れなさいと。

スター・フェリーの汽笛がかすかに聞こえる。・・・・・・・・

∴∴∴

日曜日。修平とキャットストリートへ。そしてハリウッド・ロード。

古い中国の茶器。年代物の家具。昔のロレックスの掘り出し物を探す。
着色が褪せた古い香港の絵葉書
文化大革命のときに、隣の中国の紅衛兵たちが胸につけていた毛沢東バッジ。
怪しげなスナッフ・ボトル。明朝時代の青花（チンホア）の陶器。

わたしは白磁に藍色の青花が好きというと、修平が教えてくれた。鮮やかなものは本当の骨董ではないと。明代のものは藍色の模様が滲んだように焼き付けてある。技術が未熟だったから。今の技術は進みすぎて、その未熟な滲み具合を出せない。

皮肉な技術な進歩。そういえばこの辺の青花はほとんど模様がくっきりと浮き出ている。みんな偽物。

それでもいいんだ、と修平が言う。古かろうと、新しかろうと、好きなものならそれが君にとって一番価値があると。

二人で蘭桂坊（ランカイフォン）まで下る。

「陸羽茶室にでも行ってみる？」

「飲茶？ ポーレイ茶はおいしいけど、点心（ディムサム）には飽きちゃったわ。」

どうしよう？

レバノン料理？ ロシア料理？

それとも無難にカフェ・カリフォルニア？ レストラン 97？ ジミーズ・キッチン？

すぐに決まらないのがいつものわたし。

汗だくになって坂道をグルグル歩く。結局飛び込んだのはインド料理の店。おなかが空いて、二人でナンの取り合い。セイロン風のココナッツ・ミルクがたっぷり入ったシーフード・カレー。黄魚（ウオンユ）はあまり好きではないけれど、海老といっしょにこうすると大丈夫。

そしてマサラ・ティー。牛乳に紅茶を入れてぐずぐず煮立てる。砂糖をたっぷり入れて出来上がり。シナモンの匂いがくすぐったい。・・・・・・・・

夕方、アパートに帰る。気持ちのいい疲労。折り返しに修平から電話がはいる。

「また誘ってもいい？」

「いいわよ。どうしてそんなこと聞くの？」

「迷惑じゃない？」

「馬鹿ね。」・・・・・・・・

リキからは電話がない。わたしの方からはしないことを、彼は知っている。

これでいいの？ このままで終わっても？ どんな形でも後悔するのは嫌。次の週の水曜日、ローカルの男性社員がわたしの外出中に日本人の男の人から電話があったと告げた。

『誰？』『名前は言わなかった。』わたしはリキだと直感した。かりにそうでなくても、リキだと思ってしまう。

∴∴

週末、銅鑼湾のカーサ・メキシカーナで修平の友人たちと集う。フィリピン人のバンドがラテンのナンバーで調子づける。

サウス・チャイナ・モーニング・ポストの香港人の記者仲間。ナンシー・ウオンとピーター・ラウ。スイス人のローマンは投資顧問会社のファンド・マネージャー。アメリカ人のウィルはコンピュータソフトの会社勤め。フランス人のソフィーはウィルの恋人。銀行で

働いている。ナチョスにグリーン・チリ。生チーズをたっぷりのせる。サングリアが甘い。ほかのテーブルの客も歌い、踊る。

わたしたちは中国の話題で湧き上がる。なにしろ、返還が五年先に迫っているのだ。

「九十七年以降の香港は変る？」

「変りはしないさ。」

「誰にもわからないわ。」

「五十年代の上海のような目にあうかしら？ あなたたちはどうするの？」

とソフィー。ピータが首をすくめる。

「さあね。なにがあっても不思議じゃないからね。」

ふとナンシーが漏らす。

「自分の民族のこと、こんな風に言うのは変だけど、とても物質的だと思うの。だいたいからして、共産主義なんかに向きな民族なのよ。無理があると思うわ。中国にはね、子守唄（ララバイ）ってないのよ。誰がつくったか、まるでわからないような、昔から歌いつがれてきた、そういう子守唄がね。とてもこれって基本的で、芸術的な感性だと思うんだけど。それから民族舞踊もないのよ。」

「京劇は？」

「あれは自然発生的な民族舞踊とは違うわ。中国にはすごい技術はあっても、芸術ってないのよ。」

ピーターが相槌を打つ。

「大陸の連中は二言目には五千年の歴史というけど、五千年経ってこのザマかと思うね。ナンシーの言う通りさ。なかなか気がつかない点だけど。ニューギニアの未開部族にも子守唄があるということを考えると、こういう部分は意外に中国という文化の決定的な弱点かもしれない。現実の効用だけにとらわれるという致命的な文化の欠陥さ。」

中華思想という一言でくられる中国人たち。ピーターやナンシーのように、香港という曲がりなりにも中国の外で生きてきた彼らには、冷静な視点が育まれている。日本人も同

じかもしれない。日本の外にいただけで、今まで気がつかなかったものが見えてくる。修平はそういう世界に身を置いている。フリーハンドの思考が赤い国境線を越えていく。人間関係は際限なく広がる。

修平がふとつぶやく。

「このまえ、隣の広東省で竹の花が咲いた。新聞に載っていたら？」

「うちの新聞よ。」とナンシー。

「半世紀に一度しか咲かないらしいね。」

「そう。竹は敏感だから、大きな環境の変化を事前に微妙に予覚するんですって。身がひきしまって、筍が地下茎から出てこなくなってしまうの。だから種の保存のために無理やり花を咲かせるそうよ。」

ローマンが興味深そうに聞く。

「この前は、いつだったんだい？」

「日本軍の大陸侵攻の直前。」

「今度はなにかな？」

ローマンは仕事が気になるらしい。

九十七年を前に、最後の植民地が揺れている。時代遅れのジャンクのあやうさ。．．．．．

リキからは今日も電話が来ない。月曜日にオフィスに電話をかけたのはあなたなの？ このままで本当に満足？

今、一人の男がわたしの前にいる。それをあなたは知りたくないの？

：：：

一週間経つ。

修平の同じ仲間がピアからボートに乗り、西貢（サイゴン）へ。

複雑な内海。適当な入り江を見つけて、錨を下ろす。

アイス・ボックスからいろいろな飲み物を取り出す。ナンシーやソフィーの手作りのランチ。

ローマンは甲板でひっくり返っていても、ウォール・ストリート・ジャーナルを広げている。らしくていい。わたしも東京で為替をやっていた、というと、残念そうだった。でも、為替とは違った意味で、旅行会社だって世の中の動きがわかる。今、人や物がどこからどこへ移動しているのか。思惑ではなく、実態が見える。東京の仕事を捨てたことを今、後悔はしていない。わたしがどうしてここにいるのかという、もっと根本的な不安定さのほうが目につく。

今年初めての海が優しい。岸辺に迫る濃い緑の影。南シナ海のけだるい色が今のわたしにはちょうどお似合い。

みんなはスパイス（香料）の話で盛り上がる。わたしが香料に興味があると言ったからだ。以前から香料の歴史や生態系、分布、料理での使われ方など、その種の本をよく読んできた。唯一といっていいくらいの趣味。ナツメグ、丁子（クローブ）、シナモン、コリアンダー、胡椒（ペッパー）。

オランダ東インド会社の栄光と没落。胡椒一オンスが金の延べ棒と交換された時代。インドのゴア、マレーシアのマラッカ、そしてインドネシアの香料諸島。そこで採られた香料を駆使した料理の数々。

ナンシーやソフィーは目を輝かせてわたしを質問攻めにする。修平が提案する。

「本を出そうよ。香料の歴史に始まって、地域の紀行から料理の作り方まで。僕が写真を受け持つからさ。君はその知識をもっと深掘りして文章を書くんだ。」

みんないいアイデアだと言う。

「そんなことできやしないわ。」

わたしは一人弱音を吐く。みんなが励ませば励ますほど気力が萎える。夢のまた夢。そのひとかけらだけでも見させてくれるこの人たち。あえて行動まで起こそうとわたしの背中を押す修平。

帰りのボートで修平が言う。

「見直したな。ただの仕事虫かと思ったら、すごい世界を持ってるじゃない。」

「ただの遊びよ。人より少し知っているだけだわ。英語だって下手だし。もっと上手だったら、いろんな香料のエピソードをみんなに話してあげられるのに。」

修平がアパートまでわたしを送る。二人とも疲れきっているのに、ずっと喋り通し。

エントランスのところでわたしが振り返る。

「ありがとう、今日は。楽しかった。この前も。いつもすごく楽しい。」

修平がすこし笑う。なんとなく間が悪くて、気の利いた言葉を探しているわたし。修平がそのすきにわたしの唇を盗む。ほんの数秒。男の鼓動が体中に染み渡るような気がする。目の前に真っ白な世界がさあっと降りてくる。修平が唇をわずかに浮かせて言う。

「悪いけど、あなたを部屋に入れるわけにはいかないの。」

わたしは思わず笑い出しそうになる。

「それはわたしの言うことでしょ？」

「きみのかわりに言ってやったんだ。」

修平がもう一度キスをする。わたしは自然に彼の肩に腕を回す。甘く、沈んでいく理性。・・・・・・・・

一人の部屋。ライトをつけるのが惜しいような余韻。恋の予感。誘惑の匂い。まだ不確定なわたしという存在。いったい誰にとってのわたし自身なのか。

夜半、リキが突然やってくる。

長く出張に行っていたらしい。ほかに話もない。どぎまぎしているわたしを、リキはいつになく乱暴に扱う。一ヶ月も体を合わせていないからだ、とわたしは思い込む。ボタンが飛ぶ。Tシャツの生地が悲鳴をあげる。わたしは荒々しくベッドに放り出される。

「もっと優しくしてよ。」

わたしは安っぽい抵抗をする。リキはおかまいなく思いを遂げようとする。わたしはたまらず泣き出してしまふ。子供のように。彼が入ってくる。なにも感じない。『好きだって

言って。愛してるって言うてみて。』あなたには見えないもう一人のわたしが叫んでいる。あなたには聞こえない。……

わたしが二度目の涙を目に浮かべる頃、リキは妙にさっぱりした顔で、煙草を手に行っている。東京にいたころをふと思い出す。あなたの腕枕。相手を気遣って、体を動かしたいのに我慢してた。じつは二人ともそう思っていたことがわかって大笑い。

現実に戻る。出張の話をおもしろおかしくする。わたしはベッドにだらしなく横になったまま、それをただ聞いている。あなたは冷蔵庫を開けて、買い置きのサンミゲルを探す。このままシートになってしまいたい。……

修平と二人で会うようになってから、約一ヶ月。

わたしの中でなにかが始まっている。

滯はわたしが修平のことをなにも言わないので、行間を読むような眼差しでわたしの一言一言を注意深く逃すまいとする。

わたしはまだよく知らないベトナム料理のレシピの本を買う。気がついたことをノートに書きとめる。どうせ趣味の世界。無責任でいられる楽しさ。それに自分の本をつくるというクリエイティブな刺激。

為替の仕事に戻るかはまだ自分でも決めかねている。ただなんとなく中断したような悔いがないわけではない。日系の証券会社ディーラーのアシスタントを募集しているかしら？

七月も半ばを過ぎて、力との関係はいよいよ自然消滅するのかな、と思い始める。少しそれを期待している自分に驚く。修平とうまくやっていると自信はない。きっと修平のほうがわたしに飽きるに決まってる。

すぐに体を許してしまったために、ただそれだけでしかない関係と、はじめに友達になってしまったために、それ以上のレベルにどうしてもなりきれない関係。わたしは二つのあいだで揺れている。

その日、リキから電話があった。夏休みをいっしょに過ごそうという。インドネシアのバリ島。赤道直下の熱帯雨林。

あまりにもメジャーな観光地。不思議なことに、わたしはまだ行ったことがない。おびただしい家族のフライトやホテルの予約をやってきたけれど、わたし自身、足を踏み入れたことがない。なんだか胸が騒ぐ。よくもわるくも、きっとこれはわたしにとって一つの転

機になるような気がする。

八月。夜、しばらくカンボジアに出張に行っていた修平から電話がある。夏休みはどうするのか、と聞く。わたしは答えられない。彼はいっしょにインドのゴアに行かないか、と言う。とうとうわたしは正直に、リキとバリ島へ行くことを告げる。数秒の沈黙。耳が真っ赤になるほどの緊張。

「お願い。わたしのこと、信じて。」

わたしに言える精一杯の言葉。

修平は少し気を取り直したように言う。

「わかった。君のことだ。バリ行きを教えてくださいくらいだから、きっと考えがあるんだろう。行っておいでよ。ゴアは、また今度にしよう。」

百回のごめんなさいと、百一回の言い訳。天使の本にそう書いてあった。

修平が貸してくれたルイス・ミゲルの古く甘いボレロが何度もリピートしている。・・・・・・・・

∴∴∴

旧暦のお盆。わたしは一週間の休みをとった。

バリ行きは、リキとわたし、そしてリキの知り合いの商社勤めの夫婦。年齢もほぼ同じ。その夫婦はもうじき離婚する。日本への帰任も近い。最後にいっしょに旅行をしようということらしい。

離婚する夫婦は一応の結論に達してから一年が過ぎていた。それでも二人は香港のアパートに同居しており、不思議なことに離婚すると決めてからのほうが、生活はずっと円満に流れていったという。

夫婦特有の甘えが消えた。他人になるとかえって遠慮が出て、お互いの気遣いが日常の行き違いや不協和音を柔らかく包みこんでしまう。

もうすぐ日本に帰ったら、ほんとうにこれで離婚してしまうのだろうか、と奇妙な気持ちにさえなるといふ。ときおりどちらともなく、『もしかしたら、離婚しなくても大丈夫かもしれないね。』と言うこともあったが、そのたびにかえって気まずさが残ってしまうらしい。本当は、その不安を感じる時、きっと愛のごく近いところまで来ているに違いない。そうでなければ、人間という存在はあまりにも哀しい。それだけのものではかないとは、わたしは思いたくない。

バリ。赤道の誘惑。致死量の熱帯。原色という魔性。

わたしたちは、海にも、密林にも出かけた。かつてないほど、昼間のわたしははしゃいでいたと思う。ほかの夫婦がいたから？

どうもそれだけじゃない。でも、ホテルに戻ると、二人はなんとなくよそよそしい。おぎなりの愛撫。醒めた抱擁。わたしもただ体を任せているだけ。はっきりとわかる。今終わろうとしていることが。

最後まで本音を言おうとしないリキ。わたしもずるい。でもあなたはもっとずるい。それであなたはわたしを傷つけまいとしているつもり？ それともまだ都合のいい女としてキープしたい？

わたしは十分に痛んでいる。別にあなただけのせいじゃない。黙っていればあなたがいつか自分に復讐されるのに。それがわからないの？

明るい緑の芝生。白壁に影を落とす椰子の木立。世界は眠っている。

最後の夜。食事の後、ほとんどわたしたちはほとんど何も話していない。滞在中、いつになく快活な毎日が続いていただけに、最後の数時間は言葉がなくなってしまう。どちらもこの沈黙を壊したくなかったのかもしれない。

「僕は仕事を変えようかと思ってるんだ。」

ようやくリキが口を開いた。

「あなたは大丈夫。きっと何でもやっていけるわ。」

「これからどうする？」

「わたしたちのこと？」

「うん。」

「あなたは二人でやっていける勇気がある？」

返事はない。

「でも・・・」

リキはやっとの思いで言う。

「でも、いつまでも僕たちは変わらないと思う。」

「そうね。わかっているのはそれだけね。あなたとどこでいつまた会うかわからないけど。」

結局、なにも変りはしないという気がする中で、わたしは激しく変化を求めている。リキとの会話は、ほとんど上っ面だけの言葉。彼も核心に迫ることを話さなかったけれど、わたしもそれは同じ。そんな裸の心をぶつけあうような関係は、もうそこには無いと気づいていたから？ わたしの乾いた肉体は、今までにない夢を見ようと、必死に理性や現実というものに抵抗し始めている。

静かな夜。軽やかな星のささやき。渚が聞き耳を立てている。

ベッドの中。リキの腕がわたしの体を撫でていく。わたしは背中を向けている。リキは自分のほうにわたしを向けようとする。わたしは目を閉じたまま、『ごめんね』とつぶやく。力の腕が止まる。あとは椰子の葉に風がそよぐ音ばかり。・・・・・・・・

:::

香港に着いたその夜。わたしは一人の男に会いたかった。荷物もそこそこに、わたしは修平に電話をかける。修平は、明らかにそれを待っていた。でも同時に当惑もしていた。

「わたし、決めたの。どうしてもあなたと話がしたくて。今日とは言わない。明日でいいわ。会いたい。話したいことがたくさんあるの。今のわたし。それにこれからのわたし。」

修平は、バリで何があったのか、おおよそ想像はしていたみただけけれど、このときのわたしの電話で、それがはっきりとわかったらしい。わたしの精一杯の選択を、彼はきっと信じてくれる。

荷解きをしているうちに、わたしは湧き上がる感情を抑えることができない自分に気づく。ほかになにも考えることができない。わたしは発作的に、『やっぱりあなたに今会いたい。』と思い切り、すぐに部屋を出る。タクシーでハッピー・バレーまで。修平のアパートは競馬場のすぐ近く。ナイトゲームの明かりがまるで日中のようにあたりを照らす。

タクシーを降りて、路面電車が通り過ぎるのを待つ。いらいらして立っているわたし。渡ろうとしてかれの部屋を仰ぐ。低層のビル。彼は二階。

ふとカーテン越しに修平のシルエットが浮かぶ。わたしは思わず息が弾む。そのとき、もう一人のシルエット。小柄な女性。カーテンの隙間から、ほとんど服を身に着けてないのがわかる。わたしは立ちすくむ。その女性は修平にしがみつくようにして何かを訴えている。ちらりと顔が見える。濡。．．．．さんざん濡が男の胸を叩いた後、彼はやさしく抱きしめる。

濡はようやく落ち着いて静かに抱かれている。わたしは打ちのめされたようにただ呆然とその様子を見つめている。

ただ、ここにいたらいけないだとそれだけを思い、アパートへ帰る。頭の中が真っ白になる。わたしはいったいなにをしようとしていたのだろうか？ 皮肉な現実。投げ出したくなるような自分の安っぽさ。甘すぎるガード。やっぱり遊び？ いや、そうはとても思えない。思いたくない。きっと事情があるはず。濡のことだもの。なんだってやってのける。でも修平は受け入れるの？ そんな濡のどこがいいの？ たぶん濡は捨てられる。それ以前に修平は相手になんかしていない。そう信じたい。．．．．．

寝付かれない。とても信じられない光景がまぶたに焼き付いている。窓から見える摩天楼の夜景が冷たい。

翌日わたしは修平との約束をすっぽかす。とても会えない。自分がなにを言い出すか見当もつかないから。もう十分に見苦しい。会って取り乱すなんてもうたくさん。

夜、修平から電話。

「ひどいな。すっぽかすなんて。どうしたの？」

「わたしね。．．．タベあの後あなたのアパートへ行ったの。．．．」

それだけで十分だった。

「あなたがわたしを今でも同じように思ってくれるか聞きたくて。もういいわ。わたしの

出る幕じゃないみたい。……」

「あれは誤解だよ。」

修平も気まずそう。もうなにも聞きたくない。信じられる最後の望みを失いそう。

「もういいの。よく考えてみるわ。子供じゃないから。バリに行ったのもわたしの身勝手だし。……」

修平は一切、弁解しない。

電話を切った後、わたしはなぜもっとちゃんと問いたださなかったのか、と悔やむ。納得のいく答えを聞くべきだったのに。もっともらしく、ものわりのいい大人の女なんておおよそ意味がないのに。以心伝心なんてウソ。やっぱり話さなければなにもわかりはしない。それを上手にまとめてしまったわたし。

たかが涙。当てにならない自分へのいたわり。それでもその涙を信じたいと思うときはある。大事なタイミングをはずした悔い。もっと自分に合った男は世の中にいるかもしれない。でも誰も愛せないような自分が怖い。……

日常が再び流れていく。濡がどことなくよそよそしい。何か彼とのあいだであったの？ それともわたしに対する気おくれ？

修平からはときどき電話がある。わたしたちのことには一切触れない。彼はただ、わたしがわたしらしく輝くことを考えてくれる。香料の本のこと。たまに会えるようになる。わたしは直感する。この男と濡はもう切れている。もしかしたらなんでもなかったのかもしれない。濡のこと、猛烈なモーションをかけてみて、勝手に自爆したのかもしれない。

夏がゆっくりと遠ざかっていく。

ある日の週末。修平からアパートに電話。彼もわたしの真似をして、南洋の風景のスケッチを描いているという。香料の本のために。わたしが試しに書いてみた文章のうち、丁子（クローブ）の生態のくだりを聞いてもらう。

かわりにと行って、修平が描いているスケッチのことでわたしにたずねる。どうしてもその色が浮かばない、と。『何の色？』『風。……風は何色？』写真は撮れても、スケッチが描けない。この男はきっと女に、抱いてほしいと言える。男の質の高さとはたぶんそういうもの。逆に自分で立てないようなつまらない女に、いったいどの男が必死になるだろう

う？

十月。香港で一番いい季節が始まる。乾燥した空気。快晴の続く毎日。暑くなく、寒くなく、爽やかな亜熱帯の奇蹟。

滯が辞めていく。わたしとは仕事以外ではほとんど口もきかなくなっていた。また外資系の旅行会社で働くらしい。わたしにも日系の証券会社から為替のディーラーのアシスタントをしないかと誘いが来る。修平は、一度不本意に中断したキャリアなんだ。自分にとってそれがどういう価値のあるものか、ないものか。確かめてみたらいい。とわたしの背中を押す。

：：：

奈々と飲茶をする。

「キャセイ航空で日本人スチュワーデスをものすごくたくさん採用するらしいわよ。なんでも全部で三百人とか四百人とかになるみたい。」

「不況が長かったから、日系の航空会社もずっと採ってなかったじゃない。前はキャセイでも日本人はせいぜい百人くらいだったかしら。」

「葉子、最近どうしたの？ ずいぶん綺麗になったよ。」

「そんなことないわよ。」

「本当だってば。もうすぐまたディーラーの仕事、手伝うんでしょ？ どんな女の人かって、あっちじゃ噂で持ちきりみたい。わたしが知ってる人たちからもあなたのこと聞かれたもの。知ってる人の話だと、曰、あなた、いい女なんだってさ。」

わたしは思わず噴出す。グズでドン臭いわたしのどこがいい女？

そう言えば、ずっと関係の切れていたりキからも最近連絡してくることがある。なんとなく寄り戻したいようなニュアンス。昔の男にもう一度抱かれる？ あなたも噂で踊らされるの？ それともどこかでわたしを見かけて、なんとなく惜しくなったの？

目先の誘惑で、思い出の中の懐かしい部分まで汚れていってしまうのに。

だからわたしはもう振り返らない。『君だって、愛してるとは言わなかったじゃないか。』

『聞こえなかったの？』・・・・・・・・

：：：

修平が出張に行く。今度はタイからカンボジア国境へ。イギリス人の記者といっしょ。インドシナ半島を薙（な）いでいく狂熱の嵐の中へ入っていく。

一時はカンボジアの内戦から逃れて百万を超える難民がタイ領内へ流れこんだという。タイの貧しい農民たちは、居座る難民といざこざが耐えない。その間で、悪魔のような商売が生まれている。金持ちを手引きし、不法流入難民の小さなキャンプを襲う人狩りのゲーム。殺戮と強姦。一部の商品として堪える女はバンコクやハジャイに売られていく。修平はそれをスクープしにいく。

「もっとも、有形無形の圧力がどこからかかかって、ボツになるかもしれないけどね。」

と、苦笑い。この男の先が見えない魅力。住んでいる世界が違いすぎる危うさと不安。わたしがあなたに何もしてあげられないと思ってしまう哀しさ。

リージェント・ホテルのカフェで最後の数時間を過ごす。暮れなずむ香港島に満艦飾の夜景が始まる。香港は、九龍から見たほうが綺麗。天井まで届く一枚ガラスにあなたの顔も映ってる。バンコク行きの最終便が迫る。

修平はおかしな冗談ばかり。わたしは心の中にわだかまっているその事を言い出せない。とうとう最後まで聞かずじまい。今度こそ帰ってきたら言おう。わたしたちが今、お互いにどこにいるのか。性懲りもなく同じことを繰り返すわけじゃない。この年齢にもなれば、気がつく相手に家族がいることが多い。嫌な言葉だけど、不倫という状況はかなりの確率で避けて通れない。それが駄目だなどとは思わない。ただ、あなたは偶然そうじゃない。この出会いに、一度はくじけそうになったけど、本当に大切にしていっているのか、確かめたい。でも今のあなたはそんなことどうでもいいみたい。

あの夜の濡とあなたはいったいなんだったのか。なぜ弁解もしないで、ずっとわたしと距離を置いたまま、それでもずっとわたしを励まし続けるのか。何も期待しないであなたは女をどうして愛せるのか。なにも言い出さないあなたに、わたしはそれを聞いてみたい。今のあなたはまるでそんなことには興味すらない様子。もう時効だなんて思ってるんだったら、大間違いよ。あなたが以前言っていたことを思い出す。

『日本人は愛が胸にあるというイメージが強い。アメリカ人に聞いてごらん。人にもよるけど、たいていが自分の頭を指すね。彼らは愛を感情とは思っていないらしい。好き嫌いの感情とはどうも一線を画しているらしい。つまり、もっと理性的な、考えるもの、意思のようなものだと思っているみたいなんだな。』

それで、あなたは今、どう考えているの？ああ、もう時間がない。・・・・・・・・

：：：

一週間、修平から連絡がない。

正式に旅行会社を辞める。証券会社に入る前に、アパートも移る。こまごまとした手続きに追われる毎日。

奈々は絹のアイデア商品が結構軌道に乗ったとって大はしゃぎ。わたしに義兄の会社へ来ないかとしつこい。わたしにその器量はない。

佳代が一度新しいアパートへ遊びにくる。イヴリンに香港女性の恋人が出来たと言う。

「男も女もしょせん同じね。」

佳代は目を赤くする。ブラウスの胸のところに彼女の涙がいっぱい広がっていく。

ベリンダはメイドの仕事を投げ出した。自分の女としての商品価値に目覚めてしまったようだ。今は、灣仔のリップスティックという GOGO バーに出ているらしい。お立ち台の上で、レオタード姿で踊っている。客がついて一回寝れば、マニラでは大学出の事務職の三倍の稼ぎにはなる。ビザが違う。ベリンダはそのリスクを敢えてとる。『わたしをお許し下さい。仕方がないんです。』と毎日十字架やサントニーニョに懺悔を繰り返しながら、その後鼻歌まじりにサイドラインへ流れていく。・・・・・・・・

：：：

十一月。海をはさんだ隣のマカオでは F3（フォーミュラ 3）のグランプリで沸き返る。

わたしは無我夢中でディーラーの仕事に打ち込む。ようやく慣れてきた。実際には債券ディーラーのアシスタント。それでも市場という刺激の坩堝には変りがない。あとはその日の市場コメントを書いて東京の本店に送る。新しい日常がわたしをいつしか鈍感な生活に押し戻していく。

ある土曜日。アパートに電話がかかる。聞き覚えのある声。わたしは意味もなくほとんど泣き出したくなるような気持ち。

「修平？ 今どこにいるの？」

声が遠い。雑音もする。ホテルのフロントあたりで国際電話をかけているらしい。

「今ね、アランヤプラテートなんだ。」

「どこですって？」

「アランヤプラテート。タイだよ。もっとも、カンボジアとの国境だけどね。河を渡ればポイペトだよ。」

国境の町。混乱と無法。焦熱のジャングル。死臭と憎悪の息遣い。

「これからまた出かける。車が、・・・来たみたいだ。アパート、変わったんだね。君をつかまえるのに苦労したぞ。ところで出かける前にどうしても言っておきたくてね。」

わたしの心は逸（はや）る。切なさで胸が押しつぶされそう。

「滯ちゃんのことだけど。・・・」

「もう・・・いいわ。」

修平は言葉を飲み込んだようだった。

「いいの、別に。」

うそつき。よくなんかない。でもそうとしか言えない。

「わたしがグズだっただけよ。」

「違う、そうじゃないんだ。聞いてくれよ。」

ジープのような音が聞こえる。にわかになんかの声で修平の周りが騒がしくなっている。

「こんなこと、今まで思ったこともなかったんだけどな。・・・今度はどうやら違うみたいだ。」

「なにが違うの？」

「正直言って、怖くてね。現場が。君に会いたいんだ。・・・失うものができたらしい。」

修平の声がかすれる。言葉が続かない。わたしの喉も渴いている。ずるい。そんなのずるい。こんな状況であんまりだわ。

「ああ・・・俺はいったいなにを言ってるんだ。」

修平が受話器の向こうで自己嫌悪に陥っている。地響きのような鈍い音が聞こえてくる。

「何、今の音？」

「迫撃砲だろう。カンボジア政府軍の乾季攻勢が始まってると話だ。クメール・ルージュを攻めたててるのさ。」

クラクションがけたたましく鳴る。修平を急かしているらしい。わたしは思わず口走る。

「はやく帰って来て！」

「なんだって？」

声はますます遠くなる。

「無茶しないでって言ってるのよ。」

「聞こえないよ！」

「好きだって言ってるの。わからずや！」

喧騒だけが聞こえてくる。わたしは急に不安になる。聞こえなかったんだろうか。

「修平？」

「ちゃんと聞こえてるよ。えへへ。必ず帰る。だからいい子にしてるんだ。今のを忘れるなよ。」

受話器の向こうに修平の嬉しそうな顔が見える。

突然、凄まじい大音響が聞こえてくる。

「修平！」

わたしはもう泣いていた。

「政府軍もへたくそだな。クメール・ルージュと、こっちのタイ陸軍を間違えて誤射して。」

馬鹿・・・馬鹿！・・・わたしは鼻水まで垂らしているっていうのに、なんてひどい男。

「じゃあな。クリスマスまでには帰る。それと、・・・カンボジア料理の美味しいやつ、レシピー手に入れたよ。難民から教わったんだ。楽しみにな。また香港で。切るぞ！」

「うん。・・・気をつけて。・・・」

わたしはもうほとんど声が出ない。体中が震えていた。

ガラスの靴なんてわたしにはない。緞子（サテン）の靴がお似合い。裸足ですら構わない。そう闇雲に思っていた。大地の微熱が感じとれるように。

今まで開いたこともないサウス・チャイナ・モーニング・ポストに毎日目を通す。ジャーナリストの死者が世界で年々増え続けている。彼の名はない。そのうちに国連キャンプや非武装地帯への誤射が止む、と出ていた。ほっと胸を撫で下ろす。

手紙が届くようになる。

アランヤプラテートから二通。戦況の様子。ジャーナリズムの中立という幻想と、誰もそうは許してくれないという現実。敵と味方を敢えて選択していかなければならない恐怖。・・・最後に必ず一つは、タイ、カンボジア料理のレシピーが書いてある。コリアンダーを食べると、マラリア蚊にやられないそうだ、だから自分は毎日臭いコリアンダーを山ほど食べている、と面白おかしく付け加えてある。嫌よ。『慕情』みたいなラストは。結局、男が死んでも、手紙だけが後から後から送られてくるなんて。

ふと蘭の花の水を取り替えてないのに気づく。新しいのにしてあげなくちゃ。そうすればあの人がちゃんと帰って来れるような気がする。

クリスマスを前にしてビクトリア海峡に面したビルというビルにいろいろな絵のイルミネーションが灯る。

香港の空気が一番透き通るころ。わたしも透き通っていく気がする。
心地よい軽さ。背伸びも気負いも今はない。香料の分布図が出来上がる。

エピソードを書き始めよう。あなたが帰ってくるまでに、どこまで書けるかな。わたしたちが一体どうなっていくのか、それはわからない。でも今のわたしなら、フリーハンドで何とかやっていけそう。

旅行会社のほうから『戻って来ないか』とラブコール。給与をぐっと引き上げる、という。あの仕事のほうが正直言って面白かった。いろいろな人に会えたし。

リキがまたしつこくアプローチをかけてくる。どうしちゃったの？ わたし一人しか追いかける女がないの？ けっこうアマチュア。いつだったかしら、『眠れる豚』とはよくも言ってくれたわね。おあいにく様。まったく失礼しちゃう。

わたしは人の間に落ちていかないようにしよう。愛のための愛でしかないわたしはもうやめよう。

存在をあまり重くみないように。ほんとうは何もないということを思い出そう。
人間にとって必要なのは二つだけ。太陽の光と冷たいレモネード。

不安はまだ残っている。たぶんこれからもずっと。世の中はまるで海のようなもので、水に浮力があることを信じられない人は、必死にもがいて溺れていく。それを知っている人は、体の力を抜いて、自然に水が浮かせてくれるのにまかせる。
どこの仏教徒だったか、そんなことを言っていた。

レーン・クロフォードのバーゲンが始まる頃、修平からもう一通届く。バンコク発信。冗談ばかり並べてる。最後に、香港に着いたら空港で電話をくれると書いてある。

今度だって失敗するかもしれない。でもいい。もう一度傷ついても、憧れや郷愁にいつまでも変らない心ときめき。そんな恥ずかしい過去ならいくつあっても構わない。そう思えるようになる。

正しくなければいけないとか、良くなければいけないということは、けしてない。そうあるようにしかわたしはなく、そう生きるよりほかはない。

たいせつなのは、わたしがその人に、わたしを愛する勇気をあげること。そしてわたしを豊かにする人。その人が今、ひとり帰ってくる。本当にあなたはそう？

アパートでナツメグのスケッチを描く。こういう部分に写真を使うのは止めよう。彼には悪いけど。図鑑にあるような絵で仕上げたほうが、よりエキゾチック。あなたは怒るかしら？

そのとき電話が鳴る。わたしは切なくて、もう泣きそうな顔。慌てて受話器を取る。空港のアナウンス。雑踏の気配。『もしもし？』一人の部屋に、わたしの声だけが広がる。すると向こうであなたがわたしを振り返る。・・・・・・・・・・・・・・・・

イレーヌ

零れ落ちた記憶が、どうしても潮風に馴染もうとしない。

そんな経験はきっと誰にでもあることなのだろうか。いったいどこからが現実で、どこまでが幻覚なのか、今でもまだ定かではない。

七十年におよぶ時空を、ほんとうにわたしは行ったり来たりしたのだろうか。

ヌーメアの町は箱庭のように瀟洒なたたずまいのなかで息づいていた。

ニューカレドニア。・・・赤道まで二十度。ちょうど南回帰線の北側にあたる。

南洋諸島とはいえ、これが本当にグレート・バリア・リーフの沖合なのかと、にわかにしんじがたいほど乾いた気候。いわゆる熱帯の密林は本島の南端か北端の一部を除くと、ほとんど見当たらない。

爽やかな風が始終なだらかな丘陵をわたっていく。木々の緑は枯れたような色をして生気がない。郊外は延々と赤い荒涼とした広野が続いている。

それは二十四年前。わたしは商社に就職して三年目だった。

産業用車両（トラックやダンプ）部門に配属されていた。なにを間違ったか大学でフランス語などを専攻したものだから、当初からアフリカばかりをドサ回りさせられた。今では化石のようなソシュールの言語学ゼミが呪わしいばかりだ。それが今度はどういう風の吹き回しか、このニューカレドニアに出張することになったのだ。

わたしはたまにはいいことがあるものだと言っていたが、いざヌーメアにやってくると、それがどんなに浅はかな期待だったかを思い知らされた。

なにしろ世界第三位のニッケルの鉱山をひとつひとつ歩いて回っては、現場の鉱石運搬状況や使用車両のスペックなどを汗だくになって調査するのである。毎日脱水症状のようになってヌーメアの旧市街にある長期滞在用のアパートマンに戻ると、フランス人やオーストラリア人、そして日本人の若者たちがチャラチャラと遊びまわっている。自分の毎日との落差が激しいだけに、これには意味もなく頭にきたものだ。裸同然の女たちが市内からもうアンスパータ往きのバスや、沖合いのウベア島へ渡るボートに、嬌声をあげながら乗り込んでいく。一方わたしはといえば赤土にまみれ、その日のことしか考えていないメラネシア人の人夫たちや、決められたこと以外は何一つ気をきかそうとしないフランス人技術者たちの間で、神経がぼろぼろに擦り減り、文字通り体を引きずるように帰ってくるのだ。

何が天国に一番近い島だ、とわたしはやっかみ半分吐き出したくなるような思いだった。

その日はようやく最後の日程でモンドールの鉱山事務所で商談を終えたところだった。まだ出張予定の日数は四、五日残していたが、予想よりずいぶんとはかどったことになる。おまけに日本では連休が始まる。

わたしは仕事を切り上げて、悔し紛れのリゾートを決め込むことにした。

わたしはイル・デ・パンも、アンスバータも、ウベア島も、そしてエスカペードやリフー島も、どこへも行ってなかった。一箇所、本島北部のニッケル鉱山ヘジープで行った折り、東海岸にあるヤンゲンという町に寄ったのがリゾートといえば唯一のリゾートだろう。

ヤンゲンは美しいところだった。通り過ぎただけだったが空気の味が違うような気がしたものだ。神秘的な杜と真っ白なビーチ、そして不思議な奇岩城の立ち並ぶヤンゲンは、もう一度休暇で訪れたかったが、ここヌーメアからは四百キロもある。わたしは残った日数を往復で半分も費やすことに抵抗を覚えた。飛行機で行けば何でもなかろうが、なにしろ先日のジープの強行軍が頭からはなれなかったのだ。気ままに近場で済まそうとつい哀しいサラリーマン根性を丸出しにしたわたしは、明日、とりあえずアンスバータのリゾート・ホテルに移り、のんびりするのが一番と易きに甘んじた。

その日はもう夕方近かったこともあり、ヌーメアの旧市街を買い物がてら散策することにした。

旧市街は落ち着いた肌色の壁が目によさしい。火炎樹の並木は真っ赤に燃えて街路に天蓋を張り出している。

オテル・ドゥ・パリ。本当はここに宿泊するはずだったが、何かの手違いで予約が入っていなかった。部屋数が少ないので、わたしはずっと旧市街の奥のアパルトマンに飛び込んだのである。おりしも赤ら顔のアメリカ人のビジネスマンがたくさん逗留しているらしく、大げさなジェスチャーがあたりもはばからずに炸裂していた。出張地で幼稚な日本人に会うのも嫌だが、アメリカ人の騒音のようなおしゃべりにも平行することが多い。

ブロッカー一つを隔ててサン・ジョセフ聖堂が見える。ココティエ広場横のミルク・スタンドで腹を満たし、わたしはぐるりと歩いてみた。市場は閉まっているが、往来のフランス人たちは引きもきらない。

白壁がオレンジ色に染まっていく。焼きたての細長いフランス・パンをもって子供たちが走っていく。植民地風の建物もみんなセピア色に染まっていくこの時間帯は、まるで時間が呼吸するその刻みの間に迷い込んでしまうようだ。

ふとわたしは、アルマ通りを行く一隊の兵士たちに目がとまった。フランスの駐屯軍部隊だろうが、その服装がやけに古びたスタイルだったのだ。メラネシア人の子供たちが隊列

を追いかけていく。式典か当直の交代儀礼のようなものか、わたしにはそんな風にしか思えなかった。おまけにあらうことか隊列を見送るフランス人女性たちまでが、古い映画にでも出てくるようなロング・ドレスを着ているのには驚いた。確かにかなり薄手ではあったが、あきらかに普通ではなかった。わたしはフェスティバルに違いないと思った。そのとき通りがかりの車にクラクションを鳴らされて、わたしは慌てて歩道に戻った。ふとアルマ通りのほうを見やると、もうそこにはさっきの兵隊たちや、古着を着たようなフランス人女性たちの姿は見えなくなっていた。思えば、もうこのときにすべては始まっていたのだ。・・・

なんとなく腑に落ちなかったが、わたしはまた路地を歩き出した。ちょうど反対側に骨董屋があるのに気がついたわたしは、通りを横切って店に入った。

その店は観光地だけあって小ぎれいにすべてをしつらえてあった。フランス人のおやじはでっぷり太った五十がらみの男で、けして愛想のよいほうではない。銀製品が多い。何が本物で、どれが偽物かわからないが、こうしたガラクタ然としたものを眺めるのは好きだった。

「なにをお探し？」

おやじは英語で話しかけてきた。

「フランス語でいいよ、社長。」

とわたしがフランス語を使うと、おやじはいきなり相好をくずした。

「いや特別、これといって探しものってことじゃないんだけどね。」

わたしはそう言いながら、店の奥のほうまでゆっくりと眺め歩いた。片隅に古いコインが並べられているのに気づいた。どれもフランやサンチームの類だった。

「一九一八年のコインはあるかい？」

「一九一八年？」

「そう。父親の生まれた年なんだ。今まで出張地に気の利いた土産物がなかったんでね。古物が好きな人だから、生まれた年のコインでも買っていこうかなと思ったんだよ。」

おやじはちょっと考えるようにして、一般のコインではなくメダルならあると言った。奥から取り出してきたのは、銀製の小さなメダルだった。一私人が第一次大戦の対独戦勝記

念に自ら鑄造したものらしい、とおやじは説明した。ずいぶんくすんでいるがしっかりしたものだ。表にはフランスの勝利を称える銘と三色旗をかざした女神が刻んである。裏には息子の戦死を悼む思いと孫の誕生を祝う喜びが相応の言葉で表現されてあった。わたしはやるせない気持ちと同時に、それでも続いていく人間の命の不思議に触れたような感じがして、すぐ買うことにした。

「なにか、いいことがあるかな？」

店のおやじにもきっと気持ちが通じたのだろう。にっこり笑うと彼は力強くうなずいた。悲しいことも、嬉しいことも、素直な気持ちの中に誤りはない。わたしはなにかとても幸せな気分になり、メダルを宙に放り投げながら表へ出た。が、すぐに思い出して半身だけ店の中につっこみ、おやじにたずねた。

「ところで、今日か明日はなにかお祭りでもあるのかい？」

「いや特別はないがね。どうして？」

「仮装行列みたいな人たちを見かけたからさ。」

.....

わたしはココティエ広場を旧市街のほうへ向かった。もうすっかりたそがれた旧市街はそれだけでなく琥珀色のフィルターを通して見るようだった。

わたしの新しい部屋は二階で、すぐ路地をはさんで古色蒼然とした修道院を見下ろすことができる。いわれはわからないが、その修道院はギーと呼ばれていた。

あたりは真っ暗になっていたが街灯がわずかに前庭を照らしていた。もとは修道女がたくさんいたらしいが、今ではまったく使われていない。石造りとはいえ、かなり痛みがひどいようだ。それでも日曜日にはサン・ジョセフ聖堂から人が来てきれいに掃除している。わたしはどうも、気が抜けているようにしか思えないビールを飲みながら、ニッケル鉱山での出張内容をまとめた。明日からは思い切りはねを伸ばすのだと思うと時間のたつのを忘れた。東京に帰ってからレポートをまとめるなんてご免だ。今夜のうちにやり終えてしまおうと思うわたしは、自然にペンに力がこもるのを感じた。

どのくらいの時間がたったのだろう。ビールが足らずとうとう安ワインにまで手を出していた。

わたしはおおかた書き終えて、ようやく一息いれた。窓から外をうかがうと眼下にぼんやりと例のギーの修道院が中庭とともに街灯の淡い明かりに浮かび上がって見えた。あまり

気持ちのいいものではない。人通りもまったくなかった。

ごろりと硬いベッドに横になったときだった。あたりをつんざくような女の悲鳴を聞いたのだ。空耳だろうか？ わたしはベッドに身を起こし、じっと耳をそばだてた。ややってもう一度宵闇を貫く一筋の悲鳴が再びわたしの耳に飛び込んできたのだ。

わたしは酔いもいっぺんに醒めて窓に駆け寄ってみた。街灯の調子がおかしいのか、あたりは枯れたような色合いににじんで見えた。そして誰もいないはずのギーの修道院から一人の白衣の修道女が飛び出してくるのをわたしははっきりと見たのだ。わたしは動くこともできず、その数秒間のドラマをじっと見守った。彼女のすぐ後からべつの修道士が飛び出してきた。ふたりは石畳の中庭でしばらく揉みあっていた。男はあきらかにナイフを手にしていて。そしてなにごとかを叫びながら、倒れこんだ彼女を何度も刺したのである。悲鳴はやがて聞こえなくなり、白衣だけが黒ずんだ血に染まっていった。男は呆然としていたが、やがて気を取り直したように通りへ走っていった。後にはただ街灯に照らされた真夜中の惨劇が浮かび上がっているだけだった。

わたしはふと我にかえると、すぐ一階の Salle（居間）まで駆け下り、ギャルソンに事の次第をまくしたてた。そして、二人で表へ飛び出したのだ。路地を横切り修道院の門へ向かったが、錠がかかっている入れない。わたしはギャルソンに体を押し上げてもらい、転がるように院内に入り込み、そのまま中庭へ駆けた。

しかし、そこにはたった今、刺し殺されたはずの修道女の姿がどこにも見当たらなかったのである。あとからやってきたギャルソンは怪訝そうな顔をしてわたしを見るのだった。幻覚だったのだろうか？ 今日は夕方から変なものばかり見る。

「自信がなくなってきたよ。自分がアテにならない。」

ギャルソンが笑った。

「アテにならないって？ あの月みたいだね。」

「そうだね。頼りないもんだ。青白い月の光とっしょだ。」

「よくあることだよ、ムシュー。疲れていたのさ、きっと。夢でも見ていたんだろうよ。」

わたしは反論する元気もなかった。

ギャルソンが帰ったあとも、しばらくわたしは不思議な思いを捨てきれず、その場に立ち尽くしていた。・・・

やがてあきらめがついたわたしは、アパートマンに戻ることにした。ちょうど表で一人の老人(ガードマンだった)がわたしに声をかけた。

「若いの。隣で人殺しを見たって？」

「ああ、そうだよ。だけど死体がないんだ。誰も信じちゃくれないよ。」

「修道士が修道女を刺し殺すんだろ？」

わたしは仰天した。

「ギャルソンから聞いたのかい？」

「いや、そうじゃないかと思ったんでね。」

「そのとおりさ。よく知ってるね。あんたも見たことがあるのかい？」

「いや、わしは見たことがないけどな。昔からそれと同じのをあそこで見たって人が結構いるんだ。修道院にまだいっぱい人がいたころも、修道女が何人も同じのを見たさ。誰にでも見えるというわけじゃないらしいがね。すいぶん昔、あの修道院が建てられたとき、そんなような事件が実際あったそうさ。今でもときどき出るって話だよ。」

「幽霊かい？」

「さあね。しかしほかに何がある？」

わたしは沈黙した。

「若いの。あまり深入りしないこったね。とりつかれるぜ。殺された女がべっぴんだったらなおさらえらいこった。なあ、あんた。」

老人はいやらしように笑い出した。

「べっぴんだったら、部屋まで引っ張り込んで気持ちよくしてやろうかな！」

わたしは自暴自棄になってそう吐き捨てるようにそう言った。

「こりゃあいい！ そうこなくちゃ！」

老人の笑い方があまりに下品なので、わたしはいつべんに興ざめして部屋へ戻った。窓から見下ろすと、ギーの修道院は何事もなかったかのように静まりかえっていた。・・・・・・・・

翌日わたしはさっそく図書館へ行ったり、新聞社をたずねたりして、その事件のことを確かめようところみた。アンسバータでの休暇などどうでもよくなっていた。

しかし、かつて修道院で起こったという殺人事件については、どこでもそんな話は聞いたことはあってもよくは知らないというのが通り相場だった。古い記録にも事件のことは載っていなかった。

ココティエ広場横のカフェで妙にココナツオイルが鼻につくフランス料理もどきの軽食をとりながら、わたしは何度も昨夜の情景を思い浮かべてみた。

メラネシア人たちがペタンクをして遊んでいる。熱帯偏東性の貿易風がサント・マリー湾から市街を抜けてモーゼル湾へ抜けていく。

ふとまたあるはずのない日常が見えてきた。日傘をさした婦人や子供たちが白いレースのリボンのように通りを横切っていくのだ。パナマ帽をかぶり、麻の服を着た男たちがパイプをくわえてその後を談笑しながら歩いていく。

そんな風景は、ない。

わたしに見えたものはずっと昔の映像にすぎない。そのときわたしにはもうわかっていた。今ありもしない時代が、フラッシュバックのようにときどき見えるのだ。

汽笛が聞こえる。人々が波止場へ急ぐ。みんな船を待っていたのだ。薄汚れたシャツを着たメラネシア人の男が台車を引いていく。そしてわたしを突き刺すような目で見ていく。いたたまれなくなったわたしは隣の口ひげをはやした紳士が読んでいる新聞に視線をそらした。二面の上段に太字でセンセーショナルな記事が載っていた。

『マタ・ハリ、銃殺される』・・・いったいいつの話だ？

「まったくとんでもない女だ。運のつきさ。」

その紳士はためいきをついてわたしのほうを見た。

「三ヶ月遅れの新聞でも、まあないよりはましだな。」

独り言のようにその紳士はまた紙面に目を落とした。

わたしは新聞の日付を見た。それは一九一七年十月十六日火曜日付けとなっていた。まだ第一次世界大戦中だ。稀代の女スパイの銃殺刑を報じているのだ。三ヶ月遅れだって？じゃあ今は、一九一八年の一月ということか？

「戦争はまったくの膠着状態ですな。ロシアもだらしない。革命騒ぎで戦争どころじゃな

いようだ。読むかね？」

紳士はわたしに新聞を差し出して言った。

「フィガロ紙が手にはいらなくてね。ル・タン紙でよければ。・・・」

「戦争も、じき終わりますよ。」

わたしは余計なこととは思ったが、ついひとことしゃべってしまった。

「ほう、そうですか。」

「年末にはね。」

紳士はわたしに興味を持ったようだ。

「ジャポネ(日本人)ですか？」

わたしはうなずいた。

「日本も得をしましたね。ドイツ軍は欧州戦線で手一杯なものだから、こっちで連中が押さえていた青島(チンタオ)やポナペをまんまと手に入れたじゃないですか。」

「日本は調子に乗っているだけです。火事場泥棒といっしょだ。あとでひどいしっぺ返しにあいますよ。」

「そうですかね。」

紳士はあまりピンとこないような顔をして首をかしげた。

そのとき、後ろからふと女が声をかけた。

「ボン・ジュール、ムシュー。連れの女と喧嘩でもしたの、ムシュー？」

女は褐色の肌がまぶしかった。

「まあそんなところだね。」

わたしは気を取り直してようやくそう言った。まだ意識が揺れている。

「君は？」

「わかるでしょ。そういうこと。」

商売らしい。昼間からたくましい。

「暑くないのかい？」

「暑いわよ。日本人だって暑いでしょう？ 熱帯に住んでいたって暑いものは暑いよ。ほんとうに北半球の人って変なことを言うのね。・・・ねえ、いいかしら？」

女は隣の向かいの椅子をあごでさした。わたしはどうぞと目で答えた。

「地元の出身かい？」

「ううん。サモアから。両親の代にね。フランス人とのカフェ・オ・レ(混血)よ。」

「なるほど、ハイブリッドってわけだ。」

わたしは彼女の表現が愉快だった。

「名前は？」

「知りたくもないくせに。」

「まあね。」

「イザベル・アジャーニ。」

「素敵じゃないか。」

わたしは、皮肉たっぷりに言った。

「ありがとう。あんたは？」

「ロベスピエール。」

「ダサイ名前。いつまでいるの。革命屋さん？」

ぴったりしたキュロットにシャツを胸のところでリボン結びにしている彼女は、厚化粧さえしていなければわたしもその気になったかもしれない。それにしても暑そうなかっただ。

「あと四、五日の予定だったけど、一週間くらいにしようと思ってる。東京に帰ってもちようど連休なんでね。急ぐことはない。」

「誰と喧嘩したの。恋人、奥さん？」

「きみの商売仇かもしれないよ。」

「ごあいさつね。じゃあ、退散しようかな。夜はメトロによくいってるから、気がむいたら声かけてよ。悪いようにはしないからさ。」

「覚えとく。」

「千フランよ。」

彼女は立ち上がるとおしゃれなハンドバッグを肩にかけて言った。

「ところで、ジャコバン党のだんなさん。・・・仕事、なに？ 食えない学者さん？」

「どうして？」

「だって、やたらに汚らしい新聞を大事に持ってるから。」

驚いたことにわたしは、さきほどあの紳士のくれた新聞をしっかりと握っていたのだ。質の悪い紙はもうすっかり黄ばんでしまい、パサパサに劣化していた。

「誰さ、マタ・ハリって？ ・・・人殺しでもしたのかさ。銃殺なんて、変な話じゃない。ま、いいや。」・・・

わたしは、言葉もなくただその新聞を広げてみた。彼女が悪態をついて立ち去ったのにも気がつかなかった。確かにマタ・ハリの銃殺記事が二面上段に報じられている。わたしは一瞬目をつぶり、ゆっくりと日付のところを確かめてみた。そこには、一九一七年十月十六日とあった。わたしはテーブルを片付けていたギャルソンを呼び止めた。

「ここにいた人を覚えているかい？」

ギャルソンは意味ありげに笑って言った。

「ああ、コセットですか？ 大丈夫、悪い子じゃないですよ。ココット(不良娘)だなんて言う人もいますがね。」

「コセットっていうのか。いや、違うよ。その前に、ぼくの隣に男がいたろう？ 口ひげをはやした・・・」

「男？ 彼女があなたに話し掛ける前に、そこに座ってた？」

「そうさ。」

若いギャルソンは不思議そうな表情をした。

「いいえ。小一時間というもの、このテーブルにはあなた以外、誰も座っていませんよ。」

わたしは力が抜けたように古い、その古いル・タン紙を握りしめるばかりだった。

.....

午後、わたしは真っ赤に燃える火炎樹の間を歩いてココティエ広場を後にした。何とはなしにサン・ジョセフ聖堂に足が向いたわたしは、大伽藍を仰ぎ、冷たい回廊をただぶらぶらとしていた。そこで出会った若い神父から、古手の神父は近くの慈善院に一人いると告げられ、わたしはさっそくそのそこへ出向くことにした。

慈善院はやはり旧市街の中であって、低層階ながら重厚な石造りで、院内にはまるで人がないと思うくらい静まりかえっていた。

小さな窓から南半球の日差しが流れこむ。たまにすれ違う聖職者たちはみなわたしの存在にまるで気がつかないかのようだ。押し黙って行く者。立ち話する者。少年の声が聞こえる。古い賛美歌を誰かが一人で歌っている。石造りの床や柱に染み込んでいくようだ。距離感がなくなったわたしの五感はいくつもの部屋を通り過ぎ、階段を昇り、また回廊を歩いていく。

ふと右手にひとつの小さな部屋が開け放しになっていた。そしてかなり高齢の白人の神父がロッキング・チェアに腰かけていた。気持ちよさそうだ。午後の光がちょうど彼の足元で踊っている。老神父はわたしに気がつくとにっこり笑って手招きした。わたしは誘われるままにその部屋に入った。壁にしつらえた祭壇。木のベッド。開閉式の机。質素ながらも一通りのものがあつた。老神父はそれは小さな、弱々しい声でわたしに話かけた。

「どちらへ？　ここは誰も入れないはずですか・・・」

「失礼しました。わからなかったもので。」

老神父はすべて知りつくしたようなまなざしでわたしを見つめた。

「何か、お聞きになりたいことでも？」

わたしは素直に言葉をもらした。

「旧市街にあるギーの修道院のことで。」

「あそこはもう長いこと使われておりません。」

「ええ存じ上げています。ただ一九一八年にあそこで何があったのか、それを知りたくて。」

老神父はゆっくりと目を閉じ、昔のことを思い出すようだった。

「あの頃は、わたしもまだ二十代でしたからね。いまのあなたよりも若かったでしょう。」

わたしはまだ老神父の名前すら聞いていなかった。それでも彼はずっと昔からわたしを知っているかのように、ごくうちとけた雰囲気だった。

「実はあそこで殺された修道女がいると思うのですが・・・」

「ああ・・・あれはイレヌでしょう。」

わたしはこのときはじめてその名前を知ったのである。

「お会いになったことがおありですか？」

「いえ、わたしは。あの事件のことは知っていますが。」

「彼女は誰に殺されたのでしょうか？」

「あれは・・・けっきょく、迷宮入りでした。かわいそうな娘でした。」

老神父は天井を仰いで大きくため息をつき、黙り込んだ。手がかりはここで失われた。これ以上話していても何も得るものがない、とそうわたしは思い切った。立ち上がろうとしたとき、老神父はまた口を開いた。

「何か、ギーでごらんになりましたか？」

「え？」

それとなく聞かれると、わたしはどぎまぎしてしまった。

「修道院で昨夜、なにか起こりましたか？」

「これは説明しても、誰にも信じてもらえないことですから。残念ですが。」

「そうですか・・・」

老神父はまた大きくため息をついた。

「それで、あなたはどのように思っている？」

「それが・・・わかりません。」

老神父はしばらく窓の外から石畳の様子を黙って見ていたが、ふとわたしを振り返ると、『こちらへ』というように手で招いた。わたしが彼の間近に歩み寄ると、わたしの手を取りその衰弱した手でなにかを握らせたのだった。彼は、しっかりわたしの両手を包みながらゆっくりと言った。

「あなたが、今しなければいけないと思うことを、おやりなさい。・・・」

老神父はわたしに十字(クロス)を切り、柔和な表情で笑っていた。

「さあ、行きなさい。もうここへ来てはいけない。・・・」

わたしはその謎のような言葉をなんども繰り返し心の中でつぶやきながら部屋を出た。立ち去りがてらふと老人のほうを振り返ると、彼もロッキング・チェアに座ったまま、わたしを見つめていた。そして、かすかに微笑むと痛々しいほどかすれた声で言った。

「鉱山(ヤマ)の仕事は体にさぞこたえるでしょう。お気をつけて・・・」

なぜ知っている？

わたしが鉱山巡りをしていることを。わたしは思わず聞き返そうとした。すると老人は笑いながらそれを手で制した。

「お元気で、ムシュー。」

「あなたも。」

老神父はにこやかに、ゆっくりとうなずいた。・・・

わたしは慈善院を出て、サン・ジョセフ聖堂の裏にある丘に上がった。ヌーメア市内から青いモーゼル湾が見渡せた。太陽が呆れ返ったような青空にそしらぬふりをしていた。日

本の若い女性たちが記念写真を撮っている。わたしはベンチに腰かけて、木陰ですっと往來の人々の様子を眺めていた。手の中にはさっき老神父が握らせてくれた古い銀のロザリオが汗をかいていた。・・・

その日、わたしは真夜中過ぎまでまんじりともせずに起きていた。一歩も部屋から出る気がせず、ギャルソンにブーニャを買ってきてもらい、赤ワインを飲みながら夜が通りすぎるのをただ見送った。

ブーニャは地元のカナカ人がよく食べるものだが、その日ギャルソンが買ってきたのは、魚と芋をバナナの葉で包んで料理したものだだったので、味がいささか淡泊すぎた。わたしはそれに胡椒と塩をかけて食べた。

南半球の夜空はさびしい。

ベランダからのぞける天空には星がまばらしかない。北半球の星空がどれほど豪華なものかが思い知らされる。それでも不思議なもので、数えるほどに増えていく星たちにわたしの肉眼は追いついていかない。ある種の予覚に近いものがわたしの脳裏をよぎっていった。それはひとつの流星のように。あるいは忘れたところに吹いてはニヤウリ（薄荷）の木の葉波をもてあそんでいく夜風のように。実際、昨夜と同じ光景が見れるなどと信じていたわけではなかったが、心のどこかに期待していたことも事実だ。路地には人通りがまったくなくなり、わたしはただひたすらそのときを待っていた。

『やっぱり、夢のようなものだったのかも知れない。・・・』

そんなふうに思い始めたそのときだった。

突然、闇を切り裂くようなあの女の悲鳴が聞こえてきたのだ。わたしは修道院の前庭のほうを固唾を呑んで見守っていた。

『次の悲鳴だ。・・・』

わたしは、二回目の悲鳴と同時に彼女の姿を認めるより先に部屋を飛び出した。アパルトマンを出ると、自分でも信じられないような跳躍力で修道院の門に飛びついて、院内に転がり込んだのだ。そして石の階段を駆け上がると、逃げ場を失ってうろたえている修道女に出食わし、しっかり抱きすくめたのである。彼女は年の頃二十歳前後。くっきりとした、しかし、涼しげな顔立ちだった。小柄で、太い眉と大きなひとみが凍りつくような恐怖に震えていた。

「ジャン！ やっぱり来てくれたのね！ あぶないわ、すぐ逃げないと！」

彼女は出会いがしらに抱きすくめたわたしを見て、そう叫んだ。

名前は違う。なにしろ、わたしはどう見ても東洋人だ。ジャンであるはずがない。しかし、あきらかに彼女はわたしの顔をしっかりと見ている。

「ぼくを知ってるのか？」

なにを馬鹿な、と言わんばかりに彼女の眉が曇った。

そのとき、修道院からあのナイフを持った修道士がまるで壁から抜け出るように飛び出して来たのだ。修道士はわたしの姿を目にとめると、その場で立ち止まり、口汚く罵った。

「おまえか！ この女になにをしたか、わたしは全部知ってるんだ。覚えているがいい。このままでは済まされんぞ。この売女め！」

修道士はそう捨てぜりふを残したまま振り返ることもなく走り去っていった。

わたしは気を失いそうなほど力の抜けた彼女を抱き起こした。彼女はわたしの名(といっても、彼女が知っているわたしの名)を何度も呼びながら、激しく唇をむさぼるのだった。休む間もないくらいわたしたちはキスを繰り返していた。わたしは当惑しながらも正直言って悪い気はしなかった。

やがて落ち着きを取り戻した彼女はこう言った。

「ジャン・・・もうだめかと思ったわ。ゴロの村でコレラが流行ってあなたも亡くなって日本人の夫婦が言ってたんですもの。生きてたのね。ちゃんと約束どおり今日迎えに来てくれたのね。ほんとうにあぶないところだったわ。ドーミエに計画のことを感づかれて。彼ったら開所式を前にして当直がわたし一人だけだって知ってたの。それでやって来たんだわ。そうしたら口論になって・・・ああ、どうなることかと思った。それにしてもなんて格好？ 奇妙な服ね。」

わたしは自分にはちょっと大きいLサイズのTシャツに、薄手のジーンズをはいていた。

「これかい？ そうかな。」

「そうよ。少なくとも『いまふう』じゃないわね。いったいどうしたの？」

わたしは彼女が別人と混同していることに気づいていた。一九一八年の彼女の現実と、現代に生きているわたしという現実とが、完全にごちゃまぜになっているんだと気づいていたのだ。

「イレーヌ、・・・っていうんだね？ 悪いけど人違いなんだ。」

「なにを言ってるの？・・・」

彼女はさっぱりわからないといった表情でわたしを見つめていた。

「ジャン、でしょ？ わたしのジャンに違いはないわ！」

わたしは、残酷なようだったが、それは本名ではない、といった。

すると、驚いたことに、彼女は笑いながら、「それはそうよ。わたしがつけてあげたんだから。」と言い放った。いわく、日本人の名前は呼びにくいので、フランス人にはありふれた名前のひとつをニックネームにして、わたしをジャンと呼ぶようにしたのだ、と。しかも、わたしの本名はなにかとためしてみると、こともなげに、「イロシ・オカダ」と言っていたのである。それがわたしの本名だった。Hiroshi の H は、フランス語ではサイレントで、彼らは自然に、イロシと読む。

それでもまだ押し問答はかなり続いた。そのうちに、事態は彼女にも呑みこめていったようだ。

「ぼくは、君の知っているジャン(オカダ)とたぶんそっくりなんだろう。でも、このぼくは君の生きている時代の人間じゃない。別人なんだ。」

「わからないわ。」

彼女はすがりつくようなまなざしでわたしを見つめていた。

「きみは死んだんだ。殺されたんじゃないのか。きみは自分でそれがわかっていないのかい？」

彼女は呆然として立ちすくんでいた。

「・・・わたしはここでドーミエに殺されたんだわ。修道院の開所式の一週間前。いった

「わたしはなにをしているのかしら？」

「どういう事件だったか知らないけれど、きみはとにかく死んだらしい。」

「ええ、一九一八年の、・・・今日はいつ？」

「一九八五年の二月七日だよ。」

「ああ、・・・やっぱり今日なんだわ。・・・」

「あの男は誰？」

「ドームエ？ 修道士よ。サン・ジョセフ聖堂の。あなたとわたしの関係を憎んでいたわ。恐ろしいくらい。」

「それにしても修道士が修道女を男女関係のもつれで殺すとは穏やかじゃないね。ところでイレーヌ。よければ、ぜんぶぼくに話してくれないかな。知りたいんだ。きみが誰で、今夜ここでいったいなにが起こったのかを。」

イレーヌは狐にでもつままれたような顔をしていたが、やがて少しずつ話し出した。わたしは相手が幽霊であるということをすっかり忘れていた。実際、生身の人間となにひとつ変わりはないのだ。

.....
.

イレーヌはフランス領アルジェリア生まれだった。北アフリカだ。フランス人とアラブ人の混血らしい。生まれてすぐ孤児になりカトリック教会に拾われて以来、ずっと修道院で育てられた。十八のとき、このニューカレドニアにミッションとして送りこまれたのだ。殺されたのはその三年後のことだ。ミッションとは聞こえがいいものの、事実上の棄民だった。何の引きもない者、食い詰めた者、ただ誠実で純粋な者は得てして辺境への道をたどる。

長い船旅の後、このニューカレドニアに来た彼女は、たちまち何重もの幻滅を味あわなければならなかった。

島はニッケルの景気で沸き返っていた。しかし土着のメラネシア人やサモアあたりから出稼ぎで来ていたカナカ人のあいだでは、カトリックの伝導が遅々として進まず、イレーヌは大きな壁に突き当たったのである。カトリックという価値観がけして普遍的なものではないことをここで思い知ったのだ。先んじて赴任していた本国復帰の見込みのない先輩格の修道女たちもいよいよのフラストレーションにさいなまれていた。いやがらせや、いじめの類は、自然と一番若くてきれいなイレーヌに集中した。純真なだけ、サン・ジョセフ聖堂の長老たちのウケも良く、かえって先輩の修道女たちのイレーヌへの軋轢は日を

追って激しくなっていた。

労働移民や船乗りはいつも疫病を島にもたらした。コレラやらい病が多い。あるとき南部でコレラが流行った。鉱山労働者、とくに日本人労働者の患者が続出したときである。イレーヌたちはその看護に駆り出された。

明治から大正にかけて、最盛期には数千人を超える日本人の鉱山人夫がこのニュー・カレドニアにやって来ていた。今でも電話帳をめくると、三世、あるいは四世とおぼしきタナカやらサトウやらといった日系の名前がたくさん載っている。そして彼女はジャン(ヒロシ・オカダ)に出会ったのだ。

彼は一般の労働移民と違い、高等教育を受けた鉱山技師だった。二人はコレラ騒ぎがきっかけで恋に落ちた。ジャンの病が癒えてからというもの、二人の逢瀬はエスカレートしていった。イレーヌの献身的な看病のせいか、施設に収容されていた患者たちは誰一人として二人のことを公には口にしなかったようだ。やがて、彼女が『棄民』の自覚から、駆け落ち同然の逃亡に決意を変えていくのに、そんなに長い時間はかからなかった。

二人は人の目を盗んではモン・ウェントロの丘や植物園や、ときには建設中のギーの修道院で愛し合った。そしていつしか鉱山で得た蓄財を元手に、二人でブラジルへの移民の計画が進んでいったのである。

一人の男の出現が、恋と、新しい自由な生活と、人間の開放のすべてをいっぺんに彼女にもたらしたのだ。

神は、もっとも遠い人々のために存在していた。そして彼女は生まれてこのかたずっとミッションに携わりながら、実はもっとも神から遠くで生きてきた一人だったのかもしれない。

二人は沈黙を守って『その時』を待っていた。ブラジルへの移民は現実性があったようだ。ジャンの叔父がすでに広島あたりからブラジル東部に入植していたからである。叔父はピメント(赤唐辛子)の農園をまがりなりにも経営していた。

すべての手続きや準備に一年をかけた。周到な計画だった。そして南回りの船の手配まで終えたその日、決行というその段になって男は再びコレラに倒れた。当直で造りかけのギーの修道院に泊り込んでいたイレーヌはその知らせを受けて愕然とした。

船はまたいつでも手配できる。しかし男の命は一つしかない。連絡がままならない中でイレーヌは取り乱した。

その夜、かねてからイレーヌに惹かれていた若い修道士のドーミエがギーを訪れた。そして、日本人との罪深い行為を責め、自分との関係も強要に及ぼうとした。口論の末、イレ

一又の一言がドーミエに超えてはならない一線を超えさせることになった。

イレーヌはすでに日本人の子供を宿していたのである。

そして、あの夜の凶行となった。

ナイフは現場にあった建築資材用のものだ。

「わたし・・・あなたに最後まで言わずじまいだったわ・・・」

イレーヌはわずかな街灯の下でそうつぶやいた。

「出航の日、波止場を出てから驚かせてあげようと思ってたから。それを思うと出航の日がどんなに待ち遠しかったかしら。指折り数えて、とても楽しかった。でもドーミエが・・・。彼とは慈善院の仕事やバザーで知り合いだったの。わたしに夢中で。紙切れに陳腐なことを書いてわたしに握らせたり。何度も機会はあったのに・・・かわいそうな人・・・きっとあの人もミッションと人間の生活の間で苦しんでいたのかもしれないわね。傷つけたらいけないと思って、はっきりした態度をとらなかったわたしが悪いんだわ。そんなつもりはなかったのに・・・」

「もういい。済んだことだ。」

「済んでないの。なにも終わってはいないのよ。それが証拠にわたしはあの晩のことをあれからずっと繰り返している。何千回も、何万回もずっと。なにから解き放たれたらいいのか。わたしにはもうわからないわ・・・」

イレーヌの瞳にはみるみるうちに涙が溢れていった。それが満月の明かりにまるで星のように輝いたのを覚えている。

わたしはもう、すっかり七十年前の日本人に成り代わったような気分でした。

そのとき突然イレーヌが胸のところに手をやって慌てだした。

「どうしたの？」

「ロザリオがないの・・・大事なロザリオなの。無事に子供が生まれますようにって、新しく手に入れたロザリオなのに・・・ああ、きっとさっきドーミエと争ったとき、彼がひきちぎったんだわ。」

「また買ってあげるよ。」

イレーヌはようやく笑った。

「まるでほんとうのジャンみたい」

「よく似てるだろ。どうやら本物らしいよ。」

「やめて。混乱してきちゃった。ねえ。市街の北にはまだ市民墓地があるかしら。」

「ああ、あれね。まだあるよ。どうして？」

「行ってみたい。あなたのことを確かめたいから。」

「もう終わってしまったことをかい？」

彼女は黙ってうなずいた。

わたしは鉱山(ヤマ)へ行くときに使っているジープを駐車場から引っ張り出した。ニッケルのシッパー(船積み業者)がいつも貸してくれているジープだ。わたしたちはギーをあとにして高台にある市民墓地へ向かった。

それはなだらかな丘のようなところで、一帯に数多くの墓石が広がっていた。その端のほうでイレーヌはジープを降り、芝生の上をゆっくりと歩いていった。妙なもので、気味悪さはなかった。風通しのいい高台だったからかもしれない。

「怖い？」

「いや。不思議だけどね。なんともないよ。」

イレーヌは心配そうにわたしを見た。

やがてなだらかな斜面へ降り立った彼女が立ち止まったところには、十字架もなにもないひとつの荒れ果てた墓石があった。完全に見捨てられた様子が、ありありとうかがえる墓石だった。

ライターで墓碑銘を照らすと、そのひとつにはこう刻まれていた。

『ここに イレーヌが眠る
ある不幸な出来事によって
彼女の肉体は名誉ある埋葬に値しないがために
一九一八年二月七日』

「生まれた日が刻まれてないね。」

「わたしも知らないもの・・・」

「その後、ドーミエはいったいどうしたんだろう？」

「知らない。わたしは死んでしまったから。」

「ごめんね。馬鹿なことをきいた。」

「いいの・・・あなたがジャンだったら、どんなに良かったかしら。」

「ぼくは、ジャンなんだよ、きっと。日本名もヒロシ・オカダでさ、君の彼氏と同じじゃないか。容貌容姿、ともに疑う余地がないんだろう？」

幽霊が月明かりの下で、微笑んだ。

市民墓地のちょうど中央に日本人墓地がある。

わたしたちはそこでジャン（ヒロシ・オカダ）のものを探した。そしてそれはやはりそこにあった。没年は一九一八年二月四日となっていた。イレーヌの惨死に先立つことわずかに三日である。墓碑銘には鉱山の宿舎となっていたゴロの村の日本人一同の手によって、「病に倒れ、云々・・・」と刻まれていた。

さすがにあまり気持ちのいい感じはしない。イレーヌがわたしに体をすり寄せてきた。暖かい。わたしは彼女をただしっかり抱きしめた。・・・

わたしたちは明け方までヌーメアの南にあるモン・ウェントロの丘で時を過ごした。

次第に夜が明けていく。ほんのりと東のほうから貿易風が薄明の空を運んでくる。数少ない星たちが最後の輝きを放っては、震えながら慟哭していた。わたしたちは顔を見合わせではどちらともなくほほえんでいた。そしてやわらかいキスを何度も繰り返した。それはほんとうに恋人どうしのようなだった。沖合いには灯台がまだ光を送っていた。

「アマーデ灯台・・・」

「そう。君たちの頃にはもうあったらう？ ナポレオン三世の時代だっていうから。」

返事がなかった。イレーヌはわたしの肩にもたれて瞳を閉じていた。そしてかすかな寝息がわたしの耳に聞こえてきた。海が爽やかな青を取り戻していく。わたしはしばらくそのまま明け方の海を眺めていた。・・・

昼過ぎ、アパルトマンの部屋で目覚めたとき、イレーヌはまだわたしの腕の中で眠っていた。

形のよい胸やしなやかな腰つきは、白い抜けるような肌とあいまって歌をうたっているようだった。かすかな産毛が呼吸のたびに揺れる。カーテンの間から午後の眠たそうな光が漏れてくる。それがショート・カットの亜麻色の髪にかかっている。まるで光が踊っているようだった。夜には気がつかなかったが、彼女の瞳はきれいな緑色をしていた。薄い唇が頼りなげだ。その後も、わたしたちは夕方、ヌーメアの町に二人で繰り出すまで、ずっ

と愛し合うのだった。まるで、七十年の歳月を取り返そうとでもするかのように。・・・

夕方、わたしはとりあえず、一人でル・ヴィラージュに行って女性用のしゃれた服や、パレオの類を買い込んだ。イレヌのはしゃぎようは尋常ではなかった。子供のように嬌声をあげながら、それらを試していた。彼女の時代の感覚では、とても考えられない破廉恥なデザインなのだろう。「こんなのとても着れないわ」と「これ素敵」を、何度繰り返していただろうか。

けっきょく一番のお気に入りとなったパレオをまとい、薄いルージュをさしたイレヌは、ショートカットがよく似合った。誰が尼と思うだろう？ それでも彼女は髪型をえらく気にしているのがわたしには愉快だった。

その夜は楽しかった。ヌーメアの町を一望できるビーナスの丘で食事をした。バステードというフランス料理屋だ。夜景がわたしたちを夢の世界に誘った。プールサイドのテーブルをとり、わたしたちはおしゃべりに花を咲かせた。ライトが水に照り返して彼女の明るい表情に溶けていく。揺れるまなざしは、ほかのテーブルのカップルの注目を集めていた。それほど、彼女は目立った。

わたしは夢中だった。

「クスクス（北アフリカ料理）はないの？」と、彼女はギャルソンを困らせていた。踊りに行っても、彼女は男たちの熱い視線に気持ちよさそうだった。

夜半、アパートマンに戻ったわたしたちは、また体を求め合った。それは永遠に続くかとかさえ思われたのだ。おろかなわたしを、今思い出す。終わってしまうとしたら、いったい何がきっかけになるのだろうか？ ふとそんな不安がよぎることもあったが、そのときのわたしはただもうイレヌの透明な体液に溺れるばかりだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

翌朝わたしたちは四十人乗りの小型フライトで、本島東の沖合にあるリフー島へ渡ることにした。

アパートマンを出るとき、イレヌが降りてくるのを階下でしばらく待っていたら、若いギャルソンと年寄りの門番が、にやにやしながらわたしに話かけてきた。

「ムッシュー、あの娘、どこでひっかけたんです？ フランス人でしょう？」

「北アフリカと言ってたけどな。」

「なんだ、アルジェの女か。」

ギャルソンは急に興味を失ったようだった。フランス人とはいえ、自分の植民地生まれを棚に上げて、人のことになるとやけに差別的だ。

「えへへ。旦那。あのギーのお化けじゃなくて、よかったね。綺麗な脚をしているものな。幽霊じゃあ、ああはいかない。」

老人は例によって卑猥な笑い方をした。

「さあ、どうかな。実はギーのお化けかもしれないよ。」

わたしが意味ありげに笑ったので、老人は、「神のご加護を」と言って、肩をすくめてみせた。

リフー島を選んだのには理由がある。わたし自身、本島の埃っぽい赤土や、しわがれたような木々の緑に飽き飽きしていたのだ。荒野の一本道にデニーズが一軒あったら、アメリカの西部だと思うだろう。その開き直ったような荒涼たる風景は、ともすると白樺並木と見間違えそうなニヤウリ（薄荷）の木の清涼感だけでは、とても補うことができなかった。これではせっかく南洋へ来た甲斐がないというものだ。離島の中でもリフー島は規模が大きく、また熱帯の原生林に溢れているという触れ込みだったので、わたしは一も二もなくリフー島に決めてしまったのである。

フライトは快適だった。本島を横切ると海はまるで眠っているようだった。ガラスをちりばめたような波光に思わず目を伏せる。イレーヌは窓際に釘付けとなり、顔を見合わせるたびに新鮮な笑顔を返してくる。それまで見たこともないような明るい瞳が無数に彼女の表情に映し出され、そのたびにわたしを幸せにした。

まもなくリフー島が見えてくる。緑が濃い。旅は今ほんとうに始まったばかりだった。イレーヌはしっかりとわたしの手を握っている。原生林の緑が彼女の汗を通して染み入るようだ。命が伝わってくる。・・・・

アイルを挟んでリフー島へいく中年のフランス人神父と知り合いになった。リフー島にも二つほど十九世紀に建てられた小さな教会があるそうだ。彼は島の北西部にあるシェペネへの海岸のルーデという教会に用事があるということだった。わたしはリフー島の様子を

聞いてみた。何の予約もしていない。神父は島の南東部にルエンゴニという一番きれいなビーチがあると教えてくれた。以前は観光客が泊まれるような施設が少なく、原住民の集落しかなかったが、最近では簡単なバンガローがいくつかできているはずだ、とそう言った。

わたしたちがリフー島に降り立ったあと、その神父は親切にも交渉してくれて、知り合いから、車を手に入れてくれた。島にはそういうシステムが無い。すべては個別交渉だった。わたしたちは塗装がすっかり剥げ落ちて、そうとうガタのきたルノーに乗り、一路、島の南東部へ向けて走った。中央部にある最大の集落ウエの村はそれでもポツポツと郵便局やら役場やらが点在していた。真っ青なシャトーブリアン湾が見えてきた。この海岸線に沿って行くのだ。

ウエの村はずれにまぶしいほど白い小さな教会が見えた。栈橋を過ぎると道は椰子と熱帯樹の群落に包まれていった。砂地に珊瑚を固めただけの道からはときどきの木立の切れ目を通して眩しい海が見える。椰子が多い。白地に大きな黄色の花模様を飾ったパレオが気持ちよさそうにイレーヌの肌に馴染んでいた。すべてはうまくいっていた。このまま永遠に時間が止まってしまえばいいとわたしは思っていた。

二十キロ近くを走りつめただろうか。そろそろあの神父が教えてくれたルエンゴニの村が現れるはずだ。

「驟雨（スコール）・・・」

イレーヌが不安そうに小声で言った。

「滅多に雨なんか降らないよ、ここは。」

しかし、イレーヌが言った通り、あたりは見る見るうちに鬱陶しい湿気に包まれていった。先行きが急に明かりを吹き消した夕闇のように真っ暗になった。そして十メートルと視界が届かないくらい激しい雨が森を襲った。わたしは川のように流れる道の脇にルノーをとめて、雨足の過ぎ去るのを待った。

わたしたちは顔を見合わせては吹き出して笑い、またキスを繰り返すのだった。放熱する大地から白い蒸気がもうもうとたち、真っ暗な小道を幻想の世界に誘った。・・・

やがて雨が通り過ぎ、わたしたちはうそのように晴れ上がった中をまた走り始めた。少し行くと道が別れ、標識もないままにわたしは左にそれてみた。もう距離的にはルエンゴニ

についてもよさそうなものだ。

これ以上白いビーチはないと思えるほど海が透き通っていた。椰子の群落の間にわずかなバンガローが立ち並んでいた。わたしはそのうち煉瓦と石でできた母屋風の受付に車を寄せた。

帳場は時代錯誤も甚だしいポスターや小物で埋め尽くされていた。まるで商売っ気のなさそうな白人の男が取ってつけたように笑ってみせた。眼鏡の底からイレーヌをジロジロ見ている男は、わたしがなにも言わないうちから番号札のついた鍵をカウンターに置いた。

「何も書かなくてもいいのかい？」

「ムシュー、二度も記帳しなくたっていいと思うがね。ご親切は有難いがね。」

「もうチェックインした？」

「二日前にね。何泊されるんで？」

「これから二日ほどかな。」

男は薄っぺらい宿帳を取り出して、物臭そうに開いた。そして、記帳箇所を指差した。

「だとすると、日にちの勘定は合うがねえ。」

男はそう言って、わたしの顔をまじまじと見つめた。そこにはわたしの筆跡で記帳がすでになされていたのだ。二日前にチェックインしている。しかも、四泊の予定と、わたしがメモまで加えている。

わたしはもしやと思い、「馬鹿なことを聞いてもいいかい？」と尋ねた。

「この際、なんでもどうぞ。」男は、さすがにもうにが笑いをしていた。

「今、西暦何年だね？」

「パリでも、ここでもたぶん一九一八年だと思うよ。」

「わかった。ありがとう。そういうことだね。」

「ああ、そういうことさ。」

わたしはクスクス笑っているイレーヌの腕を取り、急き立てるように表へ出た。海岸のすぐ近くまで密林が迫っていた。まったく人がいない。わたしたちのバンガローはいちばんはずれのところにあった。「あのスコールだ……」わたしはやっと気がついた。イレー

一ヌも思い出したように笑っていた。わたしは落ち着きはらって言った。

「どうやらぼくたちは、以前ここへ来たことがあるらしいよ。」

「そう？」

イレーヌはおかしくてたまらないようだった。愚かにもわたしは七十年前のわたし自身に嫉妬を覚えた。そのもう一人のわたしはイレーヌとここで休暇を楽しんでいたのだ。イレーヌが、修道院をどう抜け出してきたのかは、わからない。ただ、ここで二人が甘い生活を夢見ていたことだけは確かだろう。その気持ちの動きが、彼女にもわかったのだろうか、イレーヌはとうとう声をあげてげらげら笑い出した。わたしは彼女を追いかけた。パレオが解けて目が焼け付いてしまいそうな白い肌が熱帯の光の粒子を弾いていた。転んだ拍子に、あっ、と小さな声をあげたイレーヌは、指を見つめた。珊瑚で左手の薬指を切ったのだ。真っ赤な鮮血が滲む・わたしがそれを口に含むと、彼女はどういうわけかはにかんだ。ほんの少しの優しさにてらいを覚える少女のようなところに、わたしはまた夢中になった・

わたしたちはひとしきり渚で戯れ、そのうちに砂の塩辛さにまでまた愉快になっていった。

彼女を追いかけて密林に分け入ると、彼女の嬉々とした声が鳥の歌の合間に尾を引いていく。彼女の姿を見失ったわたしは、慌てて大声で呼んでみた。

「イレーヌ！ どこだ？」

すると彼女は太い椰子の木陰から姿を現し、自分の唇に人差し指をあてながら、『シーッ！』とわたしの言葉を制したのだった。

「どうして？」

わたしも思わず声をひそめて尋ねた。

「森や海に聞かれてしまうから。・・・」

「？・・・」

「精霊たちには内緒にしているの。わたしが抜け出してきたことを・・・」

イレーヌは、何をしても、楽しそうだった。言っている意味の半分もわたしには理解できない現実だとしても、それでもわたしは十分に幸せだったのだ。

夕方になってわたしたちは木陰でまた愛し合った。滑らかなバナナの大きな葉を敷き詰めて、何度もわたしたちは力尽きた。柔らかい葉は素肌に優しい。木立の間から午後の眠たそうな日が差し込んでくる。かなわない愛とも、禁断の恋ともわからなかったが、それでもわたしにはなにか甘い冒涇の味のような気がして、彼女の中に入っていくたびに見せるうっとりとした表情を飽かず見つめていた。……

夜、わたしたちは、近くのメラネシアン部落で食料（といっても、魚と芋ばかりだったが）を手にいれ、それをバンガローで料理した。安物の赤ワインが格別白身の焼き魚と合った。ふと気がつくとな彼女はわたしを見つめている。オレンジ色のランプに恋人の顔が揺れている。瞳は涙をこらえていた。かすかに笑う彼女をわたしは抱き寄せた。

「東京へ行こう。」

イレーヌは答えなかった。ただ、「トウキョウ……」と囁くだけだった。

「明日、椰子ガニをつかまえようよ。」

その言葉にも、イレーヌは震えながらうなずいていた。切ない感情のひだに埋め尽くされた微熱のような思いが滲み出るようだった。真っ暗な木立の間にぼうっと白いさざ波が浮かびあがる。黒い海を目で追っていくと、やがて星がちりばめられた空に続いていく。月は頼りないレースのカーテンを地上に引いていた。ふとイレーヌが、「あなたとは、またどこかで会える気がするわ。……」と囁いた。それが何を意味するものか、わたしの思考はもうほとんど追いついていかなかった。重くなっていくまぶたは、彼女の言葉を聞いていなかった。やがてわたしは寝入ってしまったのだ。ひんやりとしたゴザが、眠りをどこか遠いところへ連れて行くような気がした。永遠を手に入れるには、もしかしたらそれを一度手放さなければいけないのだろうか、などと妄想を抱いたのがわたしの記憶の一番最後のものとなった。しかし、その夢の続きを、いったいどうやって、いつ見ることができるというのだろうか。……

.....

いったい本当にそれは幻想に過ぎなかったのだろうか？ 明け方にわたしは夢を見た。それはあのヌーメアの慈善院で出会った弱弱しい老神父だった。彼が、「あの部屋」にいた。例によって、ロッキングチェアに腰掛けて、ゆっくりと揺れていた。目を閉じている。小窓から朝の最初の光が飛び込んでくる。それがスポットライトのように老人の姿を覆う。

爽やかな風がゆったりとした深呼吸を誘う。老人はふと目をあけると、思い出したように微笑んだ。彼は長いあいだそれを待っていたのだ。償いきれないものによろやく終焉をもたらすことができたのか。老人は再び目を閉じると、二度と世界を見ることがなかった。後にはただ光の渦がまるでチンダル現象のように老人の亡がらを包み込むばかりだ。・・・・・・・・

そのときだった。イレーヌが目を覚ましたのは、イレーヌの表情はこわばっていたものの、すべてを了解したような脱力感に襲われていた。彼女もきっとそれを待っていたのだ。乳白色の朝の光はここにも差し込んでいた。若さの息遣いをその滑らかな肌に匂わせながら、影はどこまでもつきまとった。わたしはその横で、まだ深い眠りから覚めることがなかった。ふとイレーヌはベッドに起き上がり、タオルを体に巻きつけると、窓辺に近寄っていった。あの雨雲がまた張り出していった。あたりはにわかには暗く、そして哀しい「にび色」に変わっていった。まるで鉛を空気に溶かしたようだ。イレーヌは脱ぎ捨てたわたしのシャツやジーンズをひとつひとつ拾い上げ、きちんとたたみ始めた。ときおり彼女はシャツを自分の顔に押し当てて、わたしの懐かしい匂いを嗅いでいるようだった。そのときジーンズからじゃらりと音がして、あの慈善院の老神父がくれた古いロザリオが床に落ちたのだ。イレーヌの瞳が輝いた。手に取るとそれを大事そうに握りしめて、まだ寝息をたてているわたしのほうを優しく見やうとした。そうだ。そのロザリオは君のものだ。わたしが現れるのをずっと待っていたんだ。そして七十年間もその罪を隠し、また悩み続けたドーミエ神父もまたそれを君に返そうと、沈黙と懺悔の中で待っていたんだ。イレーヌはわたしに近寄り、そっと唇を重ねてきた。粘膜を通して、イレーヌの涙が染みていく。糸を引くように彼女の匂いがベッドに残る。イレーヌは窓の外を眺めた。もうすっかり表は激しい雨に襲われていた。暗い。水しぶきが、景色を覆うように潜み隠していた。彼女がバンガローを出て行く。わたしは彼女の名を呼ぶ。聞こえない。雨音が激しすぎて、それでも声にならないわたしの声が、きっとイレーヌには聞こえたのだ。タオルを巻いたまま彼女は濡れ鼠になっていた。密林へ伸びていく小道で彼女は振り返り、名前を呼ぼうとするわたしに、『シーッ!』と人差し指で注意する。わたしには、それが確かに見えた。熱を含んだ地面から蒸気が立ち上る。スコールとその蒸気の中を、イレーヌ、君はどこへ行こうというんだ。このわたしをおいて。・・・・・・・・

わたしが目を覚ましたとき、もうスコールはすっかり止んでいた。そして、イレーヌの姿はどこにもなかった。わたしはジーンズのポケットに手をつっこみ、あのロザリオも無くなっているのをたしかめた。夢は、ほんとうにあったことだったに違いない。

わたしは慌てて表に飛び出した。まぶしい太陽が慣れないわたしの目に飛び込んできて痛いほどだ。地面は濡れている。たしかにさっきまで激しいスコールがあったのだ。わたし

は受付のある建物へ駆けていった。違う。そこには違う建物が、明らかに現代的な様式の、色気のない事務所がそこにあった。振り返ってみると、わたしがいたバンガローも、昨日見たものとまったく違う代物に変わっていた。殺風景な事務所のステンレス製のドアを押し開き、カウンターに駆け寄ると、白人とメラネシア人の混血らしい太った中年女が缶コーラを飲んでいた。そして、横には一人、たぶんその息子だろう。少年がラジカセをいじっていた。アメリカのポップスが流れている。女は愛想よく笑いかけてきた。「ボン・ジュール、ムッシュー・オカダ・・・」

「昨日の、・・・あの白人は君の亭主かい？」

「わたしの連れ合いは白人じゃないし、それに今はヌーメアに行ってるからね。人違いでしょ。誰のことを言ってるのさ？」

「いや、それはもういい。ところでわたしと一緒に来た女性だがね。今朝見かけたかね。スクールがものすごかったときだと思うんだけど。」

その女は不思議そうな顔をした。

「ムッシュー、あなたは疲れてるんだ。昨日は、あなた一人でいらしたじゃないの。夢でも見たんじゃないか？」

わたしは呆然と立ちすくんだ。見るに見かねたその女は、宿帳を取り出してわたしの前に開いて見せた。プラスチックのバインダーに綴じた宿帳だ。

「ほら、ね。一人でしょ、チェックインは・・・」

わたしは彼女の指差すところを言われるままに目でたどった。そのとおりだ。そして、日付の後ろにわたしは自分で、一九八五年と記してあった。わたしは次第に錯乱してきた。女は追い討ちをかけるように、古い写真を取り出した。それは昨日帳場にいた男の写真だった。ずいぶん痛んでいるが、はっきりと顔は認識できた。

「わたしの曾祖父。白人といたら、一族で彼だけ。もうとっくに亡くなっているけど。まだわたしが生まれる前にね・・・」

わたしは朦朧とした気持ちになり、彼女の言うことをほとんど聞き流していた。昨日の帳場の男は、セピア色の世界に染まってわたしをまじめそうに見つめている。わたしはもう

一言も口にすることなく、ふらふらとまたバンガローへ戻っていった。潮風が耐え難いほどに耳にさわった。部屋の中も、よく見れば、昨日わたしたちが愛し合った様子と、まったく違ったものになっていた。さっきまでイレーヌがいたベッドにも、もうなにも匂いは残っていない。わたしはすべてが終わったことを認めるよりほかなかった。……

まる一日ルエンゴニでぼんやり過ごしたのち、わたしはようやく気持ちの整理をつけて出発した。ルノーは相変わらず不健康なエンジン音をがなっていた。空港ではもう帰りの便が満席で、わたしは幻滅した。リフー島にくるときに知り合った例の神父がたまたま居合わせて交渉にあたってくれたが、これはもういかんともなし難かった。わたしは丁重に礼を言った。

「ところで、ルエンゴニはいかがでした？」

「ええ、おかげさまでいい休暇になりました。あなたもまた早いお帰りですね。」

「実は明け方に、サン・ジョセフ聖堂に長いこといた長老格の神父が亡くなりましてね。急いで戻ることになったんです。」

わたしはそれがいったい誰のことを言っているのかわかっていた。

「どなたでしょう？ たぶん先日わたしが慈善院でお目にかかった方かもしれません。」

「そうです、慈善院で静養していたんですがね。もう高齢でとうに引退していました。それでも今朝は、夜明け前にはきれいに身支度を整えて、ロッキングチェアで一息入っていたらしく、眠るように亡くなっていたというんです。若い神父が見つけたときには、朝日を一杯に浴びて、それはもう思い残すことはなにもない、という幸せそうな表情だったそうです。ご存知でしたか。ドーミエ神父というんですが。……」

わたしは知っていた。なにもかもわかっていた。

その日、わたしは飛行機をあきらめ、船に乗った。一晩かかるが仕方がなかった。日本の連休ももうすぐ終わる。それまでには、帰っていないではならない。船は、カプ・デ・パンという名で、ちょうど島の東南を周りこむようにして本島へ戻る航路をとった。ルエンゴニの海岸を過ぎ、松の岬（カプ・デ・パン）を通るからその名がついたらしい。

わたしは甲板で午後の死にそんな倦怠を体いっぱい浴びて海風を感じていた。思い出は思い出でしかない。時を逆転させても、後に残るものは、前以上の寂寥でしかなかった。

観光客が同乗していた。フランス人が多い。どちらかというバックパッカーのような連中ばかりだ。わたしはにわかに喧騒に包まれた甲板がたまらなくなり、早々にキャビンに戻ろうとした。そのときすれちがった女性の長い髪が、わたしの顔にかかった。

「あ、・・・パルドン（ごめんなさい）」

その女性がそう言って、わたしをちらっと見た。

「イレーヌ・・・」

わたしは目を疑った。「シャツにジーンズをはいた彼女は、髪の長さこそ違え、イレーヌその人だったのだ。彼女は驚いて言った。

「あら、どこかでお会いしましたっけ？」

話し方まで、そっくりだ。声の質、フランス語のアクセント、イレーヌその人だったのだ。

「いや、人違いかもしれない。」

「あら、そう？ あなたは・・・ジャポネ？」

「ええ。」

「わたしもこれからトウキョウに帰るのよ。」

「帰る？」

「そう。銀行の駐在員でいまはトウキョウ勤務なの。これでちょうど一年。リフレッシュ休暇でここまで足を伸ばしたの。」

「出身はどちらです？」

「フランス・・・」

彼女は、目を大きく見開いて、あたりまえじゃないの、という表情をした。

わたしは苦笑した。

「それはそうだろうけど。」

「よくわかるのね。ほんとうはアルジェ。両親が六十年代にパリに移ったの。発音が北アフリカっぽいかしら？」

「行ってみたいな、北アフリカに。」

「いいところだわ。といたいけれど、わたしも実は行ったことがないの。」

わたしはそれ以上話が出来なかった。にもかかわらず甲板を立ち去り難く、風に当たりながら時折彼女を見ると、彼女のほうも、緑色の瞳がなんとなくわたしを気にしているようだった。これは、夢ではない。あの晩、イレーヌが言った、「またいつか、どこかであなたと会えるような気がするの」という言葉を思い起こしていた。

ふと横にいる彼女の左手の薬指にわたしは目がとまった。バンドエイドで巻いてあったからだ。わたしは勇気を出して聞いてみた。

「あの・・・薬指、どうしたの？」

イレーヌというその女性は、明るく笑いながら言った。

「ああ、これ？ わたし馬鹿なの。ルエンゴニっていうビーチ、ご存知？ 昨日、あそこの珊瑚で怪我をしちゃって。・・・まだ痛むの。・・・」

そう言ってイレーヌはまたにっこりと微笑むのだった。

密林の記憶

離婚することが決まってから、わたしたち夫婦はそれまでの諍いがまるで嘘のように明るい日常を送っていた。

ほんとうに東京に戻ったら、別れるのだろうか。

それまでとはうってかわって平穏な毎日に、時折、どちらともなく『もしかしたら、やり直せるかもしれないね。』などと言ってみたりもするのだが、その後に言葉が続かない。やり場のない沈黙が訪れる。そして、やはり結論は変わらないと思い知るのだった。

離婚の理由は書くまい。どちらかがどちらかに対して、一方的に悪いということは、まずない。そのきっかけが不倫であろうと、あるいはほかのどんな事情であろうと、けっきょく二人には相応の問題がある。そして、二人で始めた過ちは、けっきょくそれぞれ一人でその責めを負うしかないのだ。それが、男と女の間横たわる不文律だった。

駐在期間の終わりが近づき、それまでただの一度もしたことのない旅行を、わたしたちは計画した。日取り、フライトやホテルの予約、どれをとってもこんなに心が躍る毎日ではなかった。まるで新婚旅行のようだ。いや、それ以上だったかもしれない。

香港から一番行きやすく、あまり日本人の間では知られていないものの、穴場が一つあった。それはボルネオ。ちょうど、南シナ海を越えたところ。北半分がマレーシア、南側はインドネシア。わたしたちが行くのを決めたのは、マレーシア側のコタ・キナバルだった。わたしたちが泊まったタンジュン・アル・ビーチから、東の方に四千メートル級のキナバル山の威容がくっきりと見える。午後には山の稜線が見えなくなってしまう。ボルネオはその北から熱帯性低気圧が発生するために、一年中いつ行っても休暇にはうってつけだった。なにより、日本人観光客がほとんどいなかったことが痛快だった。

わたしたちは前の日に申し入れておいた飲み物や食べ物がつまったバスケットやアイスボックスをピックアップし、ホテルの棧橋からボートに乗って、すぐ沖合いの島々をアイランド・ホッピングした。サピ島。スルッグ島。マムティック島。マヌカン島。そして一番大きなガヤ島のポリス湾(ベイ)。白人のグループ・ツアーも来ていた。

目が無くなってしまいそうな白いビーチ。珊瑚礁の内側で波が息をとめていた。地元のコンダクターがついて、スキューバ・ダイビングをしたが、海の中でわたしたちはいつもよりずっとたくさんの会話をしたような気がする。

水遊びに飽きたわたしたちは、こんどは山へでも行ってみようということにした。車を借りてキナバル山の中腹にある国立公園に向かった。妻とわたしが交替で運転した。朝、コタ・キナバルを出て、海岸線に沿って北東へ走る。対向車はあまりない。途中、メンカボンの水上部落に立ち寄り、そのあとは走りづめで山に入る。道はどこまでもきれいに舗装されていて、密林地帯になってからもドライブは快適だった。

昼過ぎ、キナバル国立公園に着いた頃には、予想通り山頂が霞み、霧雨が降ったりやんだりしていた。むせ返るような湿気は冷やかかで、ジャケットが要るくらいだ。このまま東へ道をたどれば、マムートの銅山があるラナウの町。その先は東海岸のサンダカンに至る。

わたしたちは一渡り園内の入り口付近を散策した。なんの匂いだろう？ 木犀(もくせい)のような濃厚な甘い匂いが時折運ばれてくる。南洋の樹木は圧倒的な重苦しさをわたしたちを包んだ。ざっと見渡してみて、安易に期待していた百花繚乱はなく、おまけに雨が次第にスコールのような激しさを伴ってきたので、わたしたちは慌てて入り口に近いレストハウスに駆け戻った。

「すごい雨！」

「そうとうやられちゃたね。」

離婚する夫婦がやり取りする。

「それにしても何にもないね。」

「当たり前よ、ジャングルですもの。」

「だけどもまえ、ジャングルって来たことあるのか？」

「初めてよ。」

「だったらもっと喜べよな。」

「ぶー。．．．．」

他愛もない文句の言い合いは、笑いと懐かしさを誘う。この期に及んで、喧嘩などありえなかった。

わたしたちは雨で重くなった体を引きずりながら食堂に入った。お定まりのナシ・ゴレン(焼飯)、ソト・アヤム(鶏スープ)、そしてルンダン(辛い牛肉の煮込み)。これでまず一服。すこしは体が暖まってきた。熱帯で肌寒いというのも、奇妙な経験だった。肌は連日の水遊びで真っ赤にほてっていたので、密林の冷気がかえって気持ちよい。

しかし雨に濡れたことは、キナバル山をトレッキングしようと思っていたわたしたちの気力を挫いた。途中、かつて日本兵がにわかづくりをしたというベトンで固めた露天風呂にも行きたかったが、とてもその勢いは失われていた。現代人は弱い。自然と闘うことしか考えていないからだ。

天然のシャワーはさらにはじけるような強い雨足となって、密林の十メートル先を不気味な灰色で覆いつくし、濃い緑を視界から遠ざけている。離婚する夫婦は退屈そうにパンフレットの園内地図を見ていた。ほかになにをすることもなく、ただ雨に煙る密林を飽かず眺めていたのだ。

「気持ちいいわね。」

「落ち着くね。君は山より海のほうが好きだったよね。」

「どっちも好きよ。」

わたしたちの会話はそれだけ。でも、それで十分だった。

ふと気がつくと、一人の男がわたしたちのテーブルまで来ている。五十代に近い。かなり若々しく見える。日焼けした体が頑丈に締まっている。グレーのサファリを着て、木綿の短パンをはいている。ほかには人っ子一人いないレストハウスだと思ったが、わたしたちが来る前から、その男はいたらしい。

「日本人ですか？」

男は穏やかな口調で話しかけてくる。

「はい。」

「日本から？」

「いえ、香港に住んでいますので。」

わたしたちは男に席をすすめた。こんなところでよりによって日本人に会うとは思わなかった。

男は長野から来ていた。ボルネオにはもう十年にわたって、毎年二度やってくる。もともとは高校で数学を教えていたらしい。

「以前は、学期末の休みに家にいると、家内や娘たちから粗大ごみと言われたものでした。」

そう男は屈託なく笑う。『以前は・・・言われた』という言い方が、妙に気になった。

「ボルネオにはまたどうして？」

「蝶を探っています。」

新鮮な言葉だった。わたしは急に興味を覚えた。蝶なら台湾やヒマラヤ、それにアマゾンと相場は決まっている。それがなぜボルネオ？ 男の話によると、ボルネオはとても蝶で

有名なのだそうだ。ただほかと違って、ここの蝶について図鑑の決定版が無いという。男はそれをつくりたい。十年。コタ・キナバルだけでなく、シブ、ミリ、ラブアン、クチン。そしてもっと多様な蝶を求めてインドネシア側のカリマンタン地区までずいぶん歩いたらしい。

「バリクパパンとか、サマリンダにも行かれるんですか？」

「よくご存知ですね。」

「ええ、仕事から。」

妻は、あまりこういうことに興味がない。

「ねえ、大変なものを見落としてみたいよ。あの先に植物園があるって。道理でこのへんには花を見ないわけね。わたし、ちょっとあっちに行ってみるわね。」

雨も嘘のようにあがっていた。妻は、男に挨拶すると植物園のほうに下っていった。

男はポケットからグダン・ガラム（丁子(クローブ)の葉を詰めた煙草。)を取り出した。

濃厚な甘い匂いがあたりに広がる。窓からは、霧が熱帯の陽にキラキラと輝いていた。

「また降ります。三十分がいいところです。」

男は気持ちよさそうにガラムを喫(す)う。わたしはいつしか男の話に耳を傾けていた。

.....

K。と、その男のことをしておこう。

教師。自らの未熟さを知り尽くした男が人を教えるという矛盾。思想とはけっきょく生きざまのこと。Kは思う。自分が個人として生きる座標軸や目標や、あるいは夢を持たないかぎり、生徒たちはけして耳を貸さない。家族から粗大ゴミとして扱われるようなつまらない男の話を書く酔狂な若者が、一体どこにいるだろう？ 教え子たちが問題を起こすたびに、Kは焦りを覚えていた。

十年以上も前。一つの事件がKにきっかけを与えた。ある男子生徒の自殺。遺書はなく、日記が残されただけ。Kは死の数ヶ月前からこの生徒の足跡をひとつひとつ辿ってみた。手がかりはいくらでもあった。いじめやいやがらせの類。文面の行間に漂う底知れない孤独感。失恋にまで至ってもいない、想いを凝らした一方通行の恋。でもそれらは自殺を説明する決定的なものにはならなかった。家庭にも問題がない。最後まで残ったのは、やはり動機だった。気になる文章がいくつかあった。

・・・秋に本を読んではいけない。

夏に太陽を見つめてはいけない。

きっと戸外では夏が始まっていたのだろう。『梅雨明け宣言と同時に死んでいこう。』とあった。『あの雨があがるのといっしょに死んでいこう。』ともあった。日記は日一日と焦りを示していた。日差しは狂ったように夜を通り過ぎ、明日一日をも焼き始めているように思われたのかもしれない。

ある日、Kはふと気づく。この生徒はなにも特別な人間じゃないと。Kはいつしかこの生徒を非常に身近に感じるようになる。いつまでたっても動機が見つからないことが、きわめて自然に思えるようになる。過ぎ去る者を静かに見送るほんの少しの優しさ。卑怯な人間たちは、『死ね』とはけっして言わない。そして彼らの『生きろ』という言葉には血がかよっていない。・・・・・・・・

ある日、Kは家に帰ると突然地図を広げる。そして荷造りを始める。家族が怪訝そうな目で見守る中、最初の夏休みにさっさとインドネシアに出かけてしまう。急にKは、心の中で突き上げるようなものを覚え、昔から好きだった蝶のことで頭がいっぱいになってしまったのだ。なによりも自分自身の救済が緊急の課題だった。以前から長野だけでなく、全国のあちこちへ蝶を採集しに行っていた。南洋の蝶はずっとKの憧れだった。まだ見たこともない蝶に少しでも触れていたかった。Kは、『実に身勝手な、そして唐突な行動でした。』と苦笑いする。・・・・・・・・

雨がまた激しく降りだした。

「蝶でもご覧になりますか？」

Kはわたしを奥の宿泊棟へ誘った。小さな部屋だが快適そのものだ。

「失礼。片付けてないものですから。」

フロア、机の上、椅子、いたるところに蝶の標本の作りかけが並べてある。そのほかには藁半紙(わらばんし)にびっしり書き込まれたメモと、画用紙に描かれた蝶のスケッチが散らかっていた。

「週に一つは新種が見つかります。」

マレーやインドネシアでは蝶のことをクブクプと呼ぶらしい。Kはマレー・インドネシア語ではまったく不自由がない。数えきれないほどの方言がある中で、人工的に作り出され

た言葉。だから語彙が最大公約数的に選ばれている。文法も発音もきわめて単純化されている。

Kは、『コーヒーでも飲みませんか?』とあって、茶色の麻袋からトラジャを取り出し、携帯用のグラインダーに入れてガリガリ始めた。こくのある原産の香りはここが紛れもなく熱帯だと告げていた。Kは豆を挽きながら、密林の記憶の一つ一つを静かな口調で話し出した。

.....
.....

博物誌の夢。十年の軌跡。図鑑の決定版がまだない赤道アジアの蝶たちについては、長いことKはライフワークにしたいと思っていた。

最初はインドネシアのバンドンに人を頼っていき、蝶の分布や生態の手ほどきを受けた。そして学期末ごとにインドネシア全域にわたって踏査した。とくに香料諸島、西イリアン、スマトラとめまぐるしく歩き回った。西イリアンではどうしても軍隊の世話にならなければいけないので難儀をすると言う。

南洋の蝶には魔性が棲む。ちょっとでも触れればすぐにでも壊れてしまいそうなその脆弱さ。哀しいほど深い色彩。悪魔のように冷たく官能的な存在感。優美に、またときには嘲笑するかのように補虫網の下をすりぬけていく危なげな舞踊。・・・熱帯や密林がまるでそのためにわざわざ演出してみせているかのようだ。

蝶を追って少しずつスケッチ・ブックが増えていくごとに、Kは熱帯というものを理解していったように思う。熱帯という言葉が、『原始への回帰』から、『生命の再生』という意味に、Kの心の中で変っていく。

たった一人で旅をしていると、バンガローや川辺の集落に宿をとるときなど、夜いろいろなことを考える。夜空に溢れる星たちはまるで音を立てているようだ。隠者のつもりはけっしてない。むしろ密林の中でKは、より深く社会とのつながりを意識できた。

合理的な発想とは、非合理的なものを合理的に分析したり、神秘的なものをむやみに暴きたてることではない。非合理は非合理のままに、神秘は神秘としえとらえること。だから、Kにとっても、合理的という言葉が自然という言葉に非常に近く感じられた。さまざまな

錯覚もその正体が見えてくる。息を殺して草木をかき分けていくうちに、誰も世界の中心になれはしないとあったようなごく当たり前の原理ですら、ここでは新鮮に思われたりする。

三年経つうちに、学校でのKの言動も以前とは次第に変わっていった。教師である前に、悩める人間であることを深く意識したことが、Kを大きく変えたようだ。自分の魂を、それまで気がつかなかった閉塞状況から救い出し、一人で立ってみせることは、最優先課題だった。生徒たちや、家族に、そのKの言動の一つ一つが受け入れられることはなかった。むしろ、以前より激しく批判の矢面に立つことが多くなった。決定的になったのは、傷害事件を起こした一人の生徒を彼が見捨てなかったことだった。親からも見捨てられ、学校からも拒否されたその生徒を、Kはあくまで見捨てまいとした。けっきょくKはその生徒に刺され、深手を負うことになった。学校からはすでに退学した生徒の問題ただけに、職務範囲を逸脱した行為として、かえって責められた。家族からもそのやり方は度を越えているとして非難された。狭間でKはさらに苦悩した。公私の別なく信じる道を貫いた（とKは思った）結果、学校からも婉曲に辞職を促され、やがて家族も去っていくことになった。かろうじて塾の講師として一人で生計を立て、いくばくかを別れた家族に送金し始めた。不安定な工事現場の交通誘導の夜勤も始めた。周囲の誰も救うことができず、ましてや傷つけ、自らに残ったものは、わずかに蝶の夢だけとなった。

「ハンドルの遊びが無さ過ぎたんです。いい歳をしてみっともないことでした。」

Kは苦笑した。

五年ほど前のこと。隣のスラウェシ島にあるウジュンパンダン（旧マッカサール）へ行ったとき、バンティムルンという『蝶の谷』で、一人の男の話を聞かされる。その男はもともとジャワ島のバンドンで大学勤めをしていた生物学者だが、蝶に魅せられて職を辞し、家族ともどもバンティムルンに移り住んだとのこと。何年かそこで仕事をしていたようだが、何のきっかけかボルネオ島のカリマンタン地区、サマリンダへ再び移り住んだという。なんでも世界最大といわれているアレキサンドラ・トリバネアゲハより大きく、舞う様子はゴライアス・トリバネアゲハより美しい蝶を、このサマリンダのずっと奥地で見たという。バンティムルンの自然公園でいっしょに働いていた人が、『よくいるんだ、ああいうやつがね。家族もとんだ迷惑だよ。きれいな奥さんだったがね。なんでもバンドン時代の教え子だとか言ってたな。』と吐き捨てるように言ったのをKは聞いていた。

この話があったので、Kはその男に会いにサマリンダを訪ねることにした。標本一つで二百万円、三百万円もするトリバネアゲハは、日系の業者が血眼になっていたし、それに群

がる地元の人たちにKはうんざりしていた。

サマリダの地元の役所で問い合わせたところ、偶然知っている人がいて、もう二年前にその男が亡くなっていること、そして未亡人と息子がマハカム河上流のバンガローに
いることを教えてくれた。未亡人が夫と同じように蝶を探っていることも。

サマリダを河口に、六百キロ以上もマハカム河は流れている。ポンポンと悠長な音をた
てるカパール・モトル（動力船）に乗ってマハカム河を遡った。まずテンガロンの町。この
さらに上流には黒い蘭が群生するそうだ。特産の蝶がいるかも知れないなどと思いなが
ら、船はさらに旅を続けた。河の両側は密林が迫り、赤土色の河はときどきワニの死骸が
白い腹を見せてプカプカ浮いていたりする。いくつかの村を船は過ぎ、小さなモスクが見
えてきた。・・・

原始、日本に熱帯があった。海沿いには潮干帯が広がり、マングローブが生い茂ってい
た。今、その名残は下北半島の猿だけだ。下北は地球上に生息する野生の猿の北限。熱帯
原産の猿がどうして雪深い下北にいるのか。かつて日本にもこの熱帯があった。

日を重ねてKはまた上流へ向かう。

わたしたちの世界がどんなに広くても、わたしたちの精神生活はその一切を転がせるくら
い広い。旅先で知り合う人ごとにKはそれを思う。

カパール・モトルに揺られながら、時折Kはあの自殺した生徒の日記を思い出す。

「あの澄んだ空を越えるような心を持ちたい。・・・」

あの燃える雲を凌ぐような高潔の中を生きたい。」

二行の行間に明るい青空が見える。そしてそれらはみなここにある。

ロンギラムの町。一泊してダヤク族の案内人を雇い、翌朝、密林に入った。

ボルネオ南部のカリマンタン地区の交通は道によらない。すべて河が基点になる。ブギ
族。ダヤク族。バジャウ族。そしてジャワ島やスラウェシ島からインドネシア人たちも来
る。華僑。どこの国だろうか、白人の姿も見かけた。日常生活品の商売、木材の伐採と加
工、石炭の積み出し、そして植林。きれいなサロンをまとったブギ人の女たちが荷物を頭
に載せていく。洗濯物をパタンパタンと叩く音が次第に遠くなっていく。

三時間ほど山に入るとダヤク族の小さな集落に着く。案内人を介して年寄りのダヤク人に
尋ねた。

「あんたも蝶を探している学者さんかい？」

「学者じゃないが、確かに蝶を探してる。」

年寄りはいわだらけの顔をほころばせて言う。

「先生は夕方帰ってきなさるよ。息子さんといっしょになあ。・・・バンガローの中で待っていたらいい。日が落ちる前には戻ってくるさ。」・・・・・・・・

バンガローはL字型になっていて、ベランダのように張り出した渡り廊下があり、四つの部屋がつながっている。ベランダには籐の椅子があり、そこからは小さな庭や木立を通して、むこうにダヤク族の集落が見える。裏のシャワー・ヤードには間近に森が迫り、空が思ったよりずっと高く感じられる。これでは日没が早い。

案内人をロンギラムに帰し、Kは密林に入った。年寄りの話によると、この奥にやはり蝶の谷があるという。なにもスラウエシのバンティムルンだけではないようだ。

八月。蝶が一番盛りの季節。細い獣道が走る密林はさまざまな驚きに出会う。蘭の花一つにしても、わたしたちが日常花屋さんで見るとの違い、熱帯に咲く蘭はずっと地味で小粒なものだ。野生というものの実態は得てしてそういうもの。人間が交配して作りあげたハイブリッド（混血種）の素晴らしさはそれとしても、この野生の実相には強靱なエキゾティズムがある。

目的の沢に着いたのは一時間後。小さな窪地。先にはマハカム河の支流がある。野草が生い茂り、歩行は困難をきわめる。二千五百メートル級の山が控えているので、このあたりはかなり冷気が漂ってくることもある。Kは鳶(つた)の生態から『低地性のトリバネアゲハがここにもいるかもしれない』と思いながら河沿いに歩いた。すると急に女性の、からかうような声がした。

「ここには高価なバードウィング（トリバネアゲハ）はいなくてよ。」

Kは慌ててあたりを見回した。声の主は背後の低木のあたりから姿を現わした。汗まみれのサファリを着た女性と、あとから十歳くらいの子供が飛び出してきた。その子は肩から捕虫箱を下げている。中には一匹のトリバネアゲハがはいっていた。

「オルニトプテラ・プリアムス（ミドリトリバネアゲハ）。」

Kはそう呟いた。

その女性はうなじまでの髪で、『蠟(バ)けつ(ティ)染め(ツク)』のバンダナを巻いていた。年のころ三十三前後。褐色の肌をしているが、どこか白人の雰囲気を持っている。都会からきたあか抜けた感じが見てとれたのだろう。少し痩せて、端正な顔立ちが、さらに知的に見せていた。

「あら、よくご存知ね。でもこれは今までこの辺で見たことのあるミドリトリバネアゲハの亜種とはちょっと違うわ。雄なのよ。オレンジ色の翅(はね)がふつうなのに、これは金緑色がかっているでしょう？」

「亜種が多いから、島ごとに多少の変化はあるでしょうね。それより毒性があるのに大丈夫ですか？ この捕虫箱じゃいけないな。」

「平気よ。触るときはいつも手袋しているもの。せいぜいかぶれるくらいだわ。それよりあなた、蛇のほうがこの辺は怖いよ。そんなショートカットのブーツじゃ駄目よ。こういうロングのじゃなきゃ。」

それはかなり使いこんだ革のブーツだった。薄茶色の表面が完全に剥げている。

「ダリ・マナ？ (どちらから)」

「ダリ・ジュパン。(日本から)」

「どこまでいらっしゃるの？」

「あなたに会いに。……………」

女性は驚いたように目を丸くした。彼女の名はメリアム・ノール。祖父がオランダ人。息子はルディ。母親の闊達さにくらべ、ルディは恥ずかしがりやだ。Kが握手しようとする、はにかみながらそっとその手を差し伸べた。

メリアムはこの国には珍しくクリスチャンだった。バンガローへの道すがら、彼女はこのあたりの地勢や植物の生態をくわしく教えてくれた。Kはひとつひとつの内容より、彼女の弾けるような声質に、ただ心地よく聞き惚れていた。話が時折途切れるごとに、Kは夫のノールが見たという新種のトリバネアゲハのことを聞こうと思ったが、最後まで言い出せなかった。

けっきょくKはバンガローに泊まることになり、L字型の一番南側にある部屋をあてがわれた。

「厄介じゃないかな？」

「とんでもない。嬉しいわ。寂しいところですよ。」

隣は亡くなったノールの部屋だ。その奥がキッチン兼ダイニング。北側の端が彼女たちの部屋になっている。

Kはシャワーを浴びた。貯水タンクから水を引いて、木炭などを使いながら濾過(ろか)し

である。ヤードには何の囲いもしていない。彼女もここで浴びるのだろうか？ Kは年甲斐もなく気恥ずかしいものがあった。

Kは夕暮れの中で紫色に染まっていくダヤク族の集落を、木立を通してぼんやり見ている。ルディがブリキのバケツを提げて集落のほうへ歩いていくのが見えた。誰かが鶏を絞めているような、けたたましい鳴き声が聞こえた。

密林では、夕陽を見ることができない。そのかわり、信じられないくらい大きさの星が現れる。テラスの籐椅子に腰掛けていると、ふと何かを肯定する気持ちを思い出す。どんなに社会が変わっても、けして変らないものがあることを思い出す。何かに感謝したいような気持ちといってもいい。

ルディは炊き上がったご飯(ナシプティ)と、魚(イカン)のスープをバケツに入れて戻ってくる。メリアムはすでにシャワーを終えて、すっかり主婦になっている。Kは自分もなにか手伝うと申し出た。『明日から手伝っていただくわ』とメリアムが笑った。魚にはたまねぎやトマト、ニンニク、チリ、ナツメグ、いろんな青野菜もいっしょになっている。それとアヤム・ゴレン(鶏の唐揚げ)だ。さっき裏で鶏を捌いていたのはメリアムだったらしい。これらをチャペという一種の味噌といっしょにご飯にまぜて食べるのだ。

「今日は、ダヤクの人がニシキヘビがとれたって行って大騒ぎだったよ。」

ルディがそう言った。

「わたしは遠慮したいな。」

「わたしもよ。」

メリアムが笑った。

ルディはわたしたちの話を聞きながら、静かに食事をしていたが、ときどきわたしと目があうとくすっと恥ずかしそうに笑うのだった。

Kはメリアムとさまざまな話をした。蝶のこと。家族のこと。それから日本とインドネシアの異なる社会や文化や習慣のこと。メリアムは会話を楽しくする才能があるようだ。孤独で報われることのない仕事に熱中していたノールも、彼女の明るい語り口にさぞ励まされたに違いない。粗大ゴミとさえ言われたKには、羨ましくも思えた。

「彼がまだ生きていたころ、わたしは蝶に全然興味がなかった。亡くなってから、なんとなく気掛かりで、彼が見たという新種のバードウィングを探し始めたの。かわりにみつけてあげたかったのかな。それがきっかけ。もともと専門は植物のほうなのよ。蝶のことなんか、最初ちんぷんかんぷんだったから、それはもう大変。」

「よく頑張ったね。」

「彼の一生を無駄な形で終わらせたくなかったのね。でも、本当はわたし自身のためだったかも知れない。」

メリアムは急に寂しさを含んだ表情になった。

「最近もしかしたら、そんな蝶、本当はいなかったんじゃないかって思うことがあるの。蝶を探しているうちに、実はわたしがもっと別のものを探してるんじゃないかって。」

「それはなに？」

「さあ？」

メリアムは再び笑顔を取り戻した。

夜が更けていく。雨のように降ってくる星屑に願いをかけようとは思わない。こうして生きてあることの新鮮さを、一人でも多くの人と分け合うことができれば、もうなにも望みはしない。けっきょくみんな一人だ。一人で生きていけない人間が、どうやって人を愛していけるのだろうか？

テラスのところでメリアムが言う。

「ルディ、あなたが気に入ったみたい。」

Kとメリアムは遅くまで話続けた。ポーチには自家発電があり、スポットライトが一つ、二人を照らし出す。

「それにしてもかわいそうね。粗大ゴミだなんて。」

「そう思われても仕方なかったと思うよ。ただ……」

「ただ？」

「家内も孤独だったんじゃないかな、と。」

「孤独？」

「誰も自分を構ってくれないってことさ。」

「いやあね、感傷的な言葉で。本当の孤独ってそういうものじゃないわ。きっと。わたしが、あなたにとって何でもないって感じるのが本当の孤独よ。この人になんの力にもなあってあげられてない、って思うとき。どんなに努力しても、それによって誰も救われていないって気づいたとき。……わたしにはそんなことを思える人すらそばにいない

わ。」

図星だった。わたしは言葉がそこまで追いついていかなかっただけで、確かにわたし自身の、そして別れた妻の寂しさというものを、メリアムはものの見事に表現した。そして、一見爽やかに言い放ったものの、スポットライトの光がメリアムの瞳の中でキラキラと輝いていたのをKは見逃さなかった。

その夜、Kは若いころに覚えのある、何か新しい発見でもしたときのような興奮に襲われ、なかなか寝付けなかった。星の軌道は音もなく密林の屋根を通り過ぎていった。

三人の奇妙な共同生活。蝶の採集は朝早くから始まった。ランチボックスを持って昼過ぎまで密林を歩く。午後にはバンガローに戻り、結果の整理をする。Kはノールの部屋だったところを借りて、標本をしたりスケッチをまとめたりした。ルディとはすぐに仲良しになれた。

「今度、サマリンドの家に行ったら、ナマズを捕りに行こうよ。ときどき小さい子が河で泳いでいて、ぱっくり体ごと食べられちゃったりするんだよ。ものすごく大きくてさ。こんな歯、してるんだ。」

ルディは自分の口を大きくして自分の歯を指す。

「馬鹿な子ね。でたらめを言うんじゃないよ。」

「本当だよ、ママは知らないんだよ。」

ある昼下がり、Kはメリアムと二人で山からの帰りに河沿いを歩いていた。ルディはその日、疲れて留守番をしていた。二人は岩場で一休みした。メリアムがクイズを出した。

「ありそうで、ないもの。」

「何、それ？」

「原寸大の世界地図。」

「あるわけないよ、そんなもの。」

「駄目ねえ、想像力の貧困！」

愉快だった。

またたくまに一週間が経った。先にシャワーを浴びたKは、いつものように籐椅子に落ち

着いて煙草を喫っていた。メリアムがサロンを巻いたまま、濡れた髪を撫でつけながら表に出てきた。

「ねえ、日本にもウィンド・ベル（風鈴）ある？」

「あるよ。貝でつくったものじゃないがね。どうして？」

「ここにウィンド・ベルがあるの。とってもいい音色を出すわ。このウィンド・ベルを鳴らしているのはなに？ 風？ それともウィンド・ベルそのもの？」

「風かな？」

「風はただそこに流れているだけよ。」

「じゃあ、勝手にウィンド・ベルが鳴るわけ？」

Kはばかばかしい自分の答えに笑ってしまった。

「それはそこに存在しているだけ。」

「じゃあ、なに？」

メリアムは微笑みながら髪をタオルで拭い、じっとKの顔を見つめる。

「あなたの心。聞こうと思わなければ、なにも聞こえやしないわ。」

メリアムはすぐに話題を変えた。

「恋人(ブンチンタ)は？」

「いない。」

そういう言葉にKは気が引けた。本当に結婚して以来、浮気などしたこともない。離婚後も、付き合った女性は皆無だった。その気になれば、相手になりそうな女性が無いわけではなかったが、Kの心はとてそこまでの余裕がなかった。

「まったく、いないね。ひどいもんだ。」

「ふうん。……」

メリアムは真面目な顔をしたままキッチンに入っていく。きょとんとしたKはそれでも何か、仄かなものも同時に感じ始めていた。

二週間。それは瞬く間に過ぎた。密林はいつも軋(きし)むような静かな寝息をたてていた。

午後、メリアムがシャワーを浴びるたびに、Kはある醜いものを覚えた。時間というものがこんなに長く、また苦しいものだろうか。生々しい感情。メリアムにしたところで、こ

の突然降って沸いたような現実に、ある意味当惑している部分があったはずだ。
生存に対する妄執と、実体に対する執着。人はこれをエゴイズムと呼ぶ。でもこの原罪の
ようなものを通らないと、わたしたちは自分の生を全うできない。

その夜、ルディが寝入ってから、Kとメリアムは表を歩いた。ダヤクの集落ではまだ老人
たちが座り込んで煙草をやっている。二人とも言葉は少なく、ただ歩みをすすめてはお互
いに何かを言おうとし、そして顔を見ると笑って何も言えなくなる。

雨が降り出した。スコール。二人はたちまちびしょ濡れになった。大急ぎで駆け出す。無
駄だとわかっている、雨の痛さがたまらない。走りながら雨に打たれていることが、そ
のうちに無性に愉快になってきて、大笑いしながらバンガローに駆け込む。Kが自分の部
屋のランプに灯をつけようとする。暗闇の中でメリアムがまだ息をはずませながら言っ
た。

「なにをしてるの？」

「いや、マッチをさがしてるんだ。」

「灯りをつけないで。……………」

……………

水浸しのシーツの中で、二人の呼吸が次第に小さくなっていくまで、二人は恐らくなにも
考えてはいなかった。メリアムのまだ弾力のある体は、衰え始めたKの筋肉をまるでく
すぐっているかのようだ。バンガローの材に染み込んでいる樹液の油っぽい匂いが、これほ
ど柔らかく、また懐かしく思えた夜はない。

雨は一層激しく降り、それは永遠に続くかと思われるほど。メリアムは小さな声でささや
く。『かんとんに飽きないでね。…………』肉体はまだ夢を見ていた。

翌日、Kはバンガローを発った。メリアムとルディはロンギラムまでKを送った。Kはサ
マリダへ下る船旅の間、ふとため息ばかりしている自分に気がつい
た。……………

手紙の往復。Kは大それたことをしているという恐れと、若い日々に戻ったような興奮を
抱きながら、毎日を過ごした。すべてを失ったはずの自分が、もう一度歩き始めようとし
ていることを、あらためて気づかされた。それまでの生き方の、どこが間違っていて、ど
こが正しかったのか、冷静に見つめなおす自分が生まれ始めていた。

一年後、また夏がやってくる。

サマリダで迎えてくれたメリアムは、一年前と少しも変わっていなかった。必ず来ると決

めてはいても、Kにとってはやはり夢見心地だった。その年齢でこんな想いをするなど考えも及ばなかったのだ。そう言うとメリアムは、『夢は、その重さに耐えられる人だけに見る資格があるの。容易にかなう夢は、夢とは言わないわ。』と言って笑った。

このときはルディがジャカルタの親戚のところにいたので、二人はずっと誰に憚ることなく愛し合うことができた。堰を切ったように愛し合えば愛し合うほど、かえって切なさは胸に迫ってくる。

以来、三年。二人はけして相手だけのものではなかった。

メリアムは何度かこれっきりであきらめようとした。彼女の手紙の内容は、むしろ彼女自身を勇気づけようとする文章が次第に多くなっていった。

『あなたは信じろと言うの？ あなたの心は信じようとは言っていないはず。わたしの力で出来ることをすればいい。出来なければ、そう祈るだけでいい。そう言っているはず。わたしは、わたしとあなたが選んだ結果をそのまま受け入れる。二人が苦しめば、そしてそれですべてが済むなら、わたしはどうなっても構わない。・・・』

二人の間には、あまりにも遠い距離があった。それは物理的な距離だけではなく、生活の基盤や、二人が追い求めてきたことや、これから先なにを共同の目標にしていくのかということなど、山積みの問題が多すぎた。そしてそれらを支える収入のことも。

二人は新種のトリバネアゲハを追い求めているうちに、実はもっと別のものを、もっと大切なものをいっしょに探していることに気づいた。

あるときメリアムがこんなことを言った。

「人間の心には善と悪との二つがあるでしょう？ 人を信じるというのは、相手の心の中に棲む善のほうを励ますこと。それによってあなたは善よりもっと尊い報いを手にすることができる。」

「善より尊い報いってなんだい？」

「愛(カシ)よ。」

「愛ってなに？」

「それは調和。響きあうことよ。・・・」

Kとメリアムがひっそりと大切に暖めていたものは、あらゆる無駄と無意味さの中で育っていった。なにもかもけして本当には無駄でもなく無意味でもない信じられる日はいつだろう。

すべてはどこか微妙な罪の匂いをひそみ隠したまま、先へ先へと二人を押し流していった。

そんなある日、それは突然訪れた。

ルディはずいぶん大きくなり、Kたちはもう家族と同様になっていた。ルディはこのとこ

ろ蝶に本格的な興味を示し始めていた。

三人はルディの学校が休みのとき、ひさしぶりにそろってロンギラムのバンガローへ出かけた。三日ほどたってルディは、ロンギラムの町へ買出しに行ってきた後、疲れて早々に寝てしまった。

Kとメリアムはポーチを抜けて、ダヤクの集落へいつものように散歩した。まだ早い時間で、小屋からは明かりが零れ、人の声が騒々しく聞こえてきた。Kは雨が降り出したのに気づいた。突然雷が鳴り、ダヤクの人たちが慌てて小屋に飛び込んでいった。

「スコールよ。」

「前にもこんなことがあったね。」

「妬いてるのよ、きっと。空の神様が。」

二人はびしょ濡れになる前にバンガローに戻ろうとしたが、やはり無駄だった。

あっと言う間にスコールに吞まれ、濡れ鼠になった。雨は不思議だ。Kはまるで自分が子供の時分にでも戻ったように錯覚する。雨にはそんな魔力がある。Kの部屋に入ると、メリアムはそっとルディのいる部屋のほうをうかがって言う。

「大丈夫、もう寝てるわ。」

メリアムは豹のような体になる。一つ一つKのボタンを外す。

「ほんとうにあなたは何てことをしてくれたのかしら。」

「責任を取れとでも？」

「世の中に、取れる責任なんてないわ。取れないから責任っていうのよ。馬鹿なことを言った罰よ。」

メリアムは、そう言ってランプに灯をつけた。

「やめてくれないか、もう若くないんだから。」

「それはお互い様よ。」

部屋がオレンジ色に広がっていく。屋根を強烈な雨が叩き、雷も断続的に鳴り響いていた。メリアムはKの体に生命を与えた。ひんやりとした壁際に二人の影が大きく揺れる。野生の夜。切ない呼吸。・・・・・・そのとき、突然二人の間に、同時にあるするどい直感が走った。少しドアが開いていて、そこに柔らかいランプの光を浴びた少年の姿を映し出していたのだ。ルディは雷の音で起き、そこにずっと立っていて、ドアの隙間から二人が

していることを見ていたのだ。メリアムはKの上になったまま、髪をかき上げ、『ルディ』と静かに声をかけた。すると少年はさっと駆け出していった。

「ルディ！」

母親は立ち上がり、サロンを体に巻きつけながら、テラスづたいにルディを追いかけた。Kは来るべきものが、最も醜悪な形で来たことをかみしめていた。こんな風に少年の前に現実を無造作に投げつけてしまったと。ベッドに座りなおし、煙草に火をつける。苦い味が喉に染みていく。

いつしか雨は下火になり、屋根からポーチに落ちる雨音だけがする。Kはテラスに出て様子をうかがったら、ちょうどメリアムが戻ってきた。そしてKに軽くキスをして言った。

「まだ子供なのよ。ごめんなさい。」

「わたしが話をしたほうがいいかな。」

「ううん。今はいけないわ。少し時間がかかると思うの。嫌になった？」

「とんでもない。でも不注意だったよ。なんて言ったらいいかわからない。」

「気にしないで。きっとわかってくれるわ。」

メリアムはKを抱きしめるが、どこことなく力がこもっていなかった。

翌朝、食事のときにはやはりルディは出て来なかった。メリアムは、『あの子、頑固なの』とそっけなく言うが、心配している様子は隠し切れぬ。さらに二日時折、ルディの姿を見かけることはあっても、それはごく稀で、ほとんど意識的にKを避けていることは明らかだった。密林の夕暮れはまるでなにかの罪を負っているようだった。生きていくことにもしも意味があるとしたら、それは生きてあることの代償に負う罰を受けることかもしれない。Kを襲う激しい後悔と苦痛。ロングラムの棧橋まで送ってくれたメリアムは、できるだけ明るく装ってはいたが、少したつと気まずい沈黙が二人の間に広がっていた。一人でカパル・モトルに乗ってから、Kはメリアムの姿が河岸に小さくなっていくのをずっと見つめていた。マハカム河のゆっくりとした流れがすべてを忘却の彼方へ追いやっていくような気がした。・・・・・・・・・・・・・・・・

メリアムからすぐに手紙が来た。サマリндаでは再びいつもと変わらない日常が回復したこと。Kに自分で自分を責めないで欲しいということ。メリアムにとってもKの存在がなによりも取り返しがつかないほど大きくなってしまったこと。それは長い長い手紙だった。一年の間、同じように二人は文通を続けた。メリアムの手紙は以前より頻度がこころもち多くなった。もとよりジャカルタの実家は比較的裕福だった。ノールとは家族の反対を押し切って駆け落ち結婚したことで、勘当同然となっていたが、今ではもう和解できたこ

と。ルディの様子が最近少しおかしく、学校をサボることが目だって来たことなどが書かれていた。メリアムはルディとしばしば突っ込んだ話をし、ルディもけしてメリアムやKを責めてはいない、と言っただけらしい。それでもルディの衝撃は癒される様子が見えない等々。

結論は一つしかなかった。メリアムが一人の母親である以前に、一人の女性であることをルディにわかってもらうよりほかには。人が人と愛し合うということ。それがどんなに美しいことかを。簡単なようで、大変な勇気がある。受け入れるルディにとって、大変な勇気のあることなのだ。しかも成否は不透明。

今年の夏。Kは一年ぶりでボルネオに来た。メリアムは用事でジャカルタに行っているの、サマリダに戻る頃を見計らって、しばらくこのマレーシア側のコタ・キナバルに滞在している。

.....

すっかり表は晴れ上がり、蝶が舞い始めていた。植物園のほうで降り込められていた妻が、ほかの観光客たちと歓声を挙げながら戻ってくる。

Kは 南洋の深い緑に染まった一帯の密林を眺めながら、もっとずっとはるか向こうを思っている。

「いつも転んでばかりです。」

Kは自嘲気味に言った。

「わたしも、実は転びそうなんです。」

思わず、二人で笑った。

「それで、これからサマリダにいらっしゃるんですね？」

「ええ、そのつもりです。出来ることはそれだけですから。あなたがたは？」

「コタへ戻って、明日、香港に帰ります。」

「そうですか。じゃあ、お元気で。またどこかでお目にかかれるかもしれませんね。」

「そうですね。ボルネオの蝶の博物誌。楽しみにしています。きっと完成させてください。必ず。」

「ええ、必ず。」.....

わたしたちは来た道をもとへ辿った。車は、やがて海岸線沿いに走るようになり、コタの街が近づいてくる。燃えるような夕焼けの中で、星が大きく現れ始めた。コタの海岸線に張り出したバイパスに灯りがともり、真珠のネックレスのように輝いていた。

あと一ヶ月、あるいは二ヶ月すると、わたしたちは別々の生活を歩んでいくことになる。Kや、メリアム、そしてルディにもはっきりとした答えがなく、先が見えないように、わたしたちにも、この結論がほんとうに正しいことなのか、わかってはいない。答えのない問いを問い続けて、何度も転びながらそれでも歩いていくしかないわたしたち。国立公園からずっと押し黙っていた妻が、口を開く。

「わたし、あなたのこと悪く思っていないよ。・・・」

「うん。」

ややあって、また妻が言った。

「わたしの言うこと信じてる？」

「いや。でも、きみの心は信じてるよ。」

妻は、くすっと笑った。

「いまさら思うんだけど、きみは悪い子のときに、とてもいい子だな。」

「なにそれ。」

「どうとでも。」

わたしは明るかった。

「別れの言葉はないよ。でもぼくたちには、いっしょにいた時間がある。」

「いやあね、惚れなおしちゃうじゃない。」

妻は、なんとなく鼻声になっていた。そしてことのほか小さな声で呟くように言った。

「ありがとう。」

わたしは、ふと口にしかけた。

「焼けぼっくいに・・・」

「火はつかないわよ。」

わたしたちは、妙に幸せな気分だった。

カーチペー

南風が吹く頃

その日の朝。お定まりのレイバンをした一人の米軍将校が馴染みの日本人女のアパートから炎天下に出てきた。路地に停めた軍用ジープへ乗り込むと、早速エンジンをかけた。二階からまだ眠たそうな女が顔を出して、窓越しに頬杖をつきながらその様子をボンヤリ見守っていた。エンジンをふかす音が何度かしたが、なかなか発進しない。将校はいらいらしながらますますアクセルを踏み込んだ。女の黄色い声が飛んだ。

「ニュートラルに入ってんじゃないの？」

将校はジリジリ照りつける日差しに脂汗をかいていた。この朝っぱらの椿事に周りの窓からもその種の女たちが同衾中の米兵たちといっしょに顔をのぞかせていた。突然、その女がおかしくてたまらないといった様子で笑い出した。

「何がおかしい？」

将校はムキになって二階を見据えた。

「だって・・・・・・・・あんだ、タイヤをどこに置き忘れてきたの？」

将校は、『なに？』とばかりに、ジープを飛び降りて足回りを見た。タイヤが一本残らず外され、車軸は空しく宙を搔いてがなり狂っていたのだ。周到にも犯人はジープの車高に合わせてボディの下をブロックで支えておいたから、慌ててジープに乗った将校はそれに気づかなかったのだ。将校は帽子をボンネットに叩きつけた。

「くそ！ またあいつらだ！」

・・

一群のハーレーが嘉手納から北に向かっていた。タンデム・シートには日本人の少年が一人、ほかのハーレーにもそれぞれ日本人の年頃の女たちが乗っていた。全部で三十台は連ねていたに違いない。運転している連中は刈り込んだ頭の格好から、嘉手納や金武(きん)に駐留している米兵だとすぐわかる。彼らには奇妙なアダ名がついていた。ジーンズのベストに髑髏の海賊旗を縫いこんでいたので、その名の通り『ジョリー・ロジャーズ(愉快的仲間たち)』と呼ばれていたのだ。実際、底抜けに陽気な連中だった。

マイキーというリーダー格の黒人兵のバイクに乗っていた日本人の少年は、みんなのマスコットのように可愛がられていた。白いランニングに、マイキーのお下がりのカーキ色をしたズボンを短パンに仕立て直してはいていた。坊主頭の十四歳。浩太といたが、ジョリー・ロジャーズは彼をビリーと呼んでいた。小柄で、おまけにビリー・ザ・キッドのように左利きだったからだ。

深い青とエメラルドの浅瀬が交錯するビーチ・ロードをいくつも緩やかにワインディングしながらハーレーが続く。どれもこれもセコハンの『尻軽女(ローライダー)』ばかりだった。

マイキーがタンデムのビリーに大声で話かけた。

「ビリー、どんな気分だい？」

「すごいよ！ 小便(ピピ)ちびりそうだよ。」

「とんでもない表現だな。もっと色っぽく言えないのか。まるで女をイカしてるみたいだとかさ。」

「僕、女を知らないもの。」

「そりゃあそうだ。そのうちな。もっと英語が上手になったら、口説き方を教えてやるよ。」

V型二気筒が確かに腹の下から重厚な振動を伝えてくる。先行車のエキゾースト・オイルが鼻をくすぐる。潮風は集落や森や海岸沿いを通り抜けるたびに、違った匂いと空気の温度差を運んでくる。鋭い直射日光を体いっぱいを受けても、逆に肌は空気抵抗のためにひんやりとしている。だからかえってポーッとするような不思議な感覚だった。チェーンが空気からんでシャリシャリと音をたてるのが気持ちいい。ギアを変えるたびにこの音がする。それがたまらなくセクシーだった。辺戸岬はまだ遠い。後続のバイクから、カーブのたびに女の甲高い声がある。

「ビリー、いいか、覚えとくんだ。バイクは車と違ってハンドルじゃあ曲がれない。」

「肩を入れるんでしょ。」

「前傾姿勢のヨーロッパスタイルなら、コーナーに入るときに肩からインするよりほほかないが、このチョッパーは、肩を使ったらすぐコケる。膝(ニー)だよ、膝。」

「膝でどうするのさ。」

「ティア・ドロップ・タンクをしっかりと膝で絞めるんだ。それでタンクを左右に倒しこむんだよ。こういう風に。」

マイキーのローライダーは、右回りのコーナーで自然に倒れていった。引っ張られるような遠心力が上体を襲う。

「おまえもタンデムを挟むようにしてみな。要領がわかるだろう。」

快感だった。鉄の馬が自在にその角度を変えていく。二百キロもあるとはとても思えないほど軽い。神に近づいていくような気すらするバイクという乗り物を、この日ビリーは初めて体で感じた。そしてそのローライダーを気ままに乗りこなしているこの連中は、まさにヒーローといってもよかった。

キラキラと光る波がまるで動きを止めているように見えた。それはスピードが持つ不思議だった。わずかに風と機械的な音だけが風景の中を切り裂いていく。ビリーはビーチ・ロード沿いに咲くデイゴの赤い花や、雨上がりに輝くフクギやサキシマスオウの壁の間を走り抜けていくうちに、まるで自由な絵を描いていくような気がした。

六十年代の終わり。十四歳の夏。忘れることのできない夏が始まろうとしていた。

.....

十時頃、一段は宜野湾を通過した。やがて射撃場で演習の音が聞こえてきた。残波岬は近い。一度も休みをとらないでタフなライダーたちはひたすら進路を北へとった。潮の匂いが目にしみる。恩納、名護を抜けるとあたりの緑が急に明るくなってきた。日がかなり高くなってきたからかも知れない。

ビリーがマイキーに会ったのはつい先週のことだった。珍しく金武の町の米兵にランプを届ける帰り道だった。父親の修理工場は嘉手納に近いコザ（現沖縄市）にある。空になった麻袋を提げて、ビリーはサトウキビ畑をショートカットした。金武湾から未舗装路を自転車で行くと、一本道にハーレーがあった。むき出しのV型エンジンを見たとき、ビリーは思わず胸が高鳴るのを覚えた。その鉄のかたまりを見ていると、どこかでしわがれた男の声がした。道端に立っているオオハマボウの木陰に座りこんだ黒人兵だった。

「Where are you dreaming to go」

聞きなれない英語だった。ポカンとして口を開けていると、黒人兵は同じ言葉を繰り返した。さらに一度、ゆっくりと言い直した。

こんな文型で、『夢見ている』なんて使い方など聞いたことがない。

「コザ。」

黒人兵は畑から折ってきたサトウキビを一本投げて寄越した。

「そうか。おれは嘉手納だ。近いじゃないか。お使いか？」

「バイク用のランプを届けたんだ。」

「バイク？」

Bike という言葉がわからなかったらしい。

「ああ、motorcycle か。坊やのうちはメンテナンス・ショップかい？」

「ああ、父さんがワイルドバンチ（ならず者の群れ）っていうショップをやってるんだ。たくさんのマリーン（海兵隊）の連中が来るよ。勝手に来て、勝手に道具を使って、パーツを勝手に取り付ける。その分だけ勝手にお金を置いていくんだ。」

「ワイルドバンチ？・・・聞いたことあるよ。ポパイって奴、知ってるかい？」

「太っちょの白人？」

「そうそう。あいつがよく行ってるだろ？ 英語の上手な坊やっておまえのことか。」

「あんたは？」

黒人兵はやおら立ち上がると近寄ってきた。

「マイキー。・・・先週グアムのアンダーソン基地から来たばかりだ。」

「B52だね。」

「そうさ。Butche（ブッチャー、屠殺人）52だよ。・・・」

黒人は吐き捨てるように言った。

「なあ、兄弟。仲良くやろう。おれも厄介になるよ。ワイルドバンチでね。」

その男はハーレーに跨るとキック・スターターでエンジンをかけた。

「兄弟。バイクは好きかい？」

「乗ったことないけどね。バイクに乗る人に悪い人はいないよ。」

黒人兵は愉快そうに笑った。一面のサトウキビ畑が揺らめいた。風が渡っていく。

「あばよ、兄弟。」

七半以上の巨体はおもむろに目を覚ました。やがて足元に広がるシリンダーの炸裂音が空気を震わせた。音は風となり、猛然と砂煙がたちこめた。ハーレーの姿は、けたたましい4ストロークを残して小さくなっていった。息がつまるような砂煙の中で、ビリーは立ち尽くしたままその影をいつまでも追っていた。

翌日、マイキーは早速ワイルドバンチにやってきた。常連の黒人兵ジュピターや、やはりよく出入りしていた白人兵のロイやポパイたちといっしょだった。みんなB52の搭乗員とは限らない。マイキーとポパイはそうだったが、パイロットではない。銃座の射撃手だ。ジュピターとロイは海兵所属で、騎兵隊（戦闘ヘリ部隊）の射撃手をしていた。まだこの時代、沖縄では米国人と日本人の差別問題が多かったが、黒人兵と白人兵の間の差別も抜き差しなら無いものだった。ただ、バイクに集う彼らの間にはそうしたものは微塵もなかった。

のっぽのロイはいつも噛み煙草をやっていた。その神経質そうなクチャクチャいう音がいつも耳障りで、一度ビリーが言ったことがある。

「いつもそんなのやってると、癌になっちゃうよ。」

「ビリー、おれたちはそんなこと心配しているヒマがないんだよ。」

ビリーは失言したと思った。ロイは急に黙ったビリーが気になったのか、肩を叩きながら言った。

「ありがとうよ。心配なんかしてくれちゃってさ。スウィートだな、おまえは。」

父も母も米兵たちから好かれていた。トラックのタイヤを交換する仕事が入ったときなどは、居合わせたジョリー・ロジャーズが手伝ってくれたりする。さすがに人数をかけると仕事が速い。父親とビリーの二人でやれば、二、三十分はかかるのに、この連中の手にかかるはずか五分で済んでしまう。おまけにPXの余り物や、くすねたものを、あれこれと持ってきてはドンと置いていく。

『クリスマス・ギフトだ。』

夏でもいつでも、そのときはクリスマスだった。一年に何回、クリスマスがあったことか。牛肉やらアイスクリームやら、ビリーの大嫌いなハーシーズのチョコやら、酒にいたっては、やたらバーボンの瓶がたまっていく。ワイルドバンチでは、日本人と米国人の軋

轢など皆無だった。ときに父親が、那覇あたりでつきあっている日本人女性のことで、よく米兵から相談をもちかけられたりすることもある。別れ話をうまくまとめてやったことだってある。まるで人生相談所だ。ビリーはあるていどたまったブーツをときどきほかの同業の店や取引先に配達したりした。これはけっこう効き目があり、金武や那覇からも仕事が入るようになる。

ジョリー・ロジャーズたちのハーレーも、けして自前のものではなく、ほとんどは軍用のものを払い下げて、それを改造したものだ。基地を去っていく兵隊たちが残し、代々持ちまわっているものも多かった。フロント・フォークを思い切り伸ばしたチョッパーは当たり前。ペイントに至っては、日本人のセンスをはるかに超えていた。タンクに裸の女を描くのはまだ可愛い方で、ひどいになると女性のそれ(・・)をあからさまに描いたりして、周辺の住民の物議をかもしたりする。その破廉恥な集団にマイキーが入ってからというもの、ワイルドバンチはいっそう派手に大騒ぎをする場所となった。

三十台余りのバイクは昼前によく辺土名に着いた。ずっと向こうには灯台がある。目の前にはビーチが広がる。一人の女がポパイにからんだ。

「なあんだ。辺戸岬までいくんじゃないの。つまんない。せっかくここまで来てさ。与論島が見えないじゃない。」

「ヨロン？」

「日本よ。」

「ここだって日本じゃないか。」

「なにいつてんのよ。日本だけどあんたたちがいるから、話はそんなに簡単じゃないわよ。」

「エミちゃん、愛してるんだ。」

「関係ないでしょ。」

「除隊したらいっしょにアメリカに行こう。」

「ウソつき。」

「本当だよ。」「あんたこそ沖縄に残ったら？」

「沖縄が日本に返還されたら、おれはその場で失業かもしれない。」

「いつのことやら。・・・・それより金武の女と先に手を切ってよ。そっちのほうがあたしには死活問題なのよ。あんた汚いわよ、触らないで！」

惚れているのか、憎みあっているのか、わからない関係が多い。

いくつも小さく切り込んでいる三日月形の砂浜への小道を探して、ビリーたちはビーチを目指す。いろいろなものを詰めたバスケットをみんな抱えている。

ビーチでは早速ランチが始まった。岬の西側一帯は米軍将校クラスの保養地だった。だから砂の質もこまかくて上等だ。北側のこの辺はカジュマルやその他の低木が砂浜近くまで生い茂っている。さすがに人気もなく、米兵たちにとっては絶好の遊び場だった。バドワイザーやらミラーを開けるたびに、プシュッ、プシュッという音がする。

淡い海の色が急に深くなるあたりでしきりに白い波が立つ。海に飛びこむ連中もいる。ビリーは泳げなかった。友達にも泳げない者が多い。マイキーが、こんなにきれいな海があるのにどうして沖縄の人は泳げないんだとしきりに不思議がっていた。ビリーは、いつも見ているからとか何とか、理由にならない理由を言った。第一、学校にプールがない。黒い肌が沖へ向かっていく。かなり遠くで手を振るのが見える。何か叫んでいるが、声は聞こえない。海がすべての音を拡散させてしまうのだ。ビリーはロイの彼女がこしらえてくれたタコスをおぼっていた。この味が好きだった。ハンバーガーよりずっと洒落ていると思った。冷めてしまったチリ・ビーンズをたっぷり入れて、ビリーは手をべとべとにしながらむしゃぶりついていた。

木陰の方からは、もう動物(・・)たちのよがり声が聞こえてきた。真ッ昼間だというのにあたりを憚ることもしない。卑猥な声をあげる日本人の女たちを、ビリーはどうしても好きになれなかった。理解はしているつもりだったが、感情がついていかなかったのだ。太っちょのポパイが女を砂浜にうつ伏せに組み敷いて、その腰を浮かせたのには、さすがにビリーも目のやり場に困った。ビリーの短パンはダブダブだったが、それが見る間に硬くなってきたので、目立つのではないかと心配になり、ずっと膝を抱えて海の方ばかりを眺めていた。波の面を渡ってくる風はもう夏の到来を告げていた。やっと海を感じる温度になってきた頃だ。いつも夏の初めが一番期待がこもっていて好きだった。この夏が永遠に続けばいいと、ビリーは思っていた。

マイキーが上がってきた。ゴムのように張り詰めた筋肉が水を弾いている。

「今朝の将校の一件、面白かったね。」

ビリーは思い出し笑いをした。

「ああ、あいつは実戦を知らない。アマチュアだよ。」

「でも将校は将校だよ。あとでヒドイ目にあうよ。」

「証拠がないさ、だろ？」

「でもわかってるよ。ジョリー・ロジャーズの仕業だつてさ。」

「構うもんか。おれだってそんなに長くここにはいない。」

「予定は？」

「コンフィデンシャル（極秘）。」

マイキーは白い歯を見せて笑った。

「ウソだよ。本当に知らないんだ。ただそう長くはないってことだよ。」

「嘉手納を出て、帰ってきた人は少ないよ。」「嫌なこと言うね。」

「ぼくが知っている限りではね。」

海が次第に引いていく。波もおとなしくなり、一帯から音という音が沈んでいくようだ。

「人殺しばかりしていると人間が鈍感になっていくんだ。バイクはいいよ。そんなこと考えないですむ。風の向きや、道のバンク角度や、路面の状況をずっと読み取っていくんだ。余計なことを考えてる余裕はない。車なら居眠りできても、バイクじゃ一瞬でお陀仏だ。」

「アメリカでも乗ってた？」

「フロリダだったから、よくキーまで走った。」

そう言われても、ビリーにはキーがフロリダのどこなんだか見当もつかなかった。

「あとはルイジアナヘツーリングに行ったときのことだけど、モービルからニューオーリンズにかけてが好きだったね。」

「カリフォルニアは？」

「行ったことがない。第一、あそこは軽薄だね。」

「フロリダは軽薄じゃないの？」

「多少はな。おれはもともとガキの頃、キューバから親父たちといっしょに逃げてきたんだ。そういう連中から真っ先に戦争に引っ張り出されるのさ。沖縄にはグリーンカードを欲しがらる奴がいるけど、間違ってもそんなこと考えるんじゃないぜ。ちゃあんと恐ろしいことが書いてあるんだ。すぐ戦場に放り出される。黒人、ヒスパニック、それからアジア系って順番だよ。背中に番号のついてない人間がベトナムでどれだけ死んでるかかわかったもんじゃない。公表戦死者数なんか、ほんの一握りで、だいたい番号のない兵隊なんか管理の対象にもなってない。……」

「マイキー、恋人は？」

「グアムから沖縄配属になったら、向こうから最後通牒がきたよ。……ビリー、女なんかどうにでもなるさ。ここでまた尻軽女(ローライダー)を探せばいいんだ。」

「ふつうの女の子はそんなに尻軽じゃないよ。」

「それならなお好都合。しかしおまえも中途半端な世界に住んでるよなあ。もっともまだよくわからないだろうけどな。」

マイキーが言おうとしていることは何となくわかっていた。実際、沖縄は奇妙な空間だった。今で言えば、頼るべきアイデンティティが欠落していたのだ。ただ一つ、少なくとも沖縄だという壊れそうな、しかし激しい感情だけが皮膚の下に脈々と流れていた。その感情がどういう意味を持つのか、ビリーにはまだわからなかった。

真実だけが存在した。どんなに現れ方がいびつであっても、不安定であっても、そうあるように生きていることが絶対に正しいと信じられた。だから通り過ぎる出来事は、どれもこれもみんな楽しい思い出であった欲しいといつも心に願っていた。

初夏の海の屋下がり。ビリーたちは潮騒の歌を聞きながら、カジュマルの木陰で眠った。マイキーにはカジュマルの木に棲むキジムナー（子供の妖怪）のことを教えてやろうと思ったが、なんとなく止めてしまった。潮を含んだ肌がひんやりとした空気にとっても爽やかだったことを、ビリーはずっと覚えていた。

.....
.....

ジョリー・ロジャーズの悪戯はとどまることを知らなかった。金武の盛り場で空挺の連中と喧嘩になったことがある。どちらがどうだったというのでもないらしいが、ワイルドバンチに出入りしている中ではロイとほかの二人が営倉にブチ込まれた。三日で済むところを五日も入れたというので、また騒いだ。ジョーダン中尉という例の将校に、彼らの標的は再び向けられた。馴染みの日本人女を言いくるめて、ベッドの様子を一部始終テープに録音させたのだ。それをみんなで聞いて大笑いしただけではなく、中尉がよく出入りしているスーパースターというバーで、彼がいるのを見計らって、音楽の代わりにボリュームいっぱいにして流したのは傑作だった。居合わせたMPを二人連れて、マイキーら三人を拘束しようとしたらしいが、逃げ足の速い連中はまんまと遁走した。追いかけて中尉とMPたちはジープに飛び乗った。今度はちゃんとタイヤがついていた。エンジンをかけ、ハンドルに手をかけようとする、そこにあるはずのハンドルが、こんどは無いのだ。これもマイキーたちの仕業らしい。同乗していたMPたちもさすがに苦笑していた。

「They' re really something (たいした奴らだよ).....」

人間は何でも夢中になれば、無限に少しでも近づくことができる。そんな風に思える日々が誰しもあったはずだ。ビリーにとってはそれはバイクだった。

六月は雨が多かった。毎日マイキーたちはワイルドバンチでバイクの成り立ちを教えてくれた。父は車両整備に忙しく、バイクまでは教えてくれなかったからだ。ビリーはオイルや部品と格闘しているうちに、とんでもないことに気がついた。それはバイクの製造にかかわるコンセプトだった。ビリーは人間が乗りやすいようにバイクの製造が工夫されているとばかり思っていたが、それは大きな間違いであることに気がついた。バイクが人間の鼓動を読み取りやすい構造になっているのだ。人間が機械を操るのではない。バイクが人間の心の動きに応じて自在に動くように設計者は思い入れをしているのだ。

夏至の頃、南風(カーチペー)が吹いた。やがて赤みを含んだ濃黄色のユウナが咲き始めるだろう。ビリーたちは、再びオン・ロードに出た。

去年B52が爆弾を積んだまま離陸に失敗し、知花弾薬庫近くで炎上して以来、沖縄は二・四ゼネストへ向けて騒然としていた。島はベトナム反戦と、沖縄返還と、米軍基地撤退運動で大きく揺れた。けっきょく二・四ゼネストは挫折し、B52の常駐は公然と継続された。ビリーはそうした活動をけして創造的なものとは思えなかった。むしろ、無差別爆弾の屠殺人たちと、彼らから金をむしり取る女たち、……およそ創造的な生活からかけはなれた人種ではあったけれど、かえって生々しい感情に堪えている姿が、ビリーにとっては形に現れないものだけに、より創造的に、繊細に、そしてより優しいもののように思えて仕方がなかったのだ。不確かな状況や暫定的な環境の中で、自分自身をつかみとろうとしてつかみ切れない哀愁は、いつまでもビリーの瞳を惹きつけて離そうとはしなかった。……………

その日は、ジョリー・ロジャーズの中でも、マイキーはじめ六台だけがツルんでいた。ビリーは例によってマイキーのハーレーに乗っていた。アダンの海岸線を抜けて金武湾を東へ迂回。ブルービーチへ進路をとった。ポパイは嘉手納を出るときからパーム・オイルを体に塗りたくっていた。先行するポパイのバイクの方から甘い匂いがしてくる。ビーチ・ロードはご機嫌だった。出発が昼過ぎだったので、遠出は無理だった。マイキーの両手はほとんど遊んでいた。ニーグリップが効いているから手はハンドルに添えているだけで十分だった。今朝装着したばかりのハイウェイ・ペグに両足を投げ出すようにして、海風の抵抗をまともに受けながらのライディング・ポジションだ。ブルービーチは将校用だったので、ビリーたちはその付近でバイクを降り、服のまま海に飛び込んだ。今日は珍しく女っ気無しだ。ビリーは上機嫌だった。

「なあ、兄弟。ワイルドバンチのはす向かいに煙草屋があるだろう？ あそこに女の子がいつも座ってるよな。」

「冴(さえ)っていうんだよ。」

「いくつだい？」

「十七。」

ビリーは胸騒ぎを覚えた。

「よしなよ。生娘(きむすめ)だよ。」

ほかの連中がそれを聞いて大笑いした。

「ビリーがなあ、生娘なんてね！」

ビリーは不機嫌になった。

「いいさ、試してごらんよ。堅(かた)いと思うな。」

「英語は？」

「できるよ。」

.....

以来、マイキーの煙草屋通いが始まった。そしてそれがそんなに簡単ではないことが証明された。なにしろ冴の両親が大のアメちゃん嫌いだったのだ。しかしマイキーはめげることなく、まめに足を運んでは声をかけていた。冴は学生らしくさらっとした短い髪をして、いつも腰のところを締めたプリーツのついたワンピースを着ていたが、元来口数の少ないほうで、時折マイキーの冗談に硬い笑顔を見せるだけだった。そのうち、ワイルドバンチから見てみると、マイキーが来てるかどうか、いつも彼女は煙草屋の中からこっちに視線を送っているのにビリーは気がついた。馬鹿みたいだと思ったが、そのことをマイキーに言うと、マイキーも大げさに喜んでいて。

けっきょくビリーは二人の仲を取り持つ羽目になった。彼女は最初はかたくなだったが、台風の後の最初のツーリング日和にとうとうジョリー・ロジャーズの仲間入りに応じた。空はまだ不安定だった。マイキーも、初めてのツーリングに参加した彼女も、そしてビリーも、気分が何となく落ち着かないように。

マイキーのタンデムには冴が乗った。ビリーは彼女がいないジュピターのバイクに乗った。その日はビリーにとって一つの時代が終わったかのように、もの哀しい思いが押し寄せた。冴ははじめははにかんでいたが、金武湾を過ぎる頃にはすっかりハイになっていた。マイキーもくだらない冗談を飛ばしては彼女を手の内に入れつつあった。ジュピターはビリーにこう聞いた。

「ビリーは彼女がいないのかい？」
「好きな女(こ)はいるけどね。」
「学校の女(こ)か。」
「学校になんか、ずっと行ってないよ。」
「どこの女(こ)なんだよ？」

ビリーには言えなかった。マイキーのタンデムに乗っているその年上の女(ひと)だとは。年の差もあったからか、冴のほうはビリーのことなど相手にしてなかったが、ビリーのほうでは久しく憧れていた。彼女はビリーを弟くらいにしか認めてくれなかった。ビリーもそれを恋をいってよいものかずいぶん困惑していたのだ。マイキーはその多感な少年の季節にあっさり終止符を打ってしまった。ガソリンの焼ける匂いと、スピードをつけた潮風の中で、ビリーはまた一人ぼっちになってしまった。

一団は岬近くのブルービーチを目指していた。近いからこのへんを利用することは実際多かった。例によってブルービーチから少し離れたところにバイクを停めて、みんな海に飛び込んだ。大きな湾がコザの方にまで伸びていく。白い波はスカイブルーの海面に映えて、光の渦を一層際立たせていた。

夕方近くになって、遊びつかれた集団はここかしこにひっくり返っていた。ビリーはヤケになって暴れていたのがぐったりしていた。マイキーと冴の姿が見えないのに気がついたが、取りとめもなくしゃべり続けるジュピターの話にウトウトし始めていた。カジュマルの茂ったあたりから、女の悲しそうな小さな悲鳴が断続的に聞こえてくる。ロイやポパイが、いやらしそうに目配せして笑っていたので、それが誰と誰であるか、ビリーにも察知がした。女の声は明らかに抵抗を示していた。あとは男の荒い息遣いだけが樹木を渡る風に乗ってかすかに流れてくる。ビリーは起き上がる気力もなく、ボンヤリとタオルにうつ伏せてそれをただじっと聞いていた。言いようのない無力感が体中を支配していくのを、どうすることもできなかった。……

ビリーたちは、日暮れ頃、ビーチを後にして金武の町へ入った。そのときビリーは女というものがほとんど嫌になった。冴の態度が一変していたのだ。ポパイの彼女から口紅を借りて装っていた。ためらいもなく、マイキーとキスをしたり、自分から恋人気取りで腕を絡ませたりしているのだ。ビリーはこの二時間ほど前に抱いた空しさや無力感がにわかに馬鹿馬鹿しくなってしまった。

金武の町はやはり兵隊が多い。澱んだ頹廢の匂いがバーやサロンの間を漂っていた。日本人バンドの激しいロックの辛(から)さは、どことなく一時の安逸に流れているアメリカ人

たちの、いわば熟れすぎた果実の甘さと絶妙な不協和音を奏でているようだ。不自然で不安なアメリカ人たちや日本人たちの織り成す特殊な空間だった。那覇にもコザにもそういう雰囲気はあったが、金武のそれはもっと乾いていた。もっと哀しい暖かさがあった。

ビリーたちはバビロンというバーに入った。冴はスローバラードのたびにマイキーにしなだれかかって踊った。二人の、とくにその煙草屋の娘の様子は醜悪だった。ここにはいけないアメリカ人たちと、一体誰であるかをいつも問いつづけなければいけない自分たちとが、あまりにも不自然な空間に共存している。ビリーはもうほとんど痛ましくらしいの思いでいた。それが頂点に達したとき、騒ぎが起こった。

バーの奥で飲んでいた日本人青年たち五人が、マイキーたちと言い争いになったのだ。そしてそれはビール瓶を叩き割るにいたって、一触即発の危機となった。ビリーはそれを何の違和感もなく、ただ眺めていた。取っ組み合いが始まったとき、マイキーと一瞬目が合った。ビリーはそこにいるすべての人間たちを軽蔑した。みんなどうにでもなってしまうばいい、とそう思っていた。

MPが駆けつけるまでにビリーは一人でバビロンを飛び出した。そしてコザまで夜の海岸通りを歩いた。金武湾の一番内側にさしかかった頃、一団のバイクが猛スピードで通り過ぎていった。ビリーは木陰に隠れてそれを見送った。月の明かりが海面に細かい水晶の飛沫をあげている。濃紺色の風景が頼りなげな白い波やビーチによく似合っている。道路に自分の鼓動がこだまするようで、ビリーは運動靴を脱ぎ、裸足のまま歩いた。まだ熱を持った路面だけがビリーの人に言えない苦衷を知っている、とそう告げていた。

それからマイキーたちは相変わらずワイルドバンチにやってきた。ビリーは特別変わった風もなく振舞っていた。向かいの煙草屋からはよく両親と娘の激しい罵り合いが聞こえてきた。マイキーが来ると、冴も飛び出してくる。その化粧にもビリーはやがて慣れた。ただビリーがツーリングに参加することは、もうなかった。

そのうちジュピターとロイが嘉手納を発った。ベトナムでのサーチ&デストロイに加わるためだ。ビリーは彼らの最後のツーリングに参加した。そしてジュピターの厚い背中ですっと泣いていた。海の色も燃えるような夏の太陽も、カジュマルの茂みもただ慟哭していた。ジュピターはいつもよりずっと陽気だった。ビリーが饞別に用意した、ジュピターの大好きなボサノヴァのレコードを渡すと、そのジュピターが初めて泣いた。

ジュピターはその後とうとう帰って来なかった。ロイは半身不随でミネソタに送還された。マイキーが一度だけ手紙を受け取った。

ジュピターの死は、戦争が起こっている現実をビリーの記憶に深い痕跡とともに残した。

ビリーは終わりに近づいた夏の昼下がりに、食事の後ボサノヴァを聴くことが多くなった。別に塞ぎこんでいるわけではなかったが、不安な予感にただ怯えていた。

ある日、激しい雨が降った。ビリーは仕事もなく店先にいた。はやい雨足の中に、かすかに聞こえるボサノヴァが退屈だった。するとマイキーがズブ濡れのまま、ハーレーで乗りつけた。珍しくシールドのついたヘルメットをつけている。ビリーは思いがけないマイキーの登場に驚いた。

マイキーは、『乗らないか?』と、ぎこちなさそうに笑った。ビリーは一目散に二階の部屋に駆け上がって、カビの生えたヘルメットを引っ張り出し、マイキーのタンデムに飛び乗った。

雨が痛く、体中に弾いていた。それは今まで一度も経験したことのない爽快さだった。

「たまには雨の中を走るのもいいもんだよ。……自然がいろんなことを教えてくれる。」

バイクに乗る人間は、人種を問わずみんな詩人だ。

マイキーとビリーは狂ったように歓声をあげながら、金武湾沿いのビーチロードを走った。急速に冷えていく体が叩きつける雨にあたって、かえって熱くなっていくような不思議な感覚だった。不自然で、不安定なライディング・ポジションがよけいその不思議さを際立たせた。灰色に埋もれた目の海岸線が重苦しく煙っていた。ビリーは素敵な仲直りだと思った。風の音と激しい雨音がヘルメットの中でこだましている。まるで、バイクと会話しているような気すらしてくる。そんなバイクの乗り方を知っているマイキーは、やはりヒーローだった。鉄の馬が嵐の中を突き抜けていく。カーブのたびに蹄(ひづめ)の音を残す。真っ黒な雨雲が人間の罪を洗い流していくようだ。

ビリーは、唐突に聞いた。

「冴さんは？」

「雨が嫌いなんだとさ。……」

ビリーは愉快だった。

.....

ジョリー・ロジャーズは、少しずつ嘉手納を去っていった。ポパイもベトナムへ行った。渡洋爆撃は日を追って激しさを伴っていった。そして汚い言葉を発しながら、ポパイはいつも元気に帰ってきた。

父が夕食のとき、こう言ったことがある。

「連中は殺人機械だ。そうは言っても人間だから、機械になりきれはるはずもない。なりきれたらどんなに楽かもしれない。」

.....

ある日、金武で、マイキーたちと大喧嘩した日本人青年たちが日本製のバイクでワイルド・バンチに乗りつけた。マフラーを交換したり、ハンドルを一文字にしたりして、一台のセコハンのカワサキを徹底的にチューンナップした。そしてその夜、こんどはマイキーたちもやって来た。同じように一台のハーレーをチョップし、オーバーホールし、パーツを交換した。あまりの偶然に何事が起ころうとしていることに気づいた。マイキーが言った。

「決闘だよ。」

那覇港の突堤で、一対一のデッド・エンド（行き止まり）というレースでカタをつけようということらしい。ただお互いがともにバイク狂いであることを知ってから、妙な連帯感が生まれたようで、それも不思議なことだった。バイクに乗るというただそれだけですべてが許しあえるということは、そのときにビリーにも何となくわかるような気がした。しかし、成り行き上、デッド・エンドは行われることになった。

その夜、ビリーたちは突堤に集まっていた。野次馬もたくさんいて、長い突堤は人で埋まっていた。どこからこんなに集まったのか、いったい誰が呼んだのか、とにかく突堤の入り口まで人とバイクでいっぱいだった。

その日本人青年の一人が、油で汚れたツナギのままカワサキに跨っていた。額から滴り落ちる汗がタンクを濡らして、鈍い輝きを放っていた。マイキーは仲間とはしゃいでいた。冴の姿はなかった。

突堤はまっすぐ湾のほうに伸び、そのままドロップ・オフとなっていた。突堤は大きなサーチ・ライト一つで昼間のように明るかった。ビリーは心臓が高鳴り、息を弾ませていた。いったいこの二人はなにをしようとしているのか見当もつかなかった。それは二台のバイクが全速力で疾走し、ドロップ・オフ寸前で停止し、どちらが端(エンド)に近いところで止まれるかを競うものだった。いわゆる〇四のバリエーションだったが、ブレーキングに失敗するとそのまま海に落ちてしまう。バイク好きな連中としては実につらい賭けだった。

マイキーが真顔になって、日本人青年に声をかけた。

「兄弟、本気かい？」

「怖気づいたか？」

青年はうっすらと笑った。

「言ってくれるね、お利口さん。」

アイドリングの音が次第に荒くなって、決闘は最高潮に達した。飲み屋の女が十(テン)からカウント・ダウンをはじめた。

「七(セブン)、六(シックス)、五(ファイブ)……」

バイクはとてつもない音で吠え出した。ブレーキでかろうじて後輪はとどまっていたものの、わずかにコンクリートを横滑りし、テールが泳ぎ始めた。

「三(スリー)、二(トゥー)、一(ワン)……GO！」

二台のバイクは見事なもので、ウィリーもしないで、一直線に飛び出した。コイルの焦げるような匂いがビリーのいるところを真っ白に包んだ。人垣がどっと崩れて、赤いテールランプを追った。半ばを過ぎたあたりになっても二台のバイクはブレーキングをする気配がない。ほとんど競っていた。まだ赤いテール・ランプはサインを出さない。ビリーは必死で後を追いかけた。

マイキーは。速度が限界に達する頃、大声で呼びかけた。

「兄弟(バディ)！ Can you swim? (泳げるか)」

青年も大声で聞き返した。

「What? (何だって?)」

「I said, can you swim? (泳げるかって言ったんだ)」

「No! (いや)」

「I . . . teach . . . you! (教えてやるよ)」

二台ともそのまま宙に飛んだ。大きく弧を描いて白い飛沫をあげながら真っ黒な海へ落ちていった。スロットルを離した二人も、ややあって大きく体を伸ばしたまま海中へ落ち

た。コンクリートにはまったくブレーキをかけた痕がなかった。ビリーたちはいっしょに抱き合いながら泳いでくる二人を引き上げ、お祭りのように騒いだ。みんなが大笑いをしていて。勝ち負けを口にする者は一人もいなかった。マイキーも、ツナギの青年も、何がおかしくてたまらないのか、とにかく笑いころげていた。

港を吹く潮の匂いが彼らを幸せにした。夏の終わりの夜。バイクに乗る者に悪い奴はいない。

秋の気配が感じられたのはそれから少したってからだった。海からわたってくる風にも熱がこもっていなかった。まだ泳げはしたが海に行く人はいなかった。

マイキーのフライト・スケジュールが以前にもまして頻繁になったのも、その頃だった。

「せっかく今度の休暇のまま除隊に持ち込めるところだったのにな。・・・どうやら最後のおつとめ(ミッション)らしい。」

「ジョーダン中尉をからかいすぎたからだよ。」

「ビリー、バイクのキー、預かってくれ。ほかの奴に乗られたくない。」

「どうして、長いの？ いつ戻るの？」

「なあに、ポパイと同じ爆撃機だよ。折り返し戻る。ただなんとなく、嫌な感じがするんだよ。万一のときには、おまえにやる。書置きしておいたからな。」

弱気を言うマイキーを初めて見た。

B52が毎日嘉手納を飛び立っていく。ビリーはキーを握り締めたまま明日にでも帰還するB52を待っていた。しかし、マイキーとポパイのB52だけは戻って来なかった。嘉手納の横を通りかかるたびに、フェンスのずっと向こうに停めてあるハーレーを見るのだった。シャワーの日にも、ハーレーは野ざらしのまま放っておかれていた。ジョリー・ロジャーズが一人、また一人と南の空へ消えていくのを、ビリーはいつも見送っていた。そのうちの何人かはやはり帰って来なかった。

ある日、冴をコザの市場で見かけた。白人将校と抱き合うように歩いていた。以前にもまして化粧と服装がケバケバしくなっていた。もうビリーの知っている冴ではなかったが、それを認めたくなかった。

ビリーはやにわに将校に向かって叫んだ。

「あんた、知らないのかい？ この汚い女はこの前まで黒ン坊(ニガー)と寝ていたんだ！ こいつは売女(ばいた)だよ！」

将校は嫌な顔をして冴の方を見た。冴は顔を強ばらせながらビリーの方につかつかと歩み

寄り、思い切り横っ面をひっぱたいた。

「思い出なんかと暮らすのは真っ平よ。」

ビリーは大粒の涙を落としてつぶやいた。

「ファック・・・ユー・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

短い秋があっという間に過ぎ、サトウキビに銀色の花が咲き始めた。一面が銀の波にそよぎ、明るい海の色に見事なコントラストをつくっていた。

B52は相変わらず渡洋爆撃を繰り返していた。バラック横のマイキーのバイクはすっかり泥だらけになっていた。ビリーはマイキーが死んだことを認めざるをえなかった。ジョリー・ロジャーズもかなりメンバーが入れ替わっていた。そう呼ぶ人も少なくなった。マイキーから預かったキーは、永久にシーサーの貯金箱の底に眠り続けていた。

寝苦しい夜は、もうとうに過ぎ、忘却の中にわずかな夏の日の思い出だけが鮮烈な印象を残していた。沖縄返還のことが、具体的な日程を伴って人々の口にのぼるようになった。年が変わり、冬が終わり、春も通りすぎていった。また、南風(カーチペー)が吹き始める季節が近づいていた。とうにマイキーのことは、アルバムの中だけの世界になっていた。その日、ビリーはワイルドバンチの店先に立って、オイル缶を運んでいた。一台のジープが停まった。見知らぬ将校が運転席に座っていた。女が助手席の方からビリーに声をかけた。冴だった。

「浩太君。・・・怒ってる？ この前は、ゴメンね。」

ビリーはあの一件の後、冴がマイキーの子を墮したことを人づてに聞いていた。一時自分の浅はかさをどんなに悔いたか知れなかった。

「いいえ、なんでもないです。こっちこそ。・・・」

「そう。・・・あの、伝言があるの。」

ビリーは怪訝そうに彼女を見た。

「誰かさんが、はやくバイクのキーを返せって言ってたわよ。」

ビリーは目の前がパッと明るくなった。

「いつ？ どこで？」

ビリーの声はうわずっていた。

「つい今しがたよ。はやく持って行ってあげたら。あなたのこと待ってるわよ。」

ビリーは家の中へ駆け込もうとしたが、慌てて振り返った。

「あなたは・・・行かないの？」

冴は寂しそうに微笑んで、顔を横に振った。そのときほど彼女がきれいに思えたことはなかった。

ジープはすぐ走り出した。ビリーは彼女を見送ったあと、二階へ上がり、シーサーの貯金箱をこじ開けようとしたが、なかなか頑丈で穴の蓋が開かない。業を煮やして、ビリーはテラスに叩き落として割った。キーを手にとると、ビリーは表へ飛び出し、嘉手納の方へ走った。息が詰まりそうなほど、力いっぱい。・・・・・・